

My Companion, My Dearest

春日むにん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シロディール出身、元旅芸人、女性ノルド、未覚醒ドヴァキン、戦闘苦手な主人公が、DLCドラゴンボーンに登場する傭兵テルドリ・セロなどをお供にしてスカイリムを冒険します。テルドリンと主人公の恋愛を軸に据えたラブコメですが、他キャラとの恋愛やシリアスな話もあります。

### ——注意事項——

・時系列順に執筆できないので、書ける部分から書いて追加します。しおり機能は意味をなしません。申し訳ありません。

話としては「章毎に完結」しています（例：4-1は4-1のみで完結している）。原作をご存知であれば、一章毎に単独で読めると思っています。

直近では2023年9月7日に『4-1-Interlude: ジェイ・ザルゴの実験』を追加しました。

本作の全体的な構成についてはこちらの活動報告をご覧ください。

↓[https://syosetu.org/?mode=kappo\\_view&kid=270036&uid=271887](https://syosetu.org/?mode=kappo_view&kid=270036&uid=271887)

・原作にはないもの（キャラクターの過去・得意なこと・苦手なこと、キャラクター同士の恋愛（同性を含む）、ロケーションの構造、独自のキャラクター・魔法、歴史的事実の行間など）を妄想・捏造しています。また、The Elder Scrolls（エルダースクロールズ）シリーズ他作品のキャラクター・魔法が出てきます。



## 目次

3 | 1 | Interlude : 暖を取る

暖を取る

3 | 3 | Interlude : テルドリン・セロの家

テルドリン・セロの家

4 | 1 : 最初のレツスン

1. 魔法使いのカジート

2. 入学試験

3. 開かずの部屋

4. 奇妙な音

5. コレット・マレンスの憂鬱

6. 開かずの部屋の秘密

7. 二人きりの冒険

8. アビシアン海賊王

4 | 1 | Interlude : ジェイ・ザルゴの実験

ジェイ・ザルゴの実験

4 | 2 : 君の名は。

1. ブレリナ・マリオンの失敗

2. ファラルダの願望

3. オンマンドの熱意

4. ニルヤの誘惑

5. ジェイ・ザルゴの逃走

6. アンカノの絶叫

7. ネレヴァリンの祝福

4 | 3 : サールザルにて

170 159 149 141 137 131 124 112 100 91 82 74 65 50 33 21 8 1

6.	ホワイトラン	333
5.	モルヴンスカー   霧の森	324
4.	ウィッチミス・グローブ	311
3.	ロリクステッド	304
2.	マルカルス	299
1.	ホワイトラン	295
6   1 :	思い出の夜	
	身づくろい	287
5   X	Interlude : 身づくろい	
4.	テルドリン・セロの場合	284
3.	アンカノの場合	279
2.	ジエイ・ザルゴの場合	274
1.	オンマンドの場合	266
4   4	Interlude : 恋人たちの日	
2.	魅了の魔法	252
1.	躊躇と拒絶	245
4   3	Interlude : 躊躇と拒絶 / 魅了の魔法	
8.	前触れ	239
7.	スノーエルフの探し物	232
6.	最後の関門?	226
5.	死霊術師の戯れ	216
4.	吊いの間	204
3.	涙の夜	198
2.	いざない	190
1.	決裂	179

6 | 2 | I n t e r l u d e : 予感

予感

### 3—1—Interlude： 暖を取る

#### 暖を取る

間延びした女性の悲鳴に似た風の音が、雪の洞窟の出入口を覆う毛皮の幕の向こうから聞こえていた。

わたしは、灯明の魔法の光でてらてらと輝く雪の洞窟の奥で、横に二つ並んだ古い毛皮の敷物の一方に座って膝を抱え、従者のテルドリン・セロを待っていた。彼は、焚き付けにすための木の葉や枝を取ってくると言つて、吹雪の中に出ていったのだった。

スカール村に向かうためにわたしたちがレイヴン・ロックを発つてから半日ほどは気持ちのいい晴天に恵まれ、野生動物やならず者に襲われることもなかった。わたしはソルスセイム北部を襲う吹雪についてテルドリンの脅し文句はかなり大げさだったのではないかと呑気に思ったものだった。

だが、空の彼方に鈍色の雲の塊が現れ、なだらかな雪の丘の斜面を歩いているわたしたちに迫ってきてからは、わたしはむしろ、テルドリンの警告は控え目過ぎたと考えるようになった。

雲が連れてきた雪混じりの風は冷たく、しかも強烈だった。わたしは一度足を取られて転がりそうになって、テルドリンに肩を抱き寄せられた。それから彼は彼にぴったりくつき、その頑丈な体の影に隠れるようにして、灰色の空気と吹き付ける雪の白に支配された世界を彼の導きのままに進んでいった。

この洞窟の出入口には、わたし一人で歩いていたら到底気づかなかっただろう。地表から突き出た岩の陰に隠れていて、腰を屈めなければ入れなかった。やはり、なけなしの所持金をはたいてテルドリンを雇って良かっただとわたしは思った。だが、それも今となっては彼が無事に戻ってきてくれればの話だった。

洞窟の出入口の方から、がさごそという音がした。出入口を覆う毛皮の幕が揺れた。わたしは咄嗟に腰を上げ、右手に魔力を集めた。テルドリンは、この隠れた避難場所を知っているのは自分だけではない

だろうと言っていた。自分がいない間は用心するようにと。

わたしが相手の出方を待っていると、幕がひよいとめくり上げられた。何かの生物の殻で造られたヘンテコな兜と赤いマスクを着けた顔が、悲鳴じみた風の音と共に暗闇の中から現れた。

「ああ、まったくおおごとだった。こんなことなら晴れている間に枝を集めておくんだった。私としたことが、見通しが甘かったよ」

紛れもない、テルドリンの皮肉っぽい、かすれた声だった。わたしは安堵の息について魔力を霧散させ、歩み寄った。背の低い穴の中でうずくまっている彼の前には、彼が掻き集めてきた葉と枝が山盛りになっっていた。

「運ぶの手伝うよ」

「そうか？ それじゃ、よろしく頼む」

わたしが広げた腕の上に、テルドリンは枝の半分ほどを乗せた。わたしは枝をぼろぼろと何本かこぼしながら、洞窟の一番奥にある薪の山の前まで運んでいった。薪の山は、テルドリンがレイヴン・ロツクでわたしに買わせて自分で背負ってきた真新しい薪も含めて、ノルドの大男三人分くらいの量があった。

テルドリンは、敷物の手前の地面に露出している岩肌の上に、葉と枝と薪を小さいものから順に重ねていって小山の形に組み合わせ、火炎の魔法で火を点けた。じっと待っているうちに、火は綺麗に燃え広がった。少しだけ寒さがましになった気がした。

「ふん。これでようやく人心地つける」

テルドリンが満足げに鼻を鳴らし、毛皮の敷物の一つにあぐらをかいた。わたしは彼に倣ってもう一つの敷物の上に座った。

「ねえ、ここを知ってるのはテルドリンだけじゃないって言ってたよね？ それって、盗賊とかが突然入ってくるかもしれないってこと？」

わたしは不安になって、出入口の方をちらと見た。毛皮の幕には、脇に置いてあった大きな石でテルドリンが重しをしていた。

「そうだな。あとは、スカールの猟師やら、迷子のドラウグルやら、リークリングやら。色々だ」



「リークリング?」

聞き覚えのない単語にわたしは首を傾げた。テルドリンは、あぐらをかいた自身の頭と同じ高さの中空に手を伸ばした。

「ああ。このくらの背丈で、槍を持っている。ゴブリンに似た人型のクリーチャーだ。言葉が通じず、大抵は問答無用で攻撃してくる。猪に乗っている奴もいる」

わたしは不安に駆られた。スカールの猟師以外は全く歓迎できない。

テルドリンはからからと笑った。

「私がいるんだ、心配は要らない。もし何か起きたとしても、お前が洞窟の隅で震えている間に全てが終わっている」

テルドリンの物言いは、かなりぎつくばらんだ。それはいつでもどこでも誰にでも、レイヴン・ロックのお偉方や雇い主であるわたしに對してでさえ全く変わらない。たぶん、わたしに對してはわざとそうすることで、不安や緊張を解こうとしているのだと思う。出会ったばかりの頃は馬鹿にされていると思つて臍を曲げていたけれど、今ではそんな彼の態度を気に入っていた。

テルドリンはナップザックから布袋を取り出した。その布袋の中からさらに紫色の細長い塊を出した。モロウインドでよく栽培されているという芋、アツシユ・ヤムだった。

「シチューを作る。お前にも分けてやろう」

テルドリンは更に、スプーン、ナイフ、小ぶりな鍋、ニンジン、キノコ、それにいくつかの小袋を取り出した。わたしは、普段酒場でさんざん吞んだくれていた傭兵のナップザックの中からそんな生活感のある品物が出てくるとは思わず、目を丸くして見守っていた。

「料理、得意なの?」

尋ねると、テルドリンは陽気な声色で言った。

「得意というほどじゃない。適当な手料理だよ。一緒に作ってみるか?」

わたしは頷いた。シロデールで旅芸人をやっていた頃、ときどき仲間内の料理当番が回ってきたことを思い出して、懐かしくなった。

アツシユ・ヤムのとろみと、アツシユ・クリープ・クラスターの粉末によるぴりつとした風味のついたシチューは美味しくて、あつという間に平らげた。だから腹は膨れたが、問題は、焚き火があっても洞窟の中がひどく寒いことだった。

食後にテルドリンのソルスセイムにまつわる思い出話でひとしきり盛り上がった後は、各々毛皮の敷物の上に横になった。しかし、ナツプザックに入れてあった薄布を一枚体に掛けただけでは、周囲からにじり寄る冷気を遮断しきることはできなかつた。北の土地の寒さにはそれなりに慣れたつもりだったが、雪に囲まれた場所でじっとして眠るのがこれほど難しいとは思わなかつた。もつと厚着をしてくるべきだった。わたしは何度も寝返りを打ち、しまいには起き上がって両膝を胸の前にくっつけて背を丸め、薄布で体をくるみ、かじかんだ手足の先を焚き火にかざした。

テルドリンはいえば、全く何も掛けず、自分の腕を枕にして平然と寝転がっているのが、焚き火の橙色の光にまざまざと照らし出されていた。顔と体は焚き火の方へ向けているが、兜とマスクを着けたままなので、起きているのか眠っているのかよく分からない。

わたしは敷物を引きずって焚き火のさらに近くへ寄せようとした。「それ以上近づくと、火の粉が飛んで火だるまになるかもしれない」

唐突に、テルドリンのしつかりした声が響いた。起きていたのか。わたしは敷物から手を離し、すぐすごと元の体勢に戻った。

「そうなんだけど、寒くてさ」

テルドリンは驚きと呆れが半分ずつ混じった声で言った。

「ノルドならこの程度は問題ないと思っていたが」

「ずつとシロディールで暮らしてたから、慣れてないの」

「そうか。それならフェシスの店でも薦めておけばよかったな。東帝都社から何年も前に仕入れたマントがまだ残っているとぼやいていた」

最後の方は少しからかうような口調になっていた。わたしは一昨日、彼の口車に乗ってグローヴァー・マロリーの店で鎧一式を買わせられそうになったことを思い返し、唇を尖らせた。

「そうやって仲介料で荒稼ぎしてるんだね」

テルドリンは笑いながら仰向けになり、わたしのじとつとした視線からわざとらしく逃れた。

「とんでもない。私は傭兵だ。お前のような腕っ節に自信のない者の護衛をしたり、タダ同然で衛兵隊の助っ人に駆り出されたりするのが私の主な仕事だ。ああいう機会は稀だよ。それに、誓って言うが、役立たずのガラクタを買わせたりはしない。そんなことをしたら私にとっても、あいつらにとっても不名誉だ」

ふざけてはいるが、どこか温かみも感じる話しぶりだった。レイヴン・ロックの住民たちの多くは、こんな町は嫌いだ、出ていきたいと文句を言いながら、実のところあの町をこの上なく愛しているのだった。

それはそれとして、寒いことには変わりがなかった。わたしはぶるつと身震いをして、薄布の中でさらに体を縮めた。

テルドリンののんびりした声が洞窟に響いた。

「ま、向こう三日は我慢することだな。ほんの何日か眠れなくても死にはしない。ふらついていようとなんだろうと、スカール村まで私が五体満足のまま連れて行ってやるよ。スカール村に着けば、頼み込めば納屋くらいは貸してくれるだろう」

本気で言っているのか。わたしは愕然とした。彼の方では、わたしがどんな状態でもスカール村まで生きたまま引きずっていく絶対の自信があるのだろうか、わたし自身は気が気ではない。

わたしは歯をガタガタ言わせながら考えた。シロデイルにいた頃、ジエラール山脈のふもとの村に興行し、村外れに設営したテントの中まで寒さが忍び込んできた時はどうしていたか。そうだ、そういう時、わたしたちはいつも。

「テルドリン。くつついて寝ていい?」

「はあ。」

素つ頓狂な声が上がった。テルドリンが肘をついて上半身をもそりを持ち上げ、こちらへ顔を向けた。聞こえなかったのだろうか。わたしは辛抱強く繰り返し返した。

「寒いから、テルドリンと体をくっつけて寝たい」

「……………お前、よくそんなことを平然と他人に持ち掛けられるな」

いくらかの沈黙の後、芯から呆れたような声でテルドリンは言った。そんなにおかしなことだろうか？ レッチング・ネツチ亭での一件といい、どうも彼の感覚がよく分からない。

「寒い時はいつもそうしてただけ。ダメ？」

テルドリンは、震えるわたしをしばらく眺めていた。それから、溜息をついて、敷物の上に寝転がったまま体を少し後ろにずらし、焚き火側にスペースを作った。

「仕方がない。その布と敷物を持ってこっちに来い」

わたしはほっとした。言われた通りに薄布と毛皮の敷物を持って移動し、彼が空けてくれたスペースの前に両膝をつけた。ちよつと考えて、向かい合うのではなく、彼と同じように焚き火の方を向いて、やや背中を丸め、両手を胸の前で畳んで寝転がった。家族や特別親しい仲間でもないのに向かい合って寝るのはまるで恋人みたいで気恥ずかしかった。

彼は、ようやく一人を包み込める程度の大きさの薄布をめいっばい広げてわたしと自身の上に被せ、毛皮の敷物を二人の足元に重しのように乗せた。そして、わたしの後ろに、わたしと同じ姿勢で鎧を着た体をぴったりと沿わせ、わたしの肩に遠慮がちに手を置いた。

彼の体は、鎧に包まれているので少しごつごつしていたが、鎧越しでも熱が伝わってきた。彼の体に触れているところから薄布の中全体へと、徐々に温もりが広がっていった。

「これでいいか？」

わたしのつむじの上から、テルドリンの妙に居心地の悪そうなかすれた声がした。わたしの心臓がとくと心地良く脈を打った。ずっと昔、やはりこんなふうに体を包み込まれ、肩に手を置かれ、つむじの上から頼りになる誰かの声を聞いた気がした。父か、あるいは母

だったかもしれない。

わたしはなんだか嬉しくなった。父あるいは母にその時そうしたように、肩に置かれたテルドリンの手を取って、鎖骨のあたりまで引っ張った。

「おい、どういっつもりだ」

なぜか少し慌てた声が降ってきた。わたしは不思議に思いつつ、全てがちょうど理想の位置に収まったことに満足した。

「こうするとあつたかいから。これで安心して眠れるよ。ありがとう。おやすみ、テルドリン」

わたしは首と目を上向けて囁いた。この位置からでは当然、彼の顔は見えないけれども。

わたしのうなじの上で、テルドリンはもう一度溜息をつき、わたしの挨拶に応じた。

「ああ。おやすみ」

洞窟の中は再び静かになった。外の吹雪の音がぼんやり耳に届いた。焚き火が二、三度小さく爆ぜた。うなじの上から規則的な呼吸音が聞こえ始めた。自然と瞼が重くなった。穏やかに遠のく意識の中で、わたしは父か母の歌う優しい子守歌を聞いた気がした。

—了—

### 3—3—Interlude：テルドリン・セロの家

#### テルドリン・セロの家

ギヤランド船長の判断により、ウインドヘルム行きの際は翌朝に出港することになった。

一ヶ月間のソルスセイム滞在の間に、わたしはレイヴン・ロックの人々とすっかり顔見知りになっていた。レッチング・ネツチ亭の主人、ゲルデイス・サドリにソルスセイムを発つことを話すと、彼は、夜にささやかな宴会を開きたいと言った。レイヴン・ロック鉱山を復活させ、街に活気を取り戻してくれた恩人二人のためという名目だった。だが、その恩人二人のうち、わたしの方はきつと脇役に過ぎない。宴会の主役になるのは、わたしの従者を務めている傭兵のテルドリン・セロだ。街の人々の友人である彼が、わたしに付き従って念願のスカイリムへ旅立つことを、宴会の参加者たちは大いに祝い、惜しむだろう。

夜に宴会があるのなら、昼のうちに準備を済ませる必要がある。わたしはテルドリンと一緒に市場へ行き、日持ちのする食材を買って二人で分けて持った。その後は、わたしの錬金術の素材の買い物に付き合ってもらったり、逆に、テルドリンが欠かさず持ち歩いているというモロウインド産の香辛料の買い物に付き合ったりした。

ナップザックの中身が充実して、出立の気概もいよいよ高まってきた頃、ふと、今まで気にもしていなかったが、とても重要なことに思い当たった。わたしは、道端の木箱の上にナップザックを置いて中身を整理しているテルドリンに尋ねた。

「ねえ、テルドリン。スカイリムに行く前に家族に会わなくていいの？」

わたしが彼を雇った日から今まで、彼がレイヴン・ロックで自由に過ごせる時間はほとんどなかった。彼の家族はさぞ寂しい思いをしただろうと思った。

ところが、返ってきたのは意外な一言だった。

「私には家族などいない」

わたしは目を何度か瞬かせた。

「え、そうなの。てつきり結婚してると思ってたよ。優しいし、強いし、なんでもできて頼りになるから」

ぶはあつ、と空気が爆発したような音がした。ちようど横を通りがかった、頬に切り傷があつて目つきの悪いダンマーの男、スリッターが盛大に嘔き出したのだった。彼は歪んだ笑いを浮かべ、陰気なだみ声でテルドリンに話しかけた。

「これまた熱烈な求められっぷりだな、おい！ 悪いことは言わねえから、今のうちに唾を付けとけよ、爺さん。どんなに不細工なちんちくりんでも、若けりや構わねえって奴はそれなりにいるからな」

ある程度距離があるのに、息が酒臭いのが分かった。雇い主であるモグルルが牢に繋がれたために、彼は現在、一時的に失職している。この様子では、モグルルの牢獄行きのきつかけを作ったわたしたちをかなり恨んでいるようだ。

テルドリンはスリッターをちらと見たが、すぐにナツプザックに視線を戻した。彼は皮肉っぽい声色で応じた。

「羨んでばかりいても幸運は巡ってこないぞ。モグルルはお務め中、有力な同業者も島を離れる。これを機に、あのやくぎ者の腰巾着などやめて、まともな雇い主を見つけることだ。そうすれば、その不景気な面を気に入る奇特な奴も現れるかもしれん」

スリッターは赤い目をぎらつかせてテルドリンを睨み据え、怒気を含んだ低い声で囁いた。

「俺はな、ほいほい主人を替える薄情者のあんたとは違えんだよ」

テルドリンはナツプザックの上端の紐を絞ってから蓋をした。彼は、相変わらずスリッターとは視線を合わせずに言った。

「私は生憎、返せない恩を作らない主義なんぞな。せいぜい、次はお咎めを食らうほどやり過ぎるなと忠告してやれ」

さらに何か言いかけたスリッターを無視して、彼はナツプザックを右肩に引っかけ、わたしにキッチンの兜の奇妙な顔を向けた。

「家族はいないが、飯を食って寝るだけの家ならある。少し荷物を取りに行きたい。ついてくるか？」

わたしは頷いた。この場に一人で残ったら、スリッターに難癖を付けられて厄介なことになりそうだった。それに、一ヶ月一緒に旅をしてきた相棒の家がどんな様子なのかも気になった。

わたしたちはスリッターの敵意に満ちた視線を背中に受けて歩き始めた。背後で唾を吐く音が聞こえた。

|||||

レイヴン・ロックの街には、東帝都社時代の名残である煉瓦や板張りの家屋と、現在の居住者たるレドラン家の人々の伝統的な住居である、エンペラー・クラブの殻で造られたクラブ・ハウスとが混在している。煉瓦や板張りの家屋は港に近づくにつれ多くなり、クラブ・ハウスは街の防壁であるブルワークに近づくにつれ数を増す。

テルドリンはわたしを伴って市場を出ると、イエンス夫妻のクラブ・ハウスの後ろへ回った。わたしたちは、ぽこぽこ頭を出しているクラブ・ハウスの群れと、ときどきぽつんと心細そうに現れる帝国風家屋の間を縫うようにして進んでいった。クラブ・ハウスの大きさはまちまちだった。聖堂と同じくらい大きなものもあれば、地上部分に人が三人入るのがせいぜいと思われるような小さなものもあった。だが、三人しか入れないクラブ・ハウスでさえ、元となったエンペラー・クラブは、生き物としては相当に大きい。こんなに大きな生き物が、こんなに沢山いるなんて、モロウインドは不思議な場所だと思っただ。

「よそ見ばかりしていると、ろくなことが起きんぞ」

不意にテルドリンの声が前方から飛んできた。わたしははっとして正面に視線を戻した。中程度の大きさのクラブ・ハウスの脇にしつらえられた天幕の支柱が、鼻先まで迫っていた。慌てて体を捻り、支柱を避けた。

「うわ！ もっと早く教えてよ、危ないなあ」



「ふん。一度痛い目に遭った方が学習すると思つてな。ここは寂れているからまだいい。大きな街にはより沢山の危険が潜んでいる」

テルドリンは狭い路地の真ん中で立ち止まって、もつともらしい教訓を垂れた。声がにやついていた。わたしはむくれた。

「いつもぼんやりしてるわけじゃないよ。今はエンペラー・クラブのことを考えてて油断しただけ」

テルドリンは、歌うように言いながら、再び悠々と歩き始めた。

「マルカルスでは過去の住人たちの生き様に想像を膨らませ、ソリチュードでは帝都を真似た立派な街並みに気を取られていたんだろ  
うよ」

実際、それらの街に行つた際には全くその通りの行動を取つていたので、何も言い返せなかった。よく面倒事に巻き込まれなかったものだ。以前の同行者が進んで面倒事にくちばしを突っ込んでいたから、あちらの方からあえて近づいてくる必要がなかっただけかもしれないが。

わたしは気を取り直し、今度はよそ見をしないようにしながら、テルドリンの後を追つた。

「エンペラー・クラブって、一番大きいのはどれくらい？」

「まだこのカニどもが気になるか。そうだな、昔アルドルーンの評議会に使われていたものだど、ざつとこの街の四分の一ほどはあつたか」

この街の四分の一はあるというエンペラー・クラブを先頭に、彼らの大群がモロウインドの川辺を横歩きで進んでいくさまが頭の中に思い浮かんだ。壮観だ。

「どこに棲んでるの？ いつか見に行つてみたいなあ」

テルドリンは愉快そうに肩を揺らした。

「はははっ、残念だが、とつくの昔に絶滅しているよ。私たちは土に埋まっていた奴らの死骸を掘り出して使っているだけだ」

なんだ、そうだったのか。ちよつとがっかりだ。

テルドリンが歩調を緩めた。眼前に一軒のクラブ・ハウスが近づいていた。これもまた、三人程度しか入れなそうな大きさだった。テル

ドリンは腰のベルトの縁に指を差し込んで、裏側にくりつけてあったらしい小さな鍵を取り出した。彼はその鍵を使ってクラブ・ハウスの木製の扉を開けた。

「ここだ。狭いから、頭をぶつけないように気を付けろ」

家の地上部分は、なるほど、彼の言葉と外観から想像した以上に狭かった。扉から入ってすぐ目の前に地下へ続く階段があった。階段の周囲には、聖堂やレツチング・ネツチのように歩き回れる余裕はなく、すぐそこにエンペラー・クラブの殻が迫っていた。

テルドリンは立ち尽くしていたわたしの背中をやんわりと前へ押しやり、扉の内側から門を掛けた。続いて、入口の脇に放置されていたランタンに火炎の魔法で火を点けて手から提げ、さっさと階段を降り始めた。わたしは彼に続きながら、ランタンの明かりで照らし出された地上部分を一瞥した。殻と階段の間に存在するわずかなスペースに、箒や雑巾や木のバケツなどの掃除道具が横たわっているのが見て取れた。

地下部分は、地上部分よりはいくらか広かった。といっても、レツチング・ネツチなどとは比べものにならない。部屋は、階段から直接繋がる一部屋と、その左右に一部屋ずつの、合計三部屋しかなかった。

階段と直結している部屋はキッチンだった。正面の壁際に暖炉と調理鍋があり、暖炉からこちら側へ丸く繋がる壁の一方には薪や樽や木箱や小さな食器棚が並んでいた。それだけでこの部屋はいっぱい。残る空間にテーブル一脚と椅子二脚が窮屈そうに収まっていた。テーブルの上のしゃれた装飾の蠟燭台は薄く埃を被っていた。少しだけ、焦げたアッシュ・ヤムの匂いが漂っていた。鍋で作った料理の匂いが壁や床に染みついているのだろう。

テルドリンはテーブルの上にナツプザックを置くと、左側の閉ざされていた木の扉を開けた。わたしはその中をひと目見た瞬間、

「なんか、ごちやごちやしてるね」

頭に浮かんだ正直な感想をついそのまま口に出していた。

その部屋はキッチンよりさらに狭い印象を受けた。右奥にベッド、

その手前の左右の壁際に衣装ダンスと棚が詰め込まれている上、床にさまざまな荷物が放置されているせいかもしれない。幸い、戸口からベッドまでは歩いていける程度の隙間が確保されているので、ベッドで眠ろうというときにそれらの荷物に足を取られて転ぶことはなさそうだった。

テルドリンは特に気を悪くした様子ではなかった。彼は入口の近くにある松明に火を点けつつ言った。

「ほとんどは前の住人の持ち物だ。なかなか整理がつかなくてな」

「出ていく時に持っていつてくれなかったの？」

テルドリンは、ふっと息を漏らした。笑ったようにも、溜息をついたようにも聞こえた。

「あの世に引越すときには何も持っていけないものさ」

わたしは少しばつが悪くなった。わたしの気持ちを見透かしてか、テルドリンはひょうきんな素振りで首を傾げた。

「気に入る品があれば譲ってやってもいいぞ。思い入れがあつて手放せないというわけじゃないんだ。奴も文句は言うまい」

彼はベッドの脇に歩いていった。ベッドの上には衣類が雑多に散らばっていた。下着らしい布切れや、彼が今着ているのと同じような厚手の服もあった。

彼がそれらをつまみ上げて確認している傍ら、部屋の中を見学することにした。鎧、武器、兜、置物、山積みの本、鉱石の塊、何かが詰まった大小の麻袋、使い道のよく分からない材木までもが置いてあった。まずは、手近なところにあつた鉄の鎧の色合いや施された文様を観察した。それに飽きると、隣で山積みになっている本の題名を上から順に眺めた。題名だけでも前の住人の人となり分かる気がして面白かった。一冊を手にとって前書きを読んでいたら、肩を軽く叩かれた。

「服を替えてくる」

テルドリンが片脇に衣類の塊を抱えて立っていた。わたしは彼の無表情な兜を見上げて頷いた。遠ざかる足音を聞きながら、視線を本に戻した。さらに何ページか読んでみたが、この本は思ったよりも難

しそうだし、内容にあまり興味が無い。もつと簡単に気晴らしに読めるような本はないだろうか。

わたしは部屋をぐるりと眺めた。すると、ベッドの向かい側の壁際にも本が積まれていることに気付いた。

テルドリンが置いていったカンテラを持って近づいた。その本の山は、鎧の隣の山と違って乱雑に重ねられていて、少し衝撃が加われば崩れてしまいそうだった。

その一番上にある、大判で赤色の革表紙に金色の刺繍のされた、わたしの手首の幅ほどの厚みのある本が目を惹いた。表紙にも背表紙にも題名や作者名は書かれていなかった。そつと手に取って、数ページめくってみた。

そこにあつたのは、絵だった。さらに正確に言うと、ものすごく大人向けの絵だった。左のページで、貴族風の部屋の天蓋付きのベッドの上で裸の人物二人が見つめ合っていたかと思うと、右のページでは体をべったりくっつけ合っていた。

非常に繊細な筆致であるがゆえに、とても生々しく、とても美しかった。隅々まで見入ってから、次のページに移った。そこにもやはり大人向けの絵が描かれていた。舞台と登場人物は前のページと同じで、体勢や表情がより扇情的になっていた。もしかして、この類の絵がこの本いっぱい描かれているのだろうか。なんだか胸がどきどきしてきた。近くにあつたベッドの上に腰掛けて、読み進めることにした。

もう何ページか進んだ時、ページとページの間にかが挟まっていることに気付いた。取り上げてみると、それは指輪だった。絡まり合ったツタを模したらしい優雅な装飾の施された銀の石座に、小ぶりなアメジストが嵌め込まれていた。同じく銀でできた指輪の腕も、石座の装飾に合わせてツタを模してうねっていた。綺麗だなと思った。「何をしているんだ!」

不意に、誰かの狼狽した声が聞こえた。顔を上げた時には、赤茶けた手袋に包まれた手が赤い本を奪い去っていた。目の前にテルドリンが立っていた。なぜか、ものものしい雰囲気、肩を強張らせてい

た。

「あ、ちよつと、読んでたのに」

腰を浮かせて奪われた赤い本へ手を伸ばすも、それは素早くテルドリンの背中へ回されてしまった。彼は後ずさり、本を元の場所に戻した。それから、激しい抑揚を伴った声で言った。

「まったく、少し目を離すとんでもないことをしでかすな、お前は」  
「なんだかよく分からないが、怒っているようだ。わたしは戸惑った。」

「読んじやいけなかったの？ 前に住んでた人が置いていったんでしょう？」

テルドリンは、急に、見えない手で首を絞められているかのように絞られきった、苦しそうな声になり、どもりがちに答えた。

「い、いや、それは………そうだが。これはその、なんというか、お前にはまだ早い」

本の山の前に立ち塞がったまま、頭の堅い父親のようなことを言い出した。どうにも、彼はわたしを純粹無垢な子供扱いしたがることが多い。

「ああいうの、何度も見たことあるよ。昔の仲間が集めてたから」

「なっ……、だ、だからといって読んでいいことにはならん。刺激が強すぎる。特に後半は目も当てられないくらい酷い。眠れなくなるぞ」  
「そういつた世界を知らないわけではないと遠回しに伝えたのに、テルドリンはなおも鼻息荒く言い募った。」

しかし、なるほど、眠れなくなるのは困る。ただでさえ悪夢に悩まされているのだ。少し悩んで、いい解決策を思いついた。

「じゃあ、二人で一緒に読むのは？ 夜までしばらく暇だし」

テルドリンの兜のレンズがランタンの光を反射して不機嫌そうにぎらついた。

「はあ!? 冗談じゃない。いったいどうしてそんな馬鹿げた考えが浮かんでくるんだ」

「すごい勢いで拒否されてしまった。わたしがとてつもなく非常識な発言をしたかのような口ぶりだ。わたしは不貞腐れて呟いた。」

「テルドリンと一緒になら、グロテスクな絵を見ても大丈夫だと思っただけ」

テルドリンはその場で落ち着きなく足踏みをした。

「酷いってのはそういう意味では……いや、いい。とにかくお前がこの本は読ませられない」

彼はがっちり腕組みをして私を見下ろした。お前があの本を諦めるまで一歩も動かないぞ、とでも言いたげな態度だ。気に入った物があれば譲ってくれるとまで宣言していたのに、どうなっているのだろうか。でもまあ、前の持ち主は亡くなっているから、今の持ち主はテルドリンだ。その彼からお許しが出ないなら仕方がない。

「分かった。読まないよ」

テルドリンの姿勢は変わらなかったが、本を取り上げてから強張ったままだった肩の力が抜けた。彼は視線を虚空に逸らし、ぼそりと小さい声で言った。

「いきなり怒ってすまなかったな」

「え？ う、うん。別に大丈夫だけど」

わたしはそう答えるしかなかった。どうも、先ほどから彼は情緒不安定だ。

——そういえば、本の間に挟まっていた指輪が、わたしの掌の中に収まったままだった。

「これも前の人の？」

掌を広げて見せた。テルドリンは指輪を見下ろして数拍沈黙してから、しわがれた声を発した。

「ああ、そうだ」

「嵌めてみてもいい？」

「ああ、まあ……構わんが。ただ、私が以前試したら——」

構わんが、と言われた時点で、わたしは指輪を右手の中指に嵌めていた。指輪はまるで吸い寄せられるように滑らかに嵌まり、アメジストが中指の付け根で煌めいた。見惚れたのも束の間、鋭い耳鳴りに襲われた。視界の中の全てのものが何重にもぶれて、揺らいだ。耐えきれずに目をつぶった。途端に重心がおかしくなり、体がふらついた。

誰かに背中を支えられ、柔らかい場所に横たえられた。体の下から、溶かしたバターと蜂蜜に何かの香辛料を混ぜたような、蠱惑的な甘さの中にぴりつとするものの混じった匂いが舞い上がってきて、わたしを包み込んだ。心地良い痺れが背骨を緩やかに走り抜けた。このままずっとこの匂いに埋もれていたいと思った。

だが、その願いは叶わなかった。早々に、呆れた様子を露わにしたかすれ声が上がから降ってきた。

「ひとの話は最後まで聴くものだ」

薄目を開けた。キチンの兜がわたしの顔を覗き込んでいた。

「その指輪には強力な魔力増強の付呪が施されている。体内に取り込まれる魔力が急に増えるから、ほんの少しの間目眩と頭痛に襲われるんだ、今のようにな。起きられるか？」

わたしは上半身をおっかなびつくり起こした。はじめのうちは側頭部がじんじん痛んだが、しばらくすると何も感じなくなった。頭を左右に振り、痛みが残っていないことを確かめた。次に、ベッドから立ち上がって体を動かしてみた。違和感はなかった。

試しに片手に魔力を集めてみた。今までは体のあちこちに薄く乗っている魔力を掻き集めているような感覚だったのに、指輪を嵌めた今は、分厚く積もっている魔力がひとりでにごっそり集まって、なお有り余っているような感覚だ。明らかに量が違う。

すごい、と呟き、改めて、右手中指に嵌めた指輪を眺めた。銀のツタをかたどった指輪の腕部分が中指に絡みついて離れまいとしているかのように見えた。唐突に頭に浮かんだことがあった。

「これ、婚約指輪とかなのかな？」

テルドリンが弾かれたように肩を揺らした。

「は!?! どうしてそんなふうに思うんだ」

「裝飾がすごく凝ってるし、付呪の効果も強力だから、その辺りで気軽に買えるものじゃないと思う。もしかしたら特別に注文して作ってもらったのかも。きつとすごく値段が張るよ。前に住んでた人への、誰かからの贈り物だったんじゃない?」

テルドリンはゆつくりとかぶりを振った。

「想像力が逞しいな。単に自分で使うために作らせた可能性もあるだろうに」

放置されている他の品物を見る限り、この指輪の装飾は前の住人の好みではなさそうだった。

「そうかなあ。でも、どっちにしても、綺麗だね」

石座に嵌まっっている小さなアメジストを覗き込んだ。誰かの愛情のこもった指輪だと思っただけで見れば、硬い殻の内側に温もりが宿っているような気がした。ずっと本の中に挟まっていたなんてかわいそうだ。

「……ふん。そんなに気に入ったなら、お前に譲ってやるよ」

テルドリンが低い声で言った。

わたしは驚いて首を横に振った。

「こんな大切な物、持ち主が亡くなってももらえないよ。お墓に供えてあげたら？」

「その必要はない。本当に大切だったら肌身離さず身に着けているものだ。自宅に置き去りにしていたということは、そこまで思い入れがなかったんだろう。あるいは、渡そうとした相手に袖にされて行き場を失ったのかもな」

いつもと同じ自信たっぷりな口調なのに、どこことなく虚ろな響きが混じっていた。テルドリンだつて大概想像力が豊かじゃないかと思っただけで、それを口に出すのはなぜか気が引けた。

わたしは努めて明るく尋ねた。

「じゃあ、本当にもらうよ？ 呪われたりしないよね？」

テルドリンは力強く頷いた。

「ああ。この部屋でろくな使い方をせずにくすぶらせているより、誰かに役立ててもらった方がよほどいい。……と、誰だか知らないが、元の持ち主も思うことだろうよ」

傭兵としていくつもの死線をくぐり抜けてきたためか、現実的な考え方だ。

綺麗な指輪をもらえたことが嬉しくて、わたしは右手を色んな角度に曲げたり高さを変えたりして、アメジストや銀のツタの見え方の変



化を楽しんだ。

テルドリンは少しの間わたしの様子を眺めていた。それから、ふと、笑ったのか溜息なのか分からない息を再び吐いた。

「私はもう少しだけ荷物の準備をする。他にもめぼしい物がないか探してみるといい」

|||||

テルドリンの荷物の準備はすぐに終わった。しかし、わたしが前の住人の遺品を物色がてら整理し始め、ときどき質問に答える以外は手持ち無沙汰になったテルドリンが在庫処分だとばかりにスケイスクローを煎じた苦い茶を淹れて押しつけてきたりもして、辛うじて部屋の入口付近の品物の整理ができた時には、夕刻を知らせる鐘が鳴り終わっていた。そろそろ宴会の参加者がレッツチング・ネツチ亭に集まる頃合いだ。

テルドリンはわたしを連れて地上の扉の前に立った。そこで、ふと思い出したように話しかけてきた。

「昼間みたいなことは、宴会では言うなよ」

わたしは首を傾げた。

「昼間みたいなことって？」

門の横木を引き抜いて階段の傍へ片付けながら、彼は答えた。

「結婚がどうかというあれだ。あの手のことはその気がなければ口に出してはいかん。誤解を招く」

あの時は純粹に褒めただけだったのだが、スリッターはわたしがテルドリンを口説いていると思って馬鹿にしてきた。なかなか難しい。

テルドリンは人さし指をぴつと立てて、わたしの中指を指した。

「それから、その指輪のことだ。もし聞かれたら、そこらの遺跡で拾ったとかなんとか適当に答えるんだ」

「え、なんで？ テルドリンがくれたのに」

「連中がその一言を聞いてどんな想像をすと思う？」

わたしは、グローヴァー・マロリーかエイフィア・ヴェローティあ

たりになつたつもりで想像してみた。テルドリンと一ヶ月行動を共にしていたわたしが市場で突然彼に求婚めいたことをし、彼の家を訪ね、戻ってきたら高価そうな指輪をしている。どうしたのかと尋ねれば、テルドリンからもらつたと答えが返ってくる。

心臓が跳ね上がった。これはまずい。大変まずい。

テルドリンは、それみろ、とばかりに鼻を鳴らし、扉を内向きに開け放った。西の空からのっぺりと広がっている夕陽の穏やかな赤色が、家の中に差し込んできた。彼はわたしに顎でしゃくつて先に外へ出るよう示し、自らも出ると扉に鍵を掛けた。振り返りざま、彼は腰に片手を置き、まるで信用ならないといった様子でわたしを見据えた。

「いいか、今夜はさつき言つたことに重々気を付けろよ。私だけでなく、お前も被害をこうむるんだからな。まったく、ろくな娯楽がないせいで、誰も彼も要らん世話ばかり焼きたがる。これだから田舎町は嫌なんだ」

ヘンテコな兜を赤く染めて拗ねたように呟くテルドリンは、なんだか少しかわいかった。

—了—

#### 4—1：最初のレッスン

##### 1. 魔法使いのカジート

眼前に屹立する、巨大な氷でできた人型の怪物が、分厚い氷の腕を振り回し、わたしの脇腹に重い一撃を入れた。なけなしの筋肉を精一杯引き締めたので体が真つ二つになることは避けられたが、脇腹で内出血が起きている気持ちの悪い感覚に囚われながら盛大に吹っ飛んだ。石の床で全身を強打する寸前になんとか受け身を取った。

短い叫び声が聞こえた。何を叫んでいるかは聞き取れなかった。脇腹と、受け身で衝撃を緩和しきれなかった腰が急激に熱を帯び、じんじんと痛んだ。両目から涙が噴き出た。にじむ視界の中で、氷の怪物はハンマーのように太い腕の前面を、誰かの頭上に振り上げていた。

このままでは「彼」が死んでしまう。だが、これ以上はどうすることもできそうにない。わたしにもっと力があればよかったのに——戦い、守り、癒す力が。そうすれば「彼」を救えただろうし、もつとずっと前に起きた色々な出来事も、全く違う結末を迎えていただろう。

わたしは瞼を閉じた。つい先ほどまで、こんなことになるとは思っていなかった。なんだかんだと不安は抱えながらも、今日ここで巡り合ったいくつもの「初めて」に、わたしの心は躍っていたのだった。始まりは、あの馬車の中だった。

|||||

二頭の馬の歩みと、地面の小さな凹凸でぶれる四つの車輪とが、わたしたちの乗る箱形の馬車を穏やかに揺らしている間、わたしは夢を見ていた。

幼いわたしは、薄暗いテントの中で、父の温かな右腕に顔をもたせかけていた。わたしは、彼がすり鉢にいくつつかの薬草を入れて、乳棒

ですりつぶし、混ぜ合わせていくのを眺めていた。父は鼻歌を歌っていた。それは、父とわたしを含む旅芸人一座がサーカスで披露する、そのときどきの流行りの歌だった。父は人前で演じる時よりも、怪我に効く薬を作り、魔法で仲間やサーカスの客を癒している時の方が楽しそうだった。

車輪が石でも弾いたのか、馬車が大きく揺れた。わたしは久しぶりに現れた父の幻を逃すまいと、彼の腕に必死でしがみついた。父はいつものように頭を撫でて声をかけてはくれなかった。出来上がった塗り薬を黙々と容器に詰め、次の薬作りに取りかかっていた。薬なんてどうでもいいのに。わたしはただ、父の顔が見たい。父の声が聞きたい。

「もうすぐ着くよ。そろそろ支度しとくれ」

顔のはつきりしない父がわたしを見下ろしてしわがれ声で言った。ああ、これは父の声ではない。これは――

わたしは瞼を開けた。眼前の御者用の覗き窓から、目尻に皺の刻まれた青い目が一對、わたしに笑いかけていた。

わたしは寝ぼけ眼で曖昧に笑い返し、覗き窓が閉まっていくのを見守った。それから、自分が夢の中で父にそうしていたのと同じように、誰かの右腕に顔をもたせかけ、しがみついていることに気づいた。

その腕は、父よりもずつとがっしりしていて、分厚い筋肉から発される熱で温かいというよりも熱い。橙色の目の粗い布服に包まれていて、奇妙な生物の殻を組み合わせて造られた、赤茶けた艶のある籠手を肘から先にはめている。胴回りに同じように赤茶けた鎧を装備し、頭部にヘンテコな形の兜と赤いマスクを身につけたその人物は、未だに体重を預けたままぼんやりしているわたしに文句を言うでも軽口を叩くでもなく、腕組みをしてじつと正面の馬車の壁を見据えていた。

「テルドリン、ごめん。腕を枕にしちゃったね」

腕から顔と手を離して声をかけると、わたしの従者のテルドリン・セロは、今ようやくわたしの存在を思い出したとでもいうように肩をぴくりと動かして、こちらにヘンテコな兜の正面を向けた。

「構わん。それより、今のうちにマントを羽織っておけ。ウィンターホールドはウィンンドヘルムの五倍は寒いぞ」

彼のかすれた声には普段よりも少し覇気がなかった。わたしは足元に置いてあるナツプザックの中から、ウィンンドヘルムのヴィオラ・ジオルダーノからもらった派手な色遣いのマントを取り出した。

「テルドリンは何か着ないの？」

わたしは胸の前でボタンを留めながら聞いた。

「私は鍛えているからな。極寒の海に突き落とされでもしない限りはこの装備で十分だ」

威勢のいい減らず口もどこか上の空に終わらせて、テルドリンは再び正面へ向き直った。わたしは不思議に思いながら、傍らの窓の幕を上げ、窓の外に顔を出した。

わたしたちの乗っている二頭立ての箱型の馬車は、暗い藍色の海を望む崖沿いの道を進んでいた。灰色の曇天から大粒の雪が静かに舞い落ちていた。頬にぴりっとした痛みが走った。テルドリンの言った通り、ウィンターホールドはウィンンドヘルムよりもずっと寒い。漏らした吐息は、真つ白になって進行方向とは反対側に流れていった。

海の彼方にはぼつんとひとつ背の高い岩山が突き出し、その上に直線的な輪郭をした灰色の塊がうずくまっていた。目を凝らすと、それは建物だった。遠くから眺めている今でさえ拳二つほどの大きさに見えるその建物は、ソリチュードのブルー・パレスやウィンンドヘルムの王たちの宮殿に匹敵するか、もしかしたらそれら以上の広さ、高さがあるかもしれない。ただ、周りに他の建物が全くないたために、どことなく物悲しそうな雰囲気も漂っていた。

「あれがウィンターホールド大学かな？　すごく大きいんだね」

ここ二週間ほどずっと目指していた場所がようやく近づいてきたことにわくわくして、わたしはテルドリンを振り返った。彼は兜をほんの少しだけこちらへ向けた。二つのレンズが外の光を反射して鈍く煌めいた。

「ああ。変わらん、あの大学は。相変わらず、まるで己こそがここらの真の主だと言わんばかりだ」

お得意の皮肉っぽい大仰な調子で彼は言ったが、両腕を組んだまま身振り手振りも全くなく喋ったので、なんとなくちぐはぐに感じられた。

わたしはふと、彼のこれまでの話しぶりから頭の中に浮かんだことを口にした。

「テルドリンはウィンターホールドに来たことがあるの？」

彼は腕組みは解かないままで肩だけ軽くすくめた。

「昔、住んでいたことがある。お前のひいじいさんが生まれるよりも前の話だ。大学の中に入るのは今回が初めてだがな」

普段はあまり意識せずに接しているが、テルドリンはダンマーで、二百年以上生きている。つい最近あったかのように話していることが、よく聞いてみると人間のわたしには想像もつかないような遠い昔の出来事だったなんてことがざらで、面白かったり、少し寂しかったりする。

いつもの彼ならもっと詳しい思い出話をペラペラと勝手に語ってくれるものだが、このことはあまり覚えていないのだろうか。わたしの曾祖父が生まれる前とは、どのくらい前のことだろう？ 頭の中で大雑把に計算しようとしていた時、複数の人が言い合いをしているような声が馬車の外から聞こえてきた。

わたしは再び窓から顔を出した。ウィンターホールド大学のお膝元の町、ウィンターホールドはすぐそこに迫っていた。藁葺きや板張りの屋根の連なる町の内側とわたしたちの今いる側とを、ウィンンドヘルムのものよりも小さいが整然と積まれた石煉瓦の壁が隔っていた。壁の片側は雪山の急斜面に潜り込み、もう片側は崖の縁で上の方がいくらか崩れて終わっていた。石煉瓦の壁の中央、わたしたちの馬車に行く街道の先に締め切られた木の門があった。その門前に立ち、門を守る衛兵と押し問答をしている人物がいた。

「ジエイ・ザルゴはカジート・キャラバンの商人ではない。大学に入学しに来たと、いったい何度言ったら分かるんだ」

独特の抑揚のある男の声だ。分厚いもこもこしたコートを着ている。フードを深く被ってこちらに背を向けているので、どのような顔

形をしているかは分からない。ひとつ確かなのは、彼がカジートであるということだ。彼は、尻のあたりから突き出た焦茶色に黒の縞模様の入った尻尾で、苛立たしげにぱたぱたと自身の背中を叩いていた。心臓をぎゅっと掴まれたような心地がした。スカイリムでは見かけることの少ないこのカジートという種族を見かけるたび、わたしは旅芸人一座で妹同然にかわいがっていた「彼女」のことを思い出す。「ならば早く推薦状とやらを見せろ。俺には魔法使いのカジートがいるなどとは到底信じられん」

衛兵は頭一つ分以上も背の低いカジートに向かって背中を屈めて、居丈高に、若干の意地悪さも感じさせる声色で言い放った。カジートは尻尾をぶわつと膨らませた。

「イヤだ。この推薦状はジェイ・ザルゴの命にも等しい。オマエのような性悪ノルドに渡すことはできない」

「いったいどの口でそんなことを言っている。こんな北の果てで何を盗み出すつもりか知らんが、俺の目は誤魔化せないぞ」

「高度な付呪の施された指輪や上位魔法の呪文書なら盗んでも手に入れる。だが、オマエたちの守る薄汚れたゴールドや痩せたニワトリに興味はない」

「ハ、やはり貴様は盗っ人ではないか！」

二頭の馬の鼻息が空気を震わせた。馬車は不穏な雰囲気、魔法使いだというカジート、ジェイ・ザルゴの背後で止まった。

ジェイ・ザルゴがこちらへ顔だけ向けた。青緑色の目をして、口元に黒いヒゲを生やした、尻尾と同じ焦げ茶色の毛並みのカジートだ。彼は馬車の窓から顔を出しているわたしを胡乱げに見上げた。

彼は、少しだけ「彼女」に似ていた。年格好と、他人から向けられる感情全てをいっしょくたに拒絶する、きかん気の強そうな目つきが。

わたしはちよつとした親近感を覚えた。彼は大学に入学しに来たと言った。わたしも同じ目的でここまでやって来たのだ、あの偏屈な大魔法使いマスター・ネロスの推薦状を持って。確かに魔法使いのカジートなんて聞いたことがないが、「彼女」に似ているこのカジートが

嘘をついているとは思いたくなかった。

「通してくれんかね？ こちらはご覧の通り、ウルフリック卿のお墨付きだ」

御者が衛兵に言った。

衛兵はウルフリックという名を聞いた途端、それまでのジェイ・ザルゴに対する態度が嘘のように背筋をぴんとただし、馬車のわたし側の側面に回った。この馬車は、とある事情によりウインドヘルムの首長ウルフリック・ストームクロークが貸してくれたもので、普通の馬車とは違い天蓋と壁板で客室が保護され、壁板の外側面にはウインドヘルムの熊の紋章が描かれている。衛兵は熊の紋章を認めると、わたしに向かつてさっと一礼した。

「大変失礼致しました！ すぐに門を開けます」

わたしをウルフリック卿の使節か何かだと早とちりしたらしい。衛兵は木の門を決まったリズムで何度か叩いた。錆びた蝶番の軋む音を伴って門は開いた。

一連のやり取りを用心深く眺めていたジェイ・ザルゴは嬉しそうに跳び上がった。それから、まるで彼自身が馬車を町の中に招き入れ先導する衛兵であるかのように、胸を張り、尻尾を立てて、門の内部に入ろうとした。

「ジェイ・ザルゴも一緒に行く。ジェイ・ザルゴだって師匠のお墨付きだ」

そのコートの襟首を衛兵が雑に掴んだ。

「貴様にまで入っていいとは言っていない。馬車の進路を塞ぐんじゃない。こつちへ来い、盗っ人め」

「うわ、やめろ、放せー！」

衛兵は抵抗する彼を街道の外れへ引きずっていき、まっさらな雪の上へ放り投げた。

「ふぎやー！」

ジェイ・ザルゴは固い雪にしたたかに全身を打ちつけ、悲鳴を上げて丸まった。フードが取れて猫に似た耳と黒髪が露わになった。彼が身につけていたポシエツトから巻物や薬瓶がいくつか零れた。衛



兵はさらにひどい仕打ちを加えようとしているのか、彼にゆつくりと近づいていく。わたしは咄嗟に叫んでいた。

「やめてくださいー！」

わたしは馬車の自分側の扉を開け放って飛び降り、冷たい空気を切り裂くようにして駆けていき、ジェイ・ザルゴと衛兵の間に割り込んだ。

「は、どうなされたの、で……？」

衛兵はわたしを見下ろし、言葉を鈍らせた。わたしがウルフリック卿の使節に相応しくない格好をしていると気づいたのだろう。ヴィオラからもらったマントは品質は良いが派手すぎるし、その下から覗いているズボンやブーツは逆にも飾り気がなく、何ヶ月も使い通しであるためによれよれになっている。

「乱暴なことはやめてください。彼はわたしが大学まで送り届けます」

そんな義務も権利もないが、勢いで押し切ることにした。啞然としている衛兵を尻目に、わたしはジェイ・ザルゴを立たせ、彼のポシェットから落ちた荷物を回収した。それから彼の手を引いて逃げるように馬車まで走っていき、目を白黒させている彼を馬車の中に押し込んだ。

馬車の扉を閉じながら、御者に馬車を出すよう頼んだ。間もなく、馬の脇腹を叩く鞭の音が聞こえ、馬車はそろそろと動き出した。

ほっと息をついたところで、腹の真ん中を肘で突かれてわたしは呻いた。無理矢理押し込んだジェイ・ザルゴがテルドリンともみくちやになって、ジェイ・ザルゴが苦し紛れに突き出した腕がわたしの腹に一撃を与えたのだった。

ジェイ・ザルゴが大口を開けて喚いた。

「痛い痛い痛い、何かかジェイ・ザルゴの腹に刺さっている！ おいオマエ、ジェイ・ザルゴからさっさと離れろ、殺す気か？」

「こんなに狭い中で満足に動けるわけがあるまい。この馬車は二人乗りだぞ。どうしてこいつを乗せた？」

テルドリンが、先ほどまでの若干憂わしい態度はどこへやら、怒り

に満ちた声とともに奇妙な生物の殻で造られた兜をこちらに向けた。するとジェイ・ザルゴのもう一方の手がテルドリンの兜のレンズを覆った。テルドリンはダンマーの言葉で低く悪態をついた。

「だって、かわいそうだったから。大学はもうすぐでしよう？ちよつとだけ我慢してよ」

かく言うわたしも彼らの体積とジェイ・ザルゴの肘に圧迫されて馬車の扉に押しつけられている。痛みで気が遠くなりそうさ。

テルドリンは頭を煩わしそうに左右に振り、レンズを覆っているジェイ・ザルゴの手を脇に除けた。

「あの衛兵の言っていたことは正しい。カジートなど信用ならん。放っておけばよかったものを」

ジェイ・ザルゴがぎよつとするほど鋭い牙を剥き出した。

「オマエたちもジェイ・ザルゴをバカにするのか？ 見くびるな。魔法で丸焦げにしてやる」

わたしに肘鉄をしている方のジェイ・ザルゴの手に実体のないエネルギーの粒子がじわりと集まる気配がして、その掌の中で小さな火花が散った。ああ、このカジートは本当に魔法を使えるのだ！ だが、こんなところで火炎の魔法を使われたら、わたしたちはおろかウルフリック卿の立派な馬車まで丸焦げになってしまう。

万事休すというところで馬車が止まり、背にしていた扉が外側から開いた。わたしは馬車から転げ落ちた。続いて息苦しい密閉空間から逃れようと焦ったジェイ・ザルゴが馬車の足置きを踏み外し、わたしの上に俯せに降ってきた。

わたしたちは揃って潰れた蛙のような声を上げた。少し間を置いて二人分の荷物を背負って馬車を降りてきたテルドリンが、扉の横に控えていた御者と顔を見合わせた。御者は愉快そうに微笑んでいた。テルドリンは呆れたようにかぶりを振った。

「到着したよ。この先はあんたら魔法使いの領域だ。わしは町でひと休みしてからウインドヘルムに戻る。うまくいくことを祈ってるよ、色々とな」

御者はそう言いながら、ジェイ・ザルゴの下敷きになっていたわたし

しを律儀に助け起こしてくれた。わたしは快適で安全な馬車の旅を提供してくれたその老人に弱々しく礼を言った。

御者の操る馬車が元来た道に戻っていく。この時、わたしは初めて石煉瓦の内側の様子を目にした。

そこは、スカイリム各地の首長が住んでいる土地の中では最もこぢんまりとしているように思えた。まだホワイトランを訪れたことはないが、伝え聞いた話から考えるに、この町よりはずっと栄えているだろう。

家は三十戸ほどしかなかった。しかも、確認できる範囲だけでも、いくつかの家は屋根と壁が壊れ、家の中の朽ちたベッドの枠や暖炉を風雪に晒していた。家々の屋根の間から抜きん出ている背の高い建物が恐らく首長の邸宅だろうが、ウインターホールド大学と比べれば水牛に対してのネズミのようなものだった。テルドリンが大学を見て言った皮肉の意味がようやく飲み込めた。

わたしたちが放り出されたのは半円形のがらんとした広場だった。町の外から続く街道が広場を突っ切り、幅広の階段に遮られて止まっていた。階段は背の高い石壁に両脇を固められて、小さな石造りの建物へと繋がっていた。石造りの建物はアーチ型の鉄の扉で閉ざされ、その扉の表面には星の中に浮かんだ目のような模様が描かれていた。

「ここがウインターホールド大学への入口か」

ジェイ・ザルゴが未だに雪に覆われた地面に倒れ伏したまま、顔だけ上げて呟いた。彼は目を細め、牙を見せて笑っていた。不敵な笑みとでも表現したらしっくりくるだろうか。地面に倒れたままなのでいまいち格好がついていないが。

「大丈夫？ 起きられる？」

わたしは腰を屈めて手を差し伸べた。ジェイ・ザルゴはびくつと首を引つ込めたのち、両腕を支えにして一人で立ち上がった。

「この程度、へっちゃらだ」

ジェイ・ザルゴはフードを被り直し、服に付いた雪を払いながら、わたしをきつと睨んだ。

「あの性悪ノルドを魔法でこてんぱんに懲らしめて堂々と町の中に

入ってやろうと思っていたのに、余計なことをしてくれたな」

強がっているのか、それとも本気で言っているのか知らないが、雪まみれの分厚いコートで着ぶくれした状態でうそぶかれても迫力がない。

「そんなことしたら逮捕されるよ」

「勝手な思い込みでジェイ・ザルゴを町から締め出そうとしたのはアイツの方だ。罪人扱いされるいわれはない」

わたしの言葉を一蹴したあと、ジェイ・ザルゴは眼前の建物に向き直り、鼻の穴を大きく膨らませた。

「だが、過ぎたことはもういい。師匠から既に書簡が届いているはずだ。彼女の最も有望な弟子が間もなくウインター・ホールド大学にやって来ると。大学の者たち全員がジェイ・ザルゴの到着を今か今かと心待ちにしているだろう」

このどこか間の抜けたカジートが、今か今かと心待ちにされるほど優秀なのだろうか？ わたしの胸の内の疑問をよそに、ジェイ・ザルゴは撫で肩を精一杯怒らせ、焦げ茶色の尻尾をくねくねさせながら、大股で階段を上がっていった。

「たのもー、たーのもー！ 大魔法使いドウラ・サツヤの弟子ジェイ・ザルゴだ！」

ジェイ・ザルゴの時代がかった口上がこだまして消え、彼が鉄の扉の前に立った時、扉が軋んで中央で二つに割れ、建物の内側へ開いた。藍色のローブを着た女性が、灯火の魔法の白い光で照らされた小さな空間の中に立っていた。金色の髪、尖った耳、黄色の肌、すらりと細長い体躯。ハイエルフだ。彼女は冷ややかな印象の金色の瞳でジェイ・ザルゴを数秒間黙って見て、それから薄ピンク色の唇を開いた。

「ようこそ、ウインター・ホールド大学へ」

鈴を振るような美しい声だが抑揚は小さく、浮かべた笑顔もなんだか取って付けたようだった。しかし、だからといって門前に立つ若いカジートに特別不信感を持っているわけでもなさそうだった。彼女は自分が彼を歓迎していることを強調するように唇の両端を引き上

げた。

「エルスウェーアからはるばるご苦勞様、ジェイ・ザルゴ。私は破壊魔法の教授のフアラルダです」

どうやら、全員ではないにせよ、誰かしらが彼を待っていていたことは本当らしい。ジェイ・ザルゴの尻尾がぴんと立った。彼は胸元に手を入れて、本くらいの大きさの包みを取り出し、うやうやしい一礼とともに包みをフアラルダに差し出した。

「フアラルダ先生、はじめまして。これがドウラ・サツヤの推薦状だ。先に届いた書簡と見比べれば本物であることはすぐに判る」

フアラルダは包みを両手で挟んで持った。

「確かに受け取りました。ところで、あちらの方たちはどなたですか？　一緒に馬車に乗ってきましたね？」

彼女は金色の目を、広場にぼんやり突っ立っていたわたしとテルドリンに移した。ジェイ・ザルゴが彼女の視線を追ってわたしたちを顧みて、首を傾げた。

「さあ、誰だろう？　ジェイ・ザルゴの知人ではない。単なる通りすがりのお節介焼きだ」

わたしはあんぐりと口を開けた。いや、確かにわたしは自分の目的を一切彼に話していなかった。だから彼にしてみればわたしは単なる通りすがりのお節介焼きだ。その認識はまったく正しいのだが。

フアラルダは何度か瞬きをしてから頷いた。

「そうですか。では行きましょう、ジェイ・ザルゴ。準備は整っています」

「あ、ちよつと待つてくださいー！」

わたしは慌てて階段を駆け上がり、ジェイ・ザルゴと肩を並べた。

「わたしもジェイ・ザルゴと同じです。大学に入学しに来たんです、マスター・ネロスに推薦されて」

フアラルダの綺麗な弓なりの眉が少し上がった。

「そうなのですか？　マスター・ネロスからは特になんの連絡も受けていませんが」

それはそうだろう。マスター・ネロスはジェイ・ザルゴの師匠のよ

うにマメではない。そもそもわたしにウインターホールド大学に行くよう勧めたのも、わたしが邪魔になって厄介払いしたかったからだ。そのために出来合いの推薦状を書く以上の手間を掛けるわけではない。

「ええと、でも、推薦状は確かにもらってます」

わたしはテルドリンを手招きして階段を上がってきてもらい、彼が持っていたわたしのナツプザックの中を探り、油紙に包まれた細長い包みを取り出した。

「ファラルダ……先生。これがマスター・ネロスの直筆の推薦状です」  
一瞬迷ってから、ジェイ・ザルゴの真似をして「先生」と付けることにした。

ファラルダ先生は、マスター・ネロスのたぶんものすごくおぎなりの推薦状の入った包みをジェイ・ザルゴの分と重ねて持った。

「受け取りましょう。ひとまず、あなたも一緒に来ることを認めます」  
わたしはほっと胸を撫で下ろした。隣のジェイ・ザルゴはスキャンプにつままれたような顔でわたしとファラルダ先生のやり取りを眺めていた。

ファラルダ先生は不意に唇を引き締めて、わたしの背後にいるテルドリンに問いかけた。

「あなたは、マスター・ネロスに推薦されて来た、ということではなさそうですね？」

テルドリンはくつくつと笑い声を立て、背負っているナツプザックをわざとらしく揺すって、その上に引っかけているキチンの盾を見せつけた。

「誰に推薦されようが、今更行儀よく魔法を習い直す気にはなれんな。私はテルドリン・セロ、傭兵だ。今はこいつに雇われている。ついていっても問題ないか？」

ファラルダ先生は再び唇に笑みを広げた。しかし、先ほどまでのぎこちないものとは違い、なんだか本当に嬉しそうだった。

「ええ。問題ありません。外の世界に比べると刺激が少ないので、あなたのよう方には退屈かもしれません」

## 2. 入学試験

角度を変えて連結し、徐々に上り勾配になって大学に繋がっている幅広の橋の上を、わたしは早足で歩いていた。

というのも、先に行くファラルダ先生の歩幅が大きいからだだった。彼女よりもずっと背の低いわたしは、彼女に追いつくためにいつもよりも速いペースで歩かなければならなかった。それは、似たような背丈のジェイ・ザルゴにとっても同じだった。彼とわたしは並んで早歩きしていた。

「オマエが魔法使いだとは、思わなかった。とても、とぼけた顔を、しているから」

ジェイ・ザルゴが、はあはあと苦しそうに息をつく合間に言った。かなり傷ついた。とぼけているのと魔法を使えるかどうかは別問題だ。言い返したくなかったが、わたしはぐっところえて大人の対応をした。

「わたしもカジートの魔法使いなんて珍しくて驚いたよ。知り合いのカジートに魔法を教えたことがあるけど、もう全然ダメ。一番簡単な治癒の魔法も使えなかったな」

旅芸人一座の若い仲間たちに宴会の余興で魔法を教えた時のことを思い返した。魔法なんて無理だと笑っていた力自慢の仲間も最後には治癒の魔法を使えるようになったのに、「彼女」だけは魔力を掌に集中させることさえできなくて悔しがっていたっけ。

「普通のカジートは、不得意だ。でも、ジェイ・ザルゴは違う。厳しい訓練の末、得意に変えた」

ジェイ・ザルゴは鼻をひくひくと動かした。不得意なことを克服するのは相当大変だったはずだ。すごいねと言うと、ジェイ・ザルゴは胸を張った。

「そうだ。ジェイ・ザルゴはすごいんだ。だけど、サイノツドもウイスパーズも蹴って、ここに来た。勉強に集中し、もつとすごい魔法使いになるためだ。ここでジェイ・ザルゴは大成するよ、間違いない」

彼の青緑色の瞳の奥には並々ならぬ熱意がこもっていた。

「オマエはなぜ、この大学に入学する?」

ジェイ・ザルゴに興味津々といった様子で問われて、返答に困った。わたしにはすごい魔法使いになるとか、大成するとかいう目標は特にない。マスター・ネロスと彼の弟子のタルヴァスの薦めで、なんとなく入学する気になっただけだ。

「自己流で使つてると危ないから一度きちんと習った方がいいって、知り合いに言われたんだよね」

わたしの答えを聞いて、ジェイ・ザルゴは青緑色の目を細め、口元から横向きに生えた細いヒゲを粉雪の絡んだ風になびかせた。

「凡庸な理由だな。いや、ジェイ・ザルゴが非凡すぎるのか。見ているがいい。ジェイ・ザルゴは早晩、アーチメイジになる」

背後からグフツと息を噴き出す音が聞こえた。すぐ後ろをついてきているテルドリンが発したものに違いなかった。

「オマエ、笑ったな!」

ジェイ・ザルゴがテルドリンに向かって牙を剥いた。テルドリンはにやついた声で答えた。

「ああ、悪い。アーチメイジになりたいカジートか。フン、こりや傑作だ」

「うぐぐぐ。その嫌味な喋り方、ブレトンか? それとも、インペリアルか?」

「この鎧がどこで作られたか知らないのか? モロウインドだ。アーチメイジになりたいならよく頭に入れておけ」

「む、そうか、オマエはダンマーか。どうりで、ヘンな匂いがすると思つた」

「なに、変な匂いだ?! 失敬な。お前こそ獣臭くてかなわん。さつきは鼻が曲がりそうだった」

「今のジェイ・ザルゴが臭いのは、認めるよ。チエイディンハルを出てから、風呂に入っていないから」

「……それ以上私に近づくなよ。今夜は念入りに体を洗わなければ……ここにまともな風呂はあるのか?」

彼らが話題にしていた「アーチメイジ」とはなんだろうか。マス



ター・ネロスが推薦状を書く時に今のアーチメイジがなんとかと話していた気もするが、覚えていない。ともあれ、いつもは余裕のあるテルドリンがジェイ・ザルゴの悪気のない発言でやり込められているのはちよつと面白い。

彼らを取り留めもない会話をしているうちに、わたしたちは最後の橋——大学に直結している平坦な橋を歩き始めていた。いよいよ大学が間近に迫ってきた。近くから見上げると一層巨大だった。橋の正面にある長方形の建物の左右に、縦に長い窓の設けられた壁を繋ぎにして、円形の塔がいくつも、後ろ側へ曲線を描くように連なっていた。

全体を合わせると、ブルー・パレスや王たちの館はおろか、ウインター・ホルドの町よりも大きいかもしれない。とても壮大だ。けれど、大学と陸地を繋ぐものが今まで歩いてきた橋以外にないのは少し心許ない。もしこれらの橋が一つでも崩れてしまったら、大学の人たちはどうするのだろうか。

長方形の建物は陸地側にあつたのと同じ鉄の扉で閉ざされていた。ファラルダ先生がその前に立つと、ひとりでに開いた。

眼前は雪の積もった円形の広い中庭になっていた。周囲の塔と壁はこの中庭を囲むように配置され、塔の階毎に回廊が巡らされていた。中庭の奥には、中心から青い光を立ち昇らせている丸い井戸のような構造物と、その後ろに天を仰いで手を広げている男性の像が建っていた。像の背後には他の塔よりも一段と背が高く横幅も大きい塔が聳えていた。

ファラルダ先生は中庭の隅の回廊に近い位置に立ってわたしたちに向き直った。先ほどまでと表情は変わらないが、眼光が鋭くなっている気がした。

「ここで入学試験を行います。荷物は周りのベンチに置いてください」

「え。にゆうがく、しけん？」

わたしは呆然と呟いた。吟遊詩人大学の時のように何か力試しをするということだろうか。マスター・ネロスからの推薦状を渡すだけ

で入学できるのではなかったのか。

ジェイ・ザルゴはこうなることは知っていたらしく、回廊に設けられたベンチにいそいそとポシエットを置きに行つた。ファラルダ先生はそれを見届けてから話を再開した。

「現在、魔法は一般的に破壊、変性、幻惑、召喚、そして回復の五種類に分類されていることは既に把握していると思います。加えて、付呪と錬金術も魔法使いの技能と見なされることがあり、この大学には専門の教授もいますが、それら二つは魔力がなくても習得できます。ですので、入学試験では、あなたがたに五種類それぞれの基礎的な魔法の素養があるかを確認します」

呆気にとられている間にどんだん話が進んでいく。そんな分類は初耳だ。今まで誰も教えてくれなかった。

わたしは隣のジェイ・ザルゴの様子を窺つた。ばつちりと目が合った。彼は情けない顔をしているわたしに向かって得意そうにやつと笑つた。

「では、まずは破壊魔法から。火炎の魔法を私に向けて放つて下さい」

ジェイ・ザルゴが尻尾をくねらせて、一歩進み出た。

「ジェイ・ザルゴから行くぞ。そうれっ！」

ジェイ・ザルゴは迷いのない動作で右手を出した。掌から一瞬黒煙が立つたが、すぐに申し分のない勢いで炎が噴き出した。

ファラルダ先生は右掌をジェイ・ザルゴに向けた。薄青色の球状の光が彼女の体を覆つた。それはすれすれでジェイ・ザルゴの放つた炎を受け止め、体の脇へ受け流していく。

「いいでしょう。止めてください」

ファラルダ先生の一声で、先生とジェイ・ザルゴが同時に右手を下ろし、真っ白な中庭に不釣り合いな鮮やかな色合いは消えた。

ジェイ・ザルゴは鼻歌を歌いながら後ろに下がった。お手並み拝見させてもらう、と小声で言い残して。

「次はあなたの番です」

ファラルダ先生は、物怖じしているわたしを軽蔑するでもなく、か

といつて励ますでもない無表情で促した。

わたしはぎくしゃくと右腕を前に差し出した。よりによつて一番苦手な魔法を当てられてしまった。うまくできる自信は全くないが、知っているだけでした。

わたしは右掌の上に体内の魔力を集中させた。緊張しているからか、魔力が不安定に波打っている。少し気を抜くと空中に飛び出していつてしまいそうな魔力を抑えつけ、それでもって掌の周りの空気を包み込み、小さく丸めた。薪の爆ぜるような音とともに、掌に小さな炎が宿った。それは周りの空気を巻き込んでどんどん大きくなった。ここまでは上出来だ。これを、あとは先生に向けて放てばいいだけだ。

わたしはその炎を、まっすぐにファラルダ先生に放った、つもりだった。

ところが、炎はぶわりと枝分かれした。四方八方に火の粉を散らしながら、のたうち回る多頭の蛇のように広がっていく。肝心のファラルダ先生には全く届いていない。やってしまった。

一陣の強い風が前方の壁に設けられた窓から入ってきて、炎が大きく形を崩した。

「ぎゃーっ！ あつつつい、あつつついよおおお!!」

背後で悲痛な叫び声が響いた。わたしは火炎の魔法を止めた。ジェイ・ザルゴのもこもこの服が盛大に燃えていた。枝分かれしていた炎の一つが今の風で燃え移ってしまったのだ。ジェイ・ザルゴは雪の上に倒れ、手足をじたばたさせて暴れていた。暴れば暴れるほどあちこちに飛び火することに彼は気づいていない。わたしは彼を助けようと駆け寄った。

その時、冷たい水の塊が頭上からどつきりと降ってきた。ジェイ・ザルゴとわたしは瞬く間に、下水道を泳いできたネズミのようにずぶ濡れになった。

ジェイ・ザルゴの服に纏わりついてた炎は消えた。もこもこした服は焼け焦げて、中から毛の塊が無残にはみ出していた。ジェイ・ザルゴの焦茶色の毛並みは水で濡れたせいで彼の顔にべったりと張り

ついていた。

もう一陣、風が中庭に吹き込んできた。それはわたしの冷水で弱った体を芯から凍え上がらせた。ぶしゅ、とジェイ・ザルゴが水っぽいくしゃみをした。

「うひー!! さささささむい、しし死んでしまいううううー!」

ジェイ・ザルゴは叫んで、犬のように身震いした。彼の顔や服に垂れていた冷たい水がわたしの体中に飛び散り、わたしはさらに深刻な寒気に見舞われることになった。ガタガタ震えていたわたしの頭に見覚えのある布切れが被せられた。

「それで早く体を拭け」

テルドリンだ。テルドリンはジェイ・ザルゴにも布切れを押しつけた。水滴を拭っているわたしたちの横で、彼は何かを確かめるように頭上を仰ぎ見ていた。

「ご、ご、めん、ジェイ・ザルゴ」

思い通りに動かない唇をどうにか操って、わたしはジェイ・ザルゴに謝った。ジェイ・ザルゴは濡れそぼった毛並みを布切れでわしゃわしゃ引つ掻き回しながら、やはり寒さのために覚束ない口調でわたしをなじった。

「ジェイ・ザルゴは、な、習いたての、ここ頃でさえ、あんなし、失敗、は、しなかった! ライバルを、減らす、たたために、やったのか?」

「ちが、うよ。か、火炎の魔法、苦手、なの」

「あんな、き、基礎、的、な、魔法が? オマエ、才能、ないな」

ジェイ・ザルゴの率直な一言が胸にぐざりと突き刺さった。ああ、そうか。薄々気づいてはいたけれど、わたしにはやはり魔法使いになれるほどの才能はないのだ。もうダメだ。試験は不合格、わたしはここで追い出される。

でも、ファラルダ先生は、この惨状を目の当たりにしても一切表情を崩さなかった。

「この状態では残りの試験を続行できませんね。屋内に移りましょう」

わたしたちは男性像の後ろにあった大きな塔の中へ導かれた。入

口ホール正面の鉄格子の扉の先は三階分くらいの吹き抜けの空間になつていて、中央にやはり井戸に似た大きな構造物があつて青い光を立ち昇らせており、その周りを回廊が囲んでいた。回廊のところどころには灯明の魔法で明かりが灯され、背の高い青いガラス窓の前にベンチが置かれていた。

塔の中は屋外と打って変わって暖かかった。びしょ濡れになつたマントを脱いでしばらくすると、徐々に体温が戻ってきた。ぼろぼろになつたコートと手袋を脱ぎ捨てて着慣れた様子のローブ姿になつたジェイ・ザルゴは、すっかり元気になり、ここが元素の間だな、とか、この大学の建物内の温度は魔法で適温に調節していると本に書いてあつた、とか、興奮した様子で喋っていた。

井戸のような構造物の前で引き続き変性と幻惑の魔法の試験が行われた。わたしは指定された魔法のいずれも知らなかつたため、先生からやり方を教えてもらった。結果は散々だった。ジェイ・ザルゴはそんなわたしを横目にそれらの魔法を悠々と披露し、勝ち誇つた笑みを浮かべていた。とてもみじめな気分だ。この入学試験とやらは、いつ、どのような基準で合格するかが決まるのだろうか。確実なのは、わたしがジェイ・ザルゴの格好の踏み台になつていふことだ。

「では、召喚魔法の試験に移ります。使い魔を召喚してください」

ファラルダ先生から次のお題が出た。ジェイ・ザルゴはまたわたしが知らないだろうと思つたのか、得意満面でふんすと鼻息を噴き出し、今にも名乗りを上げて前に進み出ようとしていた。

でも、実のところ、わたしは使い魔の召喚はかなり上手にできる。戦闘の不得意なわたしがせめて敵から逃げる隙だけでも作れるようにと、ファルクリースにいた頃、アーケイの司祭ルニルから教えてもらい、その後何かと活用してきたからだ。例え不合格になるとしても、わたしにもまともに使える魔法があると証明しておきたい。

「ファラルダ先生。わたしからやらせてください」

わたしは思いきつて宣言した。先生は無表情で頷いた。

ジェイ・ザルゴはというと、顔じゅうの毛をぶわつと逆立て、目を

真ん丸に見開いた。実に分かりやすい反応だ。

「ファラルダ先生！」

早速掌に魔力を集めようとしていたわたしと先生の間には、ジェイ・ザルゴが両手をばつと広げて大股で踏み込んだ。

「ジェイ・ザルゴはもつとすごいものを召喚できる。氷の精霊だ。精鋭レベルの召喚魔法が使えるんだ」

炎の精霊ならテルドリンがいつも召喚しているが、氷の精霊というのは聞いたことがない。けれども、それまで柱の陰で腕組みをして若干退屈そうにわたしたちの様子を見守っていたテルドリンが腕組みを解き、ううむ、と唸ったところを見ると、かなり高度な魔法なのだろう。

遮られたことでせつかくみなぎっていたやる気がしぼんでしまい少しむっとしたものの、氷の精霊を見てみたいという純粋な好奇心が勝った。わたしは魔力を霧散させて先を譲った。

ジェイ・ザルゴは全員の視線が自分に集中したのを確認すると、満足そうに目を瞑り、両手を広げたまま魔力を集め始めた。はああああ、と何やら仰々しい掛け声を絞り出す彼の柔らかそうな毛に覆われた両手に、紫色の禍々しい光が渦巻いていく。ふんっ！ という一声とともに、彼は両手を顔の前に寄せ両手の光を混ぜ合わせた後、それを自分の前に放り投げた。

黒い穴がジェイ・ザルゴの眼前の足元に現れたかと思うと、大きな氷の結晶が組み合わさった人型の物体がひとつ跳び出してきて、元素の間の床に太い腕を突き立てた。堅い氷と堅い岩が衝突し合っ生まれた、ぐわあん、という轟音で元素の間が満たされた。

「やったあー！ ついに成功したぞー！」

ジェイ・ザルゴが万歳をして喜んでいる。わたしは、初めて見るこの強面の精霊に見惚れ、それを華麗に召喚してみせたジェイ・ザルゴへの称賛の念でいっぱいになっていた。そのせいで、彼の言葉の細かな違和感に気づけなかった。

氷の精霊は床に突き立てていた太い腕を斜め上に振りかぶった。それから、その長い腕の側面で、召喚者であり本来護るべき対象のは

ずのジェイ・ザルゴを殴り飛ばした。

「ぎゃー！」

ジェイ・ザルゴの体はなすすべもなく宙を舞い、回廊の柱にしたたかに叩きつけられた。

氷の精霊の暴走はそれだけでは済まなかった。精霊は太い両足で床を踏みつけて、柱の下に背を預けてぐったりと横たわったジェイ・ザルゴに向かっていく。

何が起きているのか理解できなかった。だが、とにかくわたしは床を蹴って走り出した。ジェイ・ザルゴの倒れている位置まではわたしが一番近い。二度目の攻撃を加えられる前に彼を助け出さなければならぬ。

ただっ広い元素の間の中を全速力で駆けていき、ジェイ・ザルゴの前に躍り出た。しかし氷の精霊は既に再び振りかぶった腕で彼をなぎ払おうとした――。

|||||

そうだ。そうして、わたしはジェイ・ザルゴの代わりに氷の精霊の一撃を受けて吹っ飛ばされた。邪魔をする者がいなくなった今、精霊はジェイ・ザルゴを無慈悲に叩き潰そうとしている。わたしはその瞬間を目にしたくないがために瞼を閉じ、こんなふうに今日の出来事を思い返して現実逃避をしていたわけだ。

だが、本当に、わたしにできることは何もないのか？ 例えわたしは力の及ばない絶望的な状況であっても、諦めずに立ち向かうべきではないのか？ だって、彼はまだ死んではいない。

わたしは瞼にぎゅっと力を込め、涙を追い出して、両目を見開いた。と同時に、床に横たえた手に魔力を集め、視線の先にちっぽけな犬の使い魔を召喚した。使い魔は果敢に吠えながら氷の精霊に向かって駆けていった。氷の精霊の注意が使い魔に逸れた。これでひと手番稼げた。でも、この後はどうする？ わたしの体は動かない。魔法で回復させるのには時間がかかる。

そんなことを考えているうちに、氷の精霊の無慈悲な一撃により使い魔が悲しげな遠吠えを上げて消えた。またもや精霊とジェイ・ザルゴの間の障害がなくなった。ダメだ。最早、わたしの力では……。

目の前が真っ暗になりかけたその時、視界の隅に誰かが映った。でこぼこしたヘンテコなシルエットの、赤茶けた鎧を身につけた人物が。

「おい、でくのぼう。貴様の相手は私だ！」

その人物、テルドリンは、左手で炎の精霊をジェイ・ザルゴの間近に召喚すると同時に、ファイアボルトを右手から放った。

氷の精霊は、ぐおお、と呻き声のような音を立てて、ジェイ・ザルゴから数歩後ずさった。体表面からじゅうじゅうと水蒸気が上がっている。氷というだけあって、炎に弱いのかもしれない。

わたしはこの間に自分の体を回復することにした。魔力を掌に集め、壊れた骨や筋肉や血管が再生するよう念を込めて全身に送り返す。無理をしてもより治癒の速度をかなり速めているので制御が効かず、自然に治るときに徐々に経験するような痛みと痒みが一気に襲ってきた。わたしは歯を食いしばって耐えた。

一方テルドリンは、ジェイ・ザルゴの倒れている場所にじりじりと近づきながら、炎の精霊と一緒にあってファイアボルトを氷の精霊に撃ち込み続けていた。氷の精霊は一時は苦手な炎による攻撃に怯んでいたものの、一撃一撃には大した威力がないと理解してしまったのか、再び前進し、炎の精霊をなぎ払い、別の回廊の柱に叩きつけた。

炎の精霊の最期の悪あがきである大爆発が起こった。氷の精霊が一声わななき、腕の先がじゅつと音を立てて融けたが、動きを止めるまでには至らなかった。

テルドリンはジェイ・ザルゴの前に辿り着いていた。氷の精霊が体をのけ反らせ、融けたのとは反対の腕を振り上げた。自分と標的の間に立ち塞がる邪魔者を物言わぬ肉塊にしようとしているのだ。わたしは魔法によって生じる痛みと痒みに耐えていたために声を上げることさえできなかった。そのまま氷の精霊の全体重のかかった太い腕がテルドリンに振り下ろされた。



鈍い打撃音が耳に届いた。テルドリンは潰されていなかった。彼は先ほどまで背中に掛けていたキチンの盾を両腕で自分の頭上に掲げ、氷の精霊の一撃を受け止めていた。彼は低い嘲り笑いを漏らした。

「ハッ。その巨体は見かけ倒しか。非力な定命の者一人負かすことができないとは、デイドラの眷属も堕ちたものよ」

テルドリンは遠目からでもそれと分かるほど両腕を震わせて、頭上から加えられる途方もない重みを跳ね返そうとしていた。氷の精霊が彼の言葉の意味を理解したか分からないが、より強い力をテルドリンの頭上に加えようとしていることは確かだった。テルドリンがじわじわと押され始めた。

わたしの体は魔法のおかげで完全とは言わないまでも動けるようになっていた。わたしは起き上がり、一目散にテルドリンの背後へ、ぐったりと体を横たえ目を閉じたままのジェイ・ザルゴのところへ駆け寄った。

「ジェイ・ザルゴ」

ジェイ・ザルゴの前に両膝をついて呼びかけた。彼はとろんと瞼を開けた。彼の視線はわたしの頭上のあたりを虚ろに彷徨い、再び瞼が閉ざされた。意識がはつきりしないようだ。頭を打ったのかもしれない。下手に動かすのは危険だ。

テルドリンが声を張り上げた。

「早くそいつを連れて逃げろ！」

わたしは叫び返した。

「ダメだよ。頭を打ってる。動かせない」

「ならばお前だけでも逃げろ。元はそのカジートの蒔いた種だ。お前が巻き添えになる必要はない」

わたしは息を呑んだ。

「そんなことできない」

「馬鹿を言うな。この精霊の標的はその猫だ。そいつさえくれてやればあとはどうにでもなる」

喉の奥からせり上がってくるものがあつた。両目から熱い液体が

こぼれ落ちるのを感じた。むぎむぎ人をデイドラの餌食になどできない。まして、「彼女」を思い出させるこのカジートを。

「ジェイ・ザルゴはわたしが治すから、その間、氷の精霊を抑えて。お願い、テルドリン」

テルドリンは震えがちの溜息をついた。

「まったく、無茶な注文をする……。言っておくが、そう長くは保たんぞ」

テルドリンは鋭い呼気を吐きながら両腕を押し上げた。氷の精霊が身じろぎをしたように思えた。テルドリンは震える腕を押し上げて、押し上げて——突然、素早く氷の精霊の腕の下からすり抜けた。

氷と岩の衝突による轟音が再び元素の間に響いた。床につけた両膝から張り詰めた衝撃が腰まで上がってきた。氷の精霊の腕はほんの一瞬前までテルドリンが立っていた床に叩きつけられていた。当のテルドリンは氷の精霊の懐に入り込んでいた。

「図体がでかい分、動きも鈍いな」

テルドリンは嘲りのこもった声で呟き、後ろ手でわたしたちの前にもう一度炎の精霊を召喚した。続いて彼が何か一言短く叫ぶと、彼の全身は突如、激しい炎に包まれた。彼のヘンテコな兜も、手入れを欠かさない鎧も、明るい色の炎の中でぼやけていた。

わけが分からなかった。いったいどこから火が燃え移ったのだろう。テルドリンが死んでしまう、と思った。

しかし、氷の精霊がたじろいで数歩後退し、彼を払いのけるために両腕を振り回した時、テルドリンは全身から噴き出す炎をもともせず、氷の精霊の股の間を素早くくぐってその背後に回った。次の瞬間、氷の精霊が勢いよく燃え上がったように見えた——テルドリンが火炎の魔法を発動し、氷の精霊に至近距離から炎を吹きつけ始めたのだ。

「さあ、どうする。このままでは貴様は氷粒一つ残さず消え去るぞ」

炎に取り巻かれているにもかかわらず、テルドリンの声は至極しっかりしていた。それに、彼の言葉はただの脅しではなかった。尋常でない量の水蒸気が氷の精霊の体から噴き上がっていた。

氷の精霊は一層ものものしい咆吼を上げ、背後に回ったテルドリンを捕まえようと、鈍重な足取りで体の向きを変えようとしていた。

「もう少し頭を使ったらどうだ？ ハッ、氷しか詰まっていけない貴様の頭では無理な話か」

テルドリンは、あえて自分で自分の体を燃やしているらしい。魔法や巻物を使った様子もなかったのでもうどうやってあの現象を起こしたかは不明だが、あの炎が原因で死んでしまうようなことはなさそうだ。

わたしはテルドリンがしばらく氷の精霊の動きを封じてくれると信じてジェイ・ザルゴに向き直り、彼の力の抜けた肩と腰に手を置いた。氷の精霊が背後で手足を床に叩きつけるたびに膝から全身へ振動が広がり心が泡立った。努めてゆっくり息を吸い、その流れに乗せるようにして魔力を掌に集中させた。魔力の粒子の一粒一粒に丹念に治癒の念を込めていく。全ての粒子が優しい白い光を帯びると、それらをジェイ・ザルゴの肩と腰から彼の全身に一気に流し入れた。

ジェイ・ザルゴの体が一瞬、内側からまばゆく光り輝いた。光が収まってすぐ、彼の腰にだらんと巻きついていた尻尾が少し動いた。彼は両目を薄く開けた。わずかな隙間から覗く黒目は、今度はしつかりとわたしに焦点を合わせていた。

「……………うう……………」

ジェイ・ザルゴのふわふわした毛に覆われた口元が震えた。

彼に手を添えたまま固唾を呑んで見守っていたわたしは、不意に体を起こした彼の勢いに押されて尻餅をついた。

彼は自分の頭やら腕やら足やらとにかく手の届くところを、ローブが裂けるのもいとわずに鋭い爪を出してめったやたらに引つ掻き始めた。

「あーっ、くすぐりたい！ かかか体の奥が熱くてかゆくて痛くてかゆい!!」

ジェイ・ザルゴは苦悶の表情を浮かべていた。わたしは、一刻の猶予もないと思うあまり、先ほど自分の体に施した以上の速さで治癒の魔法を使ってしまったのだった。

「うわあああ体の中で毛虫がいっぱいもぞもぞしている!! いやだああかゆいかゆいかゆい気持ち悪い!!!」

彼はしまいには背にしていた柱や床に体を打ちつけ始めた。魔法は成功したようだが、この調子では今度は彼が自分で自分に重傷を負わせそうな勢いだ。第一今はこんなふうには悶絶している場合ではない。どうしよう。

慌ててそこまで思考を巡らせた時、氷の精霊の立てていた轟音がすっかり聞こえなくなっていることに気づいた。

氷の精霊はいなくなっていた。ちょうど氷の精霊が暴れていたあたりで、徐々に薄れつつある紫色の竜巻のようなものが、広間の床から吹き抜けの天井に向かって立ち昇っていた。

竜巻の向こうにテルドリンの姿があった。炎は消え失せていた。あれだけの業火に取り巻かれていたにもかかわらず、彼の装備も服も少しも傷んではいなかった。

広間にはいつの間にか人が集まっていた。

竜巻の前に禿げ頭の人間の男性が仁王立ちし、生真面目な表情で両手を掲げていた。テルドリンの背後に見える回廊のベンチに座っている、金糸で刺繍の入った黒い服を着た銀髪のハイエルフの男性は、顎を指で撫でながらこちらを睨んでいた。

ファラルダ先生は黒い服のハイエルフからやや離れたところに立って、両手を腰の前で組み、この空間にいる全員を油断のない目つきで見渡していた。そういえば、彼女はわたしたちが氷の精霊と戦っていた間、何をしていたのだろうか？

元素の間の入口の大扉が開いて、人間の男性と女性が一人ずつ、七転八倒しているジェイ・ザルゴとわたしの方に走ってきた。顎髭を蓄えた、かなり年配と思われる白髪の男性がわたしに叫んだ。

「おおい、きみ、彼をちよつと捕まえてくれんかね？」

急に声をかけられたためにわたしは少し間抜けな声で返事をし、ジェイ・ザルゴが足元でもんどり打って俯せになったところに飛びついた。

「何をする、離せっ！ オマエのせいだ、オマエのせいでジェイ・ザル

ゴの体はああ！」

痛みと痒みのせいで正気を失いかけているジェイ・ザルゴに、男性は滑らかな手振りで何かの魔法を放った。途端に抵抗が止まった。ジェイ・ザルゴの全身の力がぐにやりと抜けていた。男性はジェイ・ザルゴを慎重に仰向かせ、彼の頭を腕で枕をするようにして抱えた。ジェイ・ザルゴは目を緩く閉じ、眉間に皺を寄せて気絶していた。

浅黒い肌の女性がポシエットから小さな瓶を取り出し、中の濃い緑色の液体をジェイ・ザルゴに飲ませた。ジェイ・ザルゴの喉仏が何度か上下した。間もなくぷすぷすとかわいらしい寝息が彼の鼻と口から漏れ始めた。

年配の男性が息をついた。

「どうにか収まったね」

浅黒い肌の女性は、ええ、と短く答え、年配の男性にジェイ・ザルゴを任せて立ち上がった。

「トルフデイル。担架が来たら彼を頼みます」

「うん。コレットの部屋へ連れて行って看てもらおうよ」

トルフデイルと呼ばれた男性はわたしに穏やかな藍色の瞳を向け、人好きのする笑みを浮かべた。

「彼をよく守ってくれたね。また後で話そう」

わたしが照れ笑いを返した横で、女性は禿げ頭の男性に話しかけていた。

「フィニス。デイドラ送還の術は完了しましたか？」

紫色の竜巻は最後の一欠片が薄れて消えていくところだった。フィニスというらしい禿げ頭の男性は両手を降ろした。

「丁寧にオブリビオンにお帰りいただいたよ」

「ありがとう。それでは、授業に戻ってください」

フィニスはわたしをちらとだけ見て、それよりもずっと熱心な視線を眠りこけているジェイ・ザルゴに注いだ。

「承知した。ところで、彼にはぜひ僕の中級召喚魔法の授業を受けさせてくれ、ミラベル。今回は失敗してしまっただが、筋は悪くないと思う。安全な『門』の開き方を教えておきたい」

「前向きに検討します。彼があなたの堅実な姿勢から学ぶことは多いでしょう」

「ははっ、違う。僕なら大事な入学試験で求められている以上の実力をわざわざ披露しようとは思わないからな」

フィニスが歩き去るのと入れ替わりに元素の間の大扉が再度開き、担架を持った人たちがどやどやと入ってきた。彼らがジェイ・ザルゴを担架に載せ、トルフデイルに先導されて大扉の向こうに退散していくのを浅黒い肌の女性は見送っていた。それから、わたしに向き直った。

「自己紹介が遅れました。私はウィンターホールド大学のマスターウィザード、ミラベル・アーヴアインです。あなたは飛び入りの入学希望者ですね？ いきなりこんな騒ぎに巻き込まれて、運が悪かったですね」

「いえ、無事に収まって良かったです。今のはなんだったんですか？」  
ミラベル先生の気の強そうな吊り気味の眉の間には元からうっすらと縦皺が入っていた。彼女が眉を寄せると、縦皺は影を伴って深く、険しくなった。

「よくあることです。彼の実力では制御できない精霊を召喚し、暴走させてしまったのです。あなたはそのような無茶はしないでくださいね」

最後の一言で彼女は眉間の皺を少し和らげ言い聞かせるような表情になったが、続けてテルドリンに目を向けると元通り、いやそれ以上の渋面になった。彼女は、しかし彼のことは丸つきり無視して、彼の背後で彼女をじろりと睨めつけたハイエルフの男性も素通りし、ファラルダ先生に視線を移した。

「ファラルダ。あなたはなぜ彼を止めなかつたのです？ それに、デイドラ送還の術ならばあなたも使えるはずですが、なぜ使わなかつたのです？」

わたしにも薄々分かっていた。ファラルダ先生はジェイ・ザルゴが殴り飛ばされてからフィニスが氷の精霊をオブリビオンに送り返すまで、ずっとこの場において、できることがあるにもかかわらず何もし

なかったのだ。

フアラルダ先生は悪びれた様子もなく、鉄壁の無表情で答えた。「入学試験ですから。彼らがどんな能力を秘めているか見極めたいと考えました。もちろん、本当に危なくなったらすぐに止めるつもりでした」

嘘ではなさそうだ。あの程度の騒動なら止めようと思えばいつでも止められる力を持っている、そんな自信が彼女の整った顔立ちの端々に漂っていた。

ミラベル先生は溜息をつき、彼女を促した。

「そうですか。それで、彼らの評価は？」

フアラルダ先生は、今までよりも心なしか穏やかな口調で言った。「二人とも、大学に入学するのに申し分のない資質を持っています。あなたとサヴオスが彼らの入学を認めるのであれば、私も彼らを歓迎します」

驚いて息が止まりそうになった。てっきりわたしは不合格だとばかりと思っていたのだ。

ミラベル先生は渋い表情のまま頷いた。

「分かりました。彼はいつも通り、あなたの判断を信じると言っていました。私も同じです」

彼女は鳩尾の前で上品に手を組み、わたしに笑いかけた。

「おめでとうございます。あなたは今日からウィンターホールド大学の一員です」

彼女の笑顔は少し硬く、もろ手を挙げて歓迎している雰囲気ではなかった。かといってわたしを仲間に加えるのが全く不本意なわけでもなさそうだった。

わたしはミラベル先生とフアラルダ先生に丁重に礼を言った。当初の目標通り、大学に入学できて嬉しかった。

### 3. 開かずの部屋

ミラベル先生は、それからすぐ、わたしたちを連れて大学の中を案内してくれた。

大学の中庭を取り巻くいくつもの塔はどれも同じ構造をしていた。灯明の魔法が一定間隔で配置されていて、中央に青い光を放つ井戸のようなものがあり、そこから塔の天井までが複数の階を貫く吹き抜けになっていた。塔を構成する部屋は吹き抜けをぐるりと取り巻くように造られていた。

塔の部屋のほとんどは講義や実験用、それに先生たちの執務室として使われているようだ。学生たちが静かに菓の調査をしている部屋もあれば、騒がしく魔法を撃ち合っている部屋もあった。大学自体がとても広い上にどの塔も内部の構造が似通っていて、自分一人で目的の部屋を探し当てると言われたら途方に暮れてしまいそうだった。

苦勞せずに辿り着けそうなのは、とある塔の一階にあつて常においしそうな食べ物の匂いがしてくる食堂と、一番大きな塔の中の元素の間と、その直上の二階分を占める「図書館」と呼ばれる施設だった。

図書館の印象は強烈だった。壁際と中央の本棚に沢山の本や羊皮紙の束が収められていて、随所に配置されたテーブルに座つて読めるようになつていた。生涯でこれほど多くの書物を一度に視界に入れるのは初めてだった。厚みのある絨毯の上を歩いている間中、ほろ苦いインクと古くなつた藁のような匂いが鼻腔を占めていた。

やがて、わたしたちは陸地と大学を繋ぐ橋に隣接する塔の前までやってきた。

「これで最後になります。ここは達成の間。大学寮です。あなたが大学で勉強に励む間はここの一室をお貸しします。中を簡単に案内しますね」

ミラベル先生が示したその塔の見た目はやはり他と変わらなかった。橋の隣にあると覚えておけば間違えることはないだろう。わざわざ宿屋に泊まつたり、野宿したりしなくいいのはありがたい。

達成の間の中も他の塔とほとんど同じ構造だった。他とわずかに



違う点は、部屋と部屋の間隔が狭く、一つ一つの部屋が小さいことだった。

先生は玄関ホールの反対側の、階段の左右にあるいくつかの扉を掌で示した。

「あの一連の扉の先にあるのはキッチン、トイレ、風呂、倉庫です。他の学生と譲り合って使ってください」

続いて、彼女は入ってすぐ左側にある部屋の扉に近づいた。わたしの目線の少し下くらいのところに木札が掛けられ、「トルフデイル」と書かれていた。

「それから、誰かが使っている部屋の扉にはこのように、名前を書いた木札を掛けるようにしています。入る部屋を間違えないようにするためです。あなたの分もすぐに手配します。」

さて、あなたにお貸しできる部屋は——」

彼女は一階のずらりと並んだ扉へ順繰りに目をやった。

「一階にはないようですね」

わたしは、おや、と思った。

「あの部屋が空いてませんか？」

玄関ホールに入って右側の一番目の部屋にだけ、木札が掛かっていなかった。あんなに目立つ場所なのに、どうして見逃したのだろう。

先生はと見れば、なぜか、表情が凍りついていた。まるで大昔の戦争で死んだ亡霊でも目撃してしまったかのように。

しばらく経ってから、彼女はわたしに見つめられていることによく気づき、いかにも冷静そうな表情を取り繕った。

「ああ、あの部屋もありました。でも、あそこはその……ちよつとね。他の部屋の方が良いでしょう」

ちよつとね、つてなんだろう。わたしは首を捻りながら、二階へ続く階段を上る彼女についていった。

二階以上の階も、風呂とキッチンがないことを除けば同じ構造になっていたが、全て満室だった。つまり、わたしが入れるのは、先生がちよつとね、と言った部屋しかない。

一階の件の部屋の前に戻ってきた先生は、少し顔色が悪くなってい

る気がした。彼女は、わたしを振り返り、心底申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさい。急な話だったので、部屋のことまで考えが及んでいませんでした。まあ、この部屋でも問題はないでしょう。少し掃除が必要かもしれませんが、それだけです」

彼女は扉の取っ手に浅黒い手を伸ばした。その手はわずかに震えていた。彼女は取っ手を握り、内側へ押し込んだ。……開かない。鍵が掛かっているようだ。

彼女は、何か穢らわしいものにでも触れてしまったかのように、さっと手を引つ込めた。そして、彼女の一連の挙動に不信感を抱きつつあったわたしに向かって、励ますような、あるいは誤魔化すような微笑みを浮かべた。

「鍵を探さないといけません。学費も支払ってもらいたいので、一度、私の執務室に来てもらえますか」

彼女の口から唐突にさらっと飛び出た言葉のせいで、目の前の部屋に関する疑惑は一時、吹き飛んだ。「学費」って、なんだ？ 大学に上納する費用ということか？ わたしは慌てふためいて尋ねた。

「お金が必要なんですか？」

先生は、なぜこんな当たり前のことで狼狽しているのかとでも言いたげに眉間に皺を作った。

「マスター・ネロスから聞いていませんか？ 詳しくは執務室で説明します」

|||||

きつちり整理整頓されたミラベル先生の執務室で、わたしはウィンターホールド大学の「学費」なるものの説明を受けた。大学を運営するのに色々と経費が掛かるため、やむをえず徴収している、のとこのどだった。聞いてみたら、一学期分だけでも、この先何年も働いて貯めてやっと支払い終わるかどうかという金額だった。そんな額は持ち合わせていないと伝えると、難しそうな文章が並んだ紙に署名させ

られた。少しずつ支払うと約束する証文だという。

わたしは、彼女が執務室の奥から探し出してきた例の部屋の鍵を受け取った。それから、執務室で少しやることがあると言う彼女を残し、テルドリンを伴って達成の間に戻ってきた。

「どうなることかと思っただけど、正式に入学できて良かったよ」

わたしはテルドリンに笑いかけた。彼はわざとらしく肩をすくめた。

「ああ、ひやひやしたぞ。お前が非常識なのは知っていたが、まさかタダで大学の授業を受けられると思っただけだよ。いやはや、金がないと言われた時のあのマスターウィザードの顔は傑作だったな」

わたしは唇を尖らせた。

「仕方ないでしょう、タルヴァスもヴァローナも教えてくれなかったんだから」

「お前くらいの歳になれば、普通は自然と理解しているからなあ。随分うすらぼんやりした奴もいたものだ、はっはっは」

いつもながら、わたしをからかっている時の彼はとても楽しそうだ。元素の間で助けてくれたことへの感謝の気持ちを伝えようと思っていたけれど、その気が失せた。彼は続けて言った。

「こういうこともあるから、ウルフリックの報奨金は素直に受け取るべきだったんだ。私の忠告は正しかっただろう?」

わたしは小さな子供みたいに頬を膨らませた。あの選択は今でも間違っていないかと思っている。けれども、ミラベル先生に金額を教えてもらった瞬間、ウルフリック卿がわたしに手渡そうとした、ゴールドの詰まった袋が頭をよぎったのは確かだ。

わたしは彼からつんと顔を背けて、ホールのすぐ右側の、例の部屋の前に立った。

「おっと、ついにその曰く付きの部屋に入るのか、え?」

テルドリンは「曰く付き」のところを特に強調して、おどろおどろしく言った。そのせいで、わたしは先ほどこの部屋を前にした時のミラベル先生の表情や態度を思い出してしまった。握っていた部屋の鍵が急に冷気を帯びたような気がした。思わず掌を緩め、取り落とし

てしまった。鍵は、石の床の上で鋭い音を立てて一度跳ね、動かなくなつた。

一拍置いて、テルドリンが笑い始めた。

「はははっ、なんだ、そんなに怖いのか？」

「ちっ、違うよ。もう、テルドリンがおどかすから！」

わたしは彼の腕を小突いた。彼の頑丈な体は機嫌良く揺れながらわたしの貧相な攻撃をすっかり弾き返した。

テルドリンはわたしが落とした鍵を拾い上げた。

「どうせ、くだらん怪談話でもあるんだろう。マスターウィザードが信じているとは呆れたものだが、最終的にお前に貸す気になつたのなら、大した危険はあるまい」

テルドリンは扉の鍵穴に鍵を差し込んだ。わたしは彼の背中にぴつたりくつつくようにして、彼の動作を見守つた。赤い手袋が鍵を回転させた。なんの変哲もない、鍵の開く音がした。

「だが、もしかすると、本当に血に飢えた化け物が潜んでいるかもな」  
テルドリンがにやけた声で囁いた。わたしは彼のつぎはぎだらけの服の背を両手で握つた。

「本当にいたら、ちゃんと倒してよ？」

テルドリンはおちよくなるような調子で答えた。

「ああ、もちろんさ。そういうときのために私を雇っているんだろう？」

彼は扉に掌を添えて、内側へゆつくりと開いた。扉の蝶番が、長い間油を差していなかったことが窺えるぎりぎりという悲鳴のような音を立てた。テルドリンの後ろで、わたしは身を竦ませた。

眼前にぼんやりとした暗闇が広がった。扉が限界まで開いて達成の間の青白い光が射し込み、わたしの目が暗闇に慣れてくると、分厚い埃と蜘蛛の巣に支配された部屋が現れた。右側と正面の壁際にタンスなど、中央にベッド、左側に机と、他さまさまな家具が置かれていた。同じく埃が絨毯のように積もっている床との境目もはつきりせず、現時点で全ての家具の正体を見破ることはできそうになかった。

わたしはテルドリンの服からそろそろと片腕を離して、灯火の魔法を正面の壁に当てた。灯火の魔法の放つ光は、石の壁と、扉を開いたことで空中に舞い上がった埃に反射して、部屋の中を彩った。

「大層なものだ。これは、少なくとも二十年は閉めきっていたな」

テルドリンが部屋の中に足を踏み入れた。

「テルドリン、埃の下に何かいるかも」

わたしはテルドリンの後を追った。途端に大量の埃が目と鼻と喉を直撃した。乾いた石と古くなった木材の匂いが鼻腔の中に満ちた。迂闊だった。わたしには彼ののような兜とマスクがないのだ。わたしは、ただならぬ涙を流し、風邪を引いたかのように咳き込み、顔を両手で覆い、背中を丸めてうずくまった。

「む。すまん、気づかなかった」

呑気に謝るテルドリンの姿も見えない。目と喉の奥がきりきり傷み、涙と鼻水が溢れ出てくる。こうなるともう怪談話以前の問題だ。

肩をざらりとした感触の手袋が掴んだ。

「立てるか？ 一旦部屋の外へ出よう。掃除道具を調達してくる必要があるな」

わたしはテルドリンに肩を支えられて、青白い光に満ちた廊下へ戻った。両目をぎゅつとつぶって涙と埃を追い出すと、達成の間の入口ホールの方角、ぼやけた視界の端に誰かがいるのが見えた。

「きみたち、その部屋を開けたのか？」

しわがれた声には聞き覚えがあった。わたしはさらに何度か瞬きをして目の中の余分な水分を瞼の外に押し出した。

視界の端に立っていたのは、元素の間でわたしに話しかけてきた老人、トルフデイルだった。彼は埃まみれのわたしたちと、その背後で全貌が露わになっている例の部屋を、ひび割れた唇をすぼめて凝視していた。

彼の後ろには、わたしと同一年か少し年下と思われる、素朴な顔立ちの、大柄な人間の青年が一人立っていた。腕の中にジェイ・ザルゴのコートと手袋、ポシエットを抱えていた。彼も目を丸くしていたが、トルフデイルほどには驚いていないようだった。

わたしは咳払いをして喉にごびりついていた埃を追い出してから答えた。

「はい。ミラベル先生がこの部屋を貸してくれると言ったので」

「ミラベルが？　そう、か。彼女がそう判断したのか……」

彼はこちらに歩み寄り、わたしとテルドリンを代わる代わるじつと観察した。

「うん。問題はないようだ。そうだな、そのはずがない」

独り言のようにそう呟いて、彼はわたしたちの体の陰から例の部屋をひよいと覗き、すぐに首を引つ込めた。

「部屋の中は、何か変わったところがあつたかね？」

わたしに尋ねたトルフデイルの、境界がうっすらとぼやけている藍色の瞳は、注意して見ないと分からないほどではあるが、かすかに、何かを恐れるように揺れていた。ミラベル先生といい彼といい、この部屋のいったい何を怖がっているのだろうか？

わたしはできるだけ平静を装って答えた。

「荒れてるので掃除が必要です。それ以外は特に何も」

トルフデイルは困ったような笑みを浮かべ、弁解するように何度も頷いた。

「そうか、そうか。ああ、いや、すまなかつたね、さつきゆつくり話そうと言ったのにな。」

僕はトルフデイル。変性魔法の教授だ。以後、よろしく頼む」

彼は皺だらけの手を胸に当てて、軽く頭を下げた。トルフデイル……先生と、やはり呼ぶべきなのだろう。

わたしたちが名乗り返すと、トルフデイル先生は言った。

「僕らはジェイ・ザルゴの部屋に彼の荷物を置きに来たんだ。ちょうどいい、彼の部屋の備えつけの掃除道具を貸してもらおう。」

オンマンド。この後授業がなければ手伝ってくれんか？」

彼は、わたしたちのやり取りを眺めていた大柄な青年を呼んだ。青年は両目をぱちくりさせ、朗らかな声で承諾の返事をした。

|||||

部屋の掃除は、初めのうちはテルドリンが先陣を切って行った。万  
一何かが飛び出してきたときに彼ならば咄嗟に対処できるのと、単純  
に彼の装備がこの状況に最適だったからだ。テルドリンは埃と蜘蛛  
の巣の海の中に果敢に突撃し、この部屋の全貌を明らかにしていっ  
た。わたしたちも布で鼻から下を覆って手伝ったものの、目がしよぼ  
しよぼして能率が上がらないのはどうにもならなかった。

部屋の外に掃き出されたのは、大量の埃と蜘蛛の巣の他、虫食いだ  
らけの古い服が数着、沢山の虫や小動物の死骸あるいは骨、生きた蜘  
蛛が数匹などだった。それと、壁際の背の低い棚の上に人の頭骨が三  
個も置いてあったのにはぎよつとした。オンマンドと呼ばれた青年  
曰く、魔法使いの間では一般的なインテリアなのだそうだ。言われて  
みれば、マスター・ネロスの塔やウーンハースの部屋にもあった気が  
する。正直、少し趣味が悪いと思う。

一通り大きな汚れを取り払っても、なんらかの事件が起こった形跡  
は見当たらなかった。意味深な書き置きもなければ、おぞましい血痕  
も、いかがわしいアーティファクトもない。

わたしは棚の上の頭骨をテルドリンと一緒に部屋の外に運び出し  
た。さすがに頭骨に見つめられて眠る気にはなれなかった。

「何かそれらしいものがあるかと期待したが、ごく普通の部屋だった  
な」

テルドリンが残念そうな声色でわたしに耳打ちした。トルフディ  
ル先生は全開にした扉の向こうで家具の水拭きに取りかかっていた。

「そうだね。怖がってたのが馬鹿みたい」  
顔に血が昇るのを覚えた。いつものこととはいえ、彼に情けない姿  
を晒してしまったのが恥ずかしかった。

しかし、一番安心したのは恐らくトルフディル先生ではないだろう  
か。部屋が綺麗になるにつれ、彼の目からは恐怖の色が失われてい  
き、今では元素の間で出会った時と同じ穏やかなきらめきを見せてい  
た。

「あれ。それ、要らないの？」

塔の外までごみを掃き出しに行っていたオンマンドが冷たい空気を引き連れて帰ってきて、わたしたちの抱えた頭骨を指さした。

「うん。でも、他のごみと一緒にするわけにも——」

わたしが答え終わらないうちに、オンマンドは箒を傍らの壁に立てかけ、食いつくような勢いでわたしたちに駆け寄った。

「それならばぐが引き取るよ。あと二、三個欲しいと思つてたんだ」

目の前におもちゃを投げてもらった犬のような無邪気な笑顔だった。

わたしは引きつり笑いをして、テルドリンに頭骨を渡すよう促した。見る間にオンマンドの腕の中は頭骨でいっぱいになった。そのうち一個の下顎の骨が外れて床に落ちたのをわたしは取り上げた。

「どこに運ぶの？ よかったら手伝うけど」

わたしの問いに、オンマンドは、あそこ、と言つて、廊下と井戸のようなものを挟んで反対側の辺りを顎でしゃくつた。

テルドリンが太い息を吐いて腕組みをした。

「少し休憩にしないか。お前はその若者と自己紹介をして友達になつておけ。私は水を取ってくる。キッチンはあるぞだな？」

オンマンドに確認したのち、彼はのしのしとキッチンの方へ去っていった。

「彼、本当にきみの従者なの？ なんだか逆のようにも見える」

オンマンドは不思議そうな顔でテルドリンの後ろ姿を見送った。わたしは拾った下顎の骨と対になる頭骨を彼の腕から取り上げながら、彼の率直な物言いに苦笑した。

「テルドリンもときどき雇い主がどつちなのか忘れてると思う。無理もないよ、わたしよりもずっと年上だから。オブリビオンの動乱の時はモロウインドの軍に混じつて戦つたんだって」

「オブリビオンの動乱つて二百年も前の出来事だろ？ デイドラの強力な軍勢が攻めてきたつていう……。うわあ、すごいや！ じゃあエルフ？」

「ダンマーだよ。剣術も魔法も得意で、いつも助けられてる」

「両方できるのか。いいなあ、羨ましい」



わたしたちは話しながら歩き出し、「オンマンド」という木札の掛かった部屋の前までやってきた。わたしはオンマンドの指示通りに彼のポシェットの中の鍵を取って、彼の部屋の扉を開けた。彼の部屋の家具の配置はわたしに与えられた例の部屋と変わりなかった。人の頭骨が一個、テーブルの上で虚空を見つめていた。

オンマンドは、新たに持ってきた頭骨のうち一個をテーブルの上の頭骨の隣に置いて椅子に座った。彼は二個並んだ頭骨を前に、うん、と悩ましげに唸り、わたしに意見を求めた。

「どう思う、これ？」

「ええと、ごめん、よく分からない」

オンマンドは眉をひよいと上げた。

「もしかしてきみって、魔法使いの家の出じゃないの？」

わたしは頷いた。父は広い意味では魔法使いだったかもしれない。他にも簡単な魔法を使える仲間は何人かいた。でも、皆あくまで本業は旅芸人だった。

オンマンドはぱあつと顔を輝かせた。

「よかった、ぼくだけじゃなかった！ ここにいるのは両親が魔法使いとか一族全員魔法使いとかそんなやつばかりなんだよ。ノルドも学生の中にはぼく以外にいないし。まるで外の世界とは真逆さ。……あれ、もしかしてきみ、ノルド？」

彼は、ノルドと名乗るには背丈と体格の心許ないわたしを期待のこもった眼差しで見上げた。

この類の話題は苦手だ。わたしは下手な愛想笑いをした。

「二応ね。でも、シロディールで色んな人種の仲間と一緒に暮らしてたから、ノルドのしきたりみたいなのは全然分からないよ」

オンマンドは快活に笑って椅子から立ち上がった。

「どんな暮らし方をしてようとノルドはノルドだ。仲間が増えて嬉しいよ。周りがそんな感じだから、実はちよつと肩身が狭かったんだ」  
そう言われると悪い気はしなかった。ほんのささやかでも、誰かの心の支えになれるのは嬉しいことだ。

オンマンドは腕の中に残っているもう一個の頭骨の置き場所を探

すべく、部屋の中をうろろうした。ベッド脇の蠟燭立ての置いてある棚の上がしつくり来たらしく、彼は満足そうに片手を腰に当て、もう片手でわたしを手招きして、わたしの持つていた頭骨を蠟燭立てを挟んで二個目の頭骨と対称になるように置いた。

「うん、いい感じ。すごく魔法使いっぽい雰囲気になった」

彼は楽しそうにひとりごちた。わたしは同意しかねたが、わざわざ水を差すのはやめておいた。代わりに彼に尋ねた。

「オンマンドはスカイリム生まれだよ。どこの地域から来たの？」

オンマンドはベッドに腰を下ろし、わたしにも座るよう手振りで勧めてから、答えた。

「ホワイトラン。家族は先祖代々農家をやってる」

「へえ、ホワイトランか。ロリクステッドくらいしか行ったことがないな。やっぱり首都はウィンターホールドの町よりも大きいの？」

オンマンドはおかしそうにくすくすと息を漏らした。

「もちろん、ホワイトランの方が百倍は立派だよ！ びつくりしたよ、着いたばかりの時は。あれじゃ、ぼくの村の方がましなくらいだ」

彼は少し遠い目になって、自身の胸板の上に、何かを掴もうとしているかのよう手を伸ばした。ローブの生地が皺になって拳の中に収まると彼の表情は陰つたが、すぐに誤魔化すように笑い、両手を広げて熱弁した。

「でも、この大学はどうだい？ 広大で美しい建物、清潔な部屋、熱心な先生たち、一生かかっても読み切れないほどの蔵書！ ファレングー様がぼくの背中を熱烈に押ししてくださいださったのも理解できる。こんな場所で勉強できるなんて夢みたいだ」

話すにつれ興奮が高まってきた様子の彼につられて、わたしも大学に入学できたことが改めて誇らしくなってきた。ただし、この環境を維持するための学費の支払いのことを同時に思い出して胃が痛くもなったが。

「きみはシロディールのどこに住んでいたの？」

話題がわたしの身の上に戻ってきた。

わたしは躊躇した。彼のように、昔からずっと土地に根付いて生活

している人たちの中には、決まった故郷もなく放浪する旅芸人を良く思わない人もいる。

しかし、オンマンドにせつつかれて仕方なく話し始めて、それは杞憂だったと知った。旅芸人だったことを伝えると、彼の目はまるで小さな子供のよういきらきらと輝いた。国中を旅して回れるなんて楽しいだろうねえ、と彼は言った。わたしは嬉しくなって、促されるままに色んなことを話した。巡業の途中で出合った珍しいものや、ちよつとした事件、それに、ありふれているけれどとても美しい風景のことを……。

タムリエルのどこのマッドクラブが一番おいしいかという話で盛り上がっていた頃、部屋の扉がノックされ、扉の向こうからかすれた声が聞こえた。

「テルドリン・セロだ。話が弾んでいるようだな」

オンマンドが扉を開けて彼を迎え入れた。テルドリンは、部屋のそこここに鎮座する四個の頭骨へ順繰りに目をやって、感心したのか呆れたのか判然としない様子で鼻を鳴らしてから、わたしに尋ねた。「そろそろ掃除を再開しないか？」

わたしはオンマンドのベッドから腰を上げた。

「そうだね。最低限、今夜あそこで眠れるようにしよう。まだ手伝ってくれる、オンマンド？」

「ああ、もちろん。友達だからね」

オンマンドがいたずらっぽく唇の片端を上げた。わたしは胸が少しこそばゆくなった。

一方、テルドリンは明らかに面白がっている口ぶりでわたしに囁いた。

「ところで、トルフデイルが一言漏らしたよ。彼がこの大学に来た時には既にあの部屋は封じられていたと」

それはいつもの彼の声よりは小さかったが、同じ部屋にいるオンマンドには十分聞き取れる大ききだった。オンマンドが愕然と呟いた。

「なんだって？ それじゃあ少なくとも四十年は閉めきられたままだったんじゃないか。いったいどうして……」

「ほう、四十年以上も開かずの部屋だったわけか。面白い。なあ、お前もそう思うだろう?」

テルドリンが煽るような調子でわたしに話を振った。完全に、わたしで遊んでいる。せつかく楽しい気分だったのが台無しだ。

兜の下で思う存分にやっついていいるであろう彼を、わたしは雇い主としての精一杯の威厳を込めて睨みつけた。

「全然面白くないよ。昔何があったかはともかく、今はただの部屋でしよう。これ以上騒がないで」

テルドリンは大げさに肩をすくめた。

「ああ、承知したよ。私はお前のためを思って探りを入れたんだがな。お前がそう命令するなら今後はやめる。実に、残念だ」

哀れっぽく強調しても駄目なものは駄目だ。わたしは断固とした意思を示すべく、彼から顔を背け、戸惑っているオンマンドに無理に笑いかけて、部屋の扉を開けた。井戸のようなものから吹き上がる青い光の向こうで、例の部屋の入口に立っていたトルフデイル先生がにこやかに手を振った。

|||||

家具と床の水拭きを終え、二度目の休憩に入った。トルフデイル先生は部屋の外でぶらぶらしていた。オンマンドとわたしは部屋の中で、オンマンドが持ってきた盤上ゲームで遊び、テルドリンはキッチンに水を飲みに行っていた。

そこへ、執務室での用事を終えてきたらしいミラベル先生がひよっこりと顔を出した。

「部屋は問題なく使えそうですか」

ミラベル先生は部屋の敷居の向こうから、若干硬い笑顔で話しかけてきた。わたしは戸口に走って行って、頷いた。

「はい。片付けもほとんど終わりました。トルフデイル先生とオンマンドが手伝ってくれてるおかげです」

そうだ、ちようど彼女に聞いておきたいことがあった。確認した限

りでは家具はまだそのまま使えそうだったが、一つ足りない物があつたのだ。

「もう一台、ベッドを貸していただけると助かるんですが」

ミラベル先生が、え、と声を上げた。

「何に使うのですか」

彼女は怪訝そうに尋ねてきた。どうして、見れば分かるようなことを聞くのだろう。不思議に思いながら答えた。

「テルドリン——わたしの従者の分です」

ミラベル先生は、理知的な彼女に相応しくない、間の抜けた表情で口を開けた。トルフデイル先生は、その後ろで眉を八の字に下げ、目を真ん丸にしてわたしをまじまじと見つめ、それから、ミラベル先生をそうつと窺った。ミラベル先生は唇を引き結び、その眉間に、これまでになく深い皺を寄せていた。

「てつきり、あの傭兵は解雇するものと思っていましたか」

彼女は低い声で言った。わたしはびっくりして、彼女の言葉を否定した。

「いいえ。どうせ帰っても暇だって言うから、当分は一緒にいてもらうつもりです。それにわたし、彼がいないと夜、眠れないし……」

これは本当の話だ。スカイリムに来てからひどい悪夢を見るようになったので、誰かに傍で寝てもらわないと不安で仕方がない。テルドリンだったら、わたしの悪夢の中から化け物や何か飛び出してくても、簡単にねじ伏せてくれそうな気がする。

ミラベル先生はなぜか、泥酔してぐでんぐでんになった酔っ払いを見るような目でわたしを見ていた。やがて、彼女はぎゅつと瞼を閉じ、頭痛でも我慢しているかのように額に手をやった。

「ミラベル？」

おずおずと声を掛けたトルフデイル先生に、ミラベル先生は首をぎりぎり回し、強張った笑顔を浮かべた。

「ええ。もちろん。認めます。規則上は、禁止されていません。ファラルダの目にも適ったようです。ある意味、心強いと言えなくもありません」

ミラベル先生は、またぎりぎりと言を回し、わたしにその強張った笑顔を向けた。

「ベッドは倉庫にあるかもしれません。なければ諦めて、毛皮でも敷いてください。それから、ここは勉強に励むための場所ですから、くれぐれも節度を守って生活し、風紀を乱さないように。以上です」

彼女は一息で告げた後、トルフデイル先生に言った。

「アーチメイジに報告しなければなりませんので、私はこれで。後は頼みます」

ブーツの音を高く響かせて、彼女は達成の間から去っていった。彼女とちようど入れ違いにテルドリンがキツチンから出てきた。

「どうしたんだ、二人とも、そんなところにぼんやり突っ立って。誰か来ていたのか？」

トルフデイル先生は、八の字眉のまま、顎髭をしごきつつ、困ったようにわたしに笑いかけた。わたしはよく分からずに笑い返した。何がこの微妙な空気を作ったのか、全く見当がつかなかった。

テーブルに戻ると、オンマンドはなぜか鼻の頭を赤くしていた。彼はわたしと目を合わせないよう視線を彷徨わせながら、ぼそりと言った。

「あのさ、余計なお世話かもしれないけど。そういうことって、あまりあけっぴろげに話さない方がいいと思うよ」

そういうことってどういうことだろう？ わたしが質問する前に、オンマンドはトイレに行ってくるかと宣言して素早く席を立った。

#### 4. 奇妙な音

ウィンターホールド大学に入学してから数日が過ぎた。

大学では、魔法の分類別、さらにその中で習熟度別に、主に集団での授業が行われている。わたしは回復魔法以外は初級の授業を受けることになった。オンマンドとほとんどの授業が被っているのは心強かった。

ジェイ・ザルゴはあの事件の翌日にはすっかり元通りになっていた。彼とは錬金術の授業しか被らなかった。彼が受けているのはほとんどが中級、上級の授業ということだ。彼の溢れんばかりの自信は根拠のないものではなかったのだった。

ジェイ・ザルゴは初回の授業から早くも大活躍し、教授陣やずっと年上のクラスメートたちに一目置かれている。……と、食堂で食事を摂るときに毎回、彼自身から聞かされる。食堂では食事の時間中に現れればどこで誰と食べようと自由なのだが、彼はなぜか常にわたしの向かい側に座ってくる。ちなみに食堂は教職員と学生用なので、テルドリンは使うことができず、食堂で余った食材を使って寮のキッチンで自炊している。

「今日もジェイ・ザルゴの一挙手一投足が注目の的だった。魔法を放つために手を広げるたび、みんなが息を呑み、終わると感嘆の声を上げた。カジートの魔法使いが物珍しいことは理解している。だが、ジェイ・ザルゴはカジートであることは全く関係なしに、とても優れた魔法使いだ。その事実になぜ誰も思い至らない？」

この日のジェイ・ザルゴはなんだかご立腹だった。一気にそう言うなり、舌でも噛みそうな勢いで昼食のメインディッシュの鶏肉のパイに食らいついた。

「まだ入学したばかりだもの、仕方ないじゃない。そのうちみんな分かるよ、ジェイ・ザルゴがすごく頑張ってるって」

わたしは飲みかけのジャガイモのスープを置いて彼をなだめた。こんなふうに気が早いところも妹分だった「彼女」に似ている。

ジェイ・ザルゴは耳をぴんと立たせ、鼻の下から横に伸びるヒゲを

びくびく震わせた。口に入れたパイの塊を注意深く咀嚼し飲み込んでから、彼は目を細め、胸を張った。

「そうだ。ジェイ・ザルゴは努力家なんだ。サルジアス先生に教えてもらいながら、早くも巻物の開発をしている。ジェイ・ザルゴの巻物はエルスウエアでも評判だった。常人には到底扱えない代物だと噂された」

ジェイ・ザルゴはパイを食べ慣れていないらしく、口の周りにパイ生地の残りがすがくつついたままなのに気づいていない。せつかくの自慢話もこれではいまいち格好が付かない。でも、こんなふうに微妙に抜けているからこそ愛嬌があつて、自信満々な物言いもなんとなく憎めない。

先に食事を終えた学生が、わたしたちの傍らを通り過ぎがてらジェイ・ザルゴに声を掛けていった。

「ジェイ・ザルゴ。口の周り、残りかすがついてる」

「むう。難儀な食べ物だ。あちこちにこぼれる」

ジェイ・ザルゴは舌を出して口の周りをひと舐めしようとした。しかし、ふとわたしと視線を合わせ、瞳の中の黒目をぎゅつと小さくして、手元のナプキンで口の周りを丁寧に拭いた。

「オマエ、何を笑っている」

「えっ」

わたしは口元を手で覆った。つい頬が緩んでしまったようだ。

ジェイ・ザルゴは不貞腐れた表情でナプキンを畳み、テーブルの上に置いた。

「ジェイ・ザルゴをまだバカにしているのか？ ジェイ・ザルゴの實力はオマエが一番よく知っているはずだ。一度ジェイ・ザルゴを助けたからといって、自分の方が上だと勘違いするのはやめるべきだ」

「いや、そんなふうには思っていないよ」

抜けたところがあつてかわいいとは思っているものの、自分が彼より上だなんて思ったことはない。

「オマエは回復魔法の個人授業を割り当てられた。それなのにジェイ・ザルゴが初級の授業しか受けられないので、得意になっているだ



ろう」

考え過ぎだ。どんな意図で回復魔法だけ個人授業になったのかも分からないし、回復魔法の教授のコレット・マレンス先生は難しい性格だと聞くので正直一人で対峙したくない。わたしは彼の認識を正そうとした。

「だからそんなことないってば。ジェイ・ザルゴの方がわたしよりずっと色んなことができるじゃない。回復魔法の授業が初級なもの、たぶん入学試験で披露できなかったからだよ」

「もういい」

ジェイ・ザルゴは大声で言い、椅子を引いて立ち上がった。

「ジェイ・ザルゴはもう食事を終えた。図書館へ行って勉強する。オマエがパイをおかわりして昼寝をしている間に、ジェイ・ザルゴはどんどん先へ進むんだ」

呆気にとられているわたしを置いて、ジェイ・ザルゴは食堂から出ていった。

周囲に座っていた人たちが静まり返ってこちらを窺っていたが、間もなく各々の食事や会話に戻った。

「大丈夫？」

少し離れたところで食事を摂っていたオンマンドが食べかけの皿を持ってやってきた。わたしはうつすらと汗ばんでいた額を掌で拭った。

「ああ、うん、大丈夫。どうしたんだろう、ジェイ・ザルゴ」

「きみをライバル視してるんじゃないかな。『エルスウエアでは史上稀に見る天才だと称えられていた』とか言ってたから」

オンマンドはジェイ・ザルゴの下手な口真似をした。

「天才がわたしみたいなの平凡な人間をライバルにしても意味がないと思うけど」

わたしは愚痴を言った。ジェイ・ザルゴから敵視されるのはつらい。

オンマンドは困ったように頬を掻いた。

「同じ日に入学したからね。同じ歳の子供が張り合うのと似たような

ものじやない？」

「でも、何もあんなにむきにならなくてもいいのに」

オンマンドはわたしの肩を軽く叩いた。

「気にしないでしばらく放っておけば、けろつとした顔でまた話しかけてくるさ。カジートってそういう奴らなんだろう？」

確かに、カジートは前向きであっさりした性格であることが多い。ジェイ・ザルゴも、そうでなければエルスウエアからこんな北の果てまで一人で来られないだろう。

「そうだね。ありがとう、オンマンド」

わたしは彼と笑い合い、飲みかけていたジャガイモのスープと、手つかずだった鶏肉のパイに取りかかった。

|||||

食事の後、寄っていきたいところがあると言うオンマンドと別れて、わたしは達成の間の自室に帰ってきた。

テルドリンは部屋にいなかった。彼はわたしの授業にはついてきてくれるが、それ以外の時間は結構好き勝手に出歩いている。毎晩眠るときに部屋にいてさえくれればこちらとしてはなんの問題もない。彼は特に大学寮の風呂をいたく気に入ったらしく、毎晩、石鹸と湯気のむんむんとした匂いの中に何かの香辛料に似た体臭をかすかに混じらせて戻ってくる。もちろん、その際もキッチンの装備で完全武装していて、満足そうに緩んでいるであろう彼の顔を拝むことはできない。風呂から戻った後は剣の手入れやら体操やらをしてからベッドに入っているようだ。

今日の午後は授業の予定はない。テーブルに置いてあった本を開き、椅子に座った。回復魔法の初回の個人授業までに目を通しておくようにと言われているそれは、回復魔法の種類と使用方法について述べているもので、まだ三分の一ほどしか読み終えていなかった。文字の読み書きには慣れていない。授業で使う全ての本を三日で読破したと豪語していたジェイ・ザルゴとは雲泥の差だ。

ジエイ・ザルゴのことを意識に上らせてしまったために、図書館へ行くと言った時の彼の不機嫌そうな表情が頭に浮かんで、落ち着かなくなつた。難しい用語の並ぶ文章の上を目が滑つた。小さく息を吐いて本を閉じ、瞼を閉じた。期限まではあと半日くらいある。慌てて読んでも仕方ない。

——と、耳が、かすかな音を捉えた。

タツ、タツ。タツ、タツ、タツ。

何か軽いものが石の床の上を叩くような音。途切れたかと思えば、しばらくして再び始まり、十回ほど繰り返し返してまた止まる。部屋の中を見渡した。目に見える範囲では何も動いていない。

その音は本当に小さくて、少し別の音を立てればたちまち消えてしまいそうだった。わざと大きな音を立てて椅子を引いてみた。

叩くような音は止まらなかつた。それどころか少し大きくなつた、ような気がした。

なんだ、これは？ 階上の住人の足音ではないだろう。夕食後など部屋にいる時間が被つていたことも多かつたと思うが、今まで足音など聞こえたことがなかつた。それとも外の廊下を誰かが歩いているのか？

「四十年以上も開かずの部屋だったわけか」。テルドリンの面白がるような声が脳裏を掠めた。腹のあたりに冷気が集まるのを感じた。震える足を引きずって部屋の扉まで歩いていき、勢いをつけて開けた。

廊下には誰もいなかった。吹き抜けを通して上階を見渡しても、それは同じだった。

扉を閉めてみた。音はかなり小さくなつたものの、まだ聞こえている。

間違いない。この音は外から聞こえてくるのではない。この部屋の中から聞こえているのだ。

わたしは部屋を飛び出した。テルドリンはこの時間、どこにいる可能性が高いだろう。彼でなくてもいい。誰か他の人のいるところへ行きたい。わたしの足はキッチンへ向かつていた。運が良ければ学

生が間食でも作っているかもしれない。

キツチンの扉を壊れそうな勢いで開け、転がり込むようにして入った。果たしてそこではテルドリンが一人、テーブルで自作のスープを啜っていた。

「テルドリンー！」

脇目も振らずテルドリンに走り寄り、彼の片腕にぶら下がるようにして縋りつき、床に膝をついた。腹のあたりにあつた冷氣はいつしか背中と両腕の先まで広がって感覚を麻痺させていた。彼にくっついていけば、その体から発される熱が冷氣を溶かしてくれる気がした。

紫色の唇にスープの器の縁を当てていたテルドリンは、わたしに縋りつかれるのと前後して素早く器をテーブルに置いたが、中身がこぼれるのを防ぐことはできなかつた。こぼれたスープがテーブルに広がった。彼はわたしを振りほどいて悪態をついた。

「食事中の者にちよっかいをかけるなど教わらなかつたのか。お前のせいでせつかく作ったスープが——」

そこまで言つてテルドリンはわたしの必死の形相に気づいたらしい。彼は荒々しく吐き出していた息を止め、声を潜めた。

「どうした。何が起きた」

わたしは再び彼に縋りたくなる衝動を抑え、代わりに両手を交差させて自分の二の腕を掴んだ。

「変な音がするの。あの部屋の中で」

テルドリンは唇の両端に皺を作り、呆けたように薄く口を開けた。そんなことはとても信じられないとでもいうふうには。

わたしは涙声になるのも構わず訴えた。

「嘘じゃないよ。ねえ、テルドリン、今すぐ来て。幽霊でもなんでもいから退治して」

テルドリンは意を決したように唇を引き結び、傍らに置いてあつたマスクで口元を覆つて立ち上がった。彼はわたしに手を伸ばした。

「立て。一緒に行く。妙なものがいたらすぐに斬り捨ててやる」

わたしが彼の手を取ると、彼は先ほどと同じ人物とは思えないほど優しく、わたしを引き上げた。

わたしたちはキッチンを出て、廊下を進み、部屋の前に立った。もちろん先頭はテルドリンで、わたしは彼の後ろで体を縮めていた。

テルドリンが扉に左手で触れ、側頭部を近づけた。そのまま何拍か待った後で、彼は右手を剣の柄に掛けながら左手で扉を押し開けた。今にも抜剣して何者かに一太刀浴びせそうな気配を発散させながらも、彼が実際の行動に移ることはなかった。部屋の中にはやはり何も動くものはなかった。そして、あの音もすっかり消え失せていた。

テルドリンは壁際のタンスの一つににじり寄り、扉を開けた。数日前に掃除をしてわたしの持ち物を適当に入れて以来、品物の配置は変わっていないかった。テルドリンは部屋の中の全ての収納を調べていった。でも、あの叩くような音を立てそうなものは見つからなかった。

テルドリンが剣の柄から手を離し、こちらへ首を巡らせた。

「本当に聞こえたのか？ ネズミの足音ではなく？」

わたしは頷いた。ネズミやスキーヴァーなどの小動物の足音ならばもつと音と音の間隔が短いはずだ。

テルドリンは困り果てたように首を傾げた。

「夢でも見たんじゃないか？ 自分でも気づかないうちに眠っているというのはよくあることだ。特に、酒場で酔っ払いの退屈な長話を聞かされたり、誰かから押しつけられた小難しい本を読んだりしているときはな」

「夢じゃない。絶対に起きてた」

言いながら、確信が揺らいだ。白昼夢だったのかもしれない。本を読むのは苦手だ。しかもあの時はジェイ・ザルゴのことを考えてぼうっとうっとうしていた。しかし、そうだとしても。

「テルドリンはこの後何か予定はある？」

尋ねると、テルドリンは歯切れの悪い調子で答えた。

「あ、ああ。実は——これから大学の外に出たいと思っていたんだ。昼食を食べ終えたら、お前に一声掛けて出発するつもりだった」

意外だった。彼が自分からわたしの傍を離れたいと言ったことは、雇い始めた当初の互いに不信感を抱いていた時期を除いて全くな

かった。この数日間も、わたしに付き添うように、彼も完全に大学の中で過ごしていたのだ。

「誰かと約束してるの?」

「いいや。ただ、近いうちに一度機会を作りたいと思ってた」

彼に似つかわしくない、控え目に呟くような調子で彼は言った。わたしは迷ったものの、素直に自分の要求を伝えることにした。

「今日絶対に行きたいってわけじゃないんだよね? だったらお願い。今日はこの部屋で、わたしとずっと一緒にいて」

「……は?」

テルドリンの喉からわたしの正気を疑うような声が転がり出た。彼からしたらきつと馬鹿みたいに子供じみて聞こえるだろうと思いつながら、わたしは懇願した。

「またあの音がするかもしれないでしょう。そのとき、わたしだけに聞こえるのならわたしの白昼夢だし、テルドリンにも聞こえるなら本当に音がしてるってこと。どっちなのか確かめておきたいんだよ」

テルドリンは考え込むように腕組みをした。

「そうか。そういうことなら、まあ、私は構わん。だが、ただでさえその音が聞こえるか否かと気を取られているのに、私までいると勉強の邪魔にならないか? 図書館にでも行った方がいいんじゃないか?」

わたしは首を横に振った。図書館にはジェイ・ザルゴがいる。今顔を合わせたら気まずくて仕方ない。

「大丈夫。わたし、誰かが傍にいても全然気にならないから。それに、分からないところがあつたらあなたに聞けるし」

「しかし……」

妙に食い下がってくるテルドリンに、卑怯なやり口だとは思いつつ言い放った。

「そもそも、テルドリンがわたしをからかわなければ、こんなふうにはならなかったかもしれないだよ。先生たちの反応を、無視しておけばいいのにあなたが掘り返すから」

テルドリンは腕組みを解いて苛々した様子で反論してきた。

「あの時はふざけすぎた。すまなかったよ。だが、お前に命じられて

からは何も言わなかっただろう。お前の方こそ、忘れてしまえばいいものを掘り返しているだけじゃないか」

「忘れようと思って簡単に忘れられるなら、みんなもつと幸せに生きてるよ」

反射的に口にした一言が効いたのか、テルドリンは両脇にだらりと下げていた掌を握りしめ、両足の角度を落ち着きなく何度か変えた。わたしはダメ押しした。

「お願い。明日の朝目が覚めるまで何もなければ、もう本当に気にしないことにするから。今日は傍にいて」

テルドリンは再び腕組みをして、大きく音を立てて鼻から息を吸い、緩やかに鼻から出した。

「分かった。明朝までだな。それまでに何も起きなければ、悪いが私は午後いっぱい留守にさせてもらおう」

「うん……。ありがとう、テルドリン」

わたしたちは、以後、夕食と風呂の時間を除いて部屋で過ごした。一旦方針が決まれば特に言い争うこともなく、わたしは宿題の本を読み進め、分からない部分についてテルドリンに質問し、真面目な答えには感謝しふざけた答えには文句を言った。また、テルドリンはわたしのことは風呂に送り出してくれたが、自分自身は、毎晩たつぷり時間を取って入っていた風呂にこの夜は入ろうとしなかった。

正直なところ眠る時も怖かったので、一緒のベッドに寝てくれと頼んでみたもののすげなく拒否された。わたしは怯えながらベッドに潜り込み、毛布を頭まで被り、それからいくらしないうちにあつさり眠りに就いていた。

## 5. コレット・マレンスの憂鬱

遠くから鐘の音が聞こえる。大勢の足音が近づいて、遠ざかっていく。誰かがわたしの体を揺さぶっている。まだ眠っていたいの、うるさいなあ。一度その手を振り払うと、しばらくまどろみの邪魔をする者はなかった。

どのくらい経っただろう。鼻腔の中に食欲をそそる香ばしいパンと肉の匂いが漂ってきて、がばりと跳び起きた。

「ようやく目が覚めたか」

部屋の隅のテーブルで、奇妙な兜を顔の上半分には被った灰色の肌の男、テルドリンがパンを口に運んでいた。パンには切れ込みが入っており、焼いた肉の切れ端が挟んであった。

腹の虫が鳴いた。わたしは乾燥してからからになった喉から声を絞り出した。

「朝食の時間、始まってる？」

「とつくな。今すぐ走っていけ、でなければ食いそびれるぞ」

わたしは大慌てで寝間着を脱ぎ、壁際のダンスに駆け寄った。

「おい。いきなり服を脱ぐなど何度言ったら分かるんだ」

「仕方ないでしょう、急いでるの！」

わたしは猛烈な勢いで着替えながら考えた。結局、朝になるまでの音を再び耳にすることはなかったのだと。

朝食を食べ終えた後、わたしはテルドリンを伴って、すれ違う人、道を聞きつつ、回復魔法の教授であるコレット・マレンス先生の執務室の前までやってきた。

執務室の前で、小柄な中年女性が両手を揉み合わせながら左右に視線を走らせていた。彼女はわたしに血走った目を留めるなり、その目をカッと見開き、頬を紅潮させ、鼻の穴を膨らませて、ずんずんと歩み寄ってきた。

「あたしに何か用？」

かすれただみ声で彼女は尋ねた。彼女のことは、何度か食堂で見かけたことがある。いつも独りで黙々と、険しい顔で食事を摂ってい



て、なんだか近寄りがたい雰囲気だった。

「コレット・マレンス先生ですか？ わたしは——」

わたしが名前を告げるなり、彼女は跳び上がり、わたしの右手を両手でがしつと掴み、わたしの顔を食い入るように覗き込んだ。彼女の血走った目は涙で潤んでいた。目の下には濃い隈が浮かんでいた。寝不足なのだろうか。それに、なんだか息が酒臭かった。

「そうよ、あたしはコレット・マレンス。やっぱりあなたがそうなのね、あたしには分かってたわ！」

呆気を取られたわたしを完全に置き去りにして、彼女はまくし立てた。

「あたしはね、あなたの話を聞いた時、とっつっても嬉しかったのよ。ついに！ 久しぶりに！ まともな回復魔法の使い手が現れたってね！」

連中はいつもあたしに言うの、回復魔法なんてただの添え物だ、適当に使えばいいじゃないか、きちんと修めたり研究したりなんて馬鹿らしいって。回復魔法こそニルンで最も役に立つ魔法なのに、誰も分かってくれないの！ とんでもないことだわ!!」

「そ、そんなことを言う人がいるんですか。大変ですね」

わたしは、このままだと彼女と鼻の頭がくっついてしまいそうだと思う、適当に調子を合わせた。回復魔法は八大神の司祭がよく使っていたし、わたしが使えると分かると衛兵などからは普通に羨ましがられたが、魔法使い同士だと事情が違うのだろうか。

コレット先生の、ダンマーでもないのに充血していて赤っぽい目から大量の涙が溢れた。彼女はわたしを、その細い体のどこにそんな力が秘められていたのかと思うくらい強い力で抱きしめた。葉草と酒とインクの匂いが鼻の中に流れ込んだ。

「ああ！ やつと理解者が現れた！ キナレスがあたしたちを巡り合わせてくださったのよ、そうに違いない！ あたしたち、いい師弟になれるわ。そうよ、今度こそ、今度こそは絶対に……」

今度こそはなんなのが気になったが、彼女がその先を語ることはなかった。彼女はわたしを抱擁から解放し、わたしの腕を引いた。

「執務室に入りましょう。廊下で話しているとすぐ文句を言われるの。嫌な連中よ」

彼女に引つ張られるがまま、彼女の執務室に入って、彼女が予め自分の机の前に用意してくれていた椅子に座った。執務室は、見た目には片付いていた。ただし、本棚に羊皮紙が溢れんばかりに詰め込まれていたり、本がサイドテーブルの上に大小や向きを全く考えずに積み重ねられていたりして、少し触れば全てが崩れてきそうな危うさが感じられた。

テルドリンはわたしに続いて執務室に入り、出入口近くの本棚の前に陣取った。あの位置ならわたしたちの会話や魔法の練習の邪魔にはならないだろう。

ところが、コレット先生は彼をじとつと睨みつけた。

「ちよつとあんた、さつきからなんなの？ 薄気味悪くこの子に付き纏って、どういうつもり？」

そういえば、テルドリンのことを紹介しないまま話が進んでしまっていた。

「彼はテルドリン・セロ。わたしの護衛です。何かあったときのためにもいつもそばにいらってます」

「何か？ あたしが何か騒動を起こすとも思ってるの!？」

コレット先生の声跳ね上がった。わたしは思わず身を縮めた。コレット先生は、はっと目を見開き、あわあわと口を動かした。

「ごめんなさい。ああ、驚かせちゃったわ、本当にごめんなさい。あのね、授業はあなたと二人きりでやりたいのよ。そうでないとあたし、緊張しちゃうの。だから彼は外で待たせておいてもらえる？」

わたしはテルドリンに目を向けた。テルドリンはとても不服そうだったが、わたしが頷くと、黙って退出していった。

コレット先生はテルドリンが出ていった後は気分が安定したようだった。彼女は宿題の本の内容についてわたしに質問をした。何しろ急に詰め込んだもので思い出せないことも多かった。正直に覚えていないと言っても、意外にも彼女が怒り出すことはなく、それどころか微笑みさえ浮かべて、早口で答えを教えてくださいました。

コレット先生が一通り質問を終えて満足したと思われた後で、わたしはおずおずと言った。

「あまり理解できてなくて申し訳ありません。今まできちんと教えてもらったことがなくて、本を読むのも下手なので」

コレット先生は胸の前で手をひらひら振った。

「構わないわ。理論なんて魔法を使つていくうちに理解していけば十分よ。この本について、あなたから何か質問はある？」

思いのほか砕けた雰囲気だ。わたしは安心して、ここ何日か不思議に思っていたことを伝えた。

「質問というより、感想ですけど。魔力の壁も回復魔法なんですわ。この間の授業の時トルフデイル先生が教えてくれたので、てつきり変性魔法だとばかり思っていました」

すると、コレット先生は微笑はそのままに、頬をぴくぴくと痙攣させた。

「トルフデイルは未だにあれが変性魔法の一種だと勘違いしてるのよね。五年前の教授会で回復魔法に分類を変更したのを覚えてないのよ」

「分類、が変わったんですか？」

コレット先生はしかめ面になった。

「ええ、変性魔法と回復魔法の中間にあるような魔法だから、ときどき変わるの。でも一旦回復魔法に決まったんだから、トルフデイルもあなたのお鉢を奪わなくなつていいと思わない？ まさか自分の方が教えるのが上手くて学生に人気もあるからって、あたしの代わりに教えてやっているとでも考えてるのかしら？ ねえ、どう思う？」

「あの……おっしゃつてることがよく分かりません」

恐る恐る言った。コレット先生は一瞬ぼんやりとわたしを眺めた後で、慌てて強張った笑顔を作った。

「あ、あら、ごめんなさい。大学に入ったばかりだもの、まだ分からないわよね。それで、他に質問や感想はある？」

わたしは違和感を覚えながらも続けた。

「ええと、じゃあ……死者撃退系の魔法って、幻惑魔法の恐怖の魔法と

似てますよね？ こないだドレヴィス先生の授業で習ったんですけど」

コレット先生は鷹揚に頷いた。

「見た目は似てるわ。でも実際の原理は全然違うのよ。死者撃退系の魔法は治癒の魔法の応用なの」

わたしは死者撃退系の魔法を使ったことがなかったので、興味をそそられた。

「どういうことでしょうか？」

「死者は生命力を嫌うの。治癒系の魔法は生命力を活性化させるものだから、それで術者の生命力を活性化させて発散すれば死者は逃げていくのよ。単に相手に恐怖心を抱かせて逃亡させる恐怖の魔法とは根本的に違うの」

「……なるほど？」

分かったような、分からないような。とりあえず相槌を打っておい

た。コレット先生はわたしの理解が追いついていないことを敏感に察知したらしかった。彼女の目は変わらず笑みの形に細められていたが、彼女の荒れた唇はわなわなと震えていた。

「回復魔法に相応しくないって思ったかしらね？ ドレヴィスはそう思ったのね、だからあなたに恐怖の魔法を教えたのよ」

彼女の目は暗い光を帯び、視線はわたしを通り過ぎて何もない虚空を見据えていた。

「あの男は以前から死者撃退は幻惑魔法か召喚魔法に分類するべきだって言ってた。原理を考えれば回復魔法以外の分類はないのにな。ドレヴィスはフィニスと結託してあたしをここから追い出そうとしている。あたしの大切な弟子を奪おうとしている。でもあたしはあの男の思惑通りにはならないわ、ええ、絶対に」

「あのおう、コレット先生？」

コレット先生は弾かれたように肩を震わせて、彷徨っていた両目の焦点をわたしに合わせた。

「あ……ああ、ごめんなさい。貴重な授業の時間をドレヴィスの悪辣

さを嘆くのに使っちゃいけないわね。

本について他に質問がなければ、そろそろあなたの魔法の腕前を見せてもらおうかしら。大まかなところはフアラルダから聞いてるけど、細かく確認して授業の進め方を決めたいの」

それからわたしは午前いっぱいを彼女と二人で過ごした。ようやく解放された時にはぐったりと疲れていた。何しろ、少し気を緩めると彼女の妄想が始まってしまふのだ。かなり気を遣った。

コレット先生の執務室の外に出ると、テルドリンは扉のすぐ横の壁に寄りかかっていた。彼は苦笑の絡んだ声で囁いた。

「どうだった、と、わざわざ聞く必要もないか。前途多難だな」

「しばらくはね。慣れれば大丈夫だよ、たぶん」

半ば自分に言い聞かせるように希望的観測を口にした。それから、テルドリンが今日の午後いっぱいには大学の外に出かけると宣言していたことを思い出した。

「もう出かけるの?」

塔の階段の方へ向かいながら尋ねた。テルドリンは後ろをついてきた。

「部屋に荷物を取りに行ったらな。夜には帰ってくる」

「そっか。わたしは午後は休みだから、部屋か図書館で自習してるよ」  
わたしたちは階段を降り、廊下を突っ切って塔の外に出た。空模様はあまりよろしくなく、薄灰色の空に、汚れた羊毛を薄く裂いて伸ばしたような雲が広がっていた。今にも粉雪が舞い始めそうだった。

食堂の前までやってくると、香ばしい匂いが鼻をくすぐった。昼食の時間を告げる鐘はあともう少し経たないと鳴らないだろう。

わたしはテルドリンを振り返った。

「あのさ、よかったら教えてほしいんだけど。どういう用事なのか」  
テルドリンはおどけた声色で言った。

「私が娼館で遊び呆けてくるのではないかと心配になったか? あるいは鉱山で日雇いの助っ人でもやるのかと?」

「そっ、そんな心配はしてない。何をしようとテルドリンの自由だよ。そうじゃなくて……」

本来、わたしの護衛から解放されている間の彼の行動に興味を持つべきではない。でも、ウインターホールドに到着した時の彼の態度は奇妙だった。それに、例の部屋の問題もある。昨日は彼を引き留めるのに必死で、今朝までに何も起こらなかつたら気にしないと約束してしまっただけで、そうあっさり割り切れるはずもない。

どう伝えようか迷っているわたしをテルドリンはじつと見下ろし、先ほどまでとは打って変わって静かな、かすれた声で言った。

「安心しろ。命の危険があるわけでも、お前に迷惑を掛けるわけでもない。それに、一度きりだ。ほんの一度きりでいいんだ……それで私は満足する」

謎かけのような言葉だった。わたしの問いへの答えにはなっていない。それでも、これ以上追及したら踏み込み過ぎのような気がして、わたしは口を閉ざした。

空気が沈みかけたところで、テルドリンはいつもの陽気な笑いを飛ばしながら歩き出し、すれ違いざまにわたしの背中を叩いた。

「ハハハ、まだあの部屋を怖がっているのか？ 臆病者め。万一その妙な音が聞こえてきたらオンマンズの部屋にでも逃げておけ。不安なら、はなから図書館にでもこもっているがいい。用事が終わって帰ってきたら、すぐに迎えに行つてやる」

わたしは継るような気持ちで念押しをした。

「ほんとに？ 迎えに来てくれる？ 怖くなくなるまで一緒にいてくれる？」

テルドリンは兜とマスクを着けた顔だけこちらに向けて、フツと軽く息を噴き出した。

「ああ、そうするよ。大きな赤ん坊のお守りはもうこりごりなんだがな。雇われてしまった以上、せめて一人歩きができるようになるまでは世話をしやろう」

その時、昼食の時間を告げる鐘が鳴った。あちこちの塔から待っていましたとばかりに色とりどりのローブを着た学生や教職員が飛び出してきた。

「それじゃ、私が帰るまで大人しくしているんだぞ。例のカジートの

機嫌を損ねて丸焼きにされないようにな」  
テルドリンはかすれた声に笑いを滲ませ、大股で歩き去っていった。

## 6. 開かずの部屋の秘密

午後はテルドリンの勧め通り、図書館にこもることにした。

テーブルの一つで初歩的な変性魔法の呪文書を読んでいるわたしの目の前には、本の山に囲まれ、余裕に満ちた表情で本のページを繰っているジェイ・ザルゴの姿があった。彼は、昼食の時はわたしから離れた席で無然とした顔つきで食事を摂っていたのに、わたしを図書館で見つけるなり、大量の紙と本を抱えてわたしの使っているテーブルに移動してきた。

テーブルに置かれたランタンの光でジェイ・ザルゴの繊細な毛並みが輝き、くるくると表情が変わるところを眺めているのは楽しい。楽しすぎて呪文書に集中できない。彼がページをめくる音や紙の上で羽根ペンを滑らせる音が少しばかり大きいのも、なおのことそれに拍車を掛ける。

わたしが、読んでいる本と、ジェイ・ザルゴと、ジェイ・ザルゴの立てる音の間で意識をうろうろさせているうちに、夕食時を告げる鐘が鳴った。

ジェイ・ザルゴはぐいっとしなやかに背伸びをして、実に満足げな笑みを浮かべて腰を上げた。

「かなり完成に近づいた。サルジアス先生も喜ぶだろう。頭を使ったら腹が減った」

図書館司書のウラッグ先生に注意されそうな大声で彼はそうのたまい、ふいとわたしを見下ろした。

「どうした。夕食の時間だ」

「あ、うん、そうだね。行こっか」

わたしは立ち上がった。

ジェイ・ザルゴと連れ立って元素の間の外に出ると、雲がちのくすんだ夕闇が降りていた。

夕食時のジェイ・ザルゴは普段の饒舌さを取り戻していた。今開発している何かを燃やす巻物とやらのことを声高に話し、回復魔法の個人授業の様子について聞きたがった。コレット先生の難しい一面に



ついでには省いて伝えると、彼は若干妬ましそうな目つきで、次の回復魔法の授業ではもつと自分の有能さをアピールしなければいけないと一生懸命呟いていた。オンマンダの予言通り、けろつと機嫌が直つたらしい。よかった。

夕食後、わたしは達成の間に向かった。テルドリンが帰っていないかを一応確認するためだったが、部屋にもキッチンにも彼はいなかった。トイレや風呂に行っているわけでもなかった。彼がいつも使っているナツプザックが部屋の中になかったからだ。

わたしは図書館へ戻った。ジェイ・ザルゴはさつきまで使っていたテーブルで引き続き書き物をしていた。彼は向かい側に座ったわたしと目を合わせ、どこことなく嬉しそうな、それでいて微妙な警戒心も入り混じった顔つきになった。

「今日は図書館によく来るな。ジェイ・ザルゴの研究成果を盗むためか」

相変わらず声が大きい。わたしは小声で応じた。

「そんなつもりはないよ。部屋だとちよつと落ち着かないから来たの」

ジェイ・ザルゴは大真面目に頷いた。

「なんだ、そうか。ジェイ・ザルゴも幼い頃、自室では勉強が進まないと学んだ。暖かい風でゆらゆら揺れるハンモックに心を奪われ、気づいたら叩き起こされるまで眠っているんだ」

その光景を思い浮かべて、くすりと笑ってしまった。もちろんそれはばつちりジェイ・ザルゴの不興を買った。

「またバカにしているな！ 気持ちの良さそうな寝床を見ればそこで眠りたくなるのがカジートの本能だ。ジェイ・ザルゴはその本能に負けないよう、こうして工夫しているんだ」

「だからバカにはしてないって。工夫してて偉いと思うよ」

ジェイ・ザルゴは、くしゃみでも我慢しているかのように、むずむずと鼻を動かした。口元が緩んでいた。彼は勢いよく首を左右に振って、黄緑色の目を疑り深そうにぎらつかせた。

「じゃあ、なぜ笑った」

「ええつと、それは」

かわいいから、と言うと、たぶん怒る。どう誤魔化そうかと考えていたら、横から低い咳払いが飛んできた。

ウラツグ先生だった。わたしたちのテーブルから少し離れた位置の椅子に座り、年老いた図書館司書にしてはあまりに筋骨隆々とした両腕を胸の前で組んでいた。こちらを見てはいないが、今の咳払いがわたしたちに向けたものだということは分かった。

ジェイ・ザルゴは尻尾を背中に張りつけるようにぴんと伸ばした。彼はこちらへ少し身を乗り出して、ひそひそと囁いた。

「おととい、展示してある魂石をいただこうとしたら、殴られた。ケチなオークだ」

「え、それはそうなって当たり前だよ。どうしてそんなことしたの」

「珍しい魂が入っていたからだ。研究に使うつもりだった」

「見せてもらうだけじゃダメだったの？」

「ダメだ。スプリガンの魂を使って付呪することで巻物にどんな変化が現れるか知りたかった。スプリガンはこのあたりにはいない。なかなか手に入らない珍しい品はエンシルという倉庫番に金を払って手配させるものと聞いた。しかし、父上からの仕送りは来月にならないと来——ぐええ！」

ジェイ・ザルゴの頭の上に深緑色の拳骨が落ちた。ジェイ・ザルゴの顔がぺちゃっと歪んだ。そんな顔もまた愛嬌があると呑気に思ってたわたしの頭の上にも同じように拳骨が降ってきた。視界に火花が散った。

「ここは図書館だ。静かにできないなら、出ていけ」

テーブルの脇でウラツグ先生がわたしたちを見下ろしていた。オークにしては彫りの深い顔立ちと照明の当たり方のせいで両目に影が掛かり、口元は豊かな白い髭と鋭い牙に遮られ、全く表情が窺えない。

「すみませんでした」

わたしたちは、しゅんと頭を下げた。

それからの夜の時間は、集中できていないのかいないのかよく分からない状態で呪文書を繰り、ときどきジェイ・ザルゴにいちやもんやら雑談やらを吹っかけられ、ウラツグ先生から無言の圧力が飛んでくる、といった具合に過ぎた。

ずっと椅子に座りっぱなしだったので、体を動かしたくなり、図書館の出入口のホールに散歩に来た。ホール正面の大きなガラス窓からは、青い光の立ち昇る中庭を囲んで、大学の塔がずらりと一堂に会している様子と、遠くのウィンターホルドの町の、篝火に照らされたちっぽけな町並み、更に、町から大学へと続く長い橋の一部が見えた。どんより暗い夜の曇り空から、結構な量の雪が静かに降り注いでいた。

テルドリンは未だに図書館に現れなかった。中庭や橋を歩いていないかと目を凝らしても、あの特徴的な姿は見当たらなかった。

背後から二人分の足音が聞こえてきた。

「帰るぞ。閉館の時間だ」

ジェイ・ザルゴが大きな麻袋を背負っていた。ウラツグ先生が鍵の束を出して、図書館の扉を閉めようとしていた。

「あ、わたしの本」

「ジェイ・ザルゴがついでに持った。この袋の中に入っている」

ジェイ・ザルゴが背中の中の袋をペシペシと無造作に叩いた。ウラツグ先生がジェイ・ザルゴを睨めつけた。

「くれぐれも雑に扱うなよ。一冊でもページをバラバラにして返してみろ、お前の血に贖わせてやる」

彼は血管の浮いた拳骨を自分のもう一方の掌に当てた。いい音がした。

ジェイ・ザルゴは若干早足でわたしの隣にやってきた。

「おやすみなさい、ウラツグ先生」

慌ててぴよこんと頭を下げる彼につられて、わたしも頭を下げた。

「おやすみ」

ウラツグ先生は唸るように一言答え、そのままホール横の上り階段へ向かった。上階の鍵を閉めに行くのだろう。わたしたちは彼とは逆に、下り階段を降りた。

わたしは元素の間の前の大扉を開けた。大粒の雪がフードを着けた頭と肩の上に降り注いだ。服の下の肌が、寒さを追い出すためにぴんと張り詰めた。

しかし、静かだ。町の酒場の喧噪も亡霊の海のぶつかり合う波の音も、この崖の上の大学からは遠い。

「ウラツグ先生の癩癩も困りものだ。殴られすぎてジェイ・ザルゴの頭が使い物にならなくなったら、ウインターホールド大学、いや、タムリエルの魔法研究界にとって大きな損失だというのに」

ウラツグ先生から離れられて安心したのか、ジェイ・ザルゴが鬱憤を吐き出した。

「まあ、わたしたちが悪かったんだから仕方ないよ。かなり手加減してくれてたと思う」

オークの腕力は並大抵ではない。ウラツグ先生が本気を出したら、わたしたちの頭など簡単にかち割れるだろう。

ジェイ・ザルゴは先生に殴られたあたりをフードの上からしかめ面できすった。

「魔法使いにとって頭脳は命だ。ドウラ・サツヤはそれをよく心得ていた。ジェイ・ザルゴを一日食事抜きにしたり、砂に首まで埋めて放置したりはしても、殴ることは一度もなかった」

拳骨一発で済ませてくれるウラツグ先生よりもむしろ過酷な気がするが、感じ方は人それぞれということか。

ジェイ・ザルゴがにんまりと笑った。

「でも、ジェイ・ザルゴはウラツグ先生に勝った。だからいくら殴られても悔しくはない」

「勝ったってどういうこと?」

「ふふん。秘密だ。気が向いたら教えるよ」

ジェイ・ザルゴは得意そうに鼻息を噴き出して、肩の麻袋を担ぎ直した。

達成の間は魔法のおかげで温かかった。ジェイ・ザルゴはわたしの部屋の扉をまるで自分の部屋であるかのように無遠慮に開けた。

テルドリンはいなかった。彼のナツプザックは相変わらず部屋のどこにも見当たらなかった。……さすがに遅すぎる。何か良くないことが起きたのか？

いや、思い返してみれば、彼は「夜には」帰ってくるただけ言っていて、夜のいつ頃になるとははっきり言っていないかった。きつと名残惜しくて長居しているのだろう。わたしの世話を焼くのうんざりしているのかもしれない。

「オマエの本は奥の方に入れてしまったから、一度全部出さなければならぬ」

ジェイ・ザルゴが麻袋の中から本を出してテーブルの上に積み始めた。わたしは扉を後ろ手に閉めて、彼の作業を手伝おうとした。その時だった。

タツ、タツ、タツ、タツ。

昨日わたしを恐怖に陥れたあの音が、本同士がぶつかって立つぱたぱたという音の合間に、聞こえた。背中に冷気が広がるのを感じた。

わたしはジェイ・ザルゴに駆け寄って彼の肩を掴んだ。ジェイ・ザルゴがびくと肩を震わせて振り返った。

「な——」

わたしは唇に人差し指を当てて彼に目配せした。彼が不審そうに口を閉じると、部屋はあの何かを叩くような奇妙な音で満ちた。

タツ、タツ、タツ。タツ、タツ、タツ。

ジェイ・ザルゴがこちらこちらへ頭を振り向けた。どうやら、この音はわたしの白昼夢ではなかったようだ。

「なんだ、これは？」

ジェイ・ザルゴが声を潜めて尋ねた。

「分からない。昨日も聞こえたの。テルドリンを呼びに行ったら聞こえなくなっていて。探したけど、何もなかった」

ジェイ・ザルゴはゆっくりと何度か瞬きをした。彼は右手に魔力を蓄えて、忍び足で近くの樽に近づき、蓋をそっと開けて中を覗き込ん

だ。特に何も入っていないことを確認したらその隣の樽へ、そしてベッドサイドテーブルへと、昨日のテルドリンと同じ作業を忍び足で行った。部屋をぐるりと一周しても、怪しいものは何もなかった。その間ずっとあの叩くような音は続いていた。

最後に、彼は何を思ったか、床に片耳をつけて這いつくばった。彼は一瞬目を糸のように細めてから、真ん丸に見開いた。彼は、彼の後をずっとついて回っていたわたしを手招きした。腰を屈めると、ふわふわした手で後頭部を掴まれて下へ押さえ込まれ、わたしは彼と同じように床に横顔を押しつける形になった。

叩くような音が急に大きくなった。心臓が止まりそうになった。大きく聞こえるようになってはつきりと理解した。これは、足音だ。それも、二本足で歩く足音。人？ だとしたら、いったい誰だ？

後頭部を掴んでいるジェイ・ザルゴの手は温かく、独りで音を聞くよりはいくらか恐怖が紛れた。ジェイ・ザルゴはじつと足音に聞き入っていた。どのくらい時間が経った頃だろうか、足音は次第に遠ざかっていった。消えるのではなく、どこか遠くへ歩いていったのだった。

足音が完全に聞こえなくなると、ジェイ・ザルゴはわたしの後頭部から手を離して立ち上がった。

「分かったか？ 音は『下から』していた」

わたしは頷いた。急に足音が大きくなったのは、わたしたちが音源に近づいたためだ。

「下に何かの空間があるってこと？ この塔に地下があるなんて、ミラベル先生は教えてくれなかったけど」

「あえて伝える必要もないと思っっているんだ。ジェイ・ザルゴも教えてもらえなかったよ。でも、ウィンターホールド大学の地下には『ミツデン』という空間が広がっていると、以前本で読んだ。サルジラス先生もそれは事実だと言っていた」

なんだ。では、あれは、そのミツデンという場所を歩き回っている大学の誰かの足音だったのか。そう思っただけでわたしはほんの一瞬安心したが、次のジェイ・ザルゴの言葉で戦慄した。

「出入口は十年ほど前に封鎖されて誰も降りることはできないとも言っていた。大きな事故が起きて、それ以来立ち入り禁止になったのだ。実際、ジェイ・ザルゴは出入口だった場所を見つけたが、漆喰で固められていた。過去に誰かがこじ開けようとした形跡もなかった。だから、さっきのは恐らく、生きた人の足音ではない」

ジェイ・ザルゴは手近なところにあつた樽を、うんしょという掛け声と一緒に持ち上げた。腕をぶるぶる震わせながら、彼は言った。

「この下に何かないか？」

「何かって？」

「スイッチとか、その類のものだ、地下への入口を開けるための。あるいは、入口自体だ」

わたしは彼の突拍子もない言葉に驚いた。しかし、その真剣な眼差しを拒む理由も特になく、樽の下の埃を払って、石の床を観察した。怪しいものは何もなかった。ジェイ・ザルゴが残念そうにわたしを見下ろしていた。

「外れか。だが、まだ見るべき場所はある」

わたしたちは次々と家具をどけ、仕掛けがないか探していった。成果は得られなかった。

ジェイ・ザルゴは最後に、部屋の扉の向かい側にある、壁に固定された燭台に触れた。テルドリンとわたしはその燭台を使っていなかった。アーニエル・ゲイン先生が、ドゥーマーの遺跡の燭台を参考にして作った魔力で光る燭台を部屋に設置してくれたからだ。

ジェイ・ザルゴはその古い燭台を握って、鍵穴に入れた鍵を回すかのごとく、横向きに回した。壊れて外れてしまうかと思ったそれは、意外にも彼の掛けた力に忠実に従って回転した。同時に部屋のどこかで、石同士の擦れるような、ざりざりという音がした。

ジェイ・ザルゴは素早くしゃがみ、二つのベッドの下を覗き込んだ。「大当たりだ」

ジェイ・ザルゴは嬉しそうに跳び上がり、テルドリンのベッドの一方の端に取りついた。

「ベッドを移動させよう」

わたしは彼の勢いに押されるがまま、一緒にベッドを脇に寄せた。テルドリンのベッドの真下にあった床の一部が、綺麗な四角形に切り取られて少しだけ浮かび、部屋の扉の側に向かつて口を開くようにして傾いていた。床と床の間からかすかに覗いているのは、閉めきられていたこの部屋に初めて入った時と同じ、真っ暗闇だった。

ジェイ・ザルゴは暗闇の中に両手を差し入れ、床を持ち上げようとした。秘密の扉に取り付けられた金具が重い音を立てた。ジェイ・ザルゴの力だけでは持ち上げきれないらしく、彼が物欲しそうな顔でこちらを見るので、仕方なく手伝うことにした。

石の擦れる音と、扉の金具の久々に役目を果たせると言わんばかりの金切り声と共に、黴臭い淀んだ空気が部屋の中に流れ出てきた。その空気の出所は、扉の縁から続く石の階段の先に広がっている、暗闇だ。

禁じられた領域ミッデンへの秘密の入口がわたしたちの目の前にあった。



## 7. 二人きりの冒険

部屋に現れた地下空間への入口はそのままにして、わたしは、冒険の準備をするぞと張り切っているジェイ・ザルゴの部屋に来ていた。彼はベッドサイドテーブルから薬瓶やら巻物やらを出してポシェットに詰めている。

わたしはジェイ・ザルゴに尋ねた。

「本当に行くの？」

彼は大きく息を吸い、胸を膨らませた。

「当然だ。目の前に未知の領域への入口が現れてぼんやりしている研究者がどこにいる」

「未知じゃなくて、事故が起きて立ち入り禁止になった場所でしょう。せめて、先生に報告して一緒について来てもらったら？」

「ダメだ。ついて来るどころか、あの入口まで封鎖されてしまう」

「それってつまり、危ないからじゃないの？」

ジェイ・ザルゴは、必要なものを詰め終わったポシェットの蓋を閉じ、優越感の滲んだ半眼になった。

「オマエや他の学生にとっては危険かもしれない。だがジェイ・ザルゴにとっては違う。父上のお供で何度も古代遺跡に潜ったことがある。鍵開けも戦闘もお手の物だ」

だから先ほども手慣れた様子で部屋の中を調べていたのか。納得したが、それで完全に心配が要らなくなるというわけでもない。

「でも、独りで行くのはやっぱり危ないんじゃない？」

控えめに言ってみた。ジェイ・ザルゴは柔らかな毛に包まれた口をぽかんと開けた。

「オマエは来ないのか？」

……逆に、どうしてわたしが行くと思ったのか聞きたい。

「行かないよ。テルドリンがいてくれればいいけど、わたしたちだけでなんて」

ここ数ヶ月、成り行きで冒険者の真似事のようなことをしてきたから、興味がなくはない。だが今回は不安の方が勝る。恐らくこの部屋

が開かずの部屋になった原因であり、昨日からずっと怯えさせられていた音の出所であり、そして、何より、テルドリンがいないからだ。

ジェイ・ザルゴは白けた目つきをわたしに向けた。

「オマエはあのダンマーがいないと何もできないんだな。見限られたらどうするつもりだ」

腹がきりきりと痛んだ。わたしはテルドリンが傍にいてくれるからこそ安心して冒険者の真似事ができた。これまで色んな事件を解決してきたのも、彼の力ありきだった。

でも、彼がわたしを見限るなんて……いや、この時間になつても姿を現さないのは、わたしに愛想を尽かしてソルスセイムに帰ってしまったからなのか？

心の中で逡巡しているわたしを見捨てるように、ジェイ・ザルゴはぷいとそっぽを向いた。

「なら、ジェイ・ザルゴは独りで行く。オマエは弱虫だ。強い手下が帰ってくるのを待ってればいい。オマエたちが降りてくる頃には、ジェイ・ザルゴはミツデンの秘密の力を独り占めしている。ジェイ・ザルゴとオマエの実力差はますます開く」

「あ、待ってよ」

ジェイ・ザルゴが自室の扉を開けて出ていくのを慌てて追いかけた。

彼はわたしの部屋のミツデンへ続く暗闇の前に立ち、わたしを顧みた。フードの下の耳をぺたんと平たくして、黄緑色の目をぼんやりと光らせ、口をすぼめて軽く突き出し、口元から横に伸びるヒゲと、縞々の尻尾を不機嫌そうに下へ垂らしている。

明らかに、拗ねている。「彼女」も気に入らないことがあるとこんな表情でわたしを見つめた。そうなったら、もうお手上げだった。

「やっぱりわたしも行くよ」

そう宣言するなり、ジェイ・ザルゴは目を輝かせた。耳とヒゲと尻尾に瞬く間に元気が戻った。この嬉しそうな姿を見たいばかりに、いつも言いなりになってしまうのだ。

「秘密の力は早い者勝ちだ。オマエの取り分がなくても恨みつこなし

だぞ」

ジェイ・ザルゴは弾んだ声で言った。秘密の力とやらが何かよく分からないが、わたしだって使い魔召喚と治癒の魔法は問題なく使えるし、いざとなればジェイ・ザルゴを背負って逃げるくらいはできる。そうだ、いつそ、テルドリンがそばにいないでも大丈夫だと自分に証明してやろう。わたしは心を奮い立たせた。

|||||

わたしたちは、各々灯火の魔法を頭上に打ち上げて、そろそろと階段を降りた。一段降りる毎に、ひんやりした黴臭い空気に肌が浸かっていた。

階段下の通路に一足先に降り立ったジェイ・ザルゴが、灯火の魔法を正面に向かって撃った。魔法の光は、真つ直ぐに続く通路に光の輪を掛けていき、ほどなく、石煉瓦でできた壁で止まった。通路は斜め前へ折れ曲がり、その先は螺旋状の下り階段になっていた。

わたしはジェイ・ザルゴのすぐ後ろに控えた。耳に届くのはわたしたち自身の息遣いの音だけだ。わたしたち以外の気配など少しも感じられない。でも、この地下のどこかには、確かに誰かがいる。背筋がすうっと冷たくなった。もし見たこともないような怪物に出くわしたら、ジェイ・ザルゴを有無を言わさず引きずって逃げ帰ろうと思った。

階段に差し掛かると、下の方から白い光がぼんやり漏れてきた。わたしは身構えた。光源となるものを持った何者かがそこにいるのではないかと思ったからだ。だが、ジェイ・ザルゴは特に警戒する様子もなくすたすたと階段を降りていった。彼を追っていくと、階段の壁際に、灯火の魔法の固定された燭台があった。

ジェイ・ザルゴは少し立ち止まり、ふうむ、と声を漏らして、そのまま歩みを進めた。階段は随分と深くまで続いていた。おおよそ五階分くらいは下っただろうか。その間ずっと、灯火の魔法の燭台が一定の間隔で設置されていたので、わたしたちは灯明の魔法を使わなく

て済んだ。

最後の一段を降りたところには鉄格子の仕切りがあった。仕切りの中央に設けられた扉は向こう側へ大きく開いていた。

仕切りを通り抜けた先にあったのは、やや天井の低い、ぽつと見たところではわたしの部屋くらいの大サイズの空間だった。階段と同じように、灯火の魔法の燭台が部屋の四隅に置かれていた。左右にそれぞれ閉じた木の扉が一つずつあり、扉の脇には本棚や樽、机、底の抜けたベッドなどが並んでいた。部屋の中央には、大きいがかなり古い錬金台が置かれていた。空気は今まで以上に黴臭く、どこから外気が流れ込んでいるのか、かなり寒かった。

ジェイ・ザルゴが、ほわあ、と感嘆したように息を吐いて、本棚の一つに近づいていった。収納されている本に手を伸ばして、軽やかに抜き取った。途端に本棚からものすごい量の埃が湧いた。彼は本を取り落とし、苦しそうに咳き込みながら、目をぎゅっと閉じて、覚束ない足取りで部屋の奥側へ後退した。

「大丈夫？」

特に何かできるわけでもないが、わたしは彼に駆け寄った。ジェイ・ザルゴはふさふさの毛で覆われた両手で両目を押さえていた。両手の下と鼻から盛大に涙と鼻水が溢れていた。これは相当きついだろう。ついこの間直撃を受けたばかりだからよく分かる。

「うぐっ、げほっ、どれだけほったらかしにしていたんだ」

わたしはとりあえず彼の背中をさすってやった。ジェイ・ザルゴはさらなる後退を決め込んで、わたしを伴ってよたよたと部屋の奥へ後ろ歩きしていく。背中に硬くて細長いものが当たった。なんだろう？ 振り返って、思わず、ひゅつと鋭く息を呑んだ。

牢屋だった。わたしの腕の太さくらいの間隔で鉄格子が組まれていて、奥行きがあり、魔法の燭台の光が届ききっていない。その暗がりの中に、白いものが大量に散らばっていた。

慌てて左右を見ると、この部屋には牢屋が三つ、横並びに設けられていることが分かった。

知らず知らずのうちに、わたしはジェイ・ザルゴの背中をさすって

いた方の手で、彼の肩を強く掴んでしまっていた。ジェイ・ザルゴのぎゃつという叫び声が部屋に響いた。

「何するんだ！ 新手のイジメか!？」

「違うよ、後ろ、後ろ見て！」

ジェイ・ザルゴは振り返り、目を何度かしばしば瞬かせて眼下の骨の山を眺めてから、また、ぎゃつと叫んでわたしに飛びついた。

「骨が！ 骨がいつぱいだ！ なんだこれは!？」

そんなこと、わたしが聞きたい。あちらこちらに転がっている頭骨は、形状からしてどれも人の骨だ。

ジェイ・ザルゴは、わたしにしがみついたまましばらくせえはあと呼吸をしていた。若干息苦しかったが、彼の体は柔らかく温もりがあったので、わたしの恐怖はかなり和らいだ。やがて、彼は黄緑色の瞳に落ち着きを取り戻し、喉仏を上下させて体を離れた。

「ああ、そうだそうだ。ミッデンはかつてそういう場所だったと、書いてあったな、あの本に」

悲鳴を上げてわたしに飛びついた事実などまるでなかったような澄ました顔で、彼は手近な牢屋の扉に向かっていった。

「そういう場所って？」

ジェイ・ザルゴはわたしをちらりと見てから、牢屋の扉の前にうづくまった。

「一般大衆に見せられない、後ろ暗いことをするための場所だよ。死の危険のある人体実験や拷問なんかだ。もう何百年も昔の話だが」

ポシエットから取り出したロックピックでいじっていた扉の鍵がカチャリと音を立てると、ジェイ・ザルゴは牢屋の中へ抜き足差し足で入っていった。彼の服の間から上へ伸びた尻尾が、緊張のためか細かく震えていた。彼は手近な骨をブーツの爪先でそっと小突いた。骨は軽い音を立てて転がっただけで、飛び上がって彼に襲いかかることはなかった。ほ、と息をつく音が彼の口から漏れた。

「ここは捕らえた人たちを閉じ込めておく場所だったってこと？」

わたしの問いに、ジェイ・ザルゴは震えの止まった尻尾を得意げにくねらせた。

「ここだけではない。ミッデンにはこの手の場所がいくつもある。後ろ暗いことの一切を大学当局が禁止してからも、不良学生の溜まり場になっていた。凄惨な事件が起きたことも一度や二度ではない」

彼はうきうきとした調子で語った。そんな場所が自分たちの足元にあると知ったら、彼のような好事家は喜ぶかもしれないが、多くの人は不気味で仕方がないだろう。先生たちがミッデンについてわたしたちに話さず、出入口を封鎖していた理由が分かった気がした。

ジェイ・ザルゴは灯明の魔法と灯火の魔法を発動し、骨の山を両手でガサガサと掻き分けていた。彼は、おっ、と小さく呟いて、指先で骨の間に埋もれていた何かをつまみ出した。

ジェイ・ザルゴが引っ張り出した埃まみれのそれは、見たところ、胸の前で重ねて腰紐で縛るタイプの、修道士の服だった。かなり大柄な人物だったようで、ジェイ・ザルゴが頭と同じ位置まで引っ張り上げてもまだ裾が床についている。ジェイ・ザルゴは目を細めてその布を観察した後、無造作に床に落とした。足元にむわっと埃が立った。

「大した付呪ではない。しかも、すごく臭い」  
臭いのは当たり前だ。そもそも、よく足を踏み入れる気になったものだ。

ジェイ・ザルゴは一通り骨を引っ掻き回し終わると、軽く溜息をついて牢屋から出てきた。

「めぼしい物は見当たらないな」

彼がいそいそと隣の牢屋に向かおうとした、その時だった。

タツ、タツ、タツ、タツ。

紛れもない、あの足音だ。わたしたちから見て右側の扉の向こうから聞こえている。両腕から耳の後ろまで一気に鳥肌が立った。ジェイ・ザルゴのフードの耳のあたりがぴくりと動いた。彼はわたしに目配せして、両手に魔力を蓄えた。わたしは唾を飲み、使い魔召喚の魔法の準備をした。

扉が軋んで、わたしたちの側に開いた。

人の骨、だった。わたしたちの背後の牢屋に転がっているものほどれも五体がバラバラになっているが、こちらはきちんとしてりし日の姿

を保っている。ただ、それ自体が当然のように自立し、剣と盾を持って歩いていることは、普通では有り得ない。

クリーチャーの一種である、スケルトンだ。そうか、骨ばかりの軽い足で歩いていたから、あんな足音がしたのか。

ジェイ・ザルゴが、わっと叫んだ。彼の両手から火炎の魔法が噴き出し、スケルトンを直撃した。わたしも使い魔を召喚して援護した。スケルトンは出会い頭に二つの攻撃を一挙に受け、あえなく崩れ落ちた。後には、牢屋の骨と同じようにはらばらになったスケルトンの骨が散らばった。

わたしは安堵した。ただのスケルトンにここまで怯えていたなんて、テルドリンが知ったら大笑いするだろう。もう大丈夫だ。スケルトンくらいだったら、ジェイ・ザルゴとわたしで倒せる。

ふと、召喚した使い魔がいなくなってしまったことに気づいた。扉の外へ出たのだろうか？ わたしが外をひよいと覗いた時、使い魔の悲しげな断末魔の遠吠えが聞こえてきた。

扉からは人一人分ほどの幅の通路が真っ直ぐに続き、その果てに、薄明るい部屋があった。かすかな明かりの中に浮かび上がっているのは――骨、骨、骨、骨。数え切れないくらい沢山のスケルトン。これらの暗い眼窩は全て、今しがた消失させた使い魔が元来た方角、つまり、わたしの方を、じっと見つめていた。

咄嗟に扉を閉めた。冷や汗が全身に湧いた。あんなに沢山いるのであればまた話は別だ。ジェイ・ザルゴを連れて地上へ逃げよう。

「こつちだー！」

わたしと一緒に扉の外を覗いていたジェイ・ザルゴが、わたしの手を掴んだ。わたしは彼に引っ張られて、地上へ繋がる階段、ではなく、扉の開いている牢屋の中へ飛び入った。彼は牢屋の扉をブーツで蹴って閉め、骨の山の中にあつた黒い修道服を取り上げた。続けてわたしを牢屋の奥の暗がり押しやり、黴臭い床に横たわらせ、修道服を自分の背中後ろに広げて、わたしに覆い被さった。視界が真っ暗になった。修道服の古い埃の臭いが鼻をついた。

タツタツタツという足音が、石の床を伝って聞こえてきた。ほ

どなく、あの木の扉が軋んで開いた。足音がますます増えて、大きくなった。それとともに、彼らの関節が歪に触れ合うごろごろという音もそこらじゅうでした。部屋の中がスケルトンで溢れているのだ。彼らはわたしたちを探している。

ジェイ・ザルゴの心臓がバクバクと鼓動しているのが、互いの服越しに伝わってきた。普段はこのうえなく柔らかくしなやかであろう彼の体は、恐怖のために硬くなっていった。わたしは気が気でなかった。スケルトンの聴覚が心臓の音まで聴き取れるとしたら。彼らの視覚が暗がりの微妙な違和感まで感じ取れるとしたら。はたまた、ジェイ・ザルゴの尻尾が修道服の隙間から突き出ていたら。わたしたちは、終わりだ。

何時間もそうしてじっとしていた気がした。スケルトンたちの足音が徐々にまばらになっていった。耳を澄ますと、どこか別の場所へ向かっていくのか、一体、また一体と、足音と関節の触れ合う音が遠ざかった。やがて、最後の音が遠ざかり、部屋は静けさを取り戻した。それからまたさらにだいたい経った頃、ジェイ・ザルゴがわたしの上で、もそもそと体を動かした。彼は少しだけ修道士の服をめくった。黒い修道服の真っ暗闇に慣れた目には十二分に眩しすぎる魔法の燭台の光が差し込んできた。

部屋の中には誰もいなかった。スケルトンがやって来た方の木の扉は開け放たれていた。

ジェイ・ザルゴが修道士の服をはいだ。彼は尻尾を背中に巻きつけ、そろりそろりと牢屋の扉へ近づいていき、扉を開けた。結構な音がしたが、それに反応して何者かが近づいてくる気配はなかった。彼はその調子で開け放たれた木の扉ににじり寄り、顔を外に出した。尻尾が背中から離れて、くねった。彼はわたしに向かってせかせかと手招きをした。

「いなくなっている。今がチャンスだ」

彼に歩み寄ると、手首を掴まれて、扉の外の通路へ連れ出された。改めて見てみれば、正面の他、右にも、すぐに急な階段になっている通路があった。だが、どちらにも今のところ、スケルトンを含む敵の



姿は見当たらない。

ジェイ・ザルゴは正面の通路を選び、わたしの手首を掴んだまま歩き出した。二人分のブーツを履いた足音が通路に響きわたった。わたしは不安になって後ろを振り返った。

「どこに行ったのかな、あのスケルトンたち」

小声で尋ねると、ジェイ・ザルゴは、してやったりと言わんばかりの浮かれた声色で答えた。

「反対側の扉へ向かったんだ。まさか、鍵の掛かっているはずの牢屋の中に隠れているとは思わなかっただろう」

「そう、なの？ でも、あの扉の先が行き止まりだったらすぐ戻ってくるでしょう。そしたら帰り道を塞がれるよ」

「オマエは心配性だな。問題ない、まだ手はある。それより、ジェイ・ザルゴはこの先がとても怪しいと思っている」

ジェイ・ザルゴが話すのに合わせて、フードの端に見え隠れするヒゲが嬉しそうに跳ねた。

スケルトンたちのいた部屋は、天井が高い代わりに床面がやや低く、通路から下り階段で繋がっていた。部屋の半分ほどはさらに掘り下げられていて、底に部位の揃っていない骨がいくつか散らばっていた。部屋の中央には例のごとく灯明の魔法の燭台が置かれ、あちらこちらの壁の隙間からは、土を抱えた木の根が張り出し、表面にキノコが生えていた。

通路から向かって右斜め奥に、さらに扉があった。ジェイ・ザルゴはわたしの手を引いたまま、扉を少しだけ開いて、中をそうつと覗き見た。ややあって、彼の全身に大きな震えが走った。彼は、わたしに顔を寄せて、興奮気味にまくし立てた。

「やっぱり！ あったぞ!! 秘密の力の源だ!!」

## 8. アビシアンの海賊王

ジェイ・ザルゴが開け放った扉の先は、背後のスケルトンたちの部屋の明かりと、奥の方にあるアーチ型の通路に一本だけ立っている灯明の魔法の燭台とで間接的に照らされているのみの、やや暗い、円形の部屋だった。中央の台の上に、ごつごつした装飾の黒い籠手が飾られていた。籠手の掌部分は何やら橙色に光っていた。

ジェイ・ザルゴはわたしの手を離し、頭上に灯火の魔法を打ち上げると、部屋に繋がる階段を降りて、黒い籠手に近づいていった。彼ははじめのうち、籠手を台から外そうとしていた。だがいくら全力で引っ張っても、横へ捻ろうとしても、あるいは台ごと押し倒そうとしても、びくともしなかった。

「やはり動かすことはできないか」

ジェイ・ザルゴはひとりごちた。彼は籠手が置いてある台に古い蠟燭がまだ残っていることに気づき、火炎の魔法で火を点けた。蠟燭の黄色い光が台を下から照らし出し、歪な影を石の床の上に伸ばした。

わたしは彼の隣に追いついて尋ねた。

「これ、何？」

ジェイ・ザルゴは真剣な顔つきで答えた。

「ジェイ・ザルゴの推測では、ムンダスの外の世界に繋がっている『門』の一つだ。見たところデイドラ系統のようだから、オブリビオンに繋がっている可能性が高い」

ジェイ・ザルゴはポシエツトの蓋を開けて、中をまさぐり、握り拳を開いた。掌の上に大ききさも材質も違う指輪が四つ乗っていた。

「それは？」

「ウラッグ先生が居眠りをしている間に図書館からいただいたきた。この籠手の四本の指にぴったり嵌まりそうだ」

ジェイ・ザルゴは指輪の大きさと籠手の指の大きさを見比べて、まず小指に指輪を押し込んだ。

「どうしてそんなものが図書館にあったの？」

「そりゃあ、ミッデンで起きた事故の遺留品だからに決まっているだ

ろう」

続いて、薬指。

「それじゃ、十年前に起きた事故って」

「ここで起きたんだ。ジェイ・ザルゴたちのいるこの場所で」

中指。

「……その指輪、全部嵌めると何か起きるの？」

「恐ろくな。ジェイ・ザルゴの予想では、この指輪は——」

人差し指。

『門』の鍵だ」

四つの指輪が籠手の四本の指に全て収まったその瞬間。

中身の入っていないはずの籠手が、ひとりりで拳を握りしめた。と同時に、籠手と同じ高さの中空に、どこからともなく、四つの髑髏がふっと現れた。それらは、その場に浮かび上がったまま、互いを追いかけるように円を描いて回転し始めた。髑髏は籠手の前に立っていたわたしたちにぶつかるとかと思いきや、すり抜けた。肉の間を、冷たい空気が素通りしていくような感覚があった。

「うわっ!？」

わたしたちは慌てて後ずさった。

四つの髑髏は徐々に高く高く浮かび上がり、回転する速度を増していく。髑髏の軌跡は白い輪になって、一つ一つの判別がなくなっていた。しまいに、輪の内側に禍々しい紫色の光が生じ、籠手の向こう側の床の上にカツと落ちた。

紫色の光は、徐々に人の形を成した。最初はただのつぺりした影のようだったそれは、形が整つてくるとともに、わたしたちに判別できる色を、その表面に浮かび上がらせていった。

髑髏の輪はいつの間にかどこかに消え失せていた。その代わりに、籠手の向こう側には、頭に二本の角を生やし、顔面全体に禍々しい刺青を入れ、左脇に曲剣を差した、黒っぽい肌の男が立っていた。男はわたしたちを光を反射しない真っ黒な瞳で見て、にやりと口を大きく裂いて笑った。

「つまり、テメーらのおかげで、オレあまたムンダスの空気を吸えるよ

うになったってわけだ。で、ここはどこだ？」

その唇の間から覗いた歯と同じ、恐ろしくぎざぎざした声を、男は轟かせた。

これは、何か、すぐくまずい予感がする。逃げた方がいいのではないか。

わたしは隣のジェイ・ザルゴをちらりと見た。彼も同じようにわたしの顔色を窺おうとしていたらしく、目が合った。彼は、心許なさそうに緩んでいた口元をぎゅつと結び、黄緑色の両目を挑むように光らせて、肩を怒らせ、一歩前に出た。そして、しかめつらしい口調で、籠手の向こうの男に言い放った。

「ウインターホールド大学の地下だ、ドレモラ。オマエの主人は、この大魔法使いジェイ・ザルゴ。さあ、大人しくそこに跪け」

男は、眉を吊り上げて、ああ？ とドスの効いた声で唸った。

「なくに寝言を言ってやがる。オレに『主人』なんてふざけた奴あいねえよ。テメーの死んだお友達が勝手にここに縛りつけたただけ。元はアビシアンの海賊王ともあろうオレをな！」

男が一言ひとことを発する毎に、ジェイ・ザルゴの尻尾の毛はぞわぞわと逆立っていった。彼はすっかり膨張してしまった尻尾を背中にくつつけて、言い返した。

「そうだ、オマエはここに呪縛されている。だから、オマエを呼び出したジェイ・ザルゴの言うことを聞くしかないんだ！」

男は、小さな両目を丸くして、それから、豪快な笑い声を上げた。「随分と威勢のいいカジートだな、おい。いいぜ、気に入った。取引をしようじゃねえか——テメー、オレの呪縛を解け。そしたら、オレのすんげエお宝をテメーにくれてやって、黙っておさらばしてやる」

「お宝？」

ジェイ・ザルゴのフードの耳の部分が、ぴよこんと動いた。尻尾の緊張が少し解け、によるによる動き始めた。真面目に考え始めてしまっている。わたしは彼に話しかけた。

「ジェイ・ザルゴ、言うことを聞いちゃダメ。騙すつもりに決まっている」

男は鼻で笑い飛ばした。

「へッ。そんな卑怯なこたあしねえよ。オレあ筋を通すタイプだ。それに、一刻も早く海で暴れ回りたくてうずうずしてる」

「ジェイ・ザルゴ——」

なおも説得しようとしたわたしを、ジェイ・ザルゴは睨んだ。

「取引を持ちかけられたのはジェイ・ザルゴだ。オマエは関係ない。逃げたければ逃げればいい。そうしたら、お宝は全部ジェイ・ザルゴのものだ」

ジェイ・ザルゴは期待に満ちた声で男に聞いた。

「お宝って、神話紀の魔法書か？ 死んでも蘇る魔法のマントか？ 常に透明化できる指輪か？」

男は、なんだそりや？ と首を傾げた。

「金銀財宝に決まってるんだろ。この近くで帝国のガレオン船を沈めた時、船に積みきれなくて隠しておいたヤツだ。そりやもう、一生遊んで暮らせるくらいはあるぜ」

ジェイ・ザルゴの尻尾が、だらんと垂れた。彼はきっぱり宣言した。「断る。ジェイ・ザルゴは金銀財宝に興味はない」

男は破顔した。

「そうかい。なら仕方ねえなあ」

「そうだ。諦めてそこに直れ、ドレモラ」

わたしが胸を撫で下ろした、その矢先のことだった。男は目にも留まらぬ速さで曲剣を抜き、間合いを詰め、刃の先をジェイ・ザルゴの眉間に突きつけた。

「はつきり言ってなかったが」

男は残忍な笑いを浮かべた。

「呪縛が弱ってるから、テメーの命令を聞く必要はねえんだよ。ヤツちまえば済む話だ」

ジェイ・ザルゴは、一步、二歩と後ずさった。わたしは彼の腕を掴み、背後の階段に向かって走り出した。だが、ジェイ・ザルゴの足が覚束ない。階段の途中で、彼が、あつと一声上げた。彼の腕がわたしの手から離れた。

ジェイ・ザルゴは、スケルトンの部屋に入るほんの手前で倒れ伏していた。その背中を、男が足で床に押さえつけた。男はにやにや笑って腰を屈め、ジェイ・ザルゴが必死で横へ振り向けた顔の真ん前に、曲剣をちらつかせた。

「ずつと毛皮の敷物が欲しいと思ってたんだよなあ。テメーは若エし、色ツヤがいい。うってつけだ」

ジェイ・ザルゴは手足をばたつかせたが、男の足の下からは抜け出すことができなかった。

わたしは立ち竦んだ。何も、できない。この男がいつジェイ・ザルゴに手を下すか分からない。割って入ろうとした瞬間にやられるかもしれない。あるいはわたしを先に刺すかもしれない。ダメだ。やはり、ミツデンに降りるのは危険だったのだ。ジェイ・ザルゴをあの時、意地でも止めていればよかった。

う、うう、とくぐもった声がジェイ・ザルゴの口から漏れた。泣いている。その泣き声は、「彼女」とよく似ていた。「彼女」は滅多に泣くことはなかった。けれど、わたしは「彼女」が、本当はとても怖がりで人一倍寂しがり屋なのをよく知っていた。——「彼女」を、いや、ジェイ・ザルゴを守らなければならない。わたしの命に代えても。

「あなたを召喚したのは、わたしだ。だからわたしを殺さなきゃ意味がない」

わたしは情けないほど裏返った声で言った。男は顔を上げ、思いきり馬鹿にした表情でせせら笑った。

「あ？　なくに言ってるんだ？　さつきコイツが自慢してただろーが、オレを呼び出したのは自分だって」

わたしは精一杯声を張り上げた。

「じゃあ、ジェイ・ザルゴが指輪を嵌める瞬間を見たの？」

「は、そりゃあ見てねえけどな。テメーらの態度から分かんだろうが」  
「ジェイ・ザルゴは妄想癖が強いから、なんでも自分がやったって思い込むの」

男はわたしの言うことなど全然信じていない。呆れ顔で曲剣の背を自らの肩に乗せた。

「どつちにしろ二人とも殺すつもりなんだ。大した違いはねえよ」

その瞬間、わたしは男の後ろの円形の部屋の中に使い魔を召喚した。同時に、男に全力で体当たりを仕掛けた。わたしは男の空いている左腕であえなく首根っこを鷲掴まれたが、使い魔の方は男の脛に噛みついた。

「いてエっ！ 何すんだ、この！」

男は、ジェイ・ザルゴを押しえつけていた足を後ろへ踏み出し、曲剣を振り回した。キャインと鳴いて使い魔が消えた。その隙に、ジェイ・ザルゴは這いつくばって、男の下から逃れていた。

男は忌々しげな唸り声を上げ、わたしに向かって曲剣を振り上げた。

大丈夫だ。痛くても、いつかは終わる。わたしは、父と……たぶん、「彼女」と同じ場所に行ける。

温かな空気が頬を掠めた。温かい、というか、すさまじく熱かった。それはさまざまに赤っぽい色をしていて、わたしの首を掴んでいる男の上半身を、振り上げた曲剣ごと燃やしていた。苦痛に歪み、のけぞった男の姿がうつすらとその向こう側に見えていた。

誰かのブーツの音が背後から聞こえた。頼もしい重みを感じさせながら、無駄のない、素早い足捌き。磨きぬかれた剣を鞘から抜く音。燃える男の右脇腹から左肩にかけて、銀色の光が走った。光の後を追うように、赤黒い液体が男の体から噴き出した。首の締めつけが、一瞬だけ強くなり、すぐに緩んだ。ぞっとするような叫び声が炎の向こうから上がった。男は最期の力を振り絞り、曲剣を振り下ろした。それを受け止めたのは、奇天烈な姿形をした赤茶色の人物が掲げる、白っぽい盾だった。

男がその場にどさりと崩れ落ちた。まだその左手の縛めに支配されていたわたしは一緒になって尻餅をつき、男の腕を辿ってきた炎に危うく顔から飲まれてしまうところだったが、赤茶色の人物が男の指を素早く取り払い、わたしの両脇を掴んで後ろへ引きずってくれたので、事なきを得た。

「間一髪だったな」

聞き慣れたかすれ声が胸に沁み入った。

|||||

人心地ついて周りを見渡せる余裕ができると、ミツデンに降りてきたのはテルドリンだけではないことが分かった。ミラベル先生、トルフデイル先生、フアラルダ先生、コレット先生、オンマンド、その他にも学生や研究生が何人かと、確か、アンカノとかいう、サルモールから派遣されてきたハイエルフ。

コレット先生が、このまま二度と元の顔に戻らないのではないかと思うくらい恐怖と疲労で引きつった顔で駆け寄ってきた。

「なんてこと！　あなた、髪の毛がチリチリよ。ああっ、鼻の頭も火傷してる。早く治さなきゃ痕になっちゃうわ。……ちよつとあんた、この子から離れなさいよ！」

わたしは、床に腰を下ろした状態で、ジェイ・ザルゴに抱きつかれていた。彼はわたしの肩に顔を埋めて、えぐえぐと声を漏らしていた。ついでに涙と鼻水と涎も漏らしているので、そのあたりが湿っていて、少し気持ち悪かった。だが、それ以外に関しては、ジェイ・ザルゴの体は全体的にふさふさふわふわしているので、むしろ心地良かった。

わたしはジェイ・ザルゴを引き剥がそうとするコレット先生に慌てて言った。

「もうちよつと落ち着くまでこのままにしてあげてください。わたし、自分で治せますから」

片手を鼻の頭に当て、もう片手を元通り、ジェイ・ザルゴの背中に回した。先生の言った通りだ、鼻の頭が水ぶくれになっている。わたしは治癒の念を込めた魔力を鼻の頭に流し入れた。

そう、そうなの？　本当に大丈夫かしら？　と心配そうに呟きながら、コレット先生は引き下がった。わたしは若干の後ろめたさを覚えながら微笑んだ。

コレット先生と入れ替わるように、ミラベル先生がわたしの横に膝



をついた。何が始まるのかとどきどきしていたら、彼女はポシエットの中から小さな壺を出し、包みを解いて、中身の乳白色の塗り薬を差し出した。

「塗りなさい。よく効きます」

わたしは神妙な顔で頷き、塗り薬を指に取った。塗り薬は滑らかなで、少しぴりぴりしていて、鼻の頭に塗るとつんと奥まで通り抜けていく感じがした。

ミラベル先生はわたしとわたしに抱きついていてるジェイ・ザルゴを、気の抜けたような表情で見つめていた。わたしが塗り薬の刺激で鼻をむずむずさせ、くしゃみをし終わると、彼女は言った。

「あなたの部屋にあんなものがあったとは想定外でした。私がこの大学の歴史を甘く見ていたせいで、あなたがたを危険に晒してしまいました。申し訳なく思います」

先生は深々と頭を下げた。わたしは驚いて、そんなことをしなくても、と声を掛けようとしたが、その時には、先生は頭を上げ、とても厳しい、いつもの彼女に戻っていた。

「しかし。あなたたちはまだ魔法使いとしては修行中の身です。どんなに些細に見えることでも自分たちだけでどうにかしようとは思わずに、教授の誰かに相談してください。そうでないと、今夜みたいに死にかけることになります。……分かりましたか？」

わたしは、はい、としおらしく返事をした。ジェイ・ザルゴもぐすぐす言う合間に、分かった、と不貞腐れた声で呟いた。

ミラベル先生は、本当に分かっているのかとも言いたげな深い溜息をついた。

「大学へ戻りましょう。死体の臭いがひどくなってきました。上も片付けなければいけません」

男の死体はかなり無残な状態になっていて、目に入れたくなかった。実際は異形の怪物だとはいえ、角も何も分からなくなった状態では、ただの人の死体と変わらない。ところで、上を片付けるって、どういうことだろうか？

わたしはジェイ・ザルゴに立ち上がるよう励ました。ジェイ・ザル

ゴは、立ち上がるには立ち上がったものの、わたしの横にべったりくっついて離れなかった。

「すっかり懐かれちゃったね」

ミラベル先生を先頭にどやどやと戻っていく一行の最後で、オンマンドが待つてくれていた。

「うん。なんだかよく分からないけど、疲れたんだと思う。ずっと頑張ってたから」

わたしがそう答えるなり、ジェイ・ザルゴはごろごろと喉を鳴らしてわたしの肩に頬を擦りつけた。

しんがりを務めるために後ろに控えていたテルドリンが、呆れ返った声で言った。

「頑張ったも何も、全部身から出た錆じゃないか。私がもう少し遅ければどうなっていたことか。しかも、元凶のそいつじゃなく、お前が先に殺されていたんだぞ」

頑張っていた、というのは今日のことだけを指したわけではないのだが、説明するのは面倒臭いのでやめておこう。

「ジェイ・ザルゴが全部悪いわけじゃないよ。わたしもちゃんとジェイ・ザルゴを引き留められなかったの。テルドリンがいなくてもどうにかしてやるぞって、無駄に意気込んでやって」

テルドリンははつとしたように顎を引き、首を横に振った。

「すまなかった。そもそも、私がつと早く帰っていれば良かったんだな。あるいは、あの出入口のことを正直に伝えておけば良かった」

わたしは目を丸くした。テルドリンはどうやらあの秘密の出入口の存在をわたしたちよりも先に把握していたらしい。

「どうして言ってくれなかったの？」

「お前をあれ以上怖がらせたくなかった。今夜にでもトルフデイルに伝えようと思っていただけだ」

だから、食堂の前であの時、わたしを部屋から遠ざけるようなことを言ったのか。少し寂しくなった。テルドリンのことは、とても頼りになる仲間だと思っている。けれどもテルドリンから見たわたしはそうではないのだ。今のわたしの体たらくでは無理もないけれど。

わたしは寂しさを押し込めて言った。

「何か困ったことがあったら隠さないでちゃんと行ってよ。わたしに  
関わりがあることもそうだけど、その、他のことも、良ければ相談に  
乗るから。わたし、あなたが思ってるより、ずっと大人だよ」

テルドリンは何拍かの間、わたしを静かに見下ろしていた。それか  
ら、ふっと笑い声を漏らした。

「ああ。これからはそうするよ。勝手に歩き回られて死なれたりした  
ら、後悔してもしきれんからな」

子供扱いをやめる気は一向にないようだ。まあ、わたしの気持ち  
が少しでも伝わっているのならそれでいい。気を取り直して、話題を  
変えることにした。

「でも、とにかく、さつきはありがとう。あの時あなたが火炎の魔法を  
使ってくれなければ、今頃天国にいたかも。助かったよ」

テルドリンは首を傾げた。

「私が駆けつけた時には既にあの男は燃えていたが。お前の一か八か  
の危なっかしい魔法が当たったんじゃないかなかったのか？ 普通の火炎  
の魔法では、あそこまで盛大に燃えないぞ」

わたしは、肩に頬を埋めているジェイ・ザルゴに目をやった。ジェ  
イ・ザルゴは、わたしたちが立ち止まって話し始めたのをいいことに、  
わたしに全体重を預けて、立ったまま幸せそうに眠っていた。

|||||

わたしの部屋はひどい有様になっていた。ベッド二つはバラバラ  
になり、他の家具も刀傷や焼け焦げた跡がつき、スケルトンの残骸が  
そこらじゅうに散らばっていた。テーブルに置いてあった本の一部  
も被害を受けていた。部屋の外の廊下も負けず劣らず、スケルトンの  
残骸と各種魔法の痕跡で塗れていた。スケルトンたちがあの時どこ  
へ行ったか、ようやく理解した。

ジェイ・ザルゴとわたしは、指輪を盗んだ咎と、本を使い物になら  
なくした咎で、後日、ウラツグ先生から拳骨を五発ほどお見舞いされ

ることになった。

テルドリンが夜遅くになっても帰ってこなかったのは、別に名残惜しいとか、わたしの世話を焼くのが面倒臭くなったとかではなく、件の用事からの帰り際に、偶然スノー・サーベルキャットの群れに襲われた漁師を助け、ウインターホールドの町まで送っていたからだという。結局その用事がなんだったのか、彼が語ることはなかった。

語らないと言えば、ミラベル先生やトルフデイル先生もだ。わたしの部屋になんらかの「歴史」があるのは分かったが、それ以上のことは教えてくれない。だが、それでも他に入れる部屋もなし、寮の出入口に近くて寝坊しても授業に間に合って便利なので、今のところはテルドリンと二人でこの部屋を使い続けるつもりでいる。地下の牢屋付きの部屋との境にある鉄格子の仕切りに鍵を掛け、出入口も漆喰で念入りに塞いだので、妙な足音に悩まされることも今後はないだろう。

……と、部屋でこんなことを日記に書いていたら、扉をノックする音が聞こえた。扉を少し開けるなり、ふわふわの毛に覆われた顔がその間から突き出した。

「よかった、部屋にいたか。あのな、サルジアス先生に頼まれて、今から少し町に出てくるんだ。今日は休みか？　だったら一緒に遊びに行かないか？　今日は珍しく晴れているから、きつと気持ちがいいぞ。ジェイ・ザルゴの毛並みにもさらにツヤが出るに違いない」

最初の数日間のつんけんした態度はいつたいたいなんだったのかと思うほど、ジェイ・ザルゴはわたしに素直な友情を向けてくれている。相変わらず自信たっぷりなところは変わらないが、そこが余計にかわいらしさに拍車を掛けていたりもする。

わたしが頷くと、ジェイ・ザルゴは顔を綻ばせた。

「すぐ準備してくる。あ、オンマンドやブレリナも誘うか？」

「うん。わたし、声を掛けてくるよ」

ジェイ・ザルゴは鼻歌を歌いながら隣の部屋に入っていった。毛皮の寝床（ベッドの予備がなくなったので、やむをえず使ってもらっている）の上で、片手で腕立て伏せをしていたテルドリンがむくりと起

き上がった。

「外では何があるか分からないからな。邪魔にならないようについていく」

わたしは微笑んだ。今日も、いい一日になりそうだ。

—了—

## 4—1—Interlude： ジエイ・ザルゴの実験

### ジエイ・ザルゴの実験

フローズン・ハース亭の扉を開けた途端、男性の上ずった声が耳に飛び込んできた。

「だから、あんたらに来てほしいって言ったのに！」

中央の暖炉の前で、憔悴した表情のノルドの男性が、大きな角の付いた兜を脇に抱えた衛兵に訴えていた。昼時のフローズン・ハース亭の広間は昼食目当ての客で混雑していたが、訴えている方の連れと思われる男性たちが近くの長椅子で事の次第を見守っている他は、皆面倒事に巻き込まれまいと息を潜めつつ、それとなく聞き耳を立てているのが分かった。

衛兵が困り果てた様子で肩をすくめた。

「お前の賭けに付き合えるほど人数に余裕がなかったんだ」

男性は衛兵を睨みつけた。

「俺はドーンスターで十年鍛えた。その俺が間違いないと踏んだんだぞ」

「十年くらいで音を上げて逃げ帰ってくる奴の鼻が利くとは思えなかったな」

「音を上げちゃいない。山師どもにはした金でこき使われるのにうんざりしただけだ」

「この町で働くよりずっと割がいいと言ってたじゃないか」

ノルドの男性は、衛兵にずいといと怒りの形相を近づけた。

「十年も前の揚げ足を取ってる暇があるなら、今すぐ俺についてこられるよな？」

「衛兵隊長が簡単に町を離れるわけにはいかない」

「それなら適当な衛兵をよこせ」

「ちようどあちこちで厄介事が起きていて、出払ってるんだよ」

衛兵は慥然とした表情で首を横に振った。そこで初めて、この宿屋

兼酒場の新たな客に気付いたらしく、こちらを振り返った。

「あんたは、確かあの時の」

衛兵は、わたし、ではなく、わたしの隣に立っている人物に呼びかけた。奇妙な形の兜と赤いマスクで顔を隙間なく覆い隠し、赤茶色の服の上に、何かの生物の鱗と殻で作った鎧を身に着けた男。彼は、自らが酒場の客たちの注目の的となっていることに気圧される様子もなく、ブーツで石の床を踏みしめ、かすれた声で衛兵に応じた。

「ああ。テルドリン・セロだ。何を揉めているんだ？」

衛兵は、今しがた騒いでいた男性を親指で示した。

「この男——ソルガーが所有している洞窟にスケルトンが潜んでたらしくてな。衛兵が付いていれば逃げ帰らずに済んだと文句を言うてる」

テルドリンは、ソルガーと呼ばれた男性に兜の正面を向け、呆れた様子で言った。

「衛兵は冒険ごっこのお供をするためにいるわけではない。それなりの金を払って傭兵を雇うのが常識だと思うが」

ソルガーは、突然話に加わることになった奇妙な見た目の人物に眉をひそめながら、反論した。

「あそこはただの洞窟じゃない。鉄の鉱脈があった。ウインターホルドの領内で唯一の鉱山だ。衛兵の一人や二人、派遣するのが筋だ」

衛兵がぼそりと呟いた。

「鉱脈があったってのも眉唾ものだがな」

「なんだと！」

テルドリンはさつと片手を差し出して、衛兵に掴みかからんばかりのソルガーの注意を自らに引き寄せた。

「まあ、少し落ち着け。その洞窟だか鉱山だかはどこにある？」

ソルガーは憤った勢いそのまま答えた。

「南の街道沿いだ」

「ふむ。そいつは良くないな。旅人に被害が出るかもしれん」

テルドリンは思案するように腕組みをした。広間の空気がざわついた。

衛兵がテルドリンに切り出した。

「良かったら、あんたが代わりに行ってくれないか？ あんたの言う通り、万一のことがあったら大変だ」

テルドリンは、そこで不意に、わたしに声を掛けた。

「どうする？」

すっかり三人だけで話し込んでいたのに、なぜ急にわたしに。と思ったが、よく考えれば当然のことだ。わたしは、今度は自分の方に視線が集まってくることに居心地の悪さを感じながら、答えた。

「引き受けよう」

ソルガーと衛兵は揃って怪訝そうな顔をした。ソルガーが衛兵に尋ねた。

「そもそも、こいつらはなんなんだ？」

「テルドリンはこの前ヨナスを助けてくれた凄腕の剣士だ。アーチメイジの新しい護衛だったっけか？」

テルドリンは先日一人で外出した時にウィンターホルドの町の漁師を助けたと言っていた。この衛兵とはその際に知り合ったのだろう。

衛兵は、続けてわたしに視線を移し、ひとしきりうーんと唸ってかと言った。

「すまないが、お前には見覚えがないな。テルドリンの従者か何かか？」

わたしは、自分がウィンターホルド大学の学生であり、テルドリンはアーチメイジの護衛ではなくわたしの従者であることを、彼らと、ついでにその他の聴衆に向けて、説明する羽目になった。

|||||

ソルガーが所有するホイッスリング坑道までは、ウィンターホルドから南に延びる街道を辿って少し歩いていけば、特に迷うことなく到着するという話だった。ソルガーとその仲間たちをフローズン・ハース亭に置いて、テルドリンと二人で向かうことにした。



道程の半ばあたりで、ウインターホールドの町を出た時は辛うじて曇天止まりだった空から雪と冷気が吹きつけ始めた。鼻がむずむずした。大きくなくしゃみが一つ、隣のテルドリンをすり抜けて、その向こうのただっ広い雪原に吸い込まれていった。

「部屋からマントを持ってきた方が良かったんじゃないか？」

テルドリンが言った。

当初はフローズン・ハース亭で昼食を食べるだけのつもりだったため、わたしはマントや地図が入っているナツプザックを大学の自室に置いたままにしていた。自分の腕を抱いてさすり、鼻をすすつてから答えた。

「そんなに遠くないらしいし、誰かが襲われるかもしれないなら、できるだけ急いだ方がいいでしょう」

「このご時世にこんな人気のない道をほつつき歩いている奴は、それなりの腕があるか、護衛を連れてくるか、救いようなない馬鹿か、いずれかだ。一刻を争うほど深刻でもない」

わたしは驚いて尋ねた。

「じゃあ、どうしてさつきあんなことを言ったの？」

テルドリンが口を出さなければ、ホイツスリング坑道には他の任務から帰ってきた衛兵が派遣され、わたしたちは昼食にありつけていたはずだった。

テルドリンは生真面目な口調で答えた。

「町の連中に顔売るためだ。他の裕福な学生と違って、お前は勉強だけしていればいいというわけにはいかないだろう？ 私の方も、お前を大学の中で護衛しているだけでは商売上がったりだ。まさか、分かっていなかったんじゃないかな？」

テルドリンはわたしの従者であり、ウインターホールド大学に正式に所属していないので、大学の食堂には入れず、支給品も受け取れない。今のところは食堂の残り物や倉庫に放置された不用品を使ってやりくりしているようだが、足りなければ自費で賄うことになる。一方、わたしは大学の学生なのでその辺りの心配はしなくていいものの、まだ納めきれない大学の学費を徐々に納めていかなければな

らない。

わたしは、そのような事情を分かっていたいかなかったとまでは行かないが、最近色々と忙しかったので忘れていた。今日は主に、フローズン・ハース亭の食事を試してみようという思いつきに夢中になっていた。わたしの心の内は表情にもばつちり出ていたようだ。テルドリンはわざとらしくかぶりを振った。

「やれやれ。しつかりしてくれよ。お前、一応は私の主人なんだぞ」  
一応は、のところをもものすごく強調された。わたしは何も言い返すことができず、子供みたいにむすつとして口を軽く突き出し、止めていた足を再び動かし始めた。

二百年以上の時を生きている彼に比べると、わたしはいかにも未熟で頼りない。しかし、だからこそわざわざ彼を雇っているのだ。こんなふうには馬鹿にされるのは面白くないし、いつか愛想を尽かされてしまうのではないかと恐ろしくもなる。どうにかして、彼に主人としての威厳を示せないだろうか。

必死で考え込み、同級生のジェイ・ザルゴから、ちょうど頼まれていたことがあるのを思い出した。彼が開発した、接触したアンデッドに爆発による大ダメージを与える炎のマンントの巻物を、いつか実戦で試してほしいと、数日前に大学の食堂でポシエツトの中にねじ込まれたのだった。今回の敵はアンデッドの一種であるスケルトンだ。

わたしは、肩から提げているポシエツトの中身を確認した。件の巻物は少額のゴールドとともにポシエツトの中に入っていた。

ジェイ・ザルゴは、少し自信過剰なところはあがあるが、学年で一、二を争う優等生であり、特に巻物への付呪の研究においては以前から名を知られているらしい。

これは、渡りに船と表現する他ない。  
「臍を曲げたと思ったら、今度は何を笑っているんだ？ スイートロールの欠片でも見つけたか？」

テルドリンがからかってきた。わたしは澄ました表情を作った。  
「なんでもない。ねえ、今は別にいいけど、ホイッスリング坑道に着いたらふぎけるのはやめてよね」

テルドリンは、きよとんとわたしを見つめた後、可笑しそうに答えた。

「わざわざ命令されなくなつて、自然とそうなるだろうさ。何せ、お前をかばって戦うので精一杯になるからな」

勝手なことを言つていられるのも今のうちだ、とわたしは内心ほくそ笑んだ。

|||||

雪空の上にあつて見えない太陽がそろそろ傾き始めているであろう頃、ホイツスリング坑道と思われる洞窟の前までやってきた。洞窟周辺は静まり返つていて、スケルトンが徘徊していたり、人が倒れていたりする様子はなかった。

わたしはテルドリンを後ろに従え、ホイツスリング坑道の入り口に立った。坑道の表面は雪と氷で覆われていた。数歩先に、ソルガーたちが寝起きしていたと思われる空間が開けていた。壁に固定された松明と中央の焚き火はまだ燃えていた。焚き火の周りを囲むようにベッドロールが敷かれ、体に掛けるためのものであろう毛布が散乱していた。スケルトンの姿はなかった。

ソルガーたちの居住空間に、慎重に足を踏み入れた。左手にさらに坑道が続いていた。——その先から、ごろごろという音が響いていた。スケルトン特有の、本来そこにあるべき肉を失つたために、骨が直にこすれ合つて発される音だ。

テルドリンが左手に魔力を溜め、兜の丸いレンズをわたしに向けてた。始めていいか、と無言のうちに聞いているのだ。いつもなら、ここでわたしが領き、彼が炎の精霊を召喚しながら駆け出していく。だが、今回は違う。わたしは冷気が回つてかじかんだ手でジエイ・ザルゴの巻物を取り出した。

いったい何をするつもりだ、と問いかけるように、テルドリンが左手の指先をじれつたように動かした。わたしは両手で巻物を広げ、目の前に掲げた。巻物がすうっと焼け落ちるのと前後して、燃え盛る炎

の鎧が体の周りを覆った。紅蓮色の視界の中、テルドリンが啞然としているのが見えた。

「お前、それは……」

わたしはそこはかとなない優越感に浸りつつ、宣言した。

「今回はわたしが倒す。危ないから、テルドリンは後ろに下がってて」「おい、ちょっと待て！」

テルドリンが制止してきたのを無視して左手の坑道へ走り込んだ。壁掛け松明の光に照らされたスケルトンが一体。足音に気付いてこちらへ向かってきた。武器は剣。好都合だ。短剣や弓とは違って、攻撃を避けて至近距離に入り込みやすい。

わたしは脳天をかち割ろうと振り下ろされた剣をすんでのところであわした。スケルトンの腕が炎のマントに接触した。

何かが勢いよく爆発する音が耳を突き、突風が体の周りを駆け抜け、スケルトンが目の前から掻き消えた。

一瞬、何が起きたのか理解できなかった。からからと乾いた音がした方角へ目をやると、スケルトンの頭蓋骨が転がっていた。その他の骨も、雪混じりの地面に好き勝手に散らばっていた。ああ、爆発して大ダメージを与えるんだっけ。それなら爆発でスケルトンの体自体が弾け飛んでも全くおかしくはない。

振り返ると、後を追いかけてきたらしいテルドリンが、わたしの方をまっすぐ見据えて、その場で固まっていた。きつとあまりの威力に驚いているに違いない。

わたしはにっこりと笑って、勝ち誇った気分で胸を張り——ふと、体全体が妙に軽く、熱を持つていることに気付いた。テルドリンの鼻を明かして気分が良くなったために体の方もどことなく調子良く感じる、ということではなく、本当に体が軽くなって火照っているようなのだ。具体的には、肩からポシエットが掛かっているはずなのにその重みが全く感じられず、腰を締めつけていたベルトと、胴とベルトの間に差し入れてあった護身用のダガーの感触もなくなり、体全体のかじかんだ感覚が消えて、むしろ煮え湯に突っ込んでいるかのように熱くなっていた。

わたしは自分の体を見下ろした。ポシエツトとベルトとダガーが見当たらなかつた。そして、着ている見習いのローブが、盛大に燃えていた。

「……え？」

今度こそ、何が起きているのか本当に理解できなかつた。だが、ゆっくり考えている暇はなかつた。

「後ろー！」

テルドリンが叫んだ。わたしは身を翻した。スケルトンがもう一体、今度は斧を振りかぶっていた。

髪の毛の先が少し持つていかれた。だが狙い通り、スケルトンに炎のマントを当てることができた。

激しい痛みと熱気がわたしの全身を走り、同時に爆発音が生じた。スケルトンの体が弾け、わたしの体からも何かが、火の粉を散らしながら四方八方に吹き飛んでいった。無数の布の切れ端だった。部分的に焼け焦げたそれらはまるで雪のように、坑道の地面にひらひらと舞い落ちていった。

坑道の奥から骨のこすれる音が近づきつつあった。恐らく、今度のスケルトンもこの炎のマントで倒せるだろう。でも、わたしの方はどうなるのだろうか？ ——なんだか頭が燃えるように熱い。両耳のすぐそばではぱちぱちと音がする。焦げてはいけないものが焦げる匂いが鼻腔に入り込んでくる。

体の横を何かが通り過ぎた。わたしの眼前でオブリビオンの門がニルンの空間を引き裂き、中から炎の精霊が姿を現した。

「来いー！」

片腕をぎらついた感触の手袋で掴まれて、後ろ向きに引つ張られた。坑道の奥から現われたスケルトンと、炎の精霊の背中が遠ざかつていく。

先ほどの空間まで辿り着くと、乱暴に転がされ、頭のとっぺんを掌で掴まれて、地面に後頭部を押し付けられた。目を白黒させているうちに、腹の上に容赦なく跨られ、片方の肩を強い力で掴まれた。ヘンテコで時々かわいらしいとさえ思うこともあるテルドリンの兜に、焚

き火の光が暗く深い影を落としていた。咄嗟に悲鳴を上げそうになつた。

その矢先、わたしの顔全体に分厚くてごわごわした布のようなものが被せられ、その上から額や顔の周りを何度も叩かれた。訳も分からずされるがままに歯を噛み合わせて耐えた。やがて布が取り払われた。テルドリンはマスクの向こう側で微かに乱れた息を吐いた。

「消えたようだな。お前はここにいろ。残りを片づけてくる」

テルドリンはわたしの腹の上から素早く立ち上がり、坑道の奥へ駆けていった。間もなく、剣戟と骨の散らばる音が聞こえてきた。

炎のマントは、テルドリンがわたしの頭の炎を叩き消している間に効果が切れたらしい。どくどくと音を立てながらわたしの体内を巡っていた血が徐々に大人しくなっていた。それに合わせるように、坑道の奥の戦いの気配も消えた。

聞き慣れた足音が近づいてきた。

「終わったぞ」

奥からひよいと現われたテルドリンは、何かに小突かれたように軽くのけぞり、げんなりした声色で言った。

「まだそんな格好でいたのか」

言われて初めて自覚したのだが、わたしは炎のマントの爆発によって上下の衣服と革靴を全て失い、全裸になっていた。炎のマントと爆発の余波で体がまだ熱くて、身に纏っていたものが完全になくなっていることに気付かなかつたのだ。

わたしは起き上がって周囲を見回した。靴は何組か隅の方に置いてあつたが、不運なことに、衣服の類は見当たらなかつた。

「……どうしよう」

独り言のつもりだったのに、テルドリンは皮肉っぽい口調で話しかけてきた。

「そのまま町に帰ればいいんじゃないか？　大層な評判になるぞ、あの意味でな」

わたしはむっとして言い返した。

「馬鹿なこと言わないで。寒くて死んじゃうし、だいたい、恥ずかしい

よ」

テルドリンはわたしをじとつと見下ろし、腕を組んだ。

「私に対しては恥ずかしいと思わないのか？」

ああ、またやってしまった。旅芸人だった頃は、狭いテントの中で大勢の仲間と生活しており、仲間の目の前で裸になる程度のこととは日常茶飯事だった。気が緩むと彼の前でもつい同じことをしてしまい、こうして怒られるのだ。

恥ずかしいと思わないのか、か。先ほど、わたしの上に跨った彼が怖くなり、悲鳴を上げそうになったことを思い出す。あれが以前の仲間だったら、全く動じなかっただろう。気心が知れていて、わたしが瞬間的に想像したようなことは絶対にしないと分かっているからだ。だが、テルドリンは――。

どうにも決まりが悪くなって、わたしは慌てて傍に落ちていた毛布を拾い、一般的に隠すべきとされている部分を覆って、彼に見えないようにした。

テルドリンは満足げに頷いた。

「やればできるじゃないか」

続けて、彼はにやけた声で言った。

「その格好で夜中まで待っていれば、私が大学から着替えを取ってきてやるよ」

そんなことは承諾できないと分かっているくせに。わたしが彼を軽んじた拳句、見事なやらかしぶりを披露したから、意地の悪いことを言って仕返しがしたいらしい。

「嫌だよ。その間にまたスケルトンが出てきたらどうするの。それに、こんな目立つ場所じゃ、外からも何か入ってくるかも」

「さっきの巻物で倒せばいいだろう」

「焼け死んじやうってばー」

テルドリンは盛大な溜息をつき、背負っていたナツプザックを足元に下ろした。ごそごそ中を探って、彼自身が着ているものよりやや色が薄く生地も薄い上下の服と、簡素な腰紐をわたしに差し出した。

「貸してやる。その上に毛布を何枚か羽織って、そこらの靴を借りれ

ばいい。後で洗って返せよ」

皮肉屋で口うるさく意地悪な従者から一転、彼がキナレスの使いか何かに見えた。

「テルドリン、ありがとうー」

危うく彼に倒れかかってしまいそうな勢いで服と腰紐に飛びつき、早速袖を通した。香辛料のようなぴりりとした匂いが鼻をくすぐり、服と一緒に全身に纏わりついた。身長と体格に差があるので、丈が余ってしまい、あちこちがだぶついて、かなり不格好だ。それでも、全裸や毛布を巻き付けただけの状態よりはずっとマシだろう。

「変じゃないかな？」

だぶついている袖を手首まで押し上げて、聞いてみた。テルドリンからは、少し間を置いてから答えがあった。

「……まあ、かろうじて逮捕はされずに済むだろう」

ここからさらに二、三は皮肉やかからかいの言葉が出てくるかと思っただが、彼はすぐに話題を変えた。

「ところで、あの巻物はいったいどこで手に入れた？ まともな巻物は値が張るから、お前では到底手が出せないんじゃないかと思っただが、やはりとんだ欠陥品だったな」

なんだか説教が始まりそうな雰囲気だ。わたしは、なるべくあつさり流してくれるようにと願い、小さい声で答えた。

「ジェイ・ザルゴが作ったやつ、試してくれて言われて」

願いも空しく、テルドリンは呆れと憤りを露わにした。

「なに、あのカジートが作っただと。なぜそんなものを受け取って、ましてや使おうなどと思っただ？ お前をミッデンで死出の道連れにしたかけた男だぞ！」

わたしはしどろもどろに言い訳をした。

「いや、だって、ジェイ・ザルゴは巻物の分野ではかなり有名らしいよ？ 魔法の実力もわたしよりずっとすごいじゃない。テルドリンも見てたでしょう？」

テルドリンもジェイ・ザルゴとわたしの大学への入学試験に立ち会ったから、覚えているはずだ。最後には少し失敗していたけれど、



彼の實力には目を見張るものがあつた。

しかし、テルドリンは気にも留めず、不満げに鼻息を噴き出した。「学者どもの間でいくら持ち上げられていようが、信用できるとは思わないことだ。私ならむしろ不信感が湧くな。変人奇人揃いの連中に絶賛される者がまともであるわけがない。しかも、ブレトンやハイエルフではなく、カジートだぞ？ お前はどうせ、見た目が好みだからとかなんとかいう愚かな理由で信じきっているんだろうが——あの猫どもは、役に立つどころか害にしかならないものを作つては、言葉巧みに押し付けてくるんだ。例えば私が若い頃も——」

この後、坑道を最奥部まで見て回り、スケルトンが全ていなくなつたことと、わずかながら鉄鉱脈があることを確認し、ウインターホルドの町へ向かっている間中、テルドリンの説教と昔話は続いた。わたしは、大学に帰つたらすぐにジェイ・ザルゴを捕まえて、気が済むまで文句を言おうと胸に誓つた。

—了—

4—2：君の名は。

## 1. ブレリナ・マリオンの失敗

わたしがウインターホールド大学に入学して一ヶ月ほどが経った。初めの頃は大学構内の構造がよく分からなくて迷ったり、人の顔と名前が一致しなくてアーニエル先生をフィニス先生と呼んで怒られたりしていたが、そんな間違いももう犯さなくなった。ようやく慣れてきた、と言つていいのかもしれない。

ソルスセイムで数ヶ月前に雇い、それ以来行動を共にしている傭兵のテルドリン・セロは、大学構内に籠もりがちな毎日に嫌気が差してしまうかと思いきや、案外そうでもなさそうだった。わたしの魔法の訓練に付き合ったり他の学生や先生と交流したりして、それなりに満足しているようだ。さらに、ときどき大学やウインターホールドの町の人たちから頼まれ事をするため、外出する機会もある。そのたびに必ず何かしらの成果が上がるので、退屈はしないようだった。

わたしが朝食を食べ終えて部屋に戻ると、テルドリンは床に敷いた毛皮の寝床にキッチンの装備を並べて手入れをしていた。ちょうど最後の布拭きを終えたところらしく、片手に愛用のぼろ布を持って装備の前に跪いていた。彼は鎧を着込んだまま眠る代わりに、安全な場所では時折、ご自慢の防具を隅々まで点検する。ただし、顔の上半分を覆う兜だけはどんなときも絶対に外さない。だから、もう何ヶ月も一緒にいるのにわたしは彼の素顔を拝んだことがない。食事のときに赤いマスクの下から現れる灰色の肌を見なければ、彼がダンマーであることも忘れてしまいそうだ。

「今日はなんの講義があるんだ？」

テルドリンはてきぱきと鎧を身につけながら尋ねてきた。わたしはポシエットから授業の予定を書いた羊皮紙を取り出した。

「午前はファラルダ先生の破壊魔法の講義。夜はコレット先生から新しい回復魔法を教えてもらう予定」

「それなら、午後は丸々空いてるんだな？　これまで溜め込んできた

戦利品を町に売りに行かないか。ただでさえ部屋が狭いののに、場所を取って仕方ない」

確かに、ドゥーマーの鎧やら盾やらが部屋の隅にうず高く積み上がっているのは、その手前の床で寝起きしている彼にとつては死活問題だろう。ちよつとした拍子に山が崩れたら大変なことになる。

「そうだね。ビルナさんのところに売りに行こう。ついでにフロースン・ハースでご飯でも食べてくる？」

「ああ、そいつはいい。あそこのビーフシチューはなかなか旨い。ブラックブライア・ミードもたつぷり置いてあるしな」

大学の食堂で出される食事は安くて体を動かす栄養を摂るには十分だが、やはり安いなりの味がする。たまには贅沢をしたい。それに、テルドリンはこの機会をわたしよりもさらに喜んでるに違いない。彼は大学の正規の所属員ではないから、いつも寮のキッチンで食堂の余りの食材を使って自炊している。しかも、しばしば食べ足りない学生たちにゴールドと引き替えに分け与えているのだから。

わたしはベッドに腰掛け、テルドリンは毛皮の上に片膝を立てて座り、午後のために戦利品の荷造りを始めた。しばらく作業に没頭していたところ、部屋の扉をせっかちに叩く音がした。

「はい、どなたですか？」

ベッドから降りて部屋の扉を開く。外には同期の学生であるダンマーのブレリナ・マリオンが立っていた。驚いたことに、いつも美しく整えられていた彼女の髪の毛が今朝はぼさぼさに乱れ、目の下にはくつきりと黒いクマができている。

「お、おはよう、ブレリナ。どうしたの？　なんかやつれてるよ？」

のけぞり気味にそう指摘すると、ブレリナはわたしの両肩を力強く掴み、いつになく晴れやかな表情でわたしに笑いかけた。

「聞いて。新しい呪文が完成したの！　術をかけられた者の身体能力を一時的に超人並みにする呪文よ。あなたで試させてもらってもよろしい？」

そういえば、しばらくブレリナを見かけなかった。一昨日と昨日はアンカノ顧問主催の会議があるとかで臨時で授業がなくなつたので、

どこかに遊びに出かけているか、図書館で本でも読んでいるものと思っていたが。ずっと部屋に籠もって呪文を作っていたのか。

「ええ……大丈夫なの、その呪文？　この前の呪文では大変なことになったよね」

大学に入学したばかりの頃、彼女の呪文のせいで牛に変身してしまい、その後一週間くらいテルドリンにからかわれ続けたことは今でも密かに恨んでいる。

「大丈夫！　今度はきちんと理論に則って作ったから。少なくとも命に関わるようなことにはならないわ」

命に関わらないようなことにはなる可能性があるのか。わたしは彼女の矛先をずらせないか試みることにした。

「ジェイ・ザルゴに頼んだら？　彼も個性的な研究をしてるみたいだから、お互いに勉強になると思うよ」

その研究のせいで、わたしは危うく火だるまになるところだったわけだが。

「それがあの猫、大いびきをかいて寝ていてわたくしの声に気づかないの。オンマンドも留守みたい。でも、わたくしは今すぐこの呪文を試したいの。お願い、お金ならいくらでもあげるから、協力して」

わたしの肩にブレリナの指が食い込み、彼女の赤い目がギラギラと輝いた。金云々ではなく、うんと言わなければ解放してもらえなさそうな雰囲気だ。

「わ、分かった。お金のことは終わった後で話そう。それで、どこで呪文をかけるの？」

ブレリナはわたしの肩から手を離し、ベッドを指さした。

「この部屋で結構よ。ベッドに座って」

わたしは先ほどと同じようにベッドに腰掛けた。ブレリナがずかずかと部屋の中に入ってくる。

「あら、テルドリン。ごきげんよう」

ブレリナは、床に座り込んでいる彼に礼儀正しく挨拶をした。テルドリンは既に荷造りの手を止めて、わたしたちの様子を観察していたようだった。おはよう、と挨拶を返して、彼はからかうような笑いを

含んだ声でブレリナに言った。

「先日是最高の見世物をありがとう、ブレリナ嬢。今度は私の主人を筋骨隆々の大女にでもしてくれるのか？　もし本当にそうなれば、私としては非常に助かるんだがな」

あからさまな皮肉だ。しかしブレリナはよく言ったとばかりに大真面目に胸を張った。

「明察！　まさに筋力を増強するのが今回の呪文の効果よ。もっとも、肉体を直接変化させるのは危険だから、魔力を一時的に筋肉に組み替えて肉体に付呪するの」

彼女は懐から取り出した複雑な図式や文章の書かれた羊皮紙をわたしの膝に置き、それに目を走らせながら両手に魔力を集中させる。白、赤、青、黄、紫、緑、橙、黒など、さまざまな色の光が彼女の両手に集まり混ざり合っていく。こんなにたくさん色の踊れる魔法は見たことがない。わたしは、一年ほど前にシロディールの空に架かっていた美しい虹を思い出した。

視界が真っ白に染まった。そう思ったのは一瞬のことで、わたしの目はすぐに大学寮の一室を映し出した。

ベッドに腰かけているローブを着た人物に、ブレリナが、いかが!?　筋肉がついた感じがする!?　などと興奮がちに話しかけている。ローブの人物は心ここにあらずといった様子で、ブレリナの問いかけに答えず、自分の手を覗き込んだり胸や腰を触ったりして、それぞれしている。

……何かがおかしい。

わたしはまばたきをした。視界が先ほどまでより狭く、わずかにかすんでいるような気がする。身体の感じも違う。確かにブレリナの望み通り筋肉は付いたようだが、全身が重い。指先や口元が窮屈だ。下腹部のあたりに奇妙な違和感がある。毛皮の上に片膝を突いて座っているせいで、その違和感がさらに増している。

毛皮の上に、座っている？

わたしは自分の状態を確認するために身体を見下ろした。ところどころつぎはぎの当たった茶色い服の上に、何かの生き物の殻でき

ているらしい軽装鎧を身につけている。

わたしは信じられない気持ちで、放心したように両手をだらりと下げているローブの人物を凝視した。ローブの人物が、わたしの視線に気づいたのか、こちらへ顔を向けた。

そこには、わたしがいた。いつもは水鏡の中でわたしを見つめ返すだけの女が、目を皿のように丸くして、わたしを見下ろしていた。いや、このわたしは、わたしの姿をしているがわたしではない。だってわたしはここにいる。でも、ここにいるわたしはなぜかわたしの姿をしていない。テルドリン・セロになっている。これって、つまり――

わたしたちは、同時に叫んだ。

「わたし（私）たち、入れ替わってる!？」

|||||

ブレリナの実験はまたしても失敗した。わたしを筋骨隆々の大女にするはずが、わたしとテルドリンの中身を入れ替えてしまったのだ。

「すごい効果だわ! どんな作用が働いたか気になる。あなたの魔力を動かしたのと同時にテルドリンの魔力も引っ張って、ついでに二人の魂全体になんらかの影響が及んだのかしら。あ、今はあなたがテルドリンだったわね、ごめんなさい」

二人して天地がひっくり返ったように慌てふためいてブレリナに状況を説明した後の、彼女の第一声がこれだった。わたしはキッチンの上から頭を抱え、それにより自分がキッチンの兜を被っていることを自覚してますます混乱したが、テルドリンはかえって冷静になったらしかった。彼は（わたしの）眉を怒りに燃えるデイドラのように逆立てて、ブレリナの鼻先に人差し指を突きつけた。

「詳しい原理の解明はどうでもいい。今すぐ元に戻せ。さもなければ貴様をメファアラの許へ召すことになる」

いや、前言撤回だ、冷静ではない。しかし少なくともわたしの姿と声で喋ることに対する戸惑いや躊躇いを表面上は抑えることに成功

している。

ブレリナはそんな彼（わたしの姿をした）を恐れる様子もなく、ころころと笑った。

「あら、あなたがそんなふうに喋るとなんだか新鮮ね。まあ落ち着いてちょうだい。この呪文は百まで数えるくらいで効果が切れるはずなの。少し待ってみましょう」

わたしはテルドリンの兜の下で過呼吸になりそうな勢いだったが、その言葉を聞いて少し安心した。なるほど、ブレリナは少しで元に戻ると知っていたからこんなに冷静だったのか。

ブレリナと、わたしになったテルドリンと、テルドリンになったわたしは、そのまま待つことにした。

わたしの部屋に沈黙が降りた。隣の壁の向こうからほんの微かにゴーゴーと火炎の魔法を放っているような音が聞こえる。ジェイ・ザルゴのいびきだ。狸寝入りではなく、本当に眠っていたらしい。彼が起きていればこんな妙なことにはならなかったのに。わたしは、ジェイ・ザルゴの両頬をつまんでぎゅうぎゅうと外側に引っ張って遊んでいる、という妄想を頭の中で繰り返した。さぞふわふわしていて気持ちがいいことだろう。だいぶ気が紛れた。

余裕で二百は数えられるほどの時間が経つ頃になっても、変化はなかった。わたしは相変わらずテルドリンのまま、テルドリンはわたしのままだ。

「……戻らないよ」

わたしはブレリナに言った。明らかにいつものわたしのものではない低いかすれた声が部屋に響いた。思わず喉に手をやった。手袋と口元のマスクの向こうから硬い骨の感触が返ってきた。

ブレリナは、先日わたしを牛に変えてしまったときと同じように、白々しい誤魔化し笑いを浮かべて目を逸らした。

「お、おかしいわねえ。計算では確かにほんの少しで元に戻るはずだったのよ。やっぱりただ付呪するのと魂が入れ替わるのでは勝手が違うのかしら、おほほほ……」

テルドリンが、わたしの姿でウエツヘンとわざとらしく咳をした。

ブレリナは、ごめんなさい！ と素直に頭を下げ、わたしの姿をしたテルドリンの肩に手をかけた。

「必ず治すから、それまで我慢して。他の方には話さないで。特にアンカノが知ったら、どんな罰を下すか分かったものじゃないわ。あら、あなたはテルドリンだったわね、失礼」

彼女は改めて、テルドリンの姿をしたわたしに向かって謝った。

「それじゃ、早速部屋に戻って治す方法を考えるわ。今日の講義はどの先生がご担当だったかしら？ ブレリナ・マリオンは体調不良で欠席と伝えてちようだいね」

ブレリナはそそくさと部屋を出ていった。後にはわたしたち二人がなすすべもなく残された。

「……どうするんだ？ 教授たちに素直に報告した方が賢明だと思うが」

テルドリンが、わたしの顔で眉間に皺を寄せて、わたしの声で尋ねた。わたしは、内臓に直接冷たい水を掛けられたような嫌な感覚に襲われた。こうして直接話しかけられると、自分の身体が自分以外の者に乗っ取られていることを否応なしに実感する。テルドリンもわたしと同じだったのだろう。わたしが喋り始めた途端、熟していない苦いスノーベリーを口の中いっぱいに頬張ったかのような表情になった。

「ブレリナを裏切るのは悪いから、少し様子を見てみよう。どちらにせよ、ファラルダ先生の授業までもうあまり時間がない」

「待て。もしや私に講義に参加しろというのか？ この姿で？」

テルドリンは熟していないスノーベリー顔のまま、片方の眉だけを器用に上げる。

わたしが頷くと、テルドリンはがっくりと肩を落とした。



## 2. ファラルダの願望

ウィンターホールドでは、一年中厳しい冬の気候が続く、晴天になることはほとんどない。

今しも、大学の中庭で対峙するわたしと、破壊魔法の達人ファラルダ先生の上に、曇天から白い雪が降り始めていた。

ファラルダ先生は真剣な表情で右手を胸の前に掲げる。その掌の中に彼女の周りの雪と湿気とが凝集し、鋭利な刃物のように尖った大きな氷の結晶に変化した。彼女はそれをわたしの胸の真ん中を狙って投擲した。

わたしは護身用のダガーを右手で腰から抜き、刃の腹で氷の結晶の軌跡をずらして弾き落とした。同時に左手に魔力を集め、周囲の大気を急激に乾燥させ、細かな塵を燃え上がらせ膨張させて作った火の玉を彼女に向かって放つ。

火の玉は、先生が右手で素早く展開した魔力の盾により水蒸気を上げながら消失した。先生はその傍ら左手に溜めた魔力で空気中に摩擦を引き起こし、青白い雷撃をわたし目がけて迸らせた。

わたしは唇の端でニヤリと笑った。さっきのお返しに、左手で彼女と同じように魔力の盾を展開して雷撃を無効化しながら、彼女にじりじりと近づいていく。

先生は金色の目を一瞬驚いたように見開いてからすぐに鋭く細め、唇をきつと引き結んだ。わたしの歩調に合わせてそろそろと後退しつつ両手を高く掲げ、びりびりと空気を震わせて、巨大な稲妻の塊を頭上に出現させる。わたしたちの周りに舞っていたはずの雪も、湿っていた空気も今や跡形なく、稲妻の塊を中心にして、からからに乾ききった風が一带に広がった。先生は、金色の瞳をぎらりと閃かせたかと思うと、腕を大きく振り下げ、獯猛に唸りを上げる雷の奔流を一直線にわたしに差し向けた。

この攻撃は魔力の盾ではとても耐えられない。わたしは地面を蹴って跳躍し、すれすれのところまでそれを避けた。雷の束がバリバリと凄まじい音を立てて体のすぐ横をかすめる。わたしは素早い足捌

きで、両手とも魔法に使って隙のできている先生の背後に回り込み、彼女の喉元にダガーを突きつけた。

先生はぎよつとしたように顔をのけぞらせた。彼女の両手から放たれていた雷がふつつりと途切れ、あたりは静寂に包まれた。

少し間を置いて、一部始終を目の当たりにしていた学生たちから驚嘆の声が上がった。わたしはダガーを鞘に戻し、ファラルダ先生から一歩距離を置いた。曇天から再び雪が舞い始め、冷たくじめじめとした空気が戻ってくる。

ファラルダ先生はわたしにダガーを突きつけられた瞬間の姿勢と表情のまま、数秒間立ち尽くしていた。やがて、彼女は何か考え込むように目を閉じた後、しかめつらしい顔を作ってわたしを振り返った。

「アイススパイクは魔力の盾を使って避けるようにと言ったでしょう。それに、その後で使うのはファイアボルトではなくライトニングボルト。これは習得した魔法をスムーズに繰り出せるかを見る試験であつて、実戦ではないのですよ」

わたし——もとい、わたしの姿をしているテルドリンは、しまった、という顔でこちらをちらりと見た。学生たちの後ろから様子を窺っていたテルドリン——もとい、テルドリンの姿をしているわたしは、再び頭を抱えた。

今回の講義ではこれまでに習った魔法を適切に使えるかどうかを大学の中庭で試験することになり、くじ引きでわたし、というかテルドリンが一番手になったのだ。始めに先生から説明があつたのに、なぜその通りに動かないのだろうか。

テルドリンは、いかにも苦し紛れといった様子で先生に反論した。「それならなぜお前は最後にライトニングペストを使ったんだ？ あんな強力な魔法を使うなんて説明はなかったぞ。私以外が相手だったら今頃消し炭になっていたところだ」

焦っていて気づいていないようだが、わたしはそんなぶつきらぼうな話し方をしない。それに、自分が間違っていたら素直に謝る。

ファラルダ先生のしかめ面がより一層険しくなった。先生はテル

ドリンの質問には答えなかった。

「他の学生のやり方をよく見学していなさい。次回、再試験を行いませう」

テルドリンはなおも言い募ろうと口を開いた。しかし、フアラルダ先生は次の学生の名前を呼び、強制的に話を打ち切った。

試験を待つ学生たちの集団から少し離れたところに慥然とした態度で陣取ったテルドリンに、わたしはにじり寄って小声で話しかけた。

「どうして先生の言う通りにやってくれなかったの？ それに、どうしてあんなふうに先生に言い返したの」

テルドリンは、不機嫌そうな顔のまま、肩の動きを確かめるように何度も軽く回した。

「慣れない体でいきなり魔法を使ったり、喋ったりしなければいけなかったんだ。いつもの癖が出たって仕方ないだろう。こうなることは分かってきっていたはずだ」

なるほど、言われてみれば無理もない。わたしだって、テルドリンらしく見えるよう腕組みをしているのが精一杯なのだ。

ごめん、と言おうとして、わたしの耳はふと、先生と次の学生の呪文の音に混じって、誰かがひそひそと話をしているのを捉えた。学生たちの一団を窺うと、何人かの学生がこちらを興味津々といった様子で眺め、何事か囁き合っている。

テルドリンは彼らを横目で見やり、わたしに呆れ顔を向けた。

「入れ替わっていることを知られたくないなら、もう少し離れているべきじゃないか。私は講義中にお前に近づいたり、話しかけたりしない。従者の分を弁えろ」

言っていることはもつともだ。わたしが講義を受講しているとき、テルドリンはいつも柱の陰や最後尾の席などの目立たないところにひっそりと立っていた。こんなふうに自ら進んで雇い主に話しかけているのは、他の学生にとってはさぞ珍しく映ることだろう。

しかし、わたしは彼が何気なく口にしたであろう最後の一言に思わずむっとした。今は彼がわたしでわたしが彼なので、見かけ上は彼が

雇い主でわたしが従者だが、実際は逆だ。それに、わたしは彼にそんな不躰な文句を言ったことはない。

「分かった。気をつける。とりあえず、授業が終わるまで待つてる」感情を表に出さないように努めたつもりだったが、わたしが発したテルドリンの声は、思いの外低く、不愉快そうな響きを帯びていた。テルドリンは目を瞬かせ、まるで幼い子供に言い聞かせるような口調で言った。

「喋り方にも注意するんだぞ。私はそんな碎けた言葉遣いはしない」そつちこそ、とわたしは思いながら、無言でテルドリンから離れた。

|||||

講義が終わると、わたしの姿をしたテルドリンは、講義に出席していた学生たちに取り囲まれた。驚いてぽかんと口を開けている彼に向かつて、学生たちは口々に言った。

「今日はいったいどうしたんだよ。すげーバンバン破壊魔法当ててたじゃん。いつもは見当違いの方向に飛ばして誰かを怪我させるくせに」

「あの足捌きにダガーの使い方！　まるで剣士みたいだったよ。惚れ惚れしちやった」

「先生、一瞬マジになってたよなー、ハハハ」

考えてみれば当然の帰結だろう。わたしは破壊魔法が非常に苦手で、まともに操れたためしがない。ファイアボルトやライトニングボルトを作るところまでは問題なくできる。ところがそれを目標に向かつて放つのがどうしてもうまくいかず、暴発させたり誰かを怪我させたりする羽目になるのだ。また、武器の扱いもとてつもなく下手だ。だからあんなふうにならダガーで攻撃を逸らしたり、喉元に突きつけたりなどといったことは考えつきさえしない。

テルドリンは気遣わしげな表情でこちらに顔を向けたが、学生たちは彼をしばらく離してくれそうにない。ここで彼らとの交流を切り上げるのはさすがに不自然だと思ったのか、テルドリンは賞賛の声に

引きつり笑いで応え始めた。

学生たちの興奮が収まるまで大人しく待っているしかないだろう。わたしは近場のベンチに大股を広げて座り込み、もっともらしく腕組みをした。

「彼女は、今日はとても調子がいいようですね」

横からいきなり女性の声があった。わたしは小さく叫んで飛び上がった。振り向くと、フアラルダ先生が立っていた。足音も気配も全く感じなかった。今までどこにいて、どうやってわたしの隣までやってきたのだろう。

先生は無理矢理貼り付けたような微笑みを浮かべていた。無表情でいることの多い彼女はごくたまに笑顔を見せても、まるで笑うこと自体は二の次で、相手が自分の言ったことにどう反応するか、その一挙手一投足を見逃すまいとしているような雰囲気醸し出す。だから、わたしとテルドリンが入れ替わっている今は特に、彼女が笑っているのが気でない。

「あ、そ、そう、だな。珍しい、かな。ハハ、ハハハハ」

動揺しつつもなんとかテルドリンに似せようとしたが、無理だった。かなり不自然な話し方になってしまった。

先生は、そんなテルドリンの様子に気づいているのかいないのか、一切の素振りを見せず、硬い微笑みのまま言った。

「純粋な戦闘能力でいえば私と互角か、それ以上ではないでしょうか。一度本気でお手合わせ願いたい、と常々思っているのですよ。こう見えて私、一時期は破壊魔法で身を立っていたことがあるので」

破壊魔法で身を立っていた？ それは現在、大学の教授として学生に魔法を教えているのとは違うのだろうか。そもそも、なぜそんなことをわざわざわたし、つまりテルドリンに話すのだろうか。

わたしの返答を待つつもりはなかったらしく、先生は、それでは、と一言挨拶をして、中庭から達成の間に繋がる渡り廊下へと去っていった。

わたしはほっと息をついてベンチに再び腰を下ろした。よかった。なんだかよく分からないが、とりあえずテルドリンとして振る舞わな

ければならない機会からは逃れられた。

と思つたら、すぐにキチンの肩当てを着けた左肩をちよんちよんとつつかれて、わたしはまた飛び上がった。

「うわっ。そんなに驚かないでよ、テルドリン。こつちがびつくりするじゃないか」

大柄なノルドの男子学生、オンマンドだ。いつの間にか、テルドリンをもみくちやにしている学生の一団から抜け出してこちらに近づいていたのだ。ファラルダ先生に警戒するのに必死で気づいていなかった。

「な、なんだ。オンマンド、か。わたしに何か用、か？」

またもや不自然な喋り方になってしまった。オンマンドは少し不思議そうに眉をひそめたが、それよりも自分の用件を伝えることに意識が行っているらしい。彼は手を口の横に立てて、声を潜めた。

「今日もアレ、頼んでいいかな？」

アレとはなんのことだろう。わたしは首を傾げた。オンマンドはまた眉をひそめたが、やはり彼の用件を優先させたい様子で、「彼女が心配なの？ 大丈夫、そのうちジェイ・ザルゴがみんなから引きはがしてくれるさ。だからちよつとだけ付き合ってよ」

わたしはオンマンドにずるずると引きずられるようにして中庭を出ていくことになった。

未だに学生の集団に取り囲まれているテルドリンがわたしたちに視線を向け、また厄介事が増えたとも言いたげな顔をした。わたしと目が合うと、わたしの眉をしかめて顎を軽くしゃくった。お前だけでどうにかしろ、ということらしい。彼は元の引きつり笑いを浮かべながらの学生たちとの語らいに戻っていった。

### 3. オンマンズの熱意

わたしとオンマンズがやってきたのは、海からの風が冷たい雪を孕んで吹きすさぶ、ウインターホールド大学の屋上だった。

いったいここで何をするのかときよろきよろきしていると、オンマンズはわたしに、屋上の入り口近くに立てかけられていた木刀を一本投げてよこした。慌てて受け止めた。オンマンズはもう一本の木刀を両手で持つて構え、それから若干間の抜けた声で叫んだ。

「よし、それじゃ、行くぞおおおお!!」

何が始まったのか全く見当がつかずにいるわたしに、彼は木刀を大きく振り上げて襲いかかってきた。

「セイント・ノルディック・アタローック!!」

オンマンズは何やら大仰な掛け声とともに木刀を振り下ろす。その木刀の振り方は、攻撃を避けるのだけは得意なわたしからみると信じられないくらい遅く、太刀筋がぶれまくっていて威力を著しく損ねている。柄の握り方も構えの姿勢もめちやくちやで、今にも木刀があらぬ方向へ飛んでいきそうだ。

わたしはオンマンズの木刀による攻撃を体を軽くずらすことで避けた。テルドリンの装備は重くて窮屈だった。だが彼の体についている筋肉は適切にわたしの動きを支え、不意のことにもかかわらず驚くほど軽やかかつ思いのままに彼の全身を操ることができた。

オンマンズは目を丸くしたが、すぐにこちらへ向き直り、第二波を仕掛けてきた。

「グレート・イスグラモル・スラーーツシュ!!」

今度は横斬りだ。しかし、先ほどと同じようにその攻撃は緩慢で不安定で、攻撃されているはずのこちらが心配になるほど隙が多い。

わたしは後ろに跳躍することで攻撃を避けた。彼の木刀は、キチンの胸当てをかすりもしなかった。

「サウザンド・ベアーズ・クロローーツ!!」

第三波は、わたしを逃して大きく体勢を崩し、歯を食いしばって返す刃での斜め斬り。わたしは素早く横転してその攻撃から遠ざかった。

た。

オンマンドは木刀を屋上の石畳の上に落とす。早くも肩でせえぜえと息をしていた。

「だ、大丈夫、か？」

オンマンドの肩に労るように手を置くと、彼はその上に自分の手を重ねて、ごく丁寧にわたしの手を振り払った。

「テルドリン！ どうしていつもみたいに戦ってくれないんだ？」

「……え？」

わたしは固まった。そういえば始めに木刀を渡された。ずっと片手にぶら下げたままにしていたが、これで彼の剣を受け止めないといけなかったのか。

「いつもはもつと真剣に戦ってくれるじゃないか、テルドリンの得意な『モロウインドの陽炎』とか『ネレヴァリン・ザ・ブレイカー』とか『必殺砂塵剣』とかで」

「え？ あ、うん、え？」

なんなのだろうか、その、オンマンドのさっきの謎の掛け声にも負けず劣らずの、胸のあたりが無性にむずがゆくなるネーミングは。

オンマンドはわたしの煮え切らない相づちに、荒い息をつきながら苦笑いした。

「やっぱり彼女がみんなに囲まれてたのが気にかかるの？ 大丈夫だって、盗賊やならず者の集団じゃないんだから」

もちろん何か余計なことを口走るかもしれないという意味では心配だ。でもむしろ彼がわたしの中においた方がわたしの体は安全なのではないかと思う。第一、大学内であれば、わたしたちが別行動を取ることが普段から珍しくない。その間テルドリンがどうしているか、さして気にしたことがなかったが、こうしてオンマンドに稽古をつけたりしていたのだろうか。

オンマンドが、そういえば、と口を尖らせた。

「彼女の今日の動きはテルドリンが仕込んだんだろ？ もし独りで戦うことになっても安心できるようになって。まったく、あれくらいすぐに上達させられるなら、僕の戦い方もどうにかしてくれよ」



オンマンドは、以前、家宝のアミュレットを取り戻すためにわたしたちと外出したことがあるので、わたしの実力も知っている。それから一ヶ月足らずでの動きが身につけられるのなら、わたしは今頃帝都の闘技場のチャンピオンにでもなっていることだろう。ともあれ、自分の戦いぶりがあまり芳しくないことはオンマンド自身も理解しているようだ。

しかし、彼はわたし同様、ウィンターホールド大学の学生だ。ウィンターホールド大学は武を重んじる人の多いスカイリムで唯一、魔法を体系的に学び、研究するための施設と人材が揃っている場所だ。そんなところに安くない学費を払って来てまで、わざわざ剣の腕前を磨こうとしているのはなぜだろうか。

「ええつと。この稽古を始めたのは、どうしてだったかな？」

少し興味が湧いて、わたしはこの奇妙な稽古の発端をテルドリンが忘れたように装った。

オンマンドは少しがっかりしたように眉を下げた。

「なんだよ、忘れちゃったの？ 言ったじゃないか、何度も」

それでも彼はそのことについて再びテルドリンに語れるのが嬉しくてたまらないようで、照れ臭そうに鼻をこする。

「僕は幼馴染みを見返したいんだ。ノルドなら剣で戦え、魔法なんて臆病者の道具だ、つてそいつはずつと言ってた。僕はそいつに魔法のすごさを証明するためにここに入学した、けど」

頬が少し赤らんでいる、ような気がする。

「ただ魔法だけ得意になるよりも、テルドリンみたいに剣と魔法両方で戦えるようになった方がカッコいいんじゃないかと思つて。それで、テルドリンに頼んだんだよ」

オンマンドにそんなに気にかける相手がいるなんて知らなかった。もう少し詳しく聞いてみたいけれども、これはきつとオンマンドとテルドリンの間だけの秘密なのだろう。いくら今はわたしがテルドリンだからといって、踏み込んでよいことではないように思える。わたしは、そうだったな、すまなかつた、と当たり障りのない答えを返した。

さて、彼がそこまで剣を極めたいのなら、友人としてはぜひ協力したい。テルドリンが剣で戦っているのを見たり、敵の攻撃を避けたりしている側として感じることを伝えれば参考にはなるだろう。例えば、わざわざ掛け声で自分の攻撃を仕掛けるタイミングを相手に知らせない方がいいとか、剣の持ち方を直した方がいいとか、体幹を鍛えた方がいいとかだ。もつとも、こんなことはテルドリンには分かりきっているはずだから、彼がオンマンドに教えないばかりかオンマンドの調子に合わせてやっているらしいのが不思議で仕方ないが。

わたしがマスクの下で口を開きかけたところで、魔法の鐘の音がどこからともなく響いた。正午の鐘だ。腹を空かせた学生たちが一斉に大学の食堂へ集まる合図でもある。

鐘の音を聞いた途端、わたしはかすかな空腹感が湧き上がるのを覚えた。テルドリンは普段、空腹や疲労などの生理現象に悩まされている素振りを一切見せないけれども、見せないだけで感じてはいるらしい。

オンマンドの幼馴染みへの思いも腹の虫には勝てないようだ。彼は石畳の上の木刀を取り上げ、元通りに屋上の扉の近くに立てかけた。

「付き合ってくれてありがとう、テルドリン。はいこれ、いつもの」  
そして、わたしに何かを差し出してきた。わたしがなんの気もなしに手を広げると、金貨が一枚、掌に収まった。

啞然とした。有料でやっていたのか、あんな内容で。

「じゃ、またよろしく頼むよ」

オンマンドは実に軽やかな足取りで屋上から下へ繋がる螺旋階段を降りていった。わたしは独り寒々とした屋上に取り残された。

……とりあえず、わたしも昼食を食べよう。この体で目を回して倒れたら、テルドリンにどんな文句を言われるか分からない。

オンマンドを追いかけて自分も食堂へ行こうとして、はたと思い留まる。そうか、今のわたしはテルドリンなのだから、食堂へ行っても食べられるものはない。寮に帰り、自分で作らなければ。

#### 4. ニルヤの誘惑

鍋がコトコトと音を立てている。上品に混ざり合った脂と野菜とスパイスの匂いが小さなキッチンに満ちている。我ながらなかなかの出来のようだ。そろそろ器を準備した方がいいだろう。

住人たちが（おそらくブレリナを除いて）皆食堂に向かい静まり返った大学寮。その片隅にある小さなキッチンで、わたしはテルドリンの得意料理であるモロウインド風のシチューを一人黙々と作っていた。旅の間に習ったから作り方はすっかり覚えている。それでも本来の彼の手際の良さに比べるとわたしは鈍臭くて、少し手間取ってしまった。

洗い場の桶に入れておいた井戸水で本来の自分のものではない灰色の手指を洗う。テルドリンの手は大きく、力強く、それでいて優美だ。剣を振るい弓を引くための強靱な筋肉に覆われているながら、その輪郭は滑らかな曲線を描き、少しも骨張ったり節くれ立ったりしていない。年齢を重ねているせいで少し目の粗くなっている肌も、なめした皮のような独特の風合いがある。純粹に、綺麗だ。

手を洗い終えて手袋をはめると、食器棚から木の深皿とスプーンを取り出して鍋の前の椅子に陣取った。今や空腹感はずいぶん正常な思考を圧迫しそうな勢いでせり上がっている。わたしは腹をさすって自分に言い聞かせた。あと数分待てば、じやがいもとにんじんがほくほくと柔らかくなる。それまでの辛抱だ。

空腹を紛らすために、わたしは周囲の音に聞き耳を立てた。聞こえてくるのはシチューの煮える音と、料理用の暖炉から響いてくる外の風の音だけ。落ち着きはするが心細いものだ。テルドリンも同じように感じるのだろうか？ それとも、彼のことだから、このような状況もそれなりに楽しめるのだろうか？

ふと、遠くの方で、学生寮の出入り口の扉の蝶番がギイギイとこすれる音と、外の空気がごうつと吹き込む音がした。続いて、ブーツの靴底で石の床を思いきり踏みしめているような、いやに居丈高な調子の足音。それは寮の一階の片隅にあるこのキッチンに迷いなく向

かつてきた。そしてノックもなしにキッチン扉を開ける。

振り返ると、ハイエルフの学生ニルヤが右手を腰に当て、左手を握り拳にしてわたしを見下ろしていた。

「テルドリン。今日は何を作ってるの？ 一緒に食べてもいい？ もちろん、いいよね」

内心とても焦った。わたしはニルヤが苦手だ。いつも自信たっぷりの表情と仕草で、自分以外の全ての人を見下すような言動を取るからだ。今日の前にいる彼女はその傾向がさらに悪化しているようだった。こちらの意思も確かめず食事を共にすることを宣言しながら、テルドリンに自分の存在を肯定させなければ我慢ならないといった雰囲気でもわたしの返答を待っていた。

ときどきニルヤが食堂にいなかったのはこういうことだったのか。わたしは全力で自室に逃げ帰りたい衝動に駆られた。だが、この様子だとおそらくテルドリンは彼女を毎回受け入れていたのだろう。ここで下手に断ってしまったら不審がられる。

「ああ、構わない。座っててくれ。もう少しでできるから」

自分が彼女に対してどのような感情を抱いているか悟られないよう、なるべく平坦な声を出すよう努めて、わたしはキッチンに備え付けられたテーブルへ軽く視線を向けた。

ニルヤは動こうとしなかった。彼女は馬鹿にしたように鼻で笑って、左手の握り拳を軽く揺り動かした。拳の中から金属がぶつかり合う小さな音がした。

「うん？ ゴールドは要らないの？ やつと気づいたんだね、あたし相手に下手な商売をするべきじゃないってこと」

テルドリンはこの恐ろしいニルヤからさえも金を取っていたのか。いつも冒険で得た宝や報奨金は全て山分けしているというのに、どれだけ物足りないのだろうか。いや、ブレリナもわたしを金で釣ろうとしたあたり、ダンマーの人々は労働の対価を得たり与えたりすることに對して厳格なのかもしれない。

今更やっぱり金をくれとも言えず、わたしは鍋の蓋を開け、お玉で中身を掻き回した。アツシユ・クリープ・クラスターの粉末を入れた

ために少し黄色くなっているスープが、とろとろとお玉の後にくっついてくる。食べ頃だ。仕方ない、ニルヤの分を先に盛ってあげよう。

深皿を鍋に近づけてシチューを盛ろうとしたとき、右肩と右腕が何か温かくて柔らかかなものに包まれた。おそろおそろ首を横へ曲げると、ニルヤがわたしの右肩に手を乗せ、わたしの右腕に柔らかかな胸を押しつけていた。

「うっ、わああああ!!」

わたしは今の自分が冷静沈着な老練の傭兵テルドリン・セロの姿であることも忘れて情けない悲鳴を上げ、手に持っていた食器を放り出し、鍋をひっくり返しそうになりながらキッチンの四つ角の隅へと逃げ去った。

ニルヤはあからさまに拒否されたことに驚き、自尊心を傷つけられたようだった。金色の目を妖しく煌めかせながら、ゆっくりとわたしに近づいてきた。

「いつもと全然反応が違うじゃない。どうしたの、あの子と喧嘩でもした？」

わたしの両側の壁にどんと手を当てて逃げ場をなくす。ハイエルフは背が高く、ダンマーの中では身長が高めのテルドリンでも、ニルヤからは見下ろされる形になる。そのためすぐ目の前にこんな体勢で迫られて今にも威圧感に飲まれてしまいそうなのだが、次の行動に出そうなニルヤを食い止めるためにわたしは必死で問いかけた。

「あの子、とは。わたしの、主人のことか？」

「あれ？ いつもは名前前で呼んでなかった？ ああ、昨日の夜うまくいかなかったんだね。それで喧嘩したんでしょ。あの子、今日はいつもと違って少しとげとげしかったもん」

「……なんだ、その妙な言い草は。それでは、わたしがまるで彼と――」

「できてる、と、思ってるのか？」

絶体絶命な状況であることも忘れて尋ねた。ニルヤはかすかに戸惑った表情を浮かべた。

「そうだけど、違った？ 大学中で噂になってるよ」

わたしは雷に打たれたような衝撃を受けた。わたしとテルドリンが関係を持つていると、ニルヤだけでなく、大学のみんなが思い込んでいるのか？ なぜ？

「違う。絶対に違う。わたしと、彼女、は、そんな関係じゃない」

わたしは首をぶんぶん横に振った。わたしたちをどんな色眼鏡で見たらそのような勘違いを引き起こすのだろうか。ここはテルドリンとわたしの名誉のために、全力で否定しなければ。

ニルヤは思案顔になった。それからピンク色の唇をきゅつと上げて、どきりとするほど妖艶な笑みを浮かべた。

「ふうん。じゃあ、あたしがテルドリンと何をしようか、あの子には関係ないってことだね？」

彼女はわたしの鼻から下を覆っているマスクに片手で触れ、その上からわたしの顎を、唇を、頬骨を、鼻筋を、ゆつくりとなぞっていく。全身にぞわぞわと鳥肌が立った。

「あたし、一度あなたの顔を見てみたかったの。口元はとってもハンサムだよね——その兜の中にはどんな瞳が隠されているの？ 教えて、テルドリン」

ニルヤは頭部を守るキッチンのお兜を外そうと、兜とマスクの隙間に手を差し入れた。

わたしは動けなかった。テルドリンがニルヤをどう思っているのかも、普段どう接しているのかも分からない。下手に拒絶してしまつたら、彼はかえって怒るかもしれない。ここはニルヤに従ってとりあえず兜だけでも外しておくべきだろうか。実のところわたしも、彼の素顔は少し気になっていたのだ。——死にそうなくらい空腹で、おいしそうなシチューもできあがっているのにお預けを食らい、大学の中で一番苦手な人物であるニルヤに理性を飛ばされそうな甘ったるい表情で迫られている、というこの状況に、わたしの頭の中は完全に混乱していた。

そのとき、学生寮の扉がけたたましく壁にぶつかる音がして、誰かが石の床の上を走ってくるのが聞こえ、キッチンの扉が蝶番の外れそうな勢いで開け放たれた。

わたしの姿をしたテルドリンだった。彼はすぐさま何か喜ばしくないことが起こっていると理解したらしい。

「何をやっているんだ！」

険しい顔でわたしとニルヤの間に割り込んでニルヤを押しつけ、彼女から彼自身の体を庇うように立ちはだかった。

ニルヤは少しの間、唾然として所在なげに立ち尽くしていた。それから明らかに気分を害された様子で、わたしの姿をしたテルドリンを睨みつけた。

「あーあ、いいところだったのに。テルドリンのことになると随分と鼻が効くみたいだね。そんなにその傭兵が大事？」

こちらに背を向けたテルドリンから、全身の肌を粟立たせるような気配が伝わってきた。これは以前、彼が歯牙にも掛けていなかった敵からの攻撃で傷を負ったときに発していたのと全く同じ気配だ。テルドリンは怒っている。

「八つ当たりにも限度があるぞ、ニルヤ。私はお前にこんなことを許した覚えはない」

ニルヤは、普段のわたしとは似ても似つかないその異様な雰囲気と口調に少し気圧されたようだったが、負けじと言い張った。

「あんたに許されようが許されまいが関係ないよ。テルドリンはさっきまで大人しくあたしを受け入れようとしてたんだから」

テルドリンが鋭い視線をわたしに投げかけた。彼が操っているわたしは目だけで人を殺せそうだ。わたしは恐れおののき、慌てて言い訳した。

「ご、誤解だよ。いきなり迫られてどうしたらいいか分からなかったんだ」

言ってしまったから、いかにもな台詞だったと思った。傍から見ると、ニルヤとわたしが優柔不断なテルドリンを巡って言い争っているみたいだ。まるで俗っぽい三文芝居のような展開になっている。

テルドリンもその馬鹿馬鹿しさに気づいたのか、ニルヤに向き直り、怒りを抑えた低い声で言った。

「……帰って頭を冷やせ。サルジアスなら心配ない、じきにお前の気

を引くのには必死になるだろうさ」

なぜサルジアス先生の名前が出てくるのだろうか？ とわたしが疑問に感じたのも束の間、ニルヤの顔が真っ赤に染まった。

「あんだ、どうしてあたしとサルジアスのことを知ってるの!? そうか、テルドリンが教えたんだね。この裏切り者！」

つかみかかってくるかと思ったが、彼女は乱暴に身を翻し、甲高い靴音を立ててキッチンから出ていった。間もなく、大学寮のどこかで扉が荒々しく開いて閉じる音が響いた。

テルドリンは背中を押しつけるようにして守っていた自分自身の体から離れて、げっそりした様子で額に手をやった。

「ニルヤが食堂にいなかったから、まさかと思って来てみたら案の定だ」

「ご、ごめん、テルドリン……わたし、本当にどうしたらいいか分からなくて……」

わたしは自分の背中に向かって謝った。テルドリンはわたしをちらりと振り返ってからすぐに顔を背け、溜息をついた。

「私の姿でそんな情けないことを言うな。とりあえず、テーブルで待ってろ。まだ何も食べていないだろうか？」

彼はわたしが床に散らかしてしまった深皿とスプーンを広い、洗い場へ持っていった。わたしは言われた通り素直に席についた。

テルドリンはすぐに黄色のシチューの入った深皿とスプーンを二つずつ持ってやってきた。それらをわたしの前とそのすぐ隣に置く。

「私も昼食が始まってすぐに食堂を出てきたから、ほとんど何も腹に入れていないんだ。悪いが一緒に食べさせてもらう」

テルドリンはわたしの隣に腰かけ、スプーンでシチューを掬って口に運んだ。そして心底感心したように言った。

「お前一人で作ったにしては上出来だ。錬金術が得意なだけあるな」

いつもならとても嬉しく感じるであろう彼の褒め言葉も、わたしの姿で言われると妙な気分になる。

わたしはスープと肉と野菜をバランスよくスプーンの中に収めて口元に運ぼうとした。



「おい。マスクをしたままだ」

テルドリンに注意された。そうだ、まだ彼のマスクを外していなかった。しかし、どうやって取ればいいのかよく分からない。顔の周りをあてもなく触っていたところ、テルドリンの（つまり、わたし自身の）手が伸びてきて、わたしの（つまり、テルドリンの）指を掴んだ。「ここだ。よく覚えておけ。お前がブレリナを地道に待っているつもりなら、その間は私の体で飲み食いするんだからな」

彼はわたしの指をキッチンのおの内の内側へ導く。ちょうど耳のあたりにマスクを引っかけるくぼみのようなものがあった。彼が布をつまんで上へ引っ張ると、左側は難なく外れた。

わたしは彼を真似て右側で同じことをした。鼻先からマスクをずり下ろす。キッチンのぼんやりと暖かな空気が直に肌に当たった。わたしは彼に礼を言つて、改めてシチューに手を伸ばした。

|||||

自分で作ったシチューとテーブルに置いてあったパンで十分に腹が膨れると、わたしは、既に食べ終えて膝に手を置いてぼんやりしていたテルドリンに聞いた。

「ニルヤとはときどきああやって一緒に食事をしてるの?」

テルドリンは頷いた。

「ああ。あいつが馬鹿みたいなことでも落ち込んでるときにな。……言っておくが、食事以上のことはしていないぞ」

彼は弁明するような、それでいてどこかわたしを責めるような調子で二言目を付け足した。

先ほどの過剰なまでの反応でそれはよく理解できている。もつとも、食事以上のことをしても彼の自由なので、問題を起こささえないければわたしは一向に構わないのだが。

「本当に悪かったよ。ああいうの慣れてなくて、叫んで逃げ回っちゃったんだ」

素直に打ち明けると、テルドリンは手のかかる子供を見るような目

でわたしを見て、噛んで含めるように言った。

「そうじゃないかと思っていた。ああいう手合いには大げさに反応しては逆効果だ。その場限りの感情に動かされているだけだから、冷静に受け流した方がいい」

そんな忠告をされても、いきなりどうにかできるものでもない。その方面に疎いわたしが如才なく立ち回れるようになるためには、たぶんテルドリン以上の経験値が必要だ。すなわち今から二百年以上は生きなければならぬということ、人間のわたしには無理だ。

「努力はするけど、うまくいかなかったらテルドリンのところまで逃げね」

わたしの答えにテルドリンは諦めたように笑った。

「ああ、それでいい。取り返しのつかないことになるよりマシだ」

テルドリンは席を立ち、二人分の食器を重ねて洗い場に向かった。ざぶり、と水の零れる音が続いて、ざりざりと何かをこすっている音がする。桶の水を食器にかけ、石鹸で泡立てた布で木の皿の表面を拭っているのだろう。

「さつきサルジアス先生がなんとかって言ったのはなんだったの？」

わたしがもう一つ気になっていたことを質問すると、皿をこする音が止まった。

「……あれは、あー、お前が知らなくてもいいことだ」

テルドリンの声はなんだかぎくしゃくしていた。

「でも、大学の人たちの事情はなるべく把握しておかなくちゃ、仕事の依頼が——」

「いいんだ。知らなくても全く問題ない。お前にはまだ早い」

すげなくかわされた。テルドリンはわざとらしく鼻歌を歌いながら皿洗いを再開した。その件に関してはこれ以上の詮索は無用、ということらしい。わたしは釈然としない気分になりながらも、空になった鍋を抱えてテルドリンの隣に立った。

## 5. ジェイ・ザルゴの逃走

キッチンを片付け終え、わたしたちは自室に戻った。今日は本来であればこの後ウインターホルドの街へ戦利品を売りに行き、ついでに夕食を食べて帰る予定だったが、この緊急事態の前には延期せざるを得ない。

わたしたちは朝にやりかけてそのままになっていた戦利品の整理を再開することにした。今日売りに行かなくても、分類して袋に詰めしておくに越したことはない。

その作業に少し手をつけたところで、また朝のように部屋の扉を叩く音がした。今度はごくのんびりとした叩き方だ。ブレリナがついに解決策を見つけたのだろうか。

扉を開くと、そこにいたのは、大学唯一のカジートの学生であるジェイ・ザルゴだった。

「ああ、テルドリン。彼女は戻っているか？」

ジェイ・ザルゴはテルドリン（の姿のわたし）に笑いかけた。彼は、ふわふわの毛に覆われた首をにゅっと伸ばして室内を見渡し、ベッドの影で床に座っているわたし（の姿のテルドリン）を認めると、ぱあつと顔を輝かせた。扉を後ろ手に閉め、わたしの横を器用にすり抜けて彼の方へ歩いていく。

「やっぱり部屋に戻っていたのか。体調は大丈夫か？」

ジェイ・ザルゴはうずくまってテルドリンと目線の高さを合わせた。テルドリンの、とうかわたしの顔を、鼻先が触れ合いそうなほど近くからじっと覗き込む。

テルドリンは眉をしかめてのけぞり、じろりと胡乱な目つきを返した。

「……絶対調だ。で、なんの用だ？」

ジェイ・ザルゴは不思議そうに目をぱちくりさせた。わたしの様子がいつもと違うことに気づいているらしい。

「いきなり自分で自分の名前を叫んで飛び出していったから、熱でもあるのかと思ったんだが。本当に絶対調なのか？」

テルドリンはしかめ面のまま首を縦に振った。

「ああ、絶好調だ。ファラルダの講義の後、皆が私の華麗な戦いぶりを褒め称えているのを見ただろう。なんの問題もない。だからお前心配される筋合いもない。用件はなんだ、カジート」

彼は、ジェイ・ザルゴを大きさに避けるようにして立ち上がると、ベッドにどつかと腰を下ろし、腕組みをしてジェイ・ザルゴを睥睨した。

わたしは地団駄を踏みたくなかった。相変わらず喋り方をわたしに似せようという努力が全く見られない。それにその傲岸不遜な態度はいったいなんなのだ。ジェイ・ザルゴの言う通り、熱でもあるんじゃないか。

ジェイ・ザルゴはまだ疑わしげにヒゲをぴくぴくさせていたが、オマエが絶好調と言うなら信じよう、と呟いて、テルドリンの隣にするりと座った。

「あのな、今日も『まつさーじ』をお願いしたいんだ。ジェイ・ザルゴは一昨日も昨日もずっと勉強をしていたから肩が凝っている」

ジェイ・ザルゴはのんびりと言った。

わたしは、かつてシロディールで旅芸人一座の一人として生きていた。一座は、歌や曲芸に限らず、訪問先の町や村に不足しがちな様々な娯楽を提供することで生計を立てていた。そのうちのひとつがマッサージだった。一座にとっては大した収入源ではなかったが、独りでスカイリムに放り出されてから、この技能は身銭を稼ぐのに役立つ。特にウィンターホールド大学では、室内に籠もってばかりの教授や学生にそれなりに好評だ。

中でもジェイ・ザルゴは良い客だ。頻繁に来てくれるし、どこを触ってもふわふわしていて気持ちが良いからこちらとしても得をした気分になる。それに彼にマッサージを施していると、一座の仲間だったカジートのことを思い出す。「彼女はジェイ・ザルゴと同じくらいの年齢で、わたしの妹同然に育ち、わたしによく膝枕をせがんだ。……二度と戻れない過去だ。「彼女」にしてあげたことを今ジェイ・ザルゴに代わりにしてあげること、わたしは「彼女」や一

座の他の仲間たちを想い、自分の心を慰めているのかもしれない。

しかし目下のところ、わたしはテルドリンと体が入れ替わっている。そしてテルドリンには当然マツサージの心得はない。いったいどうするのかと思つて眺めていると、テルドリンは眉間の皺を深め、ベッドに腰掛けたままジェイ・ザルゴから距離を取った。

「断る」

ジェイ・ザルゴは首を傾げた。

「絶好調なんじゃないのか？」

「体の方が絶好調でも、気分というものがある。今はそういう気分じゃない。いや、本音を言うと、お前を相手にするのはいつも気が乗らない」

テルドリンの返答にわたしは頭痛を覚えた。気分で誤魔化すのはまあいい。が、言い方が悪すぎる上に一言多い。わたしには決してそんな本音はない。むしろ逆だ。

ジェイ・ザルゴのフードがぺたんかと平たくなった。フードの下に隠れている耳が垂れ下がっているのだ。

「そう、だったのか？ ジェイ・ザルゴはずっと迷惑だったのか？ オマエはいつも楽しそうだったじゃないか。本当に気が乗らないのか？」

ジェイ・ザルゴはあたふたとテルドリンに問いかけた。テルドリンはもったいぶった態度で大きく頷いた。ジェイ・ザルゴのくりつとした両目が、みるみるうちに涙でいっぱいになった。

「そんなことはありえない。今日のオマエはやっぱりおかしい。休んだ方がいい。ジェイ・ザルゴも帰って寝る」

ジェイ・ザルゴは尻尾をだらりと下げてわたしのベッドから腰を上げた。彼が部屋の扉に向かってとぼとぼ歩いていこうとするのを、わたしは慌てて腕を広げて遮った。

「ま、待ってくれ、ジェイ・ザルゴ」

ジェイ・ザルゴは、わたしの存在を今思い出したとばかりにきよとんと顔を上げた。一筋の涙がふわふわの毛並みに覆われた頬から顎へ伝っている。わたしは胸を締め付けられた。ジェイ・ザルゴがわた

しを避けていかないうちにとまくしたてるように言った。

「なんだか知らないが、彼女は今日すごく機嫌が悪くてね。悪気があるわけじゃないんだ、本当にすまない。ほら、テ……お前も謝ってくれよ」

テルドリンに呼びかけた。彼はしかめ面のまま返事をしなかった。わたしは苦々しく思いながらも先を続けた。

「ジェイ・ザルゴ。よかったらわたしがマッサージをしてあげよう。いつも彼女がやっているのをそばで見っていたんだ、できないはずがない。ああ、金は取らないから安心してくれ」

ジェイ・ザルゴのつらそうな顔は見えていられなかった。テルドリンが彼に冷たくした分、わたしがどうにか埋め合わせなければいけないと思った。さらに言えば、わたしはこの機会をいくらか緊急事態とはいえみすみす逃したくなかった。否、こういうときだからこそ癒やしが必要なのだ。

わたしが提案したその瞬間、ジェイ・ザルゴの憂鬱そうな表情がすうと引っ込んでいった。代わりに彼は目を不審そうに細め、口を不満そうにすぼめた。

「オマエが、無料で、まつさーじ？ ……イヤだ。オマエの手も膝も硬くて痛そうだ。それに、オマエはまつさーじのとき、いつもピリピリしている。そんなヤツにまつさーじをされるのはイヤだ」

完膚なきまでに拒絶された。わたしは自分の小さなプライドがずたずたに引き裂かれたような気がした。彼はマッサージのたびにわたしの掌の下や膝の上でごろごろと喉を鳴らしていたから、すっかり満足していると思って嬉しかったのに、それはわたしの幻想に過ぎなかったのか。いや、落ち着け。彼はわたしに対して言っているのではない、テルドリンに対して言っているのだ。これはテルドリンに対する彼の印象だ。

「もういいか？ ジェイ・ザルゴは帰る」

それでも面と向かって拒絶された事実は変わらず、わたしは彼を引き留めるために差し出していた腕を力なく下げた。ジェイ・ザルゴはわたしの横を通り過ぎ、部屋の扉に手を掛けた。

「……待て。気が変わった」

テルドリンの、もといわたしの声がベッドの上から飛んできた。テルドリンはファラルダ先生顔負けの作り笑いを浮かべて、ジェイ・ザルゴを誘うようにほんぽんとベッドを叩いた。

「マツサージをしてやるよ、ジェイ・ザルゴ。こっちに来い」

ジェイ・ザルゴはそれを聞くなり驚くほど機敏な動作で振り返り、全身に喜びをみなぎらせてベッドに飛び込んだ。テルドリンの腰にすがりつき、彼を見上げる。

「本当か?! 迷惑じゃないのか?!」

テルドリンは頬を引きつらせ、ジェイ・ザルゴが自分の腰に回した手を払いのけた。それでも作り笑いは崩さなかった。

「ああ。さつきまでアンカノの嫌味な言動を思い出してむかむかしていたんだ、悪かったな。さあ、うつぶせに寝転がれ」

ジェイ・ザルゴは嬉々としてわたしのベッドにうつぶせになった。テルドリンは自信満々にあんなことを言っているが、大丈夫なのだろうか。

テルドリンの操るわたしと、わたしの操るテルドリンの視線が一瞬かち合った。彼はわたしの目に得体の知れない光を宿していた。

「それじゃあ、行くぞ」

彼はそう言うなり、ジェイ・ザルゴの右の前腕に両手を掛け、関節とは反対の方向に思いきり押し曲げた。

「ぎゃー……!!!」

ジェイ・ザルゴのすさまじい悲鳴が部屋中に響き渡った。

なるほど確かにその方向も伸ばした方がいい。しかし急激に伸ばすと皆痛がるのでやるのであれば少しずつなだめすかせるように伸ばすべきで……

「……いつはごうだ?」

続いてテルドリンはジェイ・ザルゴの右肩の付け根を掴み、腕を体の後ろ側へ、骨ごと引き剥がすような勢いで引っ張った。

「ぎゃー……!!!」

そこも確かに動かしの方がよいが、多くの人は十分に使いこなせて

いないため下手に扱おうと激痛を伴うわけで……

「ハーツハツハ、まだまだ序の口だぞ。そらあつ!!」

テルドリンはジェイ・ザルゴの首を、彼が普段動かさないのであろう角度までぐいと曲げた。

「ぐわー……!!」

「テルドリン！ やめてよ、それはマッサージじゃない！」

わたしは自分が今はテルドリンであることも忘れて叫んだ。その声は完全にジェイ・ザルゴの絶叫に紛れてしまった。

その後、数分間にわたってわたしの部屋の中ではオブリビオンもかくやと思うような光景が繰り広げられた。もはやマッサージではない何かでジェイ・ザルゴを弄ぶ、わたしの姿をしたテルドリン。声を枯らして叫び続けながらも、テルドリンに両脚で体をがちり押さえつけられているため逃げるに逃げられないジェイ・ザルゴ。そしてそんな二人の迫力に負け、ただその周りをおろおろとうろついている、テルドリンの姿のわたし。

右膝に関節技のようなものをかけ終わり、テルドリンがいやに晴れ晴れとした表情でジェイ・ザルゴを解放すると、彼はベッドから飛び起き一目散に部屋の外へ逃げていった。

「うわああああん！ ジェイ・ザルゴ、もうお媚に行けない!!」

隣の部屋の扉がボタンと閉まる音がして、周囲に静寂が降りた。

わたしはしばらく愕然としていた。テルドリンが鼻を鳴らしてわたしのベッドから降りると、我に返って彼に詰め寄った。

「どうしてあんなことしたの!? ジェイ・ザルゴが痛がってたじゃない」

テルドリンはふいとそっぽを向いた。

「あいつが硬すぎるのが悪い。私の体なら同じことをされても痛くもかゆくもない」

「それはテルドリンが普段から体をよく動かしてるからでしょう。自信がないなら無理にやらなくてもよかったのに。なんとか誤魔化せてたんだから」

テルドリンはむっとした様子で唇を引き結んだ。彼はわたしの（彼



自身の)体を大回りで迂回し、テーブル横の椅子に乱暴に腰掛け、お得意の腕組みをした。そして、長い長い溜息を口から吐いた。

「……あのなあ」

溜息の最後に低い掛け声を乗せ、これからなんらかの主張を行うことを示唆してから、彼は息を大きく吸い込み、咎めるように言った。「いつも思っていたんだが、あいつはただの猫じゃない、カジートの男だ。馴れ馴れしくいちやつくべきじゃない」

予想外の方面から攻め込まれたため、わたしはマスクの中でぽかんと口を開けた。

「いちやつく、って。わたしはただ仕事でジェイ・ザルゴにマッサージをしてただけだよ」

テルドリンはわたしを厳格な父親のような目で見据えた。

「仕事だと？ お前はあのカジートと触れ合えることを明らかに喜んでるだろう？ あいつにあのマッサージとやらを施しているときは決まってだらしなくにやけた顔をしているぞ」

全く否定できない。彼の毛並みと四肢の筋肉の絶妙な柔らかさは抗いがたい魅力だ。それに、ジェイ・ザルゴはかつての仲間たちを、カジートの「彼女」を想うための貴重なよすがなのだ。もはや仕事ではなく、個人的な楽しみになっていることさえ否めない。

わたしはテルドリンの言葉を正直に肯定した。

「確かにそうだけど。それはその、触り心地が良くて、昔の仲間と一緒にいるみたいな気分になれるからだよ」

テルドリンは眉間に深い皺を寄せ、何かの痛みを堪えるように瞼をきつく閉じた。

「いくら昔の仲間と似ていたって別人だ。勘違いするな。それに、触り心地……触り心地だと？」

テルドリンは突然目をカッと開き、握り拳でテーブルを叩いた。「それがいずれ思わぬ過ちに繋がると、お前には分からないのか!？」

彼に操られているわたしの体全体から、まるで調子に乗って薪を入れすぎた焚き火のような熱気と歪みとが伝わってくる。ニルヤと対峙したときと同じくらい怒っているかもしれない。今度は何が彼に

そうさせているのだろうか。どうやらわたしの危機感のなさを嘆いているようだが、理由が全く分からない。

わたしは彼の謎の怒りを受け流そうとして、あえてへらへら笑ってみせた。

「いや、過ちって。大げさすぎない？ ジエイ・ザルゴもわたしも互いのことをなんとも思っていないから平気だつて」

「よりによって私の口からそんな台詞を吐くな！ いいか、油断しているときこそ一番危ないんだ。ふとした拍子に踏み越えてはいけない一線を踏み越えてその気になり、のちのち後悔することになる」

さらに怒らせてしまった。やけに実感のこもった話しぶりだ。もしかしたら彼自身がそういう経験をしたことがあるのだろうか。

しかし、なぜそんなことで彼に説教されなければならぬのかが甚だ疑問だ。わたしも子供ではないのだからそのくらい知っている。その上で全く危険がないと判断した（そもそも仕事だ）から行動しているわけだし、万一何かあったとしても全てわたし自身の責任だ。

「仮にその可能性があったとして、それがテルドリンとなんの関係があるの。わたしたちがどうなるうがわたしたちの勝手でしょう」

わたしは若干苛立ちを覚えて尋ねた。

わたしが反論するとは思っていなかったのか、テルドリンは大きく見開いた目を何度かぱちくりさせた。それから盛大な溜息を鼻と口から噴き出し、これだから思慮の足りない奴は困る、とでも言いたげにかぶりを振った。

「関係ないわけがないだろう。私の目の前で何か始められたらたまつたものではない」

……テルドリンはわたしたちを動物か何かだと思っているのだろうか。高尚なエルフ族から見たら人間もカジートも少し知恵のついた動物程度の存在かもしれないが、わたしたちにだって彼らと同じ理性がある。人目を気にせずなんでもできる者はそう多くない。

「何も始めないよ、テルドリンの前なんかで。そんなに嫌ならマツサージをしているときは外に出てればよかったのに。どうしていつも中にいたの？」

ジェイ・ザルゴが部屋を訪ねてくれば十中八九マツサージが始まることは分かりきっている。もし嫌なら彼の方が避ければいいのに、とわたしは思った。

テルドリンはわたしの爪先で石の床を何度か踏み鳴らした。

「ここはお前の一人部屋ではない。お前が従者である私に一部を貸し与えている部屋だ。間借り人であるとはいえ、お前たちの都合に付き合っているいちち部屋から出てやる義務は私にはない」

テルドリンが怒っている理由がようやく腑に落ちた。つまり、彼にはこの部屋でゆつくり静かに過ごす権利があるのに、同居人が彼の気も知らず勝手に他人と「いちやつき」始めるのはいい気分ではない、ということだ。本人たちにそういう気が全くなくても。

わたしは、旅芸人一座にいた頃は狭いテントの中で大勢の仲間たちと一緒に暮らすのが当たり前だったから、どこまでが誰の領域であるとか、自分のそばで誰が何をしているなどといったことは滅多に気にならない。しかし、テルドリンは違ったのだ。わたしは彼の雇い主なのだから、彼が快適な毎日を送れるようもつと気を遣うべきだった。わたしはここに至って潔く納得し、反省した。

「ごめん。今まで配慮が足りなかった。わたし、テルドリンの時間を邪魔してたんだね」

テルドリンはようやく理解したかとはばかりに満足そうに頬を緩ませた。

「分かってくれたならいいんだ。今後ジェイ・ザルゴ相手の仕事は控えてくれ。少なくとも私がこの姿でいる間は断るぞ。ま、さつきの様子だと、奴がまた来るかは知らんがな」

これまで鬱憤が溜まっていたせいから心底楽しそうだ。恨みがましい気分になったものの、今回は完全にわたしが悪いのだからとやかく文句を言うことはできない。ただ、ジェイ・ザルゴ相手の仕事を控えるのは嫌だ。彼はわたしの貴重な癒やしであり、救いだから。わたしは今後の方針についてテルドリンに伝えることにした。

「元に戻ったらジェイ・ザルゴに謝りにいくよ。彼が許してくれたら、今度から他の人と同じように、マツサージを頼まれたら彼の部屋に行

くようにする」

いつもジェイ・ザルゴが部屋に入り込んできた流れでその場でマツサージになだれ込んでいたのが良くなかったのだ。今後は他の客と同じように扱えばテルドリンも心穏やかに過ごせるだろう。

わたしはこれで一件落着だと思った。ところが、一方のテルドリンは笑顔をぴしりと強ばらせた。そのまま何も言わずに固まっている彼に、わたしは急に体調でも悪くなったのかと思って話しかけた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

彼はわたしの声に反応して肩を跳ね上げた。

「……あ？ ……ああ……大丈夫だ」

そう呟きながら、何やら呆然とした表情で、視線を斜め下の虚空へゆるゆると移動させた。その頬が熱に冒されたように赤く染まっていく。本当に平気なのだろうか？ わたしが彼の（というか、自分自身）様子をよく見ようとして立ち位置を移動し中腰になると、彼はわたしから顔を背けた。耳まで赤くなっているのが分かった。

「具合が悪いんじゃないの？ どういう状態か教えてくれれば手伝うよ」

テルドリンはわたしの問いかけに答えなかった。ただひたすら肩で息をし、わずかに見える睫毛を震わせていた。

その状態のまま、外の廊下を歩いて一周してこられるくらいの時間が経過した頃、彼は不意に椅子を引いて立ち上がった。

「用を足してくる」

## 6. アンカノの絶叫

「用を足す？ 何か用事があったの？」

それが比喩表現だと理解できなかったわたしのためにテルドリンは言い直した。

「トイレに行ってくる」

なんだ、トイレに行きたかったから様子が変だったのか。わたしはとりあえず安心してから、彼の言ったことを改めて咀嚼して、動揺した。

考えてみれば、体が入れ替わっているのだから、いつこういう事態に陥ってもおかしくはなかった。そして昼食を食べてしばらく経っているのだから、そろそろ催すのが自然な流れだ。でも、テルドリンが、わたしの体でトイレに行く？ 彼が無事にあの作業を終えられるかが不安だ。それに、恥ずかしい。いくら旅芸人をやっていたわたしだって、排泄行為を他人に見られたくはないし、ましてや代行されたくはない。

だが、そんなことを言っている場合ではないことは理解している。わたしは最低限確認しなければならぬことを確認することにした。

「場所は分かるよね？ やり方は？」

一旦言葉に出したら踏ん切りが付いたのか、テルドリンの頬に差ししていた朱は徐々に薄れつつあった。彼はこともなげに頷いた。

「たぶん分かる。何度か見たことがある」

テルドリンはすたすたと歩いていつて扉を開け放ち、外に出た。見たことがあるというその具体的な意味がかなり気になったが、わたしは深く考えないことにした。とにかく、なんとなくやり方が分かっているのならそれでいい。

心の中でそう独りごちていたら、閉まりかけていた扉がガツと音を立てた。テルドリンの（つまりわたしの）手が扉を押さえ、扉の隙間からわたしの顔が覗いていた。

「何、どうしたの？」

テルドリンはいやに真面目な顔つきで言った。

「変なことはしないから安心しろよ」

今度こそ彼は扉を閉めて去っていった。おかしなことを言い残していくものだ。わたしはそんなことはまるで心配していないのに。

しかし、他人に自分の体のあらゆる行為を一任するというのは心臓に悪い。これからテルドリンがトイレに行くたびに寿命が一年くらい縮んでしまいそうだ。そろそろブレリナには本当に治す方法を見つけてもらわなければ困る、とわたしは思った。

そこで、彼を待つ間に一度ブレリナの部屋を訪ねてみることにした。幸い、部屋の外の円形の廊下に人はいなかった。皆自分の部屋に籠もっているか、どこかに出かけているかしているらしい。わたしは同じ階のちようど向かい側にあるブレリナの部屋へ足を向けた。

彼女の部屋の扉をノックして、小さく声を掛ける。

「ブレリナ？ テルドリン、だ。調子はどうだ？」

返事はなかった。扉に耳を当ててもなんの音も聞こえてこない。よほど集中しているのか、それとも図書館に資料集めにでも行っているのか。いずれにしろ、この姿でこれ以上粘って誰かに目撃されたら面倒なことになる。いったん退散してテルドリンが帰ってくるのを待とう。

自室に戻ろうと踵を返したそのとき、わたしが今まで意識しないよう努めていた下半身のある部分の根元あたりに、何かがじわじわと集まっている感覚があった。一步踏み出す毎にその感覚は強くなっていく。自室に入り扉を閉めた頃には、明確な自覚が芽生えていた。

わたしもトイレに行きたい。

でも、テルドリンが戻ってくるまでは待つていなければ。そして彼に一言断りを入れなければ。いや、それ以前に、この鎧の外し方がよく分からないから、彼に聞く必要がある。服も下着もだ。あとはあの部分をどうやって持てばいいか——ダメだ、そんなの聞けっこない。というかあの部分って、テルドリンの？ どうしてわたしが、恋人でもそういう仕事の最中でもないのを見て、触らなければならぬのか？ いやいや、今はわたしがテルドリンなのだから、あれを触るのもテルドリン自身と言えるわけで、わたしはなんら恥じる必要はなく

堂々と――

軽快なノックの音が響いた。扉を開けると、幾分すつきりした表情のテルドリン、もといわたしがいた。

「おかえり。大丈夫だった？」

わたしは焦りを抑え、一応の礼儀として尋ねた。テルドリンは短く、ああ、と答えて、いらいらするほど悠々とした足取りで部屋に入った。部屋の中央あたりまで行ったところでこちらへ悠然と振り向き、これまたむかむかするほどゆったりと穏やかな口調で話し始めた。

「なあ。さっきのジェイ・ザルゴの話だが、やはりあれは私の――」

「ね、ねえ、テルドリン。そんなことより、わたしもトイレに行きたい」  
わたしは待ちきれなくなつて彼の話に割つて入つた。

テルドリンは急に話を中断されて若干気分を害したようだったが、わたしの声色から事態が切迫していると悟つたためか、素直にわたしの話題に乗り換えた。

「そうか、さっさと行ってこい。えー、あれだ、支えないと零れるからな。あと、そう、あまり勢いよく出しすぎると撥ねる」

かなりばつが悪そうだ。それはそうだろう、わたしだつてそんなことを彼の（そしてわたし自身の）口から聞きたくなかつた。

「う、うん、出し方は分かつたよ。でも……」

わたしはもじもじしながら言い淀んだ。その間にも意識しなくなつたあの部分周辺の疼きは深刻な速度で増していく。

「何が問題なんだ。はつきり言え」

テルドリンにせつつかれて、わたしは上ずつた声で答えた。

「鎧と服の外し方が分からない。それに、その、テルドリンののだと思うと、恥ずかしい」

テルドリンの操っているわたしの頬に再びぱつと紅が散つた。

「ばつ、馬鹿。私だつてさつき同じことをしたんだぞ、我慢しろ。いいか、まず腰のベルトを――」

テルドリンがわたしの手を取つて教えようとするのを、わたしは下半身からの激しい突き上げに見舞われて振り払つた。

「もう間に合わない！　お願い、一緒に来て!!」

「はあ!?!」

わたしは彼の、もとい自分自身の腕を乱暴に掴んで、寮の奥まったところにあるトイレに向かって駆け出した。

|||||

ウィンターホールド大学の大学寮は、多数の学生と教授陣を収容するため、トイレが各階に男女別に設けられている。トイレの中には複数の便器が設けられ、それぞれ壁とドアで仕切られて個室になっている。便器の横にあるレバーを引っ張ると排泄物は水で押し流され、一カ所に集められて浄化された後で海へ排出される仕組みになっている。スカイリム中、いやシロデール中と比べても非常に先進的な設備で、以前、アーリエル先生がドウーマーのトイレからヒントを得たとかなんとか誇らしげに教えてくれた。しかし、今はそんなことはどうでもいい。

テルドリンとわたしは男性トイレの一番手前の個室に駆け込んだ。

「あう、早く! 漏れちゃうよお!」

わたしはもはや見境なく叫んだ。もうパンパンに張り詰めているのに、まだ鎧さえ脱げていない。危機的状況だ。

「分かった、分かった! その姿でそんな声を上げるな、気が狂いそうだ」

テルドリンは泣きそうな顔でわたしをなだめながら、わたしの体の横に片膝をつき、カチャカチャと金属の触れ合う音をさせながらベルトを外していく。下腹部の締め付けが緩むと本能からの要求はより一層ひどくなった。

「ねえ、まだ!?! まだ準備できない!?!」

「まだだ! 堪え性のない奴だな、黙って待ってろ。もうすぐ楽にしてやる」

鎧をばさりと脇に持ち上げられ、腰のあたりをまさぐられる。下穿きの紐がしゆるしゆると素早く解かれた。最後は下着だ。彼は、それを全て取り払うことは諦めて必要な部分だけ取り出すことにしたら



しい。わたしの手が下着の隙間から中に忍び込み、彼のあの部分を掴んだ。頭のとっぺんから爪先までを激しい電流が走り、わたしはテルドリンの喉から妙に艶めかしい声を上げてしまった。テルドリンはその声の下で、彼自身のそれを下着の中から荒々しく引きずり出した。

「いいぞ、やれ！」

テルドリン、もといわたしの声を合図に、わたしは目をぎゅっつぶって溜まっていたものを放った。

心地良い水音が長い間トイレの中に響いていた。わたしは全てを出し終わると瞼を開け、安堵の溜息をついた。しかし下を見る勇氣はなく、トイレの壁を凝視しながら、彼のものを支え持ったままのテルドリンに聞いた。

「どう？　ちゃんと全部中に出せてる？」

テルドリンはぐったりと疲れきった声で応じた。

「ああ。全く、本当に頭がおかしくなりそうだった。次からは自分でやるんだぞ」

「……気が進まないけど……分かったよ。でも、今のはよく見てなかったからもう一度やり方を——」

言いかけた時、背後で蝶番の軋む音がした。個室のドアだ。確か入るときに鍵をかけたと思ったのだが。

わたしは反射的に顔を巡らせ、何が起こったのか確かめた。

わたしたちの個室のドアは内側に向かって開放されていた。個室の入り口に、神経質そうな顔を真っ赤に染め唇をわなわな震わせている、背の高いハイエルフが立ち塞がっていた。この場面で出くわす人物としてはおおよそ最悪の相手、アンカノ顧問だった。

わたしの頭の中で、顧問から見える光景が一瞬のうちに組み立てられる。

テルドリンの足元にひざまずいているわたし。彼の下半身にはまだあの部分が露出しているばかりか、わたしがしっかりと握りしめている。そして、先ほどまでわたしたちが口走っていた言葉の数々。

顧問の口が今までにないくらい大きく開かれ、彼の絶叫が響き渡る

までがひどく長く感じられた。

「な、何をやってるんだ、貴様らー!!」

|||||

アンカノ顧問の緊急招集を受けて、全学の教職員と学生が達成の間に集められた。例外なく全員だ。ブレリナは部屋で睡魔に負けて熟睡していたところを叩き起こされたらしく、大変不機嫌だった。だが、テルドリンの恨めしそうな顔はいい眠気覚ましになったようで、彼女はわたしたちと一緒に事のあらましを皆の前で打ち明けた。

「やはりそうだったんですね。二人とも魔力の感じが普段と全然違いましたから、もしかしてと思っていたんです」

ファラルダ先生はさらりと言い放った。話しかけられた時点では見破られていたのか、とわたしは思った。

「どうりで避けてばかりだったわけだ。あの……最後に話したことはとつくに忘れてるよね？ そうだと言ってくれよ」

オンマンドは鼻の頭まで真っ赤にしていた。わたしは罪悪感に苛まれた。

「あんた、免疫がなさすぎるんじゃない？ さっさと押し倒しちやえばよかった」

ニルヤはつんとした表情でわたしの耳元に囁きかけた。背筋が凍りついた。

「ジェイ・ザルゴをお媚に行けない体にしたのはテルドリンだったんだな！ 責任を取れ！」

ジェイ・ザルゴは誤解を招きそうなことを叫んで泣き崩れた。媚には行けると思うけど、ごめん、ジェイ・ザルゴ。

「停学！ いや、退学だ！ あのような破廉恥な行為を顧問たる私の目と鼻の先で行うとは!!」

アンカノ顧問は事の次第を知ってなお喚き続けている。彼はトイレの一番奥の個室で用を足していたらしい。そこに怪しげな声を上げる二人組が入ってきたから何事かと思いい、わざわざお手製の鍵開け

の呪文を使って現場に乱入したということだ。

「特に貴様。テルドリン・セロと言ったか？ サヴォス殿の温情でここに置いてもらっている分際で、なんだその態度は！」

顧問の攻撃の矛先はわたしの姿をしたテルドリンに向かった。それもそのはず、彼はキーキー騒ぎ立てる顧問を実に冷めた目で眺めており、名指しされようが一切動じない。

「やれやれ。懇切丁寧に事情を説明して下げたくない頭まで下げたのに。融通の利かない、典型的なアルトマーだな」

彼は小さく呟いた。運が悪かったのか、それともわざと聞こえるように言ったのか分からないが、顧問はそれを耳ざとく聞きつけ、さらにヒステリックに声を張り上げた。

「き、貴様ツ！ この大学の最高顧問の私を、サルモールのアンカノを馬鹿にするのか!?!」

顧問がテルドリンに向かって何かの呪文を発動しそうになったのを、アーチメイジのサヴォス・アレン先生が間に入って止めた。

「まあまあ、アンカノ殿、落ち着いて。まずは彼らを元に戻してやらなくてはなりません」

「どいてください！ 目にももの見せてやらないと気が済まない！」

その傍らで、変性魔法の教授であるトルフデイル先生は、ブレリナからわたしにかけて（はずだった）筋力増強の呪文について説明を受けていた。ブレリナが羊皮紙に書かれた複雑な図式の意味とわたしたちに起こったことを伝えるにつれ、先生の藍色の目はきらきらと輝きを増していった。

「素晴らしい！ つまりブレリナ、きみは二人の脳に致命傷を与えられたと擬似的に認識させることで魂を乖離させ、魂石ではなく互いの体を容れ物とみなして魂縛を行い、さらに死霊術の原理を変則的に応用……」

ブレリナの話が終わるか終わらないかのうちに、先生はブレリナに向かつて鼻息荒くまくし立てた。後半は専門的な用語が多すぎると早口すぎるのとでわたしには理解できなかった。とりあえず、わたしたちに想像以上に物騒な呪文がかけられたことだけは分かった。

「偶然とはいえ、よくこんなに強力な効果のある呪文を考え出せたものだ。ブレリナ、きみは将来有望だ！」

トルフデイル先生は自分より背の高いブレリナの肩を抱いた。ブレリナの今までしおらしく伏せていた顔に喜色が浮かんだ。

「本当ですか!? わたくしにもついに研究者としての芽が出たのですね。ありがとうございます、先生！」

テルドリンが大きな咳払いをした。トルフデイル先生とブレリナは瞬間に彼らの世界からこちらに意識を引き戻されたようだった。先生は、テルドリンとわたしに向かって大げさに腕を広げた。

「おお、すまんすまん。儂らにとつては大発見でも、きみたちにとつては災難だったな。……念のため聞くが、あと二、三日そのままにいる気はないか？」

トルフデイル先生はこの変わり者だらけの大学内では数少ない常識的な考え方の持ち主だと思っていたが、未知なるものへの探究心には勝てないらしい。

テルドリンとわたしは全力で先生の提案を拒絶した。あと数日このままにいるとして、その間にわたしたちが何をされるか、分かったものではないからだ。ブレリナの口車に乗ったわたしはともかく、巻き込まれただけのテルドリンがかわいそうだ。

先生は心底残念そうにあごひげをすごいた。

「そうか。ならば仕方ない、もう一度入れ替わりの呪文をかけて元に戻そう。ただブレリナの呪文だけでは少し心許ないから、色々と補強する必要がある……」

先生はぶつぶつ言いながらわたしたちに背を向け、他の何人かの教授や研究生を呼んで頭を寄せ合った。集められた人々の間から、「本当にもう元に戻してしまうのか?」「書籍にまとめればタムリエル中の魔術師がこぞって買い求めるだろうに」などといった言葉がだだ漏れしている。やはり断っておいて正解だった。

トルフデイル先生は、いきり立つ彼らの意思を統一するのに少し時間を費やした後、入れ替わりの呪文をどのように補強すればよいかについて彼らから意見を仰ぎ、それらを素早くまとめあげててきばきと

指示を出した。間もなくわたしたちは、教授たちが作り出したひどい味の薬湯をいくつも飲まされ、呪文を幾重にも重ねがけされた。

「さて。準備は整った。儂らの話を聞いていたので分かっていると思うが、仕上げはきみたちにやってもらう」

トルフデイル先生は、わたしたちに気合を入れるようにパンと手を叩いた。

「まずは、しっかりと抱き合ってください」

入れ替えの呪文が発動されるときは互いが物理的にも心理的にも近くにいた方が確実に違いないと誰かが言い出したことにより、わたしたちは大学中の人が見守る中で抱き合い、見つめ合うことになってしまった。彼らから見たら既に関係を持っているらしい者同士が。わたしたちから見たら自分自身と。……駄目だ、下手に意識してしまつたら卒倒する恐れがある。

わたしは極めて事務的な態度で自分自身の背中に腕を回した。テルドリンがわたしの口からウツと気持ち悪そうな呻き声を上げてあからさまに視線を逸らした。わたしだって同じ反応をしたい。自分の操っている腕の中にこれまた自分自身の体の厚みや温かさを感じている、という常識の範疇を超えた事実本能が警鐘を鳴らしている。

テルドリンはかなり躊躇った後、必要とあらばいつでもわたしを突き飛ばせるとも言いたげな手つきで、彼自身の腰をがちりと掴んで引き寄せた。わたしの顔がテルドリンの肩に、胸と腹がテルドリンの胴体に押しつけられた。マスク越しに体臭まで明瞭に感じられる。誰かがヒューヒューと茶化すような口笛を吹いた。なんの拷問だ、これは。

「よし。よくできている。次に、お互いの顔、つまり本来の自分の顔をしっかりと見据えて。それこそが本来あるべき自分だと心に刻み込むのだ」

わたしは既に、自分自身が赤くなったり青くなったりしているのを、嫌悪感を覚えながらも間近な距離からずっと眺め続けている。問題はテルドリンだ。

「兜は、外さなくてもいいか？」

テルドリンがやつと絞り出したような声で尋ねた。トルフデイル先生は灰色のあごひげを少しの間くるくるともてあそんでから答えた。

「きみがその姿を自分自身であると認識できるのなら」

「……それなら問題ない」

彼は、非常に不承不承といった様子でわたしに視線を向けた。わたしと彼は、まるで今にも口づけでも交わしそうな距離で、自分自身の目を（彼の方は兜のレンズを）思いきり覗き込む体勢になった。またもやどこかから口笛。塵と化して消えたい。

トルフデイル先生からさらに指示が出た。

「では、最後に、名前を。相手の名前を呼ぶんだ。自分が自分であり、相手が相手であることを自分と相手に言い聞かせるために」

最後にとんでもない試練が待っていたことを忘れていた。この体勢でさらに彼の名前を呼ばなければならない。もはや公開処刑だ。

でも、これでもし元に戻れなければ、わたしは彼の姿でずっと生活することになる。それ以前に、先生たちが研究者としての情熱に掻き立てられておかしな実験を始めてしまうかもしれない。そんなのは嫌だ。彼も同じように思っているはずだ。

わたしは、意を決して彼の名前を呼んだ。彼自身のかすれた声で、はつきりと、淀みなく。

「テルドリン。テルドリン・セロ」

テルドリンは、それにほとんど被せるようにして、わたしの声でわたしの名前を口にした。

その瞬間、わたしたちの周りで、さまざまな色の光の帯が一斉に沸き立った。それらの光は輝きを増しながら重なり合い、まばゆい白一色に収斂されていった。まぶしさに目をやられ、頭がくらくらした。身の回りの事象の何もかもが影のように薄くなり、自分から遠ざかっていく。わたしはその中で唯一存在を実感できるテルドリンの、わたし自身の体だけは離すまいと、無我夢中で抱きしめた。薄れゆく意識の中で、わたしはテルドリンが彼自身の胴に腕を回し指を食い込ませ

る感觸を捉えた。

## 7. ネレヴァアリンの祝福

枯れた草木や朽ちた集落の跡が点在する起伏の激しい荒野を、わたしは歩いている。

時折、前方から強い風が吹いて乾ききった土を舞い上げ、小規模な砂嵐を生じさせる。砂嵐はわたしが着込んでいるキチンの鎧に襲いかかつてパチパチと音を立てる。さらに口元のマスクや、鎧の隙間から覗く服に牙を立て、その下のわたしの肌に刺すような痛みを与える。

少し足を止めて振り返れば、遠くに裾の長い赤い山が見える。山の頂上からは黒煙がたなびいている。黒煙は薄まりながらも空の隅々まで広がっている。そのせいで空はのっぺりと仄暗い。太陽も、月も、星も、この空には輝かない。ゆえに植物は枯れ、大地は潤いを失い、かつて豊かだったこの土地は荒れ果て、今のような姿になったのだ。

少し前をわたしと同じキチンの鎧を着込んだ人物が歩いている。わたしの雇い主だ。彼は——男か女か、人間かエルフか、若いのか年老いているのかさえ未だに分からないが、便宜的にそう呼ぶことにしよう——、疲れを知らない軽快な足取りでこの荒涼たる光景の中を進んでいく。

どれだけそうして二人で歩いていただろうか。前方にレドラン様式の丸い建物がいくつか並んでいるのが見えてきた。その向こうには黒い海が、小さな帆船と船着き場をひとつずつ浮かべて横たわっていた。潮の匂いと湿り気を含んだ海風が前からどっと吹いてきた。砂嵐を巻き起こす風はこの海上で生まれて陸地に向かって吹き込んでいたのだ。

わたしたちは海風に抗いながら、一回り大きな建物の前までやってきた。骨削の鎧を着た衛兵が扉の前にかがり火を片手に持って立っていた。

雇い主はそこで立ち止まってくると振り向き、今まで背負っていた杖をわたしに投げるように渡してきた。



「はいこれ。今までの報酬」

わたしはそのちららんぼらんな態度が彼の常態であるとは知りつつも、改めて呆れ返った。長い旅を共にして今が別れ際だというのに、いくらなんでもあつさりしすぎていないだろうか。だが、それが彼という人間（あるいはエルフ）なのだ。わたしは彼の淡泊な態度の方は諦めて、「報酬」に対して文句を言うことにした。

「お前の持っていたガラクタが報酬だって？ 私には杖など使わないぞ。戦闘の邪魔にしかない」

その杖はごく軽く、先端にガラス細工のような独特の飾りがついていた。そして確認した限りでは、なんの魔力も感じられなかった。

「いや、ガラクタに見えてすごいんだよその杖は。それなりの店で売ってみな。この先十年は働かなくて済むくらいの小金持ちになるから」

彼がのんびりと言った。わたしは、彼が自分を騙そうとしているのではないかと一瞬思った。しかし、彼が誰かに不義理を働くなどは、これまでの言動を思い起こす限りでは信じられなかったため、その報酬を受け入れることにした。

「この杖はなんて名前なんだ？」

「ん、なんだったつけ。ずっと昔に教えてもらったきりだからなあ。え、つと……」

彼は頭の後ろで腕組みをしてその場で何周かぐるぐると歩き回ってから、パチンと指を鳴らした。

「ああそうだ、マグナスの杖！」

彼はその姿勢のまま、手の平を開いてひらひら振った。

「じゃ、そういうことで。ここでお別れだ、テルドリン」

彼は跳ねるように軽やかな歩調で、わたしの体を肩がぎりぎり触れ合わない程度に避けて歩き去っていくようにする——その直前に素早く、二枚のマスク越しにわたしに口づけをした。ほんの一瞬の出来事だったので、わたしの錯覚ではないかとさえ思ったほどだったが、唇に残った感触は幻として片付けるには生々しすぎた。

「きみの未来にネレヴァルの祝福あれ」

最後に聞いた声は、思いがけず柔らかく、優しかった。

わたしは慌てて振り返り、今のはいったいどういうつもりかと彼の背中に向かって叫んだ。彼は返事をせず、足を止めることもなかった。淡々と元来た道を辿っていき、やがて一段と強い海風により沸き立った砂嵐の中に消えた。

わたしはそれから長いこと、彼の案内がなければ何も見出せないその荒野を惚けたように眺めていた。

|||||

瞼を開けると、そこはウィンターホールド大学の自室で、わたしはベッドに寝かされていた。わたしのすぐ横に誰かが椅子に腰掛けて座っていた。髪がぼさぼさのままのブレリナ・マリオンだった。彼女は祈るような眼差しでわたしを見守っていた。わたしは手について上半身を起こした。

「……ブレリナ」

耳に響いたのは、紛れもない元のわたし自身の声だった。おそろおそろ顔に触れてみた。兜もマスクも着けておらず、馴染みのある感触が返ってきた。体を見下ろし、筋肉を軽く動かしてみた。大学から支給された魔法のローブを着込んでいる肉体は、先ほどまで自分のものだったそれと比べるとひよろひよろしていて頼りなかった。しかし、間違いなく普段から使い慣れているわたし自身の体だった。

わたしはわたしに戻れたのだ。安堵が胸に押し寄せ、わたしは自然と顔を綻ばせた。

「戻れた。元の体に戻れたよ、ブレリナ！」

ブレリナが息を弾ませて抱きついてきた。

「よかった！ 呪文は成功したのね！」

わたしはブレリナと抱き合い、存分に喜びを分かち合った。ブレリナは、主にわたしの無事を祝福することと謝罪することを中心にしつつも、あの大がかりな入れ替わりの呪文が効力を発揮したことに大きな感動を覚えたようで、素晴らしいとかすごいとかいう意味を持つあ

らゆる語句をその合間に差し込んだ。わたしは苦笑した。今回の出来事を通じて、彼女の呪文の被験者になると決まってもなくてもないことになるをよく分かったわけだが、それでもこうして澆刺としている彼女を見ると、また付き合ってもいいかな、なんて思ってしまう。

ある程度興奮が収まったら、テルドリンのことが気にかかった。自室の中を見回して、毛皮の寝床の上でキチンの鎧を着た人物がむくりと起き上がったところなのを認めた。わたしはベッドから飛び降りるようにして彼に駆け寄った。

「テルドリン」

彼は自分の体のあちこちを確かめるように触ったり動かしたりしていた。その作業はどうやら彼の納得のいく結果に終わったらしく、彼はそこで初めてわたしを見上げた。

「戻ってるな」

当然ながらいつもの少しかすれたぶっきらぼうな声で、兜を被ったままなので表情も分からない。でも、わたしにはテルドリンがわたしと同じようにほっとしているような気がした。

ブレリナによれば、入れ替わりの呪文が発動した後、わたしたちはその場で抱き合ったまま昏倒し、この部屋に運び込まれたそうだ。わたしがテルドリンの腕で自分の体をがちがちに抱え込んでしまっていたため、運んだり、寝かせるために引き剥がしたりするには苦労したという。それから数時間ほど、見張り役を名乗り出たブレリナの前でわたしたちは眠り続けていたらしい。

「トルフデイル先生を呼んでくるから、二人ともここで待っていてね」  
ブレリナは一通りの説明を終えてから、走るような勢いで部屋を出ていった。

わたしはテルドリンの方を向いてベッドに腰掛けた。先生たちに強力な呪文をかけられたせいも、それとも一日に二度も入れ替わったことが原因か、全身が緩やかに疲労して立っているのがつらい。テルドリンも同じ状態のようで、寝床に腰を下ろしたまま立ち上がるうとはしなかった。

「さすがのブレリナ嬢も少しは責任を感じているみたいだな。謝礼はさぞかしはずんでくれるんじゃないか？」

テルドリンの皮肉っぽい一言で、わたしは危うく謝礼の話を忘れかけていたことに気づいた。

「ああ、そうだった！ お金は後でもらうって話だったね」

テルドリンは軽く肩をすくめた。

「しつかりしてくれ。今日一日がただ働きだったなんて私は信じたくないぞ」

遠回しに分け前を要求している。それももつともなことだろう、今回は完全に彼を巻き込む形になってしまったのだから。

「ごめんごめん。ブレリナには忘れないうちに釘を刺しておく。受け取り次第、半分テルドリンに渡す」

「そいつは結構。さんざん苦勞させられた甲斐があつたよ」

テルドリンは腕組みをして体を左右に軽く揺らした。そんな些細な動作も、やはり彼が彼自身の体で行った方がしっくりくる。わたしはほっとして微笑んだ。

テルドリンは何か言いたげにわたしを数秒間見つめてから急に俯き、口元の赤いマスクに手を伸ばした。

「落ち着かないと思つたら、お前、マスクの着け方を微妙に間違つてるぞ」

テルドリンはキチンの兜と赤いマスクの位置を調整し始めた。昼食の後で着け直したときにどこか間違つてしまったのだろう。わたしは、ごめん、と気のない返事をしながら彼の様子をぼんやり眺めていた。彼のこの体をついさつきまで自分が操っていたなんて、どうにも信じられない気分だ。

そこへ、ちょうどブレリナがトルフデイル先生を連れて帰ってきた。わたしがベッドから腰を上げようとするのを先生は押し留めた。彼はテルドリンとわたしを頭のとっぺんからつま先までくまなくじっと観察してから、満足そうに頷いた。

「うんうん。見た目も魔力の流れも特におかしなところはないね」

ブレリナは、事態が完全に収まったと分かつたら若干の罪悪感に苛

まれたらしく、トルフデイル先生やわたし、テルドリンの顔色をこわごとと窺っている。トルフデイル先生はそんな彼女に穏やかに笑いかけた。

「ブレリナよ、あまり気にするな。叡智は試行錯誤の積み重ねによって生まれるものだ。失敗なんてよくあることだし、ましてや今回は失敗じゃない。体も魂も傷つけずに入れ替え、また元に戻せた。大成功だ。きみたちもそう思うだろう？」

にこやかに話を振られた。わたしが、ええまあ、と曖昧に同意する横で、テルドリンは呆れたように小さく溜息をついた。

トルフデイル先生はわたしたちの反応を見てそれ以上の言及は無用と考えたらしく、さてと、と言葉を継いだ。

「そんなわけで、教授陣のほとんどは全く気にしていないというか、むしろさっさと解決してしまったことを残念がっているんだがね。アスカノ殿がどうしても気が済まないと言うものだから、一応きみたちには、罰、のようなものを与えることになってしまった」

やはりアスカノ顧問の癩癩は収まらなかったか。わたしはブレリナと視線を交わし、トルフデイル先生の次の言葉を待った。

「実は今、極秘裏に『サールザル』という初期のノルドの遺跡の発掘を行っている。きみたちにはそれに参加してもらおうことになった」

トルフデイル先生は、スカイリムの出身でないブレリナとわたしにも理解できるようにと思ったのか、丁寧な解説付きで「罰」の内容を明かした。しかし、ブレリナもわたしもその場所についてはよく知っていた。ウインターホールドの町の人々や大学の学生の間での定番の伝説、あるいは怪談話に登場する場所だからだ。

サールザルとは、ノルドの始祖イヌグラモルが建設したタムリエル最古の都市の一つであり、スノーエルフによる凄惨な侵略で滅びたと伝説に謳われる場所だ。怪談話の方では、当時の死者が今でも徘徊していて、時折彷徨い出てきては、道を外れた旅人を自分たちの死に場所に引きずり込むとおどろおどろしく語られている。実際には、遺跡は嚴重に封鎖されているし、死者が自分たちの領域の外に出ることも滅多にないのだが。

わたしたちが既にサールザルについての初歩的な知識を持っていることを伝えると、トルフデイル先生は手間が省けたとばかりに具体的な話に移った。

「これまでではアーニエル先生がときどき一人で発掘していただけだったが、一昨日と昨日の会議で方針が変わった。まずは、少人数で色々な箇所を試掘して当たりをつけてから、全学を動員して大規模な発掘を行う。きみたちには、始めの少人数での試掘作業に儼と共に加わってもらいたい」

わたしはわくわくする気持ちを抑えきれなかった。それは、罰というよりも褒賞ではないだろうか。あの有名なサールザルをこの目で見られる、しかも皆より一足早く入れるなんて。ブレリナも同じ気持ちでいるようで、灰色の頬をほのかに上気させていた。

「念のため聞いておくが、それには当然、私もついていくことができるんだらうな？」

テルドリリンが尋ねた。トルフデイル先生は、もちろん、と首を縦に振った。

「きみに来てもらった方がこちらとしても助かる。それにアンカノ殿も……その、きみとぜひ一度、一緒に仕事をしたいと言っていた」

先生はアンカノ顧問について言いづらそうに付け足した。テルドリリンはせせら笑った。

「アンカノも参加するのか？ 意外だな。命令だけして偉そうにふんぞり返っているタイプだと思っていた」

どうやら彼はアンカノ顧問のことが気に入らないらしい。無論、わたしも顧問のことはニルヤの次くらいに苦手だけれども、接点がないのでそこまで強い感情は持てない。

「ま、どうせ、小生意気な老いぼれダンマーに身の程を思い知らせてやろうとでも考えているのだろう。一向に構わないが、私はこいつの従者だ。目を離すわけにはいかない。こき使われるのならこいつも一緒にしてくれ」

彼はわたしを顎で示した。……何か、面倒なことになりそうな予感がする。

トルフデイル先生は申し訳なきそうに弱々しく笑った。

「彼がきみたちを理不尽に扱わないよう儂もできる限り注意するよ。すまないな、どうにもサルモールとの付き合い方は難しくて」

テルドリンはトルフデイル先生を慰めるように声を和らげた。

「気にしないでくれ。お前たちに非はない。むしろサルモールの者をあそこまで大人しく丸め込んでいるお前やサヴオスに感服しているよ、私は」

|||||

トルフデイル先生は、わたしたちが来週のモーundasの日から発掘作業に参加すること、それまでにサルザルの歴史について図書館で調べておいてほしい旨を伝えてわたしの部屋を去った。ブレリナからは、どうせなら調べ物は一緒にやろうと提案された。わたしは快く了解し、ついでの今回の報酬のことを彼女にそれとなく思い出してもらってから別れた。

わたしの部屋の中は再びテルドリンとわたしだけになった。長い一日だった、とわたしは思った。

「もう寝たいんだけど、明かりを消していい？」

わたしは扉に鍵を掛けてから、その横に備え付けられているドウーマー製の燭台のレバーに手を添えた。

「ああ。構わない」

燭台から光が消えると窓のない部屋は一気に闇に包まれた。わたしは手探りでベッドに戻り、横になった。ブレリナと明日からの予定について話していたあたりから強烈な睡魔に襲われていたので、少し気を抜けばすぐに心地よい眠りに就けるだろう。しかし、その前にテルドリンに伝えておかなければならないことがある。

「テルドリン。今日はごめんね。あんなことに巻き込んで、あなたの体でさんざん情けないところを見せちゃって」

ベッドの斜め下からテルドリンの声が聞こえた。

「もう慣れっこだよ、お前やお前の友達がやらかしたことに巻き込ま

れるのは。それよりも私こそ、……すまなかつたな、色々」と

だいぶ不貞腐れた口調ではあったものの、彼にしては珍しく詫びてきた。わたしは驚いて少し眠気が醒めてしまった。

「気にしないで。テルドリンは悪くない。変な話だけど、わたしはテルドリンのことが少しだけ分かって良かったよ。普段は兜のせいで表情が見えないし、マツサージの件も全然話してくれなかったから」無論、自分の百面相を眺めるのは楽しい気分ではなかった。ブレリナやトルフデイル先生から大金を積まれてもう一度入れ替わって欲しいと頼み込まれても絶対に拒否するだろう。しかし終わった後で思い返してみれば、わたしはわたし自身の体を通して彼が普段隠している一面を垣間見ることができたのだ。彼はあの無感情な兜の下で、お喋りで皮肉っぽくて実は心優しい彼に相応しく、さまざまな表情を浮かべている。そう思うと嬉しくなった。

テルドリンは何拍か置いてから、そうか、と短く応えた。不貞腐れた声色のままだったけれど、どことなく温かな響きも混じっているようにわたしには感じられた。

話も一段落し、ちょうどよく眠りの波が押し寄せてきたので、わたしは素直にその誘惑に従った。

最後に考えていたテルドリンの素顔のことが残響となって頭の中にたゆたう。彼の素顔、豊かな表情を隠す兜、キチンの兜、夢で見た、もう一人のキチンの兜の人物、あれは……。

「そういうえば、さつき夢でね、わたしはまだテルドリンで、誰かと、旅を——」

どこまで伝えられたかは判然としなかった。わたしは心地良いまどろみに吸い寄せられるようにして落ちていき、翌朝に朝食の時間を知らせる魔法の鐘が鳴るまで、ずっと昔の、とても幸せだった頃の夢を見ていた。

—『君の名は。』了—



#### 4—3： サールザルにて

##### 1. 決裂

サールザルは、ウインターホールドから雪山を一つ越えた先にあった。氷に侵食された岩山に周りを囲まれて、石造りの巨大な遺跡が雪混じりの土の中から顔を出していた。遺跡の手前の土は深く掘り下げられ、足場が組まれていた。

近くにある亡霊の海からは体の芯まで凍えさせる風が常に吹きつけていて、視界を確保するために無防備になっていたわたしの両目の周りは痛みを通り越して何も感じなくなっていた。だが、掘り下げられたところまでは風も届かなかった。わたしは口元に巻いていた厚手の布を外した。それまでと比べるといくらか生温い冷気が頬に広がった。何度か瞬きをすると、目尻がちくちく痛んだ。

目の前には、複雑な文様の彫られた黒っぽい石の扉——この遺跡の入口があった。人が三人並んだくらいの幅のある両開きの扉だった。わたしは、腹の奥から心地良い熱が湧いてくるのを感じた。新しい物や場所に出合ったときは、いつもこうなる。ノルドの遺跡を目の前にしたときはなぜか、特にこの感覚が強くなる気がする。今もそうだ。あの石の扉を押して中に入ってみたくてたまらない。

「二人とも、よく頑張ったな。もう結構な時間だ。発掘は明日からにしよう」

なめした毛皮の帽子、マフラーとコートでばっちり寒さから身を守っているトルフデイル先生が、サールザルの外観に見入っていたブレリナ・マリオンとわたしに呼びかけた。白い滑らかな生地のコートを着ているブレリナが弾んだ息を漏らした。

「よかった！ これ以上何かするって言われたらどうしようかと思っ  
ていました。朝から緊張し通しだったから」

「ははは、アーニエルは早速作業を手伝わせたがるかもしれないが、詰め込みすぎるのは良くない。今日のところは彼を中から引っ張り出してきて、何日かぶりのまともな食事を摂らせて終わりだな」

先生とブレリナのやり取りにがっかりする自分が半分、ほっとする自分が半分、といったところだった。ブレリナの言葉通り、今日は一日大変だったからだ。

わたしたちは、まだ鶏も鳴かない早朝に起きて、ウインターホールドの町の西側にある雪山の急斜面を息を切らしながら登った。その後はなだらかな下り坂だったが、代わりに一帯に住み着いていた狼やトロールと戦わなければならなかった。もちろん、戦闘の苦手なわたしは敵にかすり傷一つつけられなかった。まともな戦力になっていたのはトルフデイル先生、ブレリナ、それにわたしの従者のテルドリン・セロだった。

「まったく馬鹿馬鹿しい。なぜ転移の魔法陣を構築しておかなかったのです。一日を無駄にしてしまったではないか」

わたしたちの背後から、氷で作ったダガーのように冷え冷えとした男の声が響いた。ウインターホールド大学顧問のハイエルフ、アンカノだ。いつも着ているサルモールの服と同じ色のコートを纏って、線の細い長身で足場の基礎部分に寄りかかっていた。ぐつたりと疲れきった顔をしていたが、それでもなおわたしたちを威圧するように腰に手を当て、肩をそびやかしていた。

トルフデイル先生は眉を八の字にして顎髭をしごいた。

「はあ。急に決まったことですから」

「準備する時間は何日もあった。大学で行われているくだらぬ研究をいくつか中断させて、こちらに人員を回せばよかった話です」

「そう言われましても、魔法陣の構築も維持も手間がかかりますからねえ……。遺跡は逃げませんから、一日程度は問題にならないと思いますが」

「貴方がたにとつてはそうでしょうな。しかし私は多忙の身でしてね、いささか事情が異なります。嘆かわしいことだ——かつては北にウインターホールドありと言われたほどの大学であったのに、大切な賓客に対する配慮も、有能な人材の育成も、今や我々サルモールには及びもつかぬ。私がこの大学にやってきたのは、かような惨状を改善するためでもあるとご理解いただきたい」

「はあ。それは非常にありがたいことですがねえ」

話し続けるうちに、アンカノ顧問はいやに得意げな演説めいた口調になっていった。反対に、トルフデイル先生の最後の一言はだいぶおぎなりだった。

サールザルの発掘はもともとアーニエル・ゲイン先生が一人で細々と行っていたが、顧問の発案で、大学全体で大がかりな発掘を行うことになった。わたしたちはその先遣隊だ。

顧問が更に何か言おうと口を開きかけたところへ、一行のしんがりを務めていたテルドリンが近づいてきた。いつも通りのキッチン装備で全身を固めている彼は、わたしたちの中では唯一、疲労した様子を見せていなかった。本人曰くモロウインドーの傭兵だそうだから、このくらいは余裕なのだろう。

「そんなに時間が惜しいなら、これ以上無駄にせず、リコールの魔法か何かで大学に帰ってはいかがかな。遺跡掘りなど下っ端のやることだ。わざわざそのご立派な服の裾を汚す必要はない」

テルドリンは顧問の言動のせいでもかなり気を悪くしているらしい。サールザルに到着するまでの顧問は、お世辞にもわたしたち学生の模範になるような態度だったとは言えなかった。山を登る時には妙に大人しかった、というか、いつの間にか誰よりも早く登りきっていて驚いたが、その先は、敵に襲われるたびに自分だけ透明化して隠れたり、大学の食堂で用意してもらった携帯食に文句を言ったり、疲れると歩く速度を下げて物言いたげな溜息をつき、それを無視していれば怒ったりと、やりたい放題だった。

「傭兵の分際で、よくも私に向かってそのような無礼な口を聞けたものだ」

彼は筋の通った鼻筋を見せつけるように、顎を上向けた。

「無論、本来ならば私が埃塗れになる必要はない。しかしこの遺跡には私の推測によると極めて重要な、大学の未来に関わる発見が眠っている。それを見逃すことのないよう導いてやるのが大学顧問としての責務だ。」

それに、その二人が先日の愚行の償いに励んでいるかも見張らね

ばならないからな」

顧問はブレリナとわたしをぎろりと睨んだ。わたしたちは数日前に大学でとある騒動を起こした。今回わたしたち二人だけが先遣隊となったのは、顧問がわたしたちになんらかの罰を与えろと言っただけで聞かなかったからだ。

テルドリンはあからさまな嘲り笑いの絡んだ声で言い返した。

「身に余る役割を与えられたからといって、そう肩肘を張ることもあるまい。アーニエルとトルフデイルは遺跡掘りと学生の世話にかけては、あんたよりよほど優秀だろうよ」

「身に余る、だと？ 灰だらけの醜い老いぼれめ。私の実力を知らないからそのようなことが言えるのだ」

「ほう、注目に値するだけの実力があつたのか。それは失礼した。これまでのあんたの様子からはまるで想像がつかなかったよ」

売り言葉に買い言葉だ。顧問はあれだけ疲れた素振りを見せているのに、よくわたしたちに嫌味を言う気力が残っているものだ。テルドリンも突つかかりすぎだ。相手はサルモールの一員なのだ。本気で怒らせたらずいことにならないだろうか。

「トルフデイル先生。夕食の準備をしましょう。寝泊まりする場所はどこですか？」

わたしはトルフデイル先生に尋ねた。先生はそわそわと触つていた顎髭から手を離して、隅にあつた掘つ立て小屋を指さした。

「ああ、うん、そうだな。これからはしばらくはあの小屋で寝ることになる。邪魔なものを外に出してくれ。アーニエルは儂が迎えに行ってくる」

トルフデイル先生は遺跡の扉の方へ歩いていった。わたしはブレリナに先に小屋に向かってほしいと伝えてから、顧問となじり合っているテルドリンに声を掛けた。

「テルドリン。寝床と夕ご飯の準備をするよ」

テルドリンは、むう、と短く唸ってわたしに視線を移した。

「分かっている。まずはあの小屋を片付ければいいんだな」

顧問と喧嘩しながら、わたしたちの会話はすっかり聞いていたらし

い。器用なものだ。

「うん。それから——」

わたしは精一杯の親しみを込めた笑顔で顧問に話しかけようとした。ところが、顧問は邪魔されたのが気に食わなかったのか、金色の目をきつく細めてわたしを見下ろした。

「まさか、手伝えとは言わないだろうな」

まあ、そういう答えが返ってくるだろうとは思っていた。わたしは笑顔を崩さないように努めて、準備ができたら呼ぶと伝えた。テルドリンは、やれやれ、と小さく呟き、小屋へ向かうわたしの後ろに続いた。

|||||

アーニエル先生は、トルフデイル先生が三度くらい呼びにいつてようやく遺跡の外へ出てきた。着ている服はよれよれで埃だらけ、おまけに生地が薄く、外へ出た途端、連続で大きなくしゃみをしていた。「遺跡の中は寒くないんだよ。コートなんて着てたら作業の邪魔になるしな」

掘っ立て小屋に置き去りにされていたコートを羽織り、板張りの床に敷いた毛皮の敷物の上に腰を下ろし、テルドリンとわたしで作った簡単な鶏肉と人参のスープを音を立てて啜って、アーニエル先生は言った。わたしたちは車座になって座っていた——暖炉のそばに一つだけ置いてある椅子で、可もなく不可もなくといった表情でスープを味わっている顧問を除いては。

トルフデイル先生が尋ねた。

「作業は順調か、アーニエル」

「んー、まあな。俺一人だったから、まだ魔術師ギルドの報告書のおさらいくらいしか済んでないけど」

アーニエル先生は眉間に皺を寄せ、スープの最後の一口を啜り終えた。

「魔術師ギルドって、何百年も前になくなつた？」

わたしは驚いて尋ねた。魔術師ギルドは戦士ギルドと同じようにタムリエル全土に支部があつたが、大昔に解体されてしまったと聞いた。

アーニエル先生が空になつたお椀を目の前の床に置いた。

「だいたい二百年前だ。あんたはもう生まれてたんだつたか、テルドリリン」

「ああ。モロウインドで傭兵をやっていた。尤も、私は連中とはあまり関わり合いにならないようにしていたよ。召喚に失敗したデイドラに付け狙われたり、つまらんことで仲間割れを起こしたり、護衛をするところくなことがなかった」

テルドリリンは呆れ声で答えた。

アーニエル先生はからからと笑つた。

「そりゃあご愁傷様。そういう奴は目立つんだよなあ。実際はクソ真面目にコツコツ研究してる連中も大勢いたんだがな。ここを発掘してた連中もそうだ。生憎オブリビオンの動乱でそれどころじゃなくなつちまつたつぽいけど。」

報告書はうちの図書館に埋もれてた。帝国の考古学者と合同調査をやつてたらしい。そのおかげで俺たちはまた一から始めなくて済んだつてわけだ」

「二百年前の魔術師ギルドの仕事を、子孫でもないわたしたちが引き継ぐって……なんだか、すごいですね」

調査隊の人たちは、テルドリリンのようにエルフでなければもう生きてはいない。それでも記録さえ残っていれば後を継ぐ人がこうして現れる。素晴らしいことだと思つて、わたしは相槌を打った。

そこへ、顧問の冷たい声が飛んできた。

「彼らの無能さには感謝すべきだな。おかげでこれから発見するものは全て私たちのものになるのだから」

彼はこちらに目も向けず、スプーンでお椀の中身をゆっくりかき混ぜながら尋ねた。

「それで？ 分かつたことは？」

アーニエル先生は何か言いたげに顔をくしゃつと歪めていたが、顧問の方へ体の向きを変えた。

「報告書の通り、初期のノルド、つまり末期アトモラ人の入浴の仕方は今のノルドとほとんど変わらないようです。こいつはとても面白いことです。他にもノルドが無意識にやつてることの中に末期アトモラ人の名残があるかもしれません。」

それと、植物の種は帝国の学者が持ち去つちまつて跡形もありませんでした。惜しいですね、うまいこと復活させりやあ食えるメシの種類が増えたかもしれないのに。

あとですね、『涙の夜』の壁画は、発掘を始めた時から何度も見てますが、まあ見事なもんです。他の壁画の作者とは力量が違います。古代ノルドの彫刻画の傑作の一つと言つてもいい。その手の専門家ももしどこかにいるなら見せてやりたいですね……」

話しているうちに興が乗つたらしく、アーニエル先生の声と身振りは次第に大きくなっていった。

一方の顧問は、眉間と口角にうつすらと皺を作つて、スープをひとさじずつ口に運んでいた。アーニエル先生の声が高まるにつれて眉間と口角の皺はどんどん深くなっていった。しまいに顧問は話をばつさりと呼き切つた。

「貴方はこの何年も、いったい何を調査してきたのか。私たちが知るべきはスノーエルフの探していた物のありかだけだ。それこそが報告書の要であつたらうに。どうやら貴方は読解力に少々問題があるらしい」

わたしは呆気に取られた。なんの話だろう？ サールザルは、ノルドの人口増加を危ぶんだスノーエルフによつて、住民を虐殺され占領されたと聞いていた。ここに来る前に調べた文献にも同じことが書いてあつた。スノーエルフが何かを探していたなんて聞いたことがない。

アーニエル先生は不満そうに鼻息を噴き出し、先ほどまでとは打つて変わつてやる気のない義務的な調子で答えた。

「確かにあの著者はスノーエルフ云々にえらく固執してましたね。正

直、俺はちいと考え過ぎじゃないかって思ってたけど。まあ、あなたに言われたんでももちろん一通り調べましたよ。でも、スノーエルフの攻撃の痕跡を辿ろうにも、すっかり修復されて跡形もない、と、今んところは報告書通りです。ただ、ギルドが調査してないいくつかの落盤箇所を先を探せばなんかあるかもしれない、って感じですかね」

顧問はスープをちまちまと飲みながらアーニエル先生の報告を聞いていた。先生が言葉を切るとすぐさま、顧問は問いただすような調子で尋ねた。

「万に一つもありえぬとは思いますが、まだ落盤を除去していない、ということはないでしょうか？」

アーニエル先生は、顧問の厳格なオーラを吹き飛ばすように、けらけらと笑った。

「いやいや、むしろあの量を一人で片付けられる方がありえないですよ。俺はそのために大学の学生を総動員するんだとばかり思ってたがね」

顧問が目を軽く見開いた。

「貴方は、土砂のひと山ひと山を汗水垂らして掘り返そうとしているのか？ ああ、まったく、そこまで愚かとは思わなかった。我々には魔法があるでしょう。落盤などエクスペロージョンでさっさと吹き飛ばせばよいのです」

アーニエル先生の肩がぴくりと震えた。彼は強ばった声で答えた。「言わせてもらいますがね。遺跡でエクスペロージョンを使うならば、それこそ馬鹿のやることです。特にこの遺跡は何千年も前からあるんだ、当たりどころが悪けりや更にデカイ落盤が起きますし、周辺の遺物も壊れちゃいます。大切な研究対象なんですから、慎重にやっついていかにやあいけません」

顧問は「馬鹿」のところ眉毛を持ち上げ、アーニエル先生の話の聞くにつれて鼻の穴を膨らませていき、ついにぶちまけた。

「大切な研究対象？ ドゥーマーの遺跡ならともかく、こんな古臭いノルドの遺跡をつぶさに研究してなんの意味がある。肝心なのは、スノーエルフの欲しがっていた物だけだ」



顧問はスープの残りを飲み干すと、お椀とスプーンを傍らの床に置いた。

「明日になったらすぐ、落盤箇所をエクスプロージョンで全て貫通させるべきだ。私と貴方、トルフデイル、ブレリナ・マリオンの四人で作業すれば長くとも半日で終わるでしょう。エクスプロージョンを使えない残りの二人には貫通した道の探索をさせます。よろしいですな？」

アーニエル先生は大きくのけぞった。肩を落とし、しばらく黙りこくっていたかと思うと、ぼそりと小さく、駄目だ、と言った。

眉をひそめた顧問に、アーニエル先生はがばりと顔を上げて、唾を飛ばしてまくし立てた。

「あー、駄目だ駄目だ！ あんたの命令には絶対に従わない。スノーエルフの探し物だけありや十分なあ？ ふざけるなよ。あんたは考古学つてもものをなんも分かつちやいない。第一、ただでさえノルドはこの発掘にいい顔をしてない。少しでも何かやらかしてみろ、あの石頭の首長が黙ってないぞ」

さしもの顧問もアーニエル先生に気圧されているようだった。膝の上に置いた両手の指先が先生の大声に反応してびくびく動いていた。しかし、顧問は負けじと、声高に言い返した。

「私は大学全体の利益を優先している。貴方のこの仕事への思い入れにも、ノルドの感情にも重要性は認められない。しかも現在のウインターホルドの経済は完全に大学頼みだ。私たちがどのように振る舞おうと締め出すことはできない。万一そうなたとて、サルモールに助力を仰げばいくらでも——」

「御託はもう沢山だ！」

アーニエル先生がぴしゃりと言い放った。顧問の演説をしているかのように朗々とした声が途絶え、小屋の中が静まり返った。アーニエル先生は大きく息を吸って、吐いた。それから、いくらか落ち着いた、しかしやはり底の方で何かが燃えたぎっている口調で続けた。

「この発掘の責任者は俺だ。あんたじゃない。あんたがサルモールでも大学の顧問でも関係ない。みんなには俺の指示で動いてもらう」

顧問は、苦々しげな表情でアーニエル先生を見つめていた。やがて、唇をぐにやりと不格好に開け、絞り出した。

「ああ、どうぞご自由に。貴方のことはサヴオス殿に報告します。彼の方が、貴方よりはいくらか、自分たちの立場について理解がありませんからな」

顧問はブーツで鋭く床を蹴って立ち上がり、小屋の扉につかつかと近づいて勢いよく開き、真つ暗な戸外へと歩き去った。外の冷気が一気に小屋の中へ押し寄せてきた。テルドリンがぶつくさ文句を言いながら扉を閉めた。

「……大丈夫でしょうか」

わたしは誰にもなく尋ねた。アーニエル先生はまだ怒りが醒めやらないといった様子で、毛皮の敷物の上に肘をつけてどっかりと寝転んだ。

「構いやしない。あの野郎のことは前から気に入らなかつたんだ。俺たちを下に見てふんぞり返りやがって。あいつの差し金で煮られようと焼かれようと、後悔なんてないね」

トルフデイル先生がアーニエル先生を励ますように付け加えた。

「サヴオス先生も真面目には取り合わんよ。サルモールに報告されたら少し困ったことになるかもしれないが、そのときはそのときで、ミラベルに対策を考えてもらおう」

顧問がアーニエル先生についてどのようなことを誰に言いつけるかも気になるが、今はそれよりも。

「顧問は大学まで一人で帰れるんでしょうか？ あんなに大騒ぎしてたのに」

その疑問に答えたのはテルドリンだった。

「あの根性なしが昼間と同じ道を通って帰るわけがなからう。もう既に取りコールの魔法で大学に戻って、サヴオスの部屋に押しかけているんじゃないか？ あるいはそこらの物陰でどう言い訳して小屋の中に戻ろうか考えあぐねているといったところか」

あらかじめ指定しておいた地点まで瞬間移動することができるというリコールの魔法は難しいらしく、使っている人は見たことがない

が、魔法大学の顧問に任命されるくらいの人物であれば使いこなせても不思議ではない。それに、例えリコールが使えなくても、テルドリンの言うように小屋に戻ってくるとか、やり過ぎす手段はある。確かに大丈夫そうだ。

その時、右肩に温かいものがすとんと落ちてきた。見れば、右隣に膝を揃えて座っていたブレリナが、わたしに寄りかかって寝息を立てていた。空になったスプーンのお椀とスプーンは行儀良く膝の前に揃えてあった。そういえば、ブレリナはこれまでのやり取りに一言も口を挟まなかった。よほど疲れていたのだろう。

トルフデイル先生は、幼い孫でも見守るような表情でわたしたちに微笑んだ。

「そろそろ休もう。明日からは重労働だ。アーニエルは手厳しいからな」

アーニエル先生はにやつと笑って、自分の腰のあたりを無造作に掻いた。

「そりゃ、たまに手伝いに来るだけのよぼよぼのじいさんに壊れやすい壺やなんかを持たれたら、細かく口出ししたくもなるさ。今度の助手たちはあんたよりはずっと元気だから、気苦労が少なくて済みそうだ」

## 2. いざない

暖炉の薪の爆ぜる音で、ふと目を覚ました。小屋のはめ殺しのガラス窓の外は暗い。遠くから、びゅうびゅうと風の唸る音が聞こえてくる。

少し前から気になっていたことがあった。それが何かは寝起きのぼんやりとした頭ではよく分からなかった。分からないままにしておくど落ち着かないので、確かめておこうと思った。

わたしは毛布から抜け出した。暖炉の火に照らし出された、盛り上がっている毛布の数は四つ。アンカノ顧問は結局小屋に帰ってこなかったらしい。わたしは小屋の扉の門をそうっと上げた。なるべく音を立てないよう気をつけつつ、扉を開けて戸外に出た。

肌に沁みる冷気が剥き出しの顔や手に纏わりついた。強烈な風の音が耳に張りついた。わたしは灯火の魔法を頭上に放った。灯火は黒い空の下で白いものが荒れ狂っているのを照らし出した。雪が、亡霊の海から凄まじい速さでやって来る海風で舞っているのだ。海風と、海風に絡め取られた雪は、時々流れを外れて掘り下げまで吹き込み、わたしの全身を冷たい火のように炙っていった。

少しの間その光景に見入った後、視線を地上に戻した。薄暗い視界の端に、アーチ型の影が佇んでいた。サールザルの遺跡の扉だった。わたしの足は自然と扉の方へ向かった。灯火の光の届かない周囲の暗がりには何か潜んでいるかも、足元に何か転がっているかもしれない、風のせいでろくに物音も聞き取れないのに、そういった心配事はふわふわと意識のうわべをうろつくだけで実感がなかった。

扉の前に立って、両手をその厚みに沿わせた。精密な彫刻の凹凸が掌と指先をくすぐり、熱が鳩尾のあたりに生まれた。無駄なこととは知りつつも、両腕に体重をかけて扉を押してみた。

重たい振動が掌に伝わってきた。扉の真ん中に隙間が開き、そこから明るい光が漏れた。

開けられる。

全身に鳥肌が立った。扉にはアーニエル先生が鍵をかけていた。

その鍵は今小屋で眠っている先生の懐に入っている。だから、開けられるのはおかしい。

何かが間違っている。小屋へ戻って先生たちを起こした方がいい。どうせ明日の朝からは遺跡に入り浸れるのだ。でも……一度開けてしまったからには、今、中を見てみたい。少しだけ。何が間違っているかを確認するだけだから。

「ここは何をしている」

誰かの大声が、強風の合間に背中に叩きつけられた。右肩をぐいと掴まれた。わたしは肩に置かれた手を振りほどき、背後を顧みた。

甲殻類のような兜と赤いマスク、つぎの当たった茶色い服の上に奇妙な鎧を着けた頑丈そうな体躯。テルドリン・セロだ。わたしは胸を撫で下ろした。だが、明らかに彼は、こんな夜更けにトイレに行くでもなく、締め切られているはずの扉の前にいるわたしを咎めていた。

「鍵が開いてたから、気になったの」

後ろめたくなって、わたしは俯いてぼそぼそと言いつつ訳をした。

テルドリンは首を少し横に傾けた後で、かすれた声を張り上げた。

「開いていた？ 妙だな。すぐに小屋に戻るんだ。アーニエルを起こしてその扉の鍵を閉めさせるぞ」

その通り、一刻も早くアーニエル先生に知らせるべきだ。そう、思いはしたのだが。

わたしは風のせいで彼の声が聞こえなかったふりをした。彼が再び何か言い出さないうちに、わたしは遺跡の扉に体重をかけて自分が横向きにすり抜けられるくらいの隙間を作り、内部に滑り込んだ。

乾いた石と土の匂いが鼻の中に広がった。天井は剥き出しの土になっていて、足元には石の下り階段があった。階段を数段降りると、狭い通路に降り立った。通路はしばらく先でもっと広い空間に繋がっているようだった。通路と空間の境目あたりに火の灯されたランタンが置いてあった。

「おい。どういうつもりだ。まさかこの扉を開けたのはお前か？」

テルドリンがわたしを追いかけてきた。彼の背後で黒い石の扉が閉まり、風の音が止んだ。今度は聞こえないふりはできない。

「違う。わたしが来たときにはもう開いてた。この中で何か起きてるんだよ」

わたしは通路の先を片手で示した。テルドリンはわたしにつられてそちらを見やり、不機嫌そうな声色で続けた。

「だから確かめようとしたのか、お前一人で？　感心しないな」

「テルドリンがいるじゃない」

「今はな。さっき私が見つけていなかったら、お前は下手をすれば行方知れずか、死体になっていたかもしれない」

「あはは、大げさだなあ。危険な感じがしたらすぐ逃げ帰ったってば」「私が今までに何度お前の命を助けたと思っている。お前には危機感がまるで足りない。おまけに戦う力もない。扉を開けていきなりドラウグルに襲われたらどうするつもりだったんだ」

なんだか説教臭くなってきた。エルフの彼にとつて、わたしはときどき生まれただけで何も知らない赤ん坊のように見えるらしく、こうして小言を言われる。でも、わたしは人間としては一人前の年齢で、一応彼の雇い主でもある。見くびりすぎないでほしいものだ。

わたしは彼の小言から逃れようと、通路を早足で歩き始めた。

「はいはい、悪かったよ。今はテルドリンがいるし、ちよつとだけ見たら先生たちのところに戻るから、心配しないで」

「そうなるといいがな。どうも嫌な予感がする」

間もなく通路が終わって、視界が開けた。

正面に、巨大な人間の顔の彫られた石柱が聳えていた。石柱は石の天井から下の石畳までを貫いていた。石柱には元は石の階段がついていたらしいが、大半は崩れ去り、木製のものに替わっていた。わたしとテルドリンが立っているのは、壁を伝ってこの石柱に繋がっている木の足場だった。

石柱の周囲には、何十人かで集会ができるくらいスペースが広がっていた。そこは、今は、アーニエル先生か前の調査隊が持ち込んだと思われるいくつかの荷車と木箱、それに保管用の棚でごった返していた。広場は石の壁で四方を囲まれていて、左側の壁には幅広だが奥行きが浅い、やはり雑多な物品の散らばっている横穴が開いてい

た。そして正面の柱の影には、更に奥へ続くアーチ型の通路が見えた。

壁際には一定の間隔でランタンが設置してあり、全てに火が灯されていた。それらの放つ光がこの空間をまんべんなく照らしているおかげで、わたしはこの光景を一目で見渡すことができた。

穏やかな埃の匂いが乾燥気味のひんやりした空気とともに鼻腔に忍び込んだ。鳩尾の熱がかすかに沸き立ち、腹の中をくすぐった。

テルドリンがわたし隣の隣に立った。広場の隅から隅まで二つのレズをゆつくりと油断なく巡らせている。わたしは彼の真似をして、壁や床に一通り目を凝らしてから尋ねた。

「罨はないよね？」

「……ああ。あるとすればあの通路のあたりだが、魔術師ギルドの調査隊かアーニエルが解除済みだろう」

「よかった。じゃあ、下に降りるのは問題なさそうだね」

わたしはうきうきした足取りで足場と階段を辿り、石畳に降り立った。テルドリンは不服そうに腕組みをしてわたしの後をついてきた。

石柱周りのスペースは上から見た時の印象よりも更に雑然としていた。石畳には、長い年数が経過したためか、ボロボロに崩れている箇所があった。それらを避けるようにして置いてある荷車には、発掘に使うらしい道具が載っていた。広場の壁に張りついている足場の下には机と椅子が何脚か放置されていた。

保管用の棚の中には、古びた武器、装身具、器、壺といった、この遺跡にもともとあったと思われる品が種類毎に並べられていた。わたしは石畳の崩れた箇所や荷車や積み重なっている木箱を避けて棚の一つに近づき、上から下までをじっくりと眺めた。

「すごい量。奥にはまだ沢山あるのかな？」

「さあ。遺跡の規模によるんじゃないか。ここにあるのが全てなら、そこそこ大きめの墓所という程度だ」

テルドリンは荷車の向こうから答えた。どうにも気が乗らない様子で、腕組みを解いて左手で剣の鞘に触れている。だが、文句がないならもう少し先へ進んでも大丈夫だろう。

「奥も見に行こう。扉が開いてた原因も全然分からないし」

飛び跳ねるようにテルドリンの横を抜け、遺跡の奥へ続く通路の入口に立った。全身に馴染んだ埃の匂いが、わたしの意識を薄暗い通路の先へといぎなつた。何かとても大切なものがその先にある気がした。わたしは暗闇に向かって足を踏み出した。

「やはり卑しい性根は隠せないと見える」

突然、氷のダガーのように鋭く冷たい男の声が背後の広場に響いた。わたしはぎよつとして振り返った。足場の下に放置されていた椅子の一つに、いつの間にか、黒い服を着た背の高い人物が足を組んで座っていた。

突風が体に吹きつけた。と思ったら、わたしはテルドリンの背中に庇われていた。テルドリンは左手で剣の鞘を握り、右手を剣の柄に置いていた。

「貴様の主人に襲いかかるとでも思ったか？ 馬鹿馬鹿しい。単に、少々観察しておきたかったのだよ、貴様らが人目のない場所でのような行動を取るかを」

その嫌味っぽい喋り方には聞き覚えがあった。わたしはテルドリンの後ろから顔を出して、突然現れた男の姿を確認した。誰であろう、アンカノ顧問だった。

「顧問。大学に帰らなかつたんですか？」

わたしは、まだ戦闘態勢を解かずにいるテルドリンを押しつけるようにして、前に出た。

顧問は、嘲笑とも溜息ともつかない、恐らくそれら両方を含んだ短い息をついて言った。

「あの浅はかなブレトンの思い上がりを報告するためだけに大学に帰るはずがなからう。彼奴が実りのない調査を延々と進めるつもりなら、私は別個に動くまでだ」

「どうやらわたしたちが考えていたより、彼はずっと度胸があるようだ。」

「もしかして、遺跡の扉を開けたのも顧問ですか？」

「無論。私の鍵開けの魔法にかかれれば、二百年前の帝国製の鍵など造



作もない」

そういえば先日の騒動の時も、顧問は自前の鍵開けの魔法でドアの鍵を開けていた。わたしは素直に感心した。

「ドラウグルや罫が怖くないんですね」

顧問は傍らの机の上を長い人差し指で叩いた。そこには、薄茶色のペー지를上にして、大判の本が開いてあった。

「魔術師ギルドの報告書によると、彼らが調査を行った全ての区域にドラウグルはいなかったそうだ。更に、アーニエルは報告書に書かれている事項を一通り確認したと言っていたが、危ない目に遭ったという話はしなかった。二百年の間にこの遺跡に新たな異常が発生していればあの男が騒ぎ立てないはずはない。すなわち現在においても、魔術師ギルドが調査を行っていた区域に限っては安全なのだ」

一気に語ってから、顧問は今度はあからさまな軽蔑の眼差しをわたしに向けた。

「この程度は報告書を読んでいれば容易に想像がつくことだ。ところが君は先ほどアーニエルから話を聞くまで報告書の存在さえ知らなかった。発掘調査の前に予習をしておけと言われたであろうに、図書館の目録も確認しなかったのか？ もしや文字もろくに読めぬのではなからうな」

恥ずかしくて頬に血が昇った。文字は一応読めるが、読み慣れてはいないので、他の学生と比べると理解が遅い。それに、図書館の使い方が未だによく分からない。だから、サールザル関連の本は一緒に予習していたブレリナに探してもらったのだ。思い返してみれば、何冊かの本が貸し出し中か行方不明だと彼女がぼやいていた気がする。

どう答えたらよいか分からず黙りこくったわたしの隣に、さすがに剣からは手を離れたテルドリンが並んだ。

「こいつと違ってあんたはおつむがいいということか。そいつは結構。ならば当然、スノーエルフの探し物とやらはどうに見つけたんだろう？ 何せ、わざわざ透明化までして私たちの間抜け面を眺めている暇があるくらいだからな」

顧問の尖った耳の先端に朱色が広がった。彼は椅子を払いのける

ように後ろへ引いて立ち上がり、つかつかと近づいてきて、彼よりも背の低いわたしたちを威圧するように胸を反らした。

「私はこの遺跡に到着するまでに疲労困憊した。ゆえに、未知の領域に踏み込む前に、ここで休息を取っていたのだ」

テルドリンは彼の言葉を一笑に付した。

「先へ進むのが怖くて仕方なかったと正直に言えばいいものを。サルモールには何につけても大げさな言い訳をする決まりでもあるのか？」

顧問は切れ長の目を見開いて肩を怒らせ、今にもなんらかの魔法を発動させそうな勢いで両拳を握りしめたが、わなわなと震える息を吐き出して、それらの不穏な身振りを押し込めた。わずかに波立っている声で彼は言った。

「単独行動に懸念を抱いていたのは認めよう。いかな私でもドラウグルドにも際限なく沸いて出られたら分が悪い。ゆえに、私のために時間を稼ぐ困が欲しいと考えていた」

なるほど。つまり、顧問は一緒にサールザルを探検してくれる仲間が欲しくて、物好きに誰かが遺跡の扉が開いているのに気づいて入ってくるのを待っていた、というわけだ。

「ならば、そこらの頭の弱い傭兵でも雇って連れてくることだな。私にはあんたに付き合う気はない」

テルドリンは顧問の遠回しな誘いを即座に拒絶した。

顧問はひくりと喉仏を上げ、しばらく瞬きもせずにテルドリンの奇妙な形の兜を睨みつけていた。それから、不意に唇の端に歪んだ笑みを浮かべた。彼は、テルドリンから、二人のエルフの言い争いをはらはらしながら見守っていたわたしに視線を移した。

「君はどうなのだ？」

顧問は、胡散臭い優しさに満ちた黄金色の眼差しをわたしに注いだ。

「その口の悪い従者はともかくとして、君は、この遺跡に非常に興味がある。そうではないか？ ノルドどもの宝を掠め取りたいのか、それとも低俗な野次馬根性を満足させたいのかは知ったことではない。

しかし私についてくれば、君の望みを叶えてやることができよう。どうだ、共に行く気はないか？」

わたしはまるで彼に魅了されたかのように動けなくなった。遺跡の埃臭い空気が、遠くにある不思議な存在に共鳴してかすかに揺れ動いている気がした。鳩尾でくすぶっていた熱が胸の裏側を焦らすように焼いた。

わたしが真夜中にこの遺跡に入ったのは、入口の扉の鍵が開いている原因を確かめるという口実があったからだ。顧問が原因だったと知った今、わたしがここにいる理由はない。

でも、わたしはなぜか切望していた。この遺跡をもっと奥まで調べてみたいと。今そうしなければ、間違いなく後悔してしまう。

「一緒に行きたいです、顧問」

アンカノ顧問の歪な笑みが一層深くなった。テルドリンが兜の二つのレンズをわたしに向け、珍しく狼狽えた声色で聞いた。

「正気か？ この男に本当についていくつもりなのか？」

わたしは、声とは対照的に無感情な彼のガラスの目玉を見つめた。

「うん。ちゃんと調査しようとしてるアーニエル先生には申し訳ないよ。でも……」

テルドリンはゆるゆるとかぶりを振って、わたしの弁解を遮った。

「もういい。お前が一度言い出したら聞かないのは分かっている」

もしかしたら、テルドリンは地上に戻りたいと言いつつもかもしれない。でも、彼がいてくれないととても困る。わたしは自他ともに認める戦闘音痴だ。この顧問なら、そんなわたしに業を煮やして、本気で囮にしかねない。

「テルドリン。ついてきてくれるよね？」

わたしは尋ねた。彼は、情けない顔をしているわたしから視線を外して嘆息した。

「当然だろう。私はお前の従者だ。来るなど言われぬ限りどこへでも行く。例えどんなにいけない同行者がいようともな」

最後のとげとげしい一言を向けられた当の本人は、すっかり勝ち誇った表情で自らの顎を撫でていた。

### 3. 涙の夜

アーチ型の通路を抜けた先には、入口の広場よりもずっと大きな空間があるらしかった。広場から先には明かりが全く灯っておらず、アンカノ顧問がわたしに持たせたランタンと、顧問とわたしの灯火の魔法だけが頼りだったが、そのいずれも空間の果てに広がる闇を消すことはできなかつた。

この空間の地表面は入口の広場よりも更に低い位置にあつた。木の足場と石柱を辿つて降りていくわたしたちの足元に、石造りの建物が所狭しと並んでいるのが見えた。

降りてすぐのところでは、空間の末端の石の壁を建物が取り囲み、小さな広場ができていた。そこから、石畳の道がいくつか暗闇の中へと延びていた。広場には一定の間隔毎に火の灯っていないランタンが置かれていた。

「暗いな。この広場のランタン全てに火を点けたまえ」

顧問は今しがた降りてきた石柱に寄りかかり、脇に抱えていた魔術師ギルドの報告書を開いて、わたしたちに命令した。自ら動く気は全くないようだ。むっとした様子で顧問を睨みつけたテルドリンを横目に、わたしはすぐごと近場のランタンに向かった。手に提げているランタンを開け、蠟燭の皿を取り出して火を分ける。

「貴様の主人は私の指示に従つたぞ。貴様もさつきと動かないか」

顧問が命じた。テルドリンはダンマーの言葉で何事か吐き捨てて、わたしとは逆回りに、火炎の魔法でランタンの火を点け始めた。

全てのランタンに火を灯したうえで、灯明の魔法を手近な建物の壁に、灯火の魔法を自分の頭上に放つた。顧問の頭上に浮かんでいる灯火の魔法も合わせると、広場は昼間のように明るくなった。

ちよつとした達成感を覚えて一息ついた時、石の壁の表面がきらきらと光を反射しているのが目についた。灯火の魔法を引き連れて近づいてみると――

壁一面に、絵が彫られていた。家屋を背景に、大勢の人が走り回っていた。彼らは二つの集団に分かれていた。一方の集団は当てずつ

ぼうに逃げ惑い、他方の集団は整然と隊列を組み、それを追いかけて  
いるようだった。

逃げている側はほぼ丸腰だった。杖をついた老人や子供の姿も  
あって、恐怖に顔を歪めたり、泣いたり、叫んだりしていた。屈強な  
体格の男女四人と、彼らの飼っていたらしい犬二匹と鷹と思しき鳥二  
羽が、威嚇するような姿勢で敵の隊列の前に立ちふさがっていた。だ  
が、彼らの仲間の成れの果てと思われる死体もまた隊列の脇に散ら  
ばっていた。

隊列を組んでいる集団は、耳の先と手足が長かった。多くが剣か  
弓、あるいは光る球のようなものを手に持っていた。彼らは目を細  
め、大口を開けて笑っていた。まるでこの殺戮を心底楽しんでいるか  
のように。

そう、殺戮だ。壁画は、昔この場所で起きた悲劇を再現していた。  
「これが『涙の夜』事件の壁画か」

顧問がいつの間にかすぐそばに立っていた。わたしは息を呑んだ。  
灯火の魔法に照らされた彼の横顔には、壁画の中の虐殺者と同じ尖つ  
た耳がついていた。

顧問はわたしを険しい表情で見下ろした。

「これを見て遠い祖先の記憶が蘇りでもしたか？ 君の従者が兜を  
被っていて良かったな。そうでなければ、君は今頃泡を吹いて倒れて  
いたことであろう」

穏やかならぬ調子で脈打っていた胸に更に波紋が広がった。テル  
ドリンは食事をするときや眠るときでさえキッチンの兜を絶対に外さ  
ないので、わたしは彼のエルフ特有の耳を見たことがなかった。

「すみません。この壁画、すごい迫力があって」

心臓のあたりを掌で強く押さえ、顧問と壁画から顔を背け、後ろに  
何歩か下がった。テルドリンのキッチンのブーツに包まれた両脚が視  
界の隅に映った。わたしは視線を上げた。そこにはいつも通りの、奇  
妙な生物の頭がちよこんと乗っていた。わたしは安堵の息を漏らし  
た。

顧問の嘲りのこもった声がわたしの横顔に叩きつけられた。

「私には稚拙な落書きとしか思えぬが。単純な若者をエルフへの恐怖や怒りに駆り立てるには十分ということだな。いかにも執念深いノルドどものやり口だ」

確かに、エルフと会ったことや喋ったことのない人がここを訪れ、壁画を見せられて「涙の夜」事件について教えられたら、彼らに対して偏見を抱くかもしれない。でも、スカイリムでさえエルフと人間が混じって生活している今は、そのようなことは起こらないと思う。

テルドリンの兜と見つめ合うことで、恐怖は消え去っていた。顧問は壁画に描かれたスノーエルフの一人を指でなぞっているところだった。わたしの見間違いでなければ、彼の冷たく整った眼差しには、なんだか寂しそうな光が宿っていた。

「顧問。わたし、もう大丈夫です」

控えめに声をかけると、顧問はこちらに身を翻した。彼は不快そうに顔を歪めていた。

「君を待っていたわけではない。しかし声をかけてくれたことには感謝する。あの小うるさいブレトンが起きてくる前に終わらせねばな」

顧問は広場から延びる石畳の道の一つを指さした。

「まずはあの道の先に進む。報告書によれば、最も大きな落盤の起きている箇所だ」

わたしは顧問に指定された道の前に立った。かざしたランタンの光の中に、分厚い石を継ぎ合わせて造られた平屋建ての建物が左右に並んで浮かび上がった。建物の入口はどれもぽっかりと開いていた。

わたしはテルドリンがすぐ後ろについてきているのを確かめながら、一番近くの建物の中へランタンと頭を突き出してみた。どこから水が沁みているらしく、埃の匂いに混じって優しい苔の匂いがした。

正面に暖炉のようなものがあり、四人掛け程度の大きさの石のテーブルと長椅子が暖炉の前に、石でできた背の高い柵が壁際に置かれ、向かって左にいくらか広い空間が開けていた。

その空間の壁には、先ほどの壁画よりもかなり大雑把な描き方ではあるが、波に逆らって十人乗りくらいの船を漕ぐ人々と、海面下を群

れをなして泳ぐ魚のような生物の姿が生き生きと描かれていた。

「へえ。ああいう感じでアトモーラから渡ってきたのかな」

「あんなちやちな船で、亡霊の海の荒波によく耐えたものだ。私だったらアトモーラで凍死する方を選ぶな」

わたしに続いて中を覗いたテルドリンが陽気に相槌を打ったところで、ランタンの光に大きな影が差した。顧問が尊大な笑みを浮かべて立っていた。

「ノルドの芸術に理解を示すふりなどしなくてよい。君らは遺跡や賊から奪った財宝を売却してあぶく銭を稼いでいるのであろう？ あそこにあるものが欲しいならさっさと取ってきたまえ」

壁に沿って、わたしの膝丈ほどの高さのある幅広の段差が設けてあり、その段差の上に、きらびやかな装飾の武具や、器や、宝石が山と積みまれていた。積みきれないものは段差の下の床にばらけていた。

わたしは顔を赤くした。それらは目に入っていたが、さすがに墓所の捧げ物売り飛ばす気はなかった。まして、ここにあるものは全て大学の研究対象なのだ。

「いえ、結構です。先へ進みましょう」

わたしは顧問の横を素早くすり抜けた。

テルドリンがわたしの後を追いながら言った。

「他人を低く見積もるのはやめた方がいい。そんなことではいずれ足元を掬われる」

「キツ、貴様、それはどういう意味だ」

顧問の裏返った声は建物の壁に反射して虚しく響いた。

わたしはその先のいくつかの戸口でも、ランタンをかざして少し中を覗いてみた。どの建物の中にも面白そうな壁画があったが、顧問に不名誉な思い違いをされないよう深入りするのには避けた。

不思議だったのは、やはりどの建物の中にも、墓所らしく捧げ物がたっぷり置いてあるのに、棺が全く見当たらないことだった。ドラウグルになって飛び出してこないのはとても助かるが……どこかにまとめて埋葬されているのだろうか？

十数軒の建物を通り過ぎ、左右の分かれ道に出た。顧問の指示で左

の道を取った。またしばらく進んだら石柱に突き当たった。足場を辿って、今度は上へ昇っていった。石柱の上部からは細い通路が、更に別の空間へと続いていった。その空間の入口を入れて少し歩いたところで、瓦礫を含んだ大量の土砂が行く手を阻んだ。

「ここだ」

顧問が呟いた。彼はわたしたちに片手でうるさそうに振り払う動作をした。

「邪魔だ。下がってたまえ」

わたしはテルドリンを右後ろに従えて、顧問の背後にやや離れて陣取った。

顧問が両手を開き、体の前で掌を向かい合わせた。火花が飛び、わたしの頭の三倍ほども大きさのある火球がめらめらと顧問の前に浮かび上がった。それは次の瞬間、道を塞ぐ土砂に火の粉を振りまいて突進していった。

派手な爆発音が響き、足元が揺れ、すさまじい量の砂塵がこちらへ押し寄せた。思わず目を細め、鼻と口を服の裾で覆った。瞼の隙間から、顧問も同じことをしているのが見えた。

しばらく経った頃に砂塵は収まった。土砂はいくらかは崩れていたが、向こう側にあるはずの空間は、まだ髪の毛一本ほども姿を現していなかった。

「さすがに一度では貫通しないか」

顧問はひとりごち、体の前で両手を向かい合わせ、大きな火球を再び作り出した。また躊躇なく土砂に当てる。爆発、揺れ、砂塵。顧問は今度は砂塵に怯むことはなく、再び火球を作る。それを繰り返す。再び爆発、揺れ、砂塵……。何度も繰り返しているうちに、気のせいかな、足元の揺れが大きくなっているような気がした。

そして、その瞬間は唐突に訪れた。

派手な爆発音の合間に、ビキビキビキと不吉な音が鼓膜に届いた。わたしの右腕を誰かが掴んだ。テルドリンが顧問に背を向け、右手でわたしの右腕を捕まえて元来た方へ走り出そうとしていた。

わたしが彼につられて足を踏み出す前に、全身がふわりと軽くなっ



た。まるで、旅芸人をやっていた頃の空中ブランコの芸で、ブランコから手を離して飛んだ瞬間みたいだった。

華やかな浮遊感は、すぐに絶望的な落下感に変わる。

信じられなかった。あんなに頑丈そうに見えた石の床が、出来の悪いパイ生地みたいに、ぼろぼろと崩れ落ちていた。

落ちていく先には、淡い蠟燭の光に照らされた円形の空間が見えた。わたしは右手を伸ばし、テルドリンの右腕の付け根をありったけの力で捕まえた。

#### 4. 吊いの間

右手首から右肩の付け根までが、すごく痛い。特に右肩の付け根がひどい。筋肉がぎゅうぎゅう言っていて、いつ肩から先が胴体から離れていてもおかしくない感じがする。上半身全体も、右腕にかかっている重みに引つ張られて、重りをいくつも背中の上に乗せられたかのような圧力に晒されているが、右腕よりはましだ。すべすべした分厚い石の構造物に下から支えられているからだ。

その構造物は、二つの石柱の間に固定され、急な角度で上に向かって張り出しているようだった。わたしは落下感に襲われて間もなく、ここに俯せに叩きつけられ、傾きに沿って滑り落ち、石柱に引つかかって止まった。でも、油断はできない。左腕は石柱とわたしのぶら下げている重みに圧されて動かせず、腰から下は無防備だ。少しでもバランスを崩したら、ここからも落ちてしまう。わたしの右腕だけが頼みの綱の、テルドリンと一緒に。

テルドリンはわたしの上腕を掴んでいた。彼の手はわたしの腕に沿うようにして真下に伸び、わたしの手によって逆に右の上腕を掴まれていた。その下に彼の頭と体が続いている、と思われる。先ほど足元に見えた明かりは消えてしまったらしく、空間は真っ暗になった。

「テ、ルド、リン……」

わたしは自分をだましましたまし呼びかけた。上半身に特大の重りが乗っているかのような圧力がかかっている、わたしの胸は呼吸をするので精一杯だった。

短い間の後、テルドリンがいつものかすれた声でわたしの名前を呼ぶのが聞こえた。わたしはほっとした。

「怪我、は……」

「つらいなら話すな。私は問題ない。ぞつとするような暗闇の中で宙吊りになっていること以外はな」

彼の声は、空気を震わせるだけでなく、繋ぎ合っている腕の肉と骨を通して、直接わたしに注がれた。それはわたしの緊張しきった心と

体を温めた。

「目が慣れても大したものは見当たらん。生き物の気配もない。石のようなものが壁からいくつか頭を出しているが、この位置からでは飛びつけそうにない」

テルドリンが頭を巡らせるたびにその動きはわたしに伝わり、わたしの下にある石の構造物が危なっかしくぐらつき、角度が緩くなつた。

テルドリンは、急に世間話でもしているような口調になった。

「そういえば、アンカノはどうした？ 悲鳴を上げる間もなく落ちたか？ アーニエルの言葉に耳を貸さないからこうなるんだ。サルモールどもはざる賢いくせに世間知らずで考えが甘い。あの高慢ちきな若造は特にそうだった」

わたしはそんな世間知らずの若造の言うことを真に受けて、こんな状況にテルドリンと自分自身を追い込んでしまったのだ。わたしの胸は張り裂けんばかりに痛んだ。精神的な意味だけでなく、肉体的な意味でも張り裂けそうだった。

「後悔しているのか？ 私もだよ。どうしてこんな間抜けな人間に雇われてしまったのかと後悔していた。常にな」

危うく呼吸が止まりそうだったが、間もなくわたしは彼の声に苦々しさや憎悪の欠片もないことに気づいた。むしろ、彼は笑っていた。「だが後悔が消し飛ぶくらい、お前と過ごすのは楽しかった。ここだけの話、いい雇い主に巡り会うのは難しいんだ。強欲だったり、クズだったり、つまらなかつたりしてな。それでも金のためにはある程度我慢しなければならぬ。その点お前は良かった。間抜けで非常識で我が儘だが、気前はいいし、弱い者いじめはしないし、何より面白かった」

どうして今そんなことを言うのか。どうして過去形なのか。

テルドリンは、人差し指の先を上下に動かして、わたしの腕を撫でた。

「いいか、よく聞け。朝になればアーニエルたちが私たちを捜し始める。この馬鹿でかい穴に辿り着くまでそう時間はかからない。それ

までそこに辛抱強くぶら下がっている。お前一人ならなんとか保つかもしれん」

わたしは震えた。テルドリンはその震えをなだめるように指先に力を込めた。

「私のことを気にする必要はない。私は十分に生きた。最後にお前と楽しく冒険もできた。満足だ。あとはブラックライトの墓に入れれば言うことなしたが、高望みはよそう。お前にも誰にも、そこまでの義理はない」

わたしの喉から嗚咽が漏れた。涙がぼろぼろ零れて暗闇の中に落ちていった。信じられなかった。テルドリンがこんなふうに諦めてしまうなんて。馬鹿な主人のために無駄死にはしたくないと、昔の雇い主の思い出話をするたびに言っていたではないか。

「泣いているのか。さては、せつかく雇った腕のいい傭兵を失うのが惜しいんだな？ 大丈夫だ、しかるべき場所を探せば、私ほどは言わんが優秀な傭兵は見つかる。ゲルデイスかブランウルフに当たってみる。お前になら快く教えてくれるだろう。」

さあ、分かったら、そろそろこの手を離せ。そうしたら私も手を離す」

そういう問題でないことは彼にも分かっているだろうに。こんな時まで茶化さないでほしい。テルドリンの手を離すなんて、できっこない。

「どうした。早くしろ。落ちるのは私だけでいい。お前を死なせたくない」

テルドリンの声は次第に切実な響きを帯びた。

「なあ、私なぜこんなことを言っているか分かるか？ ……ああ、クソ、この際だ、はつきりさせてやる。いいか、一生忘れるなよ。愚かなことだが、私は……お前を——」

「どういう状況だ？」

唐突に、氷の間に突き刺して冷やしたダガーのような男の声から降ってきて、テルドリンの言葉に覆い被さった。

「どういう状況だと聞いている。答えられないのか？」

もう一度同じ声が入から降ってきた。それからすぐに、ちょうどわたしの顔と同じくらいの高さのところ、金糸で刺繍の入った黒いブーツが降りてきた。落ちてきたのではない。降りてきたのだ。ブーツは白っぽい紫色の光を放つ円盤状の物体に下から支えられていた。

「ああ、なるほど。その体勢では声を発することも容易ではないな」  
円盤状の物体が更に垂直に降り始めた。降りるにつれ、物体の上立っているものの正体が分かった。それは黒いブーツを履いた男だった。灯火の魔法を頭上に灯し、ブーツと同じように金糸で刺繍された黒い服を着た、銀髪の男。アンカノ顧問だ。

顧問はわたしの腕にぶら下がっているテルドリンを見下ろせる位置まで高度を下げた。

「貴様ならば答えられるであろう。どういう状況だ？」

テルドリンは突然の顧問の登場に言葉を失っていた。わたしも、例え声が出せる状態だったとしても、彼と同じように何も言えなかっただろう。死んだと思っていた顧問が生きていて、光る円盤に乗って宙に立っている。いったい何から突っ込めばいいのか。

テルドリンがようやく答えた。

「どういう状況も何も。あなたのエキスプロージョンで床が吹っ飛んで放り出されて、運良く何かに引っかかっている。それだけのことだ」

顧問は意地の悪い声色で言った。

「それだけ、か。ならば私の助けも不要だな？」

顧問は足元の暗闇に向かって灯明の魔法を放った。

灯明の光は降下しながら、わたしたちが落ちこんだ場所を照らし出した。緩い円弧を描く壁面に、縦長の黒い石でできた構造物、ちょうどわたしの引っかかっているのと同じものがずらりと並んでいた。ただし、わたしたちの足元から下は歯抜けになっている箇所の方が多かった。

灯明の光は遙かに下の方で、瓦礫の山の中から突き出た石橋の真ん中に降りて止まった。石橋の下には更に、暗くて底の見えない、大き

な丸い穴が開いていた。

穴の周りは人が何人か横に並べる程度の石の床で固められていて、その半分ほどは瓦礫の山に埋もれていた。瓦礫は、欠けた岩、土砂、黒い石、それに白っぽくて色々な形をした欠片が混じってできていた。見るからにバランスが悪く、今しも一カ所がぱらぱらと崩れて穴の中に吸い込まれていった。

壁際にはわたしのいる層と同じ縦長の石が並んでいたが、今度は壁に垂直に埋められていた。その光景にはなんだか見覚えがあった。

「見たところ、貴様らはこのままでは遠からず落下死する運命にあるようだが。世間知らずで考えが甘く高慢ちきな若造の手を借りようなどは、まさか思うまいな」

どうやら顧問はわたしたちのやり取りをかなり始めの方から聞いていたらしい。

テルドリンは、ぐうつと怒りのこもった呻き声を上げて言った。

「誰のせいでこんなことになったと思っている」

「私が原因だから、私が助けるのが当然だとしても？ それこそ考えが甘いと言わざるをえない。貴様らの代わりはいくらでもいる。死んだら別の者を連れてくるだけだ」

顧問は明らかに、この絶対的に優位な立場に酔いしれていた。

「しかし、私も人でなしではない。いくら気に食わぬ相手とはいえ、見殺しにするのは寝覚めが悪い。

アンカノ様、助けてください、と心の底から懇願しろ。そうすれば助けてやる。貴様も、貴様の主人もな」

テルドリンの体に静かな殺気がみなぎった。それは腕を通じてわたしの顔と胴へと走り抜け、肌を粟立たせた。

わたしが身震いをしたその時、わたしたちを支えている構造物が、根元の方でごろごろと音を立てて大きく傾いた。わたしは血の気が引くのを感じ、テルドリンの上腕を一層強い力で掴んだ。だしぬけにテルドリンが叫んだ。

「頼む。私たちを助けてくれ。助けて、ください。アンカノ——様」

その声には悔しさと、怒りと、憎しみと、何より必死さが滲んでい

た。

顧問の声がいつになく楽しそうに弾けた。

「仕方がない。望み通りにしてやろう」

わたしの右腕が軽くなった。テルドリンの重みがなくなったのだ。彼の体がわたしの目の前に浮かんでいた。顧問はまるで両手の先から出ている見えない糸でテルドリンを操っているかのように、薄赤い光を帯びた両手を高く掲げていた。

「互いの腕を放したまえ」

わたしたちは恐る恐る相手の腕を放した。顧問が宣言した通り、テルドリンは空中に浮かんだままだった。

わたしは自由になった両腕で胸の下の構造物を抱えて自分の体がずり落ちないようにした。構造物は今のところは安定していた。わたしは久しぶりにまともに呼吸することができた。朽ちた岩と砂埃の匂いが肺に満ちた。

ふと、顧問の両手の薄赤い光がちかちか瞬いた。

「これでは保たぬか。致し方ない」

顧問が両手を自分の方へ引いた。すると、テルドリンが操り人形のように顧問の方へ飛んでいき、あれよあれよという間に横抱きにされていた。

二人の様子が実に優雅に見えたのはほんの一瞬のことだった。次の瞬間、顧問は苦しそうな声を上げ、いつも反り返らせている背中をあっけなく丸めた。肩と腕がぶるぶる震えていた。体勢が体勢なので、顧問とテルドリンの顔は息がかかりそうなくらい近くなっていた。

「なっ、何をする！ どこを触っているんだ！ 小汚い面を私に近づけるな、この——！」

テルドリンは、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、ダンマーのたぶんとても品のない言葉で罵声を浴びせ、身をよじり、手で顧問の顔を思いきり押しやった。

顧問はされるがままに顔を珍妙に歪ませた。先ほどまでの余裕綽々な態度はどこへやら、彼は憎々しげに、口を動かすだけで精一杯

といった感じの声を絞り出した。

「黙れ。貴様は重すぎる。これ以上暴れたら、落としてやる」

テルドリンは無念そうな唸り声を漏らして抵抗をやめた。

顧問は苦悶と優越感の入り交じった凄まじい形相を浮かべた。

「しおらしく、しているよ。主人を、心配させたくなければ」

テルドリンがわたしに視線を向けてきたので、わたしは彼を勇気づけるつもりで微笑んだ。テルドリンは何も言わなかった。兜の下でしかめ面をしているに違いない。

二人は下へ降り始めた。テルドリンはわたしを見上げたまま、顧問の胸を小突いた。

「おい待て、どこへ行くつもりだ。上へ戻ってくれ」

「指図できる立場か？ 黙って、従え、老いぼれが」

「この穴の通じる先を知っているのか」

「知らぬ。だが、私には、リコールがある。言ったであろう、代わりは、いくらでもいると」

「あんた……どれだけ人を……！」

わたしは彼らの不穏な会話を聞きながら、体の支えになっている構造物の側面を右手で触ってみた。表面に何かの文様が施されていた。厚さはわたしの手首から肩までと同じくらいあり、真ん中くらいのところに横向きの継ぎ目が走っていた。これは、もしかして……。

下から、板のようなものが相次いで落ちる、ばたんばたんという音がした。続けて、金属が触れ合う音と陰気な息遣いがこだました。

顧問がテルドリンを抱いたまま、瓦礫を背にして、石橋に降り立とうとしていた。穴を囲む壁に埋め込まれていた黒い石の蓋が軒並み開いていた。それらの中から、古びた防具と武器を装備した、骨と皮ばかりの死体が一体ずつ歩み出てきた。動く死体——ドラウグルだ。

わたしも掴まっているこの黒い石は、古代のノルドの墓でよく見られる棺だったのだ。わたしの背筋を寒気が走り抜けた。幸いこの棺の中の死者は大人しかかったが、下の死者たちはそうではなかったということだ。十体ほどのドラウグルが、石橋の上の侵入者二人をじつと見据えていた。



「ひッー」

顧問がテルドリンを抱えていた腕を引つ込めた。テルドリンは石橋に体を打ちつけて低く呻き、すぐさま起き上がり、剣に手をかけて敵の群れを見渡した。

顧問が両手に魔力を湛えた。

「こッ、この数を相手にするのは馬鹿げている。逃げるぞ。私は死者撃退の光で彼奴らを追い散らす。貴様はあの扉の仕掛けを解除しろ」  
目を凝らすと、テルドリンの正面、橋のたもとから繋がっている通路に柵のようなものが立っていた。

わたしの鳩尾が燃えるように熱くなった。命の危機に陥ってから鳴りを潜めていた、焦がれるような感覚が蘇っていた。あのずっと奥の方から、何かを感じる。なぜかは分からないけれど、わたしはそこへ行かなければならない。

「あいつはどうするつもりだ」

テルドリンがわたしの方を指さした。顧問はわたしを仰いで舌打ちをした。

「アーニエルらに助けさせればよからう。どのみち探索には役立たぬ」

「ふざけるな。あんなところに置き去りにできるか。あいつを安全な場所へ移せ。今すぐに」

「貴様は私に指図できる立場ではないと、何度言ったら理解する？」

ドラウグルたちは当然、彼らの言い争いが終わるのを待つてはくれない。早速一体のドラウグルが斧を振りかぶってテルドリンに近づいていた。

テルドリンはさつと振り向き、左手で火炎の魔法を浴びせた。怯んでその場で足踏みをしたドラウグルを、テルドリンは雄叫びを上げて一刀のもとに斬り伏せ、橋の下の穴に蹴落とした。

テルドリンは迫り来るドラウグルたちに対峙したまま、煮えたぎるような声を轟かせた。

「早くしろ。さもなければ貴様を殺す。滅多斬りにしてやる」

顧問は面白いほど分かりやすく震え上がった。彼は慌てふためい

て消えかかっていた光る円盤の魔法を復活させ、こんなに速度が出せたのかと思うくらい素早く、わたしを見上げる位置まで浮かんできた。

「なツ、なんなのだ彼奴は。この私を、こッ、殺すなどと、不埒にも程がある」

顧問は青い顔でぶつぶつ呟きながら、わたしの両脇に無造作に手を入れた。

「先ほどの広場まで戻してやろう。あの男は借りるぞ」

「ちよつと待つてください。わたしも一緒に行くつて約束でしたよね」

顧問は脇を持ち上げようとした手を止めて、わたしを煩わしそうに睨んだ。

「彼奴はそれを望んでいないようだがね？ あの野蛮なダンマーに命を狙われる危険を冒してまで、役立たずの君を連れていく必要性は見出せない」

顧問の目当てがわたしでないことは、はじめから分かりきっていた。機会があればわたしを置いて、経験豊富なテルドリンだけを連れていこうと思っていたのかもしれない。

でも、わたしは今や、是が非でもこの遺跡の奥へ行かなければならないと感じている。それを抜きにしても、出口があるかも分からない、誰の目も届かないような場所で、この傍若無人なサルモールの顧問とテルドリンを二人きりにさせるのは嫌だ。

「彼は説得しますから。お願いします。わたしを下に降ろしてください」

わたしの懇願を顧問は突っぱねた。

「話にならぬ。広場へ戻すだけでも一苦勞なのだ。せいぜいトルフデイルに泣きつくことだな」

説得ができないのなら、別の方法でどうにかするしかない。

わたしは棺から身を乗り出し、ちょうどいい具合に目の前にある顧問の上半身に飛びついた。

「ぬわあッ!？」

顧問が素っ頓狂な声を上げると同時に、棺が傾いて壁面から外れた感覚があった。ややあつて、下の方で激しい衝突音とドラウグルの唸り声がした。

テルドリンがわたしの名前を叫んでいたが、それに応えるどころではなかった。わたしは、顧問と自分の側頭部を互い違いにくっつけて、肩から背中へ両腕を回してサルモールのローブを握り、胴を脚で挟むという、大変みつともない格好で彼にしがみついていた。ローブの匂いなのか、それとも顧問自身の匂いなのか、熟したラベンダーのような香りが鼻をくすぐった。

「なななな、何、何をして、君ッ、はなッ、はッ、離れたまえ！」

顧問は半狂乱になってわたしを引き剥がそうとした。わたしはそうはさせまいと彼に密着して夢中で叫んだ。

「嫌です。下に降ろしてください。ファイアボルトでもアイススパイクでも、この距離なら当て放題ですよ！」

わたしは右掌を広げて顧問の背中に押しつけ、魔力を集めた。顧問が陸に揚げられた魚のようにぱくぱくと口を開閉しているのがこめかみの動きで伝わってきた。

「わかッ、分かった、降ろす、降ろしてやるから！ 今からは何もせず、いッ、一切体を動かさずにだぞッ、じっとしていたまえ!!」

わたしたちは石橋に向かってゆっくりと降下し始めた。テルドリンは石橋のたもとまで進み、召喚した炎の精霊と背中合わせになって、両側から攻めてくるドラウグルたちと戦っていた。間もなく円盤の魔法の向きが変わったため、テルドリンの奮戦ぶりは耳に届くのみとなった。

テルドリンに背を向けた状態で石橋に降ろされるなり、わたしは顧問から飛びのいた。顧問は額の先から首根っこまで真っ赤にしてわたしを睨んでいた。

後ろへ振り返ると、ドラウグルのほとんどは狭い通路の中で押し合いへし合いして、テルドリンと炎の精霊を囲んでいた。テルドリンの腕には矢が刺さっていた。この乱戦状態ではさすがに防ぎきれなかったのだろう。

矢を放った当人であろうドラウグルが、仲間たちから離れたところで弓に矢をつがえてテルドリンを再び狙っていた。

「こっちだー！」

わたしはまるで迫力のない大声を上げて、聖者の光をそのドラウグル目がけて放った。白色と金色の絡み合った光がわたしの手を離れて飛んでいった。それはドラウグルの腕を掠めるだけで終わったが、十分だった。ドラウグルの標的はわたしに移った。

「お前、なぜ——」

テルドリンの言葉を最後まで聞き取ることができなかった。わたしは額の真ん中目がけて飛んでくる矢を、体をひねってかわすので精一杯になっていた。

相手は既に二本目の準備をしていた。冷や汗が出た。この石橋の上は動きにくい。一步踏み外せば真つ逆さまだ。賢い戦い方とは言えなかった。でも、わたしにはこれ以外にテルドリンを援護する手段がない。

白く光るものがわたしの横を通って弓使いのドラウグルに飛んでいき命中した。わたしが先ほど使ったのと同じ、聖者の光だった。途端に、ドラウグルが明後日の方向へ走り出した。

状況を飲み込む暇もなく、背後からまたもや何か放たれた気配があった。弓の弦のような形をしたそれはわたしの体を通り抜け、戦闘中の一団を直撃した。

効果はてきめんだった。ドラウグルたちが一斉にのけ反り、次の瞬間には、今しがたの戦いぶりが嘘のように四方八方へ逃げ出していた。

「扉を開けろー！」

顧問の、怯えを隠しきれない不安定な声が響いた。

わたしは跳ぶように走った。正面に背の高い鉄の柵が立っていた。その向こうは落とし格子で塞がれていて、落とし格子の先に黒い扉が見えた。

柵の両側にはチェーンが下がっていた。わたしは、同じように走ってきたテルドリンと一緒にチェーンを引いた。柵と落とし格子が轟

音を立てて引っ込んでいった。わたしたちは扉の中に飛び入った。顧問が喉をぜえぜえ言わせながらわたしたちに続いた。

## 5. 死霊術師の戯れ

扉の先の通路で何体かのドラウグルをテルドリンが倒し、わたしたちは更に奥へ進んだ。幸い、顧問が追い散らしたドラウグルは追いかけてこなかった。

通路を抜けたところには、サールザルの町の続きが広がっていた。今度はどこどころに蠟燭が灯されていたので、灯明や灯火の魔法を使わなくても見渡すのには苦勞しなかった。ウインターホールド大学の敷地くらいの広さの空間に、住居らしき建物が区画を作って並んでいた。区画の境目に立っている太い石の柱は天井を支え、柱同士の間には、崩れ落ちているものが多かったが、橋が渡されていた。わたしは、何千年も昔のアトモーラからの移民たちがこんな大きな町を何層も地下に建設できたことに驚いた。

しかし、悠長に観光してはいられなかった。そこは今ではドラウグルの根城にもなっていた。建物の上や橋の上や街路にドラウグルがうようよいて、目ざとくわたしたちを見つけた。一体一体は強くはないものの、しよっちゅう出くわすので、テルドリンの腕に刺さった矢の処置も済ませられなかった。

町に入ってから何体目かのドラウグルがテルドリンの剣の露となつて倒れた。わたしは周りに他のドラウグルがないことを確認して、抜剣したまま歩くテルドリンに言った。

「テルドリン。このあたりの建物に隠れて少し休憩しよう。腕を治さなきゃ」

「この程度、大したことはない。休憩ならもつと立ち回りやすい場所に出てからの方がいい」

「ううん、休もうよ。傷口が膿んだりしたら良くないよ。それにほら、顧問もわたしも疲れてるから」

わたしは背後を顧みた。一見、誰もいないように見えるが、よく観察すると人一人分くらいの範囲の空気が歪んでいる。

アンカノ顧問はわたしの判断には文句がないらしい。もし文句があれば即座に食ってかかってくるだろう。

テルドリンは、ふん、と不服そうに息を吐き出した。

「それでお前の気が済むのなら、そうしよう」

テルドリンが近くの建物に慎重な足取りで入っていった。わたしはすぐ後ろをついていき、建物の中に灯明の魔法を放った。

内部の構造は上の階層と変わらなかった。暖炉と石の家具と本棚、その横に膝丈ほどの段差のあるちよつとした空間が開けていて、壁には、熊を犬と一緒に追い立てる人の姿が描かれていた。ただ、上の階層では段差や床に置かれていた捧げ物がここにはなかった。

わたしの眼前の床に黒い影が湧いた。背後で顧問が透明化を解いたのだ。顧問のくどくどしい声が建物の中に響いた。

「長居する余裕はないぞ。この様子ではまだ——」

テルドリンがさつとこちらを振り返し、わたしの横を鋭い息を吐きながら駆け抜けた。視線で追った先で、彼の剣が顧問に真つ直ぐ向かっていった。真つ直ぐ、顧問のひよろ長い背丈の後ろで動いた何かの方へ。

テルドリンの剣の一振りで、そこにいたものは声も立てずに崩れ落ちた。

「ひいッー」

顧問は壊れた笛のように調子外れの声を上げて後ずさった。彼はすぐに長椅子の端に当たって、そのままへなへなと座り込んだ。

ドラウグルが床の上に喉を裂かれて転がっていた。もう近くにはいないと思っていたのに。

「危なかったな。あと一瞬遅ければ、あんたは肩口をばっさりやられておしまいだったよ」

テルドリンが剣を鞘に収めながら言った。

「貴様、故意に見逃していたな!? 私に一泡吹かせようと——小癩な真似を——」

顧問がこめかみに青筋を立て、目玉が零れ落ちてしまいそうなくらい両眼を見開いて怒っているのを、テルドリンはどことなく弱々しい声でせせら笑った。

「私がそんなくだらん嫌がらせをするように見えるか? 気づくのが

遅れただけだ」

テルドリンは顧問が座っている長椅子のもう一方の端にのそりと腰かけた。彼は深く息を吐き、腕の矢を引き抜いた。血が数滴飛び散った。

「毒矢だったらしい。さほど強い毒ではない。もう抜けかけている」  
独り言のように呟くテルドリンの前にわたしは立った。彼が顔を上げた。

「治癒の魔法なら必要ない。自分で治す」

「わたしがやる。テルドリン、今まで戦い通しだったもの。それに、毒にやられてたなんて聞いたら心配だよ」

「抜けかけていると言っただろう。休みたいんじゃないのか」

「すぐ終わるから大丈夫。わたしに任せてよ。ね？」

「……そこまで言うなら、勝手にしろ」

わたしはテルドリンの腕を両手で包み、治癒の魔法を直接彼の体の中に流し込んだ。触れずに魔法をかけることもできるが、この方が慣れている。それに、彼の腕に触れることで彼が本当に生きていることを確かめたいという、少し自分勝手な動機もあった。

テルドリンは、いつもならばわたしが直接彼に触れて治癒の魔法をかけようとするのを嫌がるのに、今回は大人しく受け入れた。やはり疲れているのかもしれない。

無理もない。わたしたちは今にも落ちそうな棺にぶら下がって、生死の境を彷徨っていたのだ。まったく、本当に恐ろしかった。あの時のことを思い起こしたわたしの頭にふと一つの疑問が浮かんだ。わたしは彼に魔力を流し込みながら、見回りのドラウグルに聞こえないよう、小さい声でテルドリンに話しかけた。

「そういえば、なんて言おうとしたの？」

「なんの話だ」

「二人で棺にぶら下がってた時だよ。手を離せって言った後、何か言いかけてたよね」

「ああ、あれか」

テルドリンは頷いた。それから、いきなり長い間があった。毒で頭



をやられたのではと心配になった頃、彼は心底不思議そうな声色で後続けた。

「はて、なんだったか？ すまんが覚えていない」

わたしはがっくりと肩を落とした。

「ええ？　すごく大事なことみたいな雰囲気だったのに」

「ハハハ、すまんすまん。さすがに気が動転していたんだ。そうだな、最期に忠告でもしてやろうと思ったのかもしれない。怪しい男についていくなとか、年寄りの言うことにきちんと耳を傾けろとか」

「そんなのが最期の言葉なんて悲しすぎるよ。子供じゃないんだから、そのくらい分かってるって」

「いいや、お前は分かっている。分かっているから今ここにいます。お前は地上に戻るべきだった。いつも私たちが行くような、帰り道のはつきりしている洞窟や遺跡とは違うんだ、ここは」

また小言が始まった。

治癒の魔法をかけ始めた時は、テルドリンの矢傷を受けた部分を中心に魔力が引つかかる感覚があつたが、今は滑らかに流れるようになっていた。わたしは治癒の魔法を止め、彼の腕から手を離して、口を尖らせた。

「だって、どうしてもこの先に何かがあるか気になつたから。テルドリンを顧問と二人きりにするのも心配だったし。あなたに何か起きても絶対助けてくれないよ、あの人」

「そんな輩と組むことを決めたのはお前だ」

「うっ。それはそうだけど」

そこへ、敵地のまっただ中にあることをまるで考えていないであろう朗々たる声で、不機嫌そうに話しかけてくる者があつた。

「私はここにいるのだがね？　許可なく君ら二人だけで話し込み、程度の低い悪口に興じるのも大概にしたまえ」

テルドリンと喋るのに夢中になつて冗談ではなく忘れてしまつていた。顧問だ。彼は殺されかけた衝撃からまだ立ち直れていない様子で、呼吸は荒く、自分の身を支えるように固い腕組みをしていた。

「よくも主従揃つてさんざん盾突いてくれたものだ。特に、君は――」

人畜無害ぶった顔をして、先ほどはあのような、あのような、ッは、破廉恥なッ……！ 例えここを生きて出られても、大学に籍が残っているとは期待しないことだッ」

顧問は途中で言葉に詰まり、赤面して顔を背け、声を裏返らせた。あの時は焦っていて、顧問を脅して言うことを聞かせるなどというとんでもないことをしでかした。謝るべきだろう。第一、これ以上大声を出されるのも危険だ。

「すみませんでした、顧問。ご迷惑をかけました」

顧問はわたしが頭を下げるのを見届けて、それなりに気分が良くなったらしい。二、三度喉仏を上下させて呼吸してから、嫌味な調子の戻った、抑え気味の声で言った。

「私が君らを未だ見捨てずにいることに感謝したまえ。この忌々しいまでの広さでは、例え脱出口があったとして、君らだけで探し出すことは難しいだろう」

確かに、かつて都市だったこの遺跡はどこがどこへ繋がっているのかさっぱり分からず、まるで迷路のようだ。着の身着のまま降りてきてしまったテルドリンとわたしには余裕がない。顧問も身一つであることには変わりないが、彼は望めばリコールの魔法でいつでも大に帰れる。

テルドリンが長椅子に座ったまま顧問に上半身を向けた。

「それじゃあ、あんたはどこに何があるかすっかり分かっているのか。そんなへっぴり腰で歴戦の遺跡探検家だったとは驚きだ」

顧問は小鼻をひくつかせて肩をすくめた。

「この手の場所を訪れたのは初めてだ。しかし経験がなくとも適切な知識と頭脳があれば取るべき道は見えてくる。場数を踏んでいることしか誇れぬご老体とは違うのだよ」

テルドリンは見えすいた挑発には乗らなかつた。

「ならば、私に任せきりにしていないで、さっさと先導してくれ。いくらおつむの出来が良かろうと、ドラウグルを怖がって逃げ回った挙げ句に背後から斬られたのでは意味がない」

顧問は頬の片側を痙攣させて口早に言った。

「怖がつてなどいない。私は元来この類のものには詳しい。ドラウグルにはこれまで遭遇する機会がなかったゆえ、少々手間取っているだけだ。そのうちに慣れる。いや、今すぐに慣れてやる」

顧問はおもむろに右手を上げ、傍らで息絶えているドラウグルの頭上にかざした。掌に紫色の魔力を集め、叩きつけるように下に放った。

ドラウグルが禍々しい光を纏って、ひとりでに起き上がった。蘇った死者は手に持っていた斧を肩に担ぎ、感情のない青い目でテルドリンとわたしを見据えた。

驚いて足が竦んだわたしを、テルドリンが素早く腰を浮かせて後ろに庇った。

今しがた倒したはずなのに、どうして起き上がったのだろう。考えて、間もなく悟った。これは死霊術だ。ドラウグルが操られているのは初めてだが、死んだ獣や人を操っている死霊術師なら見たことがあった。

顧問が歪んだ微笑みを浮かべた。

「警戒せずともよい。此奴は今や私のしもべだ。貴様の大事な主人を傷つけはしない」

顧問は掌を上に向け、五本の指をゆつくりと動かした。

ドラウグルが軽妙な足さばきで踊り出した。ところどころ歯の抜けた口を開けたり閉じたり、ひよこひよこ左右を見回したりして、しまいには斧を隅に放り投げて、顧問に行儀良くお辞儀をした。

わたしは驚きから一転、その動きに見入った。顧問は何事か思索するように目を細めていた。

「なるほど。使い勝手は他の死体と変わらぬな。むしろかなり扱いやすい。元々そのためになられたからか？ ふむ……興味深い」

顧問が掌を下に返し、こちらに向かって払う動作をした。ドラウグルが軽快な足取りでわたしたちに近づいてきた。

ドラウグルはテルドリンの顔に手を伸ばし、マスクの上から顎を器用に撫でた。テルドリンは気味悪そうに呻いてその手を払いのけた。

わたしにはテルドリンのような拒否反応は起きなかった。それど

ころか、ちよつとわくわくした。敵意のないドラウグルは新鮮だった。わたしはテルドリンの後ろからひよいと手を出してみた。ドラウグルはそれを違和感のない動作で取った。ドラウグルの手は枯れ木よりも細く萎れていて冷たかった。だが、嫌な感じはせず、感情のない青目も穴だらけの歯並びもなんだか愛嬌があるように思えてきた。

ドラウグルが一生懸命わたしの手を引くので、わたしは楽しくなつて、導かれるがままテルドリンの後ろから進み出た。ドラウグルはわたしの腰に手を添え、肩を左右に揺らしてステップを踏む、田舎の村の祭りで皆で踊るような素朴な踊りを始めた。

わたしは顔を綻ばせた。シロデイルにいた頃は、旅芸人という職業柄よく村祭りに居合わせ、村人に混じつて踊つたものだった。ファルクリースで死者の間に居候していた頃も一度祭りがあった。ああ、あの時は――

「やめろ」

恐ろしくどすの効いた声が鼓膜を震わせた。

ドラウグルの体から光が消えた。ドラウグルがその場にばたんと仰向けに倒れ、わたしはつられてその胸の中に飛び込んだ。先ほどまでは不思議と感じていなかった、煮詰めた酒のような臭いと薬草のような臭いの混じつた独特の死臭が鼻の中に流れ込んだ。

わたしはええずき、口元を押さえて顔を上げた。顧問が、傲慢な、しかしかすかに緊張の感じられる表情でわたしの背後を見据えていた。

わたしは腕を引っ張られて立たされた。テルドリンだ。待つたをかけたのも彼だった。

「エスコート役を取られて不満だったか？ 使役の練習には最適なのだがね」

珍しく冗談めいたことを言った顧問に、テルドリンは憤つた声色で返した。

「死者を弄ぶな。穢らわしい」

顧問は片方の眉をぴくりと動かした。

「貴様の言えたことではなからう。貴様らダンマーは死んだ仲間に必

「死霊術を掛けると聞くぞ」

「今までに何度同じ口上を聞かされたか……。知ったかぶりをするくらいなら黙っている。死霊術師はどこに行っても嫌われ者だ。ましてドラウグルなど、邪悪なまじないが掛かっているかもしれない。あなたが勝手に使っているだけなら構わんが、私たちに近づけるな」

「どうやらテルドリンは死霊術が嫌いみたいだ。彼は、ウインドヘルムの事件のこともあるし、それ以前にも何か嫌な経験をしたのかもしれない。わたしも良い印象はなかったが、このドラウグルに限っては、死臭を除けばあまり抵抗感がない。死霊術にも上手い下手があるのだろうか？」

顧問はテルドリンを嘲り笑った。

「邪悪なまじないと来たか。これはこれは、なんとも偏見塗れの老人に相応しい言い分だ。安心しろ、その可能性があれば即座に灰にしている。此奴は害のない抜け殻だ。それと、使い道は貴様を苛つかせる他にもいくつかある」

彼は紫色の魔力を再度ドラウグルに撃ち込んだ。ドラウグルが肘を突いて起き上がった。青い目がわたしたち三人の間を彷徨った。

テルドリンが鼻息も荒く剣を抜いた。ドラウグルが驚いたように跳び上がった、わたしの背中を盾にして隠れた。……。これも顧問が操っているのだろうか。だとしたら、なんとというか、ちよつと面白い。「何をにやついている。そこをどけ。そいつの首を落として使い物にならなくしてやる」

テルドリンがわたしの体を避けるように何歩か踏み出した。わたしは慌てて彼の行く手を阻んだ。

「ダメだよ。かわいいそうだよ」

「かわいそうだ!? 寝言も休み休み言え。そんなものをお前とベタベタさせるわけにはいかん。どうあつても成敗する」

「絶対ダメ。ねえ、顧問が大丈夫って言うてるから大丈夫だと思うよ」「このうえ何を言い出すかと思えば。お前はいつからその若造を信用するようになった？ 妙な気でも起こしたか？」

「はあ？ どうしていきなりそんな話になるの」

「それでもなければサルモールの言うことなど信じる気にならんだろうが」

「確かにサルモールそのものには不信感があるけど。顧問は嘘をつくのが得意なタイプじゃないと思う」

「ああ、お前は救いがたいほどのお人好しだ。奴らの所行を知っていれば、どんなに善人ぶっていようと、まともな者はまず関わりを避けるものだ。第一、さつき危うく死にそうになったのもそいつのせいじゃないか。もう忘れたのか？」

わたしたちが言い合いをしている間、顧問は神妙な顔つきで左掌に紫色の魔力を蓄え、指先でその光の塊を混ぜていた。やがて彼は一息ついて、いかにも得意満面という表情を作った。

「テルドリン・セロ。貴様は私が先導するべきだと言っていたな。喜べ、望み通りにしてやろう。ただし先頭に行くのは私ではなく、そのドラウグルだ。其奴はこの遺跡の構造を把握している。知りうる限りの最深部まで案内させる」

死霊術を使うとそのようなこともできるのか。わたしはまた感心して、へえ、すごい、と素直に呟いた。ひねくれているところがあっても、顧問はやはりウインターホールド大学の顧問なのだ。

顧問は、広いけれど薄っぺらな胸板をここぞとばかりに反らした。「更に付け加えるなら、其奴の知る最深部とは、すなわちスノーエルフの探し物のありかだ。私たちはこれ以上余計な労力をかけることなく、目的の場所に到達できる」

わたしは胸が高鳴り、頬が紅潮するのを感じた。きっとその先に、わたしが求めてやまないものがある。わたしの中の、わたしであってわたしではない誰かがそう言っている気がした。

テルドリンは顧問とわたしとドラウグルに代わる代わる視線を注ぎ、諦めたような深い溜息をついて、剣を鞘に収めた。

「そいつを叩き斬るのは今のところはやめておく。だが私の主人の周りには纏わりつかせるな。死臭が移ってはかなわん」

「ふん。本人は満更でもなさそうだが。いずれにせよ呑気に手を繋いで歩かせるつもりはない」

顧問が右手で手招きをすると、ドラウグルがわたしの背中から離れて顧問の隣に立った。

テルドリンは慎重な口ぶりで続けた。

「それから、そいつはドラウグルとしてはかなり低級だ。重要な宝のありかを知っているとは限らない。あまり無駄足を踏みたくはないんだがな」

顧問は肩をそびやかした。

「いいや、此奴は宝のありかを知っているとも。少なくとも、ありかを知る別の者のもとまでは案内できる。この程度はドラウグルに関する研究書を二、三読んでいれば自ずと浮かぶ推論だ。ま、たかが傭兵の貴様では思い至らぬのも無理はないか」

顧問は左手の魔力をドラウグルに撃ち込んだ。ドラウグルは軽くよろけて、すぐに体勢を立て直した。どことなくぼんやりしていた表情が引きしまっていた。ドラウグルは建物の出入口にのしのしと向かっていった。

顧問はそれを満足そうに見送って言った。

「彼奴の後を追うぞ。間違っても斬らないように。魔法を一からかけ直すのは手間だ」

テルドリンがわたしの顔を窺った。わたしは頷いた。後を追わないという選択肢はなかった。

## 6. 最後の関門？

アンカノ顧問のドラウグルに導かれて、わたしたちは同じようなくつかの空間を通り過ぎ、サールザルの奥深くへと進んでいた。

なぜ奥深くへ進んでいると分かったかと言えば、例の感覚がますます強くなっている気がしたのもあるが、それよりも、敵の強さが増してきたからだ。斧の一振りが重く、弓の一撃は速く、シャウトを使うドラウグルも現れた。

顧問のドラウグルは、見た目には敵のドラウグルたちと変わらないのに、わたしたちと同じように標的にされていた。どうやらドラウグルたちは見た目以外にも敵味方を判別する方法を持っているらしかった。顧問のドラウグルは先頭を歩いている分、攻撃される確率も高く、テルドリンが悪態をつきながら守っていた。

今はちやうど、空間から別の空間へと繋がる狭い通路へ入って、顧問のドラウグルが仕掛けられていた雷の罫の魔法を踏み、大ダメージを受けて通路の隅で膝を突いてしまったところだ。魔法の発動音に引き寄せられて前後から二体ずつのドラウグルがわらわらと詰めかけてきた。

顧問の指示で一番後ろを歩いていたわたしは、テルドリンが召喚してくれた炎の精霊の背後に隠れて、死者の町の方から駆けてくるドラウグルに向かって犬の使い魔を召喚し、聖者の光を撃った。使い魔の方は成功したものの、聖者の光はあらぬ方角へ飛んでいった。

「役立たずが！」

顧問の罵声とともに、弓の弦のような形の、聖者の光に似た白色の魔法がわたしと炎の精霊の体を通り抜けた。魔法はドラウグルたちに命中し、彼らをよろめかせ、元来た方へ逃走させた。

顧問は金色の目と端正に並んだ歯を恐怖で剥き出しにして、肩で息をしていた。ドラウグルに遭遇するたびにこの顔になるのでいつか倒れないかと心配だったが、宣言していた通り、少しずつ慣れてはいるようだった。そしてそんな状態であってさえ、彼はわたしよりずっと戦うことには長けていた。



「左へ避ける、老いぼれ！」

顧問は言うなり前方にチェインライトニングを連続して放った。身をよじったテルドリンの胸当てのすぐ横を青白い電流が立って続けに貫いた。テルドリンとの戦いで既に体力を失いかけていた一体目のドラウグルが倒れた。貫通した電流にやられたもう一体のドラウグルがふらふらの状態でなおも向かってくるのを、炎の精霊のファイアボルトが怯ませ、とどめにテルドリンが斬って捨てた。

「走れ。後ろの亡者どもを撒く」

顧問は息の荒くなっているテルドリンに命令した。テルドリンは黙ってその命令に従った。顧問はわたしを顧みることもなくテルドリンに続いた。

わたしは彼らを追いかけてようとして、通路の隅で膝を突いたままの顧問のドラウグルに目を留めた。ドラウグルはまだ体力が戻らないようで、青い目を心なしか不安げに瞬かせてわたしを見上げた。

「治癒の魔法は……効かないよね」

迷っている時間はなかった。わたしはドラウグルの腕を自分の肩に回させて立ち上がらせた。死後に干からびてしまったからなのか、ドラウグルの背丈は、ノルドにしては低すぎると言われるわたしよりも低く、体の重さもわたしとさほど変わらないと思われた。

テルドリンがわたしの名前を叫んで通路を逆走してきた。わたしはドラウグルと一緒に歩き出したところだった。テルドリンはわたしにドラウグルに肩を貸しているのを見て、不快そうに顎を引いた。「何をやっている」

「助けてるの。この方が速く歩けるでしょう。道案内がいなくなったら困るし、あと、その、かわいそうだったから」

最後の一言の方が本音だった。テルドリンにはばっちり見透かされて、遠巻きにされたまま文句を言われた。

「さつきから、かわいそう、かわいそうとそればかりだが、そんなふうに思うのがそもそも馬鹿げているんだぞ。そいつはただの死体だ、アンカノの魔力で動いているだけのな」

それは分かっているつもりだ。けれど、こうして敵対もせず一緒に

歩いたり戦ったりするのを見てみると、どうしても邪険にはできない。

通路を抜けたそこにあつた空間は、これまでとは雰囲気が変わっていた。天井までの高さは、ちょうど達成の間のわたしの部屋くらい、幅はわたしの部屋の二倍くらいだ。空間はその幅と高さのまま、途中に巨大な男の頭の彫像を二つずつ挟んで奥にまっすぐ延びているが、それほど長いわけでもない。小走りで行けば、すぐに一番奥の大きな落とし格子に阻まれる。その先には、この位置からでは、崩れた土砂が見えるだけだ。

行き止まりだろうか？ いや、そうではないと思う。顧問のドラウグルの目指していた場所だし、わたしの中の燃えるような感覚は相変わらずわたしを急かしている。そして扉の前にはノルドの遺跡でよく見かけるレバーと、腰くらいまでの高さの四つの石碑がある。

顧問は四つの石碑の間を思案顔でせかせかと歩き回っていた。

わたしはテルドリンの非難がましい視線に応えて、顧問のドラウグルに肩を貸すのをやめた。

ドラウグルは一人で歩ける程度には回復したようだった。よろめきながら奥へ歩いていき、落とし格子の前に立った。それきり、固まった。ドラウグルがそこに立ったことで落とし格子が開くことも、隠し通路が姿を現すこともなかった。鎧を着た背中になんとか哀愁が漂っているような気がした。

「どうしたのかな？」

わたしの問いに、テルドリンは軽く肩を回しながら答えた。

「親切な誰かが開けてくれるのを待っているんじゃないか？ 私だったらあの石碑とレバーをどうにかしようと思うがな。ただの死体では、所詮そこまでの知恵は働かないだろうよ」

「ただの死体」という言葉を彼は特に丁寧な発音した。

わたしは通路の方をまだ警戒しているテルドリンを置いて、四つの石碑を調べることにした。ノルドの遺跡によくある仕掛けだった。三つの面に動物の絵が描かれていた。全ての石碑の正しい面を目印に合わせ、レバーを引けば落とし格子が上がる仕組みと思われた。

……だが、今までに解いてきた他の遺跡の仕掛けと比べると、何か違和感がある気がした。

「さしたる考えがないのであれば、私の周りをうろつかないでくれたまえ。目障りだ」

顧問が氷のような声と視線をわたしに浴びせた。わたしは腰が引けてしまいそうになったが、なんとか抑えて尋ねた。

「この仕掛け、どこかに手がかりがないでしょうか」

「君の目は節穴か？ 左右の壁を見たまえ。そこにかつてあったものが手がかりだったのであろう。すっかり消されているがね」

石碑を挟んで向かい合わせになっている左右の壁には、広い範囲にわたって何か削り取られたような跡があった。更に、その痕跡とは無関係に、ところどころに穴が開いていた。石碑の正しい面を選ばなければ毒矢か何か飛び出してくるのかもしれない。

テルドリンがこちらに歩いてきて、右手前の石碑の周りを巡った。「狼に、蝙蝠に、魚か。珍しい組み合わせだな。私の記憶では、この手の仕掛けで出てくる動物は蛇、鳥、魚くらいだったと思っただが」

そうか。テルドリンのおかげで石碑の違和感の正体が分かった。描かれている動物の種類が多いのだ。蛇、鳥、魚の他に、狼、蝙蝠、蜂、熊など、見たことのない種類が混じっている。更に、描かれている動物の組み合わせが石碑によって違う。

右手前の石碑は狼、蝙蝠、魚、右奥は馬、狼、蜂。左手前は熊、兎、鳥、左奥は牛、鳥、蛇。

どうしてわざわざこんな組み合わせになっているのか、考えてみよう。

ここはサルザル。スノーエルフによって滅ぼされたノルドの都市だ。

スノーエルフはノルドが持っていた何か欲しくて「涙の夜」を引き起こした、と顧問は推測している。もし、それが今もサルザルの奥に眠っているのならば、そこへ辿り着く鍵も「涙の夜」にあるのかもしれない。

上層の町の広場にあった、例のおどろおどろしい壁画。あの中で

は、四体の動物が、ノルドの勇者たちと一緒にスノーエルフに立ち向かっていった。

わたしは四つの石碑のうち二つを狼、もう二つを鳥の面にした。それから顧問に言った。

「これで開かないか試してみます。危ないので、下がってください」

顧問は切れ長の目をきゅっと細めた。

「何を思いついたか知らぬが、まあ好きにすればよからう」

彼は高みの見物とでも言わんばかりに取り澄ました顔で空間の手前側へ下がった。

テルドリンがレバーの前に進み出た。

「レバーは私が引く。問題ないな？」

彼は、失敗して毒矢や槍が飛んできたら貧弱なわたしではひとたまりもないからと、いつもこの役を引き受けてくれる。

「うん。お願い、テルドリン」

わたしはそう答えて、顧問の隣に並んだ。

テルドリンが、ふっと軽く息を吐きながら、レバーを引いた。

頭上から岩を転がしているような大きな音が響き、落とし格子が引き上げられていった。落とし格子の前で立ち往生していた顧問のドラウグルはもう居ても立ってもいられない様子で、落とし格子が上がりきるや、すぐに歩き出し、右に曲がって見えなくなった。道はそこから側へ続いているらしい。

テルドリンが感心した様子で聞いた。

「どういう理屈だ？」

わたしが説明すると、彼は皮肉っぽく笑った。

「なるほど。『涙の夜』の惨劇を頭に叩き込んだお利口さんだけが先に進めるというわけだ、え？　なかなかよくできているじゃないか」

不愉快そうに金色の瞳をぎらつかせて黙り込んでいた顧問が、無理やり唇の端を吊り上げた。

「馬鹿馬鹿しい。怪しげな組み合わせを選べば、当て推量でも正解できるではないか。ノルドどもも間抜けな仕掛けをこしらえたな。この程度のものが障害になると思ったのか？」

顧問は片手をさっさと進行方向へ差しのべた。  
「先を急ぐぞ。これがノルドどものとっておきのネズミ取りなら、もうすぐ私たちは目的地に到着するであろう」

## 7. スノーエルフの探し物

落とし格子から先は、広めの一本道になっていた。一つ罨があったくらいで、敵は見当たらなかった。

進むにつれ、わたしの血管の中を柔らかくて小さな炎が巡っているかのような、ふわふわと心地良い感覚が全身に満ちてきた。それは今までずっと感じていた焦らすような感覚の集大成だった。目的の場所はまだもう少しそこに違いないと、わたしの体は張りきって伝えていた。

しかし同時に、体の外側では、別の現象も起きていた。普通の石と苔の匂いのする空気の中に、ぴりぴりと肌を刺す空気が混じってきたのだ。空気が薄いとか、毒が撒かれているとか、そういうものとは違う。害はなく、実体もない。しかも、おかしなことに、それを吸い込むと頭が冴えてくる。そうするとなんだか、気持ち悪いような、気持ちいいような、よく分からない、まぜこぜの気分になる。

その空気を感じているのはわたしだけではなかった。アンカノ顧問のドラウグルはちよっとうきうきした歩き方になっていた。テルドリンは時々歩く速度を緩めては、纏わりつくそれを振り払おうとしているかのように頭を左右に振っていた。アンカノ顧問は胸を大きく広げ、肩を上下させて何度も深呼吸をしていた。

通路の果てに黒い扉があった。顧問のドラウグルがそれを躊躇いなく開け放った。

ぴりぴりした空気が少し濃くなった。下り階段の先に青緑色の光がちらついていた。

顧問のドラウグルを先頭にして階段を降りたわたしたちの目の前に、ウィンターホールド大学の元素の間くらいの大きさの四角い空間が開けた。わたしたちの立っている階段前のスペースから左右の丸太の階段を降りていったところが、この空間の地表面だった。

わたしたちの正面奥には四本の柱が聳えていて、青緑色のゆらめく空気の膜が柱の間に湧いていた。膜の内側に浮かんでいたのは巨大な球体だった。横方向にゆっくりと回転するその球体は、不揃いな形

の岩のようなもので表面を覆われて、下から青緑色の光が透けていた。

わたしは一目でそれがおかしな空気の出所だと理解した。

わたしたちは誰からともなく、それをよく見下ろせるよう、スペースの縁まで移動した。

「スノーエルフが探していたのは、これか」

テルドリンとわたしの間に立った顧問が震える声で言った。その震えは、おそれから来るものなのか、それとも、喜びから来るものなのか、判断がつかなかった。

顧問のドラウグルが丸太の階段を降りて、球体に近寄ろうとしていた。わたしはその無邪気な姿を目で追おうとして、視界の中で別のものが動いたことに気づいた。

四本の柱の手前側に、蓋の開いた棺が一つあった。棺の中から一体の手ぶらのドラウグルが起き上がり、わたしたち三人を見上げていた。ドラウグルの体は球体と同じ青緑色の光を湛えていた。

番人。咄嗟にその一言が思い浮かんだ。いくら顧問が古代のノルドを馬鹿にしようと、彼らだって大切な宝を守るのにネズミ取りだけで済ませるわけがないのだ。

ドラウグルはやにわに片手を上げ、球体を穴が開きそうなほど凝視している顧問目にかけてアイスパイクを放った。

テルドリンが顧問を庇って仰向けに押し倒した。アイスパイクは顧問ではなく、テルドリンの肩に突き刺さった。

ドラウグルが振り上げたもう片手で放った二発目のアイスパイクをわたしは横に跳んでよけた。テルドリンは顧問の胸の上から這い降りて立ち上がるようにしていた。彼を狙った三発目、四発目のアイスパイクを、わたしは魔力の盾で遮った。

「よくやった。あとは任せろ」

テルドリンがわたしの肩を引いて顧問の隣に尻もちをつかせた。彼は素早く抜剣しつつ左手で炎の精霊を召喚し、丸太の階段を駆け下りていった。

棺の中にいたドラウグルは、最も目立つ動きをしているテルドリン

を標的に定めていた。ドラウグルは炎の精霊が背後からファイアボルトを浴びせてくるのを気にも留めず、テルドリンに向けてアイススパイクを連発した。

テルドリンは、それらのいくつかは剣で弾き飛ばし、残りは構わず撃ち込まれるがままにして、ドラウグルに突進していった。

「はあっ！」

十分に距離を詰めた時、テルドリンはドラウグルの無防備な首に向かって剣の刃を一閃させた。それで全てが終わる、はずだった。

ところが。刃は、キーン、という、まるで鋼の鎧にでも当たったかのような音を立てて、折れた。ドラウグルの首に触れたところから、真つ二つに。折れた先は床ではね返って転がった。

肝心のドラウグルの首は無傷だった。ドラウグルは両手を振り上げて、魔力を掌にほとばしらせた。青光りする電流の膜がドラウグルの全身を繭のように覆った。雷のマントだ。

「ぐうっ……い！」

とどめを刺すために間近まで迫っていたテルドリンは、電流をまともにも食らうことになった。彼はよろめき、覚束ない足取りで数歩後退した。ドラウグルはそこへ更にアイスストームを撃ち込んだ。

「テ——！」

思わず膝立ちになったわたしの口を、冷たく乾いた手が塞いだ。

「大声を出すな。私たちに標的が移るであろうが」

顧問の上ずった囁き声が耳のすぐ近くでした。

テルドリンは追撃のアイスストームを魔力の壁で防いでいた。全ては無力化することができず、足や脇腹に氷の結晶が張りついた。

その追撃が終わると、ドラウグルは両腕を下ろし、じりじりと後ずさった。魔力切れのようだ。テルドリンがすかさず追いつき、折れた剣の先で首を突きにかかった。

また鎧とぶつかったような音がした。ドラウグルは剣に押されてのけ反ったが、無傷だった。

テルドリンはダンマーの言葉で罵声を上げ、ドラウグルの剥き出しの腕や防具の隙間を短くなった剣の刃で斬りまくった。全て、無駄



だった。

呆然とした様子で再び後退したテルドリンを前にして、ドラウグルはがらがらと不気味な笑い声を立て、球体に近い片手を高く掲げた。球体を取り巻く青緑色の空気が、その掌の先に吸い込まれるように引き寄せられていった。

「力の源はやはり、あれか」

顧問が呟いた。次にはわたしの口を塞ぐのをやめ、例の光る円盤の魔法を発動した。彼はテルドリンとドラウグルを大きく迂回して、球体の斜め上に浮かんだ。そして、両手を胸の前に突き出し、球体に向けて電撃の魔法を放ち始めた。

ドラウグルは狼のような唸り声を漏らし、顧問の方へ頭を巡らせた。自分以外の何者かが球体に干渉していると感づいたらしい。球体から充填した魔力で、ドラウグルは顧問に向かってアイススパイクを撃った。

顧問は電撃の魔法を引っ返めて魔力の盾を発動し、間一髪のところまでアイススパイクを無効化した。ドラウグルが古の言葉で何事か呟き、テルドリンにくるりと背を向けて走り出した。標的を顧問に変えたのだ。

顧問は焦った様子で天井近くまで浮上し、更にドラウグルから逃れるように空間の隅の方へ移動し始めた。

「其奴の動きを止めろ、老いぼれ！ その魔法は私にしか解けない！」  
既にテルドリンはドラウグルの後を追っていた。ドラウグルはテルドリンが迫っていると見るや、雷のマントをもう一度発動した。電流の膜でドラウグルの全身が覆われた。更にアイスストームが一発繰り出された。テルドリンは、容赦のない氷の暴風と、その先の電流に覆われたドラウグルの体に、微塵の迷いもなく跳びかかった。

ドラウグルが喚きながら床に仰向けに倒れた。テルドリンはその上に馬乗りになり、ドラウグルの両掌が下になるよう、手首ごと床に押さえつけた。

「テルドリンー！」

わたしはテルドリンの言いつけを破って駆け出した。ドラウグル

の動きは封じられている。だがテルドリンも無事ではいられない。さつきまでのダメージに加え、雷のマントで体力を奪われ続ける。

走り寄るにつれ、ドラウグルの怒声に混じって、テルドリンが食いしばった歯の間から苦しそうな息を漏らしているのが聞こえてきた。

「馬鹿。来るな」

テルドリンの叫びを丸つきり無視して、わたしは彼に抱きついた。彼に触れたところから、肉や骨を少しずつ離ればなれにしようとしているかのような、気持ちの悪い痺れが広がってきて、わたしの体を支配した。喉から悲鳴が漏れた。頭がおかしくなってしまうそうだった。でも、テルドリンの背中の温かさが正気を保たせてくれた。わたしは彼に回復魔法を掛けなければいけないのだ。

「テルドリン……」

わたしは自分を奮い立たせるために彼の名前をもう一度口にして、体中を流れる電流の隙間を縫って魔力を掻き集め、テルドリンの肩から回して胸に重ねた掌から放出させた。穏やかな熱が、テルドリンの肩や脇腹のアイスピックにやられた部分や、電流で弱りきった体の内部に沁みていくのが分かった。

その時、例の球体を覆っていた青緑色の膜が消失した。体の外側で渦巻いていたぴりぴりした感覚もなくなった。

顧問が球体の脇に浮かび、腕を組んでわたしたちを見下ろしていた。目をらんらんと輝かせ、高慢で誇らしげな笑みを浮かべて。

「終わらせろ。其奴はもう無力だ」

テルドリンは押さえていたドラウグルの両手を離し、ドラウグルが魔法を放つ隙も与えずにドラウグルの頭を素早く鷲掴みにして、折れた剣の刃で首を切り裂いた。

ドラウグルの体が一度、わたしたちの下でびくんと跳ねた。それから、全てが静まり返った。

テルドリンが頭を垂れて長い息をついた。彼は、まだ抱きついたまままでいるわたしの腕に指の先で軽く触れた。

「無事か？」

「わたしは全然平気。ちょっと痺れただけ」

「ちよつと痺れただけって、お前なあ」

テルドリンはわたしの腕を外して立ち上がり、背を向けたまま、いまいち感情の読み取れない声で、もごもごと言った。

「何も、私と一緒に雷のマントにやられる必要はなかっただろう。離れたところから掛ければよかったんだ」

「そうなんだけどね。つい焦っちゃって」

「……さつきは体力が限界に近かった。回復魔法そのものはいい判断だった。助かったよ」

テルドリンはわたしを振り返り、柔らかく励ますような声色で続けた。

「ただ、次からは、焦りに負けず、冷静に行動しろ。間違っても自分の護衛と共倒れになどならんようにな」

「分かったよ。ありがとう、テルドリン」

テルドリンは小言も多いが、良いと思ったところはこうして率直に褒めてくれて、きちんと忠告もしてくれる。それが、こそばゆくて、嬉しい。

わたしたちの隣に顧問が降りてきた。相変わらず得意げに反り返っていたが、その表情の中にはなぜか苛立ちがちらついていた。

「脱出口を未だ発見していないにもかかわらず、既に外に出られたかのような口ぶりだ。大した楽道家だな、君らは」

確かに安心するのはまだ早い。でも、そんな突っかかるような言い方をしなくてもいいのに。

テルドリンが顧問に皮肉っぽい口調で応じた。

「お褒めいただいて光荣だ。その通り、出口はまだ見つかっていない。だが、あんたはもうお目当てのものを探し当てた。大学に帰る頃合いじゃないか」

顧問は片方の下瞼をひくつかせた。

「そうしたいのは山々だ。しかし、あのドラウグルの巣以外の出入口がもしあるならば、把握しておく必要がある。大学の者たちをここに入れ、転移の魔法陣を構築させ、あの物体を大学へ移動させるためだ」

彼は、四本の柱の間に浮かんで回転している球体を指さした。球体

を覆っている不揃いな形の岩——その岩と岩の継ぎ目には、びっしりと青緑色の文字が並び、明るい青緑色に光っていた。未だかつてどこでも見たことのない文字だった。

球体を眺める顧問の表情は、いつになく生き生きとしていた。この球体に秘められた力のことを想像しているのだろう。わたしもウィンターホールド大学の学生の端くれだから、同じ気持ちがあくなくはない。しかし、どこことなく不安も感じる。

この球体を大学に運びたいと顧問が言ったら、遺跡を壊されたアーニエル先生は憤慨するだろう。でも、他の先生や研究生、学生たちは？ たぶん、いや、絶対に喜ぶ。あつという間に大学に移動させ、色んな実験を始める。……爆発したりしないだろうか。とても心配だ。「したがって、君らは引き続き周囲を探索したまえ。脱出口が見つかったらここに戻ってきて報告するように」

「顧問は来ないんですか？」

顧問はじろりとわたしを見下ろし、次いで床の上に倒れているドラウグルに目をやった。

「私はこの球体とそのドラウグルについて調べることがある。君のお気に入りの仲間を貸してやるから、さっさと出発したまえ」

顧問が手招きをすると、球体の裏手から顧問のドラウグルが走ってきた。テルドリンが喉の奥で、うっと唸った。

わたしは、球体から顧問のドラウグルの方へ目を逸らした瞬間、体の奥の急かすような感覚がまだ消えていないことに気づいた。わたしが見つけたかったのは、この球体ではなかったのだ。

## 8. 前触れ

球体の裏にあった黒い両開きの扉を開け、狭い通路を抜けたところには、石造りの遺跡には不釣り合いな、天然の土の地面と天井が広がっていた。天井に開いた穴は地上に通じているらしく、淡い朝焼けの光が差し込んでいた。外気が入ってきているせいか、遺跡の他の場所よりも寒かった。

その中に、雑草に囲まれるようにして、背の高い半円形の壁が建てられていた。壁の下半分には爪で引っ搔いたような文字が並んでいた。

体中の血液が、にわかに燃え立った。これを探していたのだ、とわたしは思った。

足が勝手に動いていた。わたしは半円形の壁の中に立った。寒さがいくらか和らいだ。壁は、その高さでわたしを威圧しているようにも、外界からわたしを守ろうとしているようにも感じられた。

わたしは壁の文字に手で触れた。

瞬間、目の前が真っ暗になった。何も見えない。何も感じない。暗闇の中から色も形も分からない何かがふっと浮かび上がって、わたしの頭の奥深くへなだれ込んできた。その正体をわたしは知らない。知りたくない。前も同じようなことがあった。なぜだろう、さっきまであんなに求めてやまなかつたのに、もうこれ以上わたしの中に入つてこないでほしい。

けれど、嵐のように荒れ狂う心の中で、わたしをなだめるわたしがいた。今はまだ分からないかもしれない。でも、怖がらなくて大丈夫。時が来れば、必ず――。

唐突に暗闇が晴れた。わたしは元の半円形の壁の中に立っていた。「こんなところにもこの壁があったとは。驚いたな」

テルドリンがわたしの隣に立ち、壁の独特の文字を眺めた。以前、彼と一緒に入ったノルドの遺跡のいくつかでも同じような壁があった、同じようなことが起きたのをわたしは思い出した。

「お前はこの文字を読むわけではないんだっただか？ まあ、今時分

に読めるのは研究者くらいか。古のノルドの一部が使っていた文字だというが……」

テルドリンが喋っている途中で、背後から狼が無理やり人語を話しているかのような不気味な声が聞こえてきた。アンカノ顧問のドラウグルだった。歯の抜けた口を開閉し、喉の奥から声を絞り出していた。

「もしかして、これを読み上げてるの？」

わたしの問いにドラウグルはぽかんと口を開けて黙り込んだ。意味が理解できないのだろうか。

テルドリンが鼻を鳴らした。

「フン。まともな意思疎通ができれば、死霊術にも使い道があると認めてやってもいいんだが。やはり、邪悪で低俗な術に過ぎんな」

ドラウグルは、口を開けたまましばらく立ち尽くしていた。それから、よたよたと体を回転させて、石碑から見て右手側に歩いていった。

「あ、どこ行くの？」

「すねて引きこもろうとしているんじゃないか。主人に似てプライドが高いらしい」

軽口を叩くテルドリンを連れて、わたしはドラウグルを追いかけた。半円形の壁から抜ける時、少しだけほっとした。もうこんな妙なことは起こるまいと思う一方で、もしまたいつかこの壁に出合ったら、懲りずに同じことを繰り返す気もした。

半円形の壁ばかりに目が行って気づいていなかったが、右手には扉が一つあった。その先には、岩壁を掘って作られた、でこぼこした通路が長いこと続いていた。いったいどこまで行くのかと不安になってきた頃、波の音が通路の壁に反射して聞こえてきた。

通路の果ては、氷と雪でできた、冷気と潮の匂いに満ちた洞窟だった。通路付近は天井が高かったが、先へ進むにつれ低くなり、しまいには腹ばいで氷の天井と雪の地面の隙間をくぐることになった。波の音はどんどん大きくなり、灯火の魔法を使わなくても周囲の様子が分かるほど明るくなった。

やがて、鼻先を冷たい潮風が掠め、きらきらと瞬く白い光が目射

た。ホーカーや熊は潜り込むことさえ不可能と思われる小さな洞窟の入口が、朝焼けを映して鈍く輝く亡霊の海と、雪混じりの砂浜を切り取っていた。

|| || ||

わたしたちはアンカノ顧問のところへ報告に戻った。ほどなく、顧問のドラウグルを先頭にして、氷と雪の洞窟に繋がる通路を歩くことになった。

「予想通りだ。外界への出入口は間違いなく存在すると思っていた」

わたしの前を行く顧問が得意げに言った。

「どうして分かったんですか?」

「君はこんな簡単なことも自分の頭で考えられぬのか? 例えば、遺跡のそここで火を灯されていた蠟燭だ。何千年分も作り置きされていたとしても、そのように長い年月を経ても劣化しない代物が作れるとも思えぬ。死体や小動物からも作れないことはないが、非効率的だ。だとすれば、定期的に外へ材料となる動物を狩りに行っていたのであろう。」

ドラウグル——獰猛、従順、そして器用な死者を作り上げたという一点のみにおいては、私もノルドに感服せざるをえない」

顧問は興奮気味に語った。なるほど、言われてみればその通りだ。最初の一言がなければ、もっと気持ちよく納得できたのだが。

「感服したから、持ち帰って自分の部屋に飾ろうというのか? どうかしているよ、あんたは」

先ほど倒したドラウグルを肩に担いで、わたしたちの後ろを歩いているテルドリンが、怒りと呆れに満ち満ちた声で言った。

顧問は横顔を見せて、不貞腐れた様子の子のテルドリンと、事切れたドラウグルの体を満足そうに一瞥した。

「インテリアとしても悪くはないがな。まだ調べたいことが山ほどあるのだ。あの物体と一緒に置いておくと他の者に取りられてしまう」

顧問からこのドラウグルを運び出せと命令された時のテルドリンは、それはもう猛烈な拒絶ぶりだったが、誰のおかげで無事でいられたのか云々と顧問が声高に主張し始めたために渋々折れた。テルドリンはドラウグルを担ぐ時、帰ったら風呂で念入りに体を洗わなければとか、鎧に臭いがついたらどうしてくれるとか、ぶつくさ呟いていた。

そういうえば、顧問には先ほどのことも含めて、ろくに礼を言っていなかったのだった。さんざん馬鹿にされたものの、結果的に何度も助けてもらい、目的も果たすことができた。礼儀は尽くしておきたい。

「顧問。助けてくださってありがとうございます。今の戦いだけじゃなくて、サールザルに入ってから、ずっと。おかげでわたしの方でも探してたものが見つかりました」

テルドリンも、とてつもなく不本意そうではあったが、わたしに続けて言った。

「私からも一応は感謝しておく。あくまで、こいつの探し物に手を貸したことに關してだけはな」

再び正面に向き直った顧問の、尖った耳の先が少し赤くなっていた。

「……ようやく最低限の礼節を弁える気になったか。遅すぎるが、受け入れてやらぬこともない。貴様らの働きぶりは、諸々を考え合わせれば及第点といったところだった。またこのような機会があれば同行させてやってもよい。無論、私自らがこの荒涼としたノルドもの領分を出歩く機会など、今後あつてほしくはないが」

わたしも、そんな機会はなるべく訪れないことを願いたい。

それで会話はいったん終わった。しばらく黙って歩き、わたしたちは氷と雪の洞窟に着いた。

不意に、顧問が立ち止まった。つられてわたしもテルドリンも止まった。どうしたのかと思ってその黒い背中を眺めていたら、彼は何かを喉に詰まらせでもしたように、くっくつと苦しそうな笑い声を立てた。

「しかし、思い返してみれば、まるで再現だったな、これは」



独り言めいた小さな声で彼は言った。本当に独り言なら反応する必要はないけれど、独り言でないなら一応話を聞かないと怒るかもしれない。わたしは尋ねた。

「何がですか？」

顧問が振り返った。自信たつぷりの悦に入った笑いを浮かべていたが、同時に、どこか憂鬱そうな影が瞼の上や頬のあたりにかかっているようにも見えた。

「私たちが過ごしたこの一夜だ。スノーエルフもまた、何千年も前の一夜、愚かにも邪魔立てするノルドどもを倒して最深部に辿り着き、あの唯一無二の至宝を手に入れたのではないか？」

今の今まで、そんなふうに考えたことはなかった。でも、言われてみれば、顧問とテルドリンはあの壁画で描かれていた侵略者と同じ、エルフだ。彼らを迎え撃ったのはノルドの成れの果て。一度は奪われた秘宝を、もう二度と奪わせまいとして蘇った死者たちだ。そして、わたしは――

「彼らの傍らには、内通者がいたやもしれぬ。ノルドでありながらノルドを裏切った者。都市の最奥部まで彼らを手引きするような者が」わたしとテルドリン、どちらに向けているともつかない顧問の黄金色の両眼は、あの「涙の夜」の壁画を見ていた時と同じで、とても寂しそうだった。彼が常に振りまいている傲岸不遜な態度とは天と地ほどの差があるその眼差しに、わたしは急に惹きつけられて動けなくなった。今、例えば顧問に首を絞められたり、火炎の魔法で燃やされたりしても、抵抗なしに受け入れてしまう気がした。

わたしを正気に戻したのは、テルドリンの心底馬鹿にしたようなかすれ声だった。

「ハッ。くだらん。その妄想、大学の連中には聞かせない方がいいぞ。神経質が昂じて、いよいよイカれたと思われるからな」

顧問の目の寂しそうな光は、みるみるうちに、燃え盛る憤りの炎に塗り替えられた。

「傭兵風情が……ッ、ウインターホールド大学顧問たる私に向かってなんとという口の利き方だ！ 貴様らは用済みだ、いつそこで始末し

「てやろうか！」

「やれるものならやってみろ。脱出口を見つけた以上、あんたのご機嫌を取る必要はなくなった。あんたが消えても大学の連中は頓着しないだろうよ。むしろ、私たちに礼を言いに来るかもな」

「なツ、なあツ、ぬわあくにいく!?!」

「ちよつ、ちよつと、落ち着いてください！ テルドリン、言い過ぎだよ、謝って!」

「謝罪など聞かぬわ！ その不格好な鎧よろいと海の底に沈めてやる！」

「……貴様、モロウインド一の鎧鍛冶の特注品を、不格好と言うか……？ よかろう、返り討ちにしてくれる」

「もう、やめてってば——」

すったもんだしているわたしたちを、顧問のドラウグルが不思議そうに首を傾げて見つめていた。

——『サールザルにて』了——

魔法

1. 躊躇と拒絶

テルドリン・セロとわたしは雪山を下り、ウインターホルドの町の門前に立った時には、分厚い雲に覆われた空が暗くなりかけ、肌寒さが一層身に凍みる時間が始まっていた。

門番の衛兵が、勤務前にエールでも一杯引っかけたのか、酒の匂いをさせながら陽気に話しかけてきた。

「おう、あんたらか。またどこか行ってきたんだろ。面白いものは見つかったかい？」

テルドリンは、人の体ほどの大きさの、布でくるんだ荷物を肩に担いでいるというのに、全く乱れていない声で答えた。

「大したものじゃなかったよ。セプティム金貨の詰まった箱でも置いてあれば良かったんだがな」

実際は、雪山の向こうにあるサールザルの遺跡でセプティム金貨どころではない大発見をしてきたところだが、テルドリンはそれをあっさりとは伏せた。サールザルの発掘調査について知っているのが大学の教授陣と首長周辺の人々だけであると考えてのことだろう。

衛兵は、しかし、首を傾げた。

「そうなのか？ でも、そのデカイ荷物は？ お宝じゃないのかい？」

わたしは内心ぎくつとした。中身を見られたら騒ぎになるのは間違いない。

「ああ、これは——」

「君らにとっては宝とは言えぬだろうな」

テルドリンの声に被さるようにして、嫌味っぽい、高圧的な男の声が背後から響いた。少し遅れてやって来た、ウインターホルド大学の顧問のアンカノだった。彼は、テルドリンの運んでいる荷物の中身と同じもの——ドラウグルを一体、連れていた。こちらの方は顧問が死霊術で操っているので、自立し、しゅうしゅうと息継ぎをしている。

衛兵が、うわつと悲鳴を上げ、剣を抜いた。当然の反応だ。普通の人にとって、ドラウグルはスカイリムに並み居る恐ろしいクリーチャーの一種でしかない。わたしは慌てて言った。

「大丈夫です。ちよつとした魔法で動いてるだけで、襲ってきたりはしません」

「死霊術だ。矮小な言い口で貶めるのはやめたまえ」

顧問が鋭く言い放った。誤魔化そうとしたのに、操っている当の本人がこれではどうしようもない。案の定、衛兵は剣を顧問に向けた。

「死霊術?! なんておぞましいものを! ここは通さないぞ。動く死体と死霊術師なんかにおれの町を歩かれちゃたまらない!」

顧問はドラウグルを引き連れて、ずいとわたしの隣に立った。

「死霊術師を通してはならぬという法律などなかったはずだが? こちらとて、辛気臭い寒村など歩きたくはない。道中にあるゆえ通らざるを得ないだけだ」

「かつ、寒村だと? ウインターホールド地域の首都だぞ、この痩せぎすエルフめ!」

「口の利き方を分かっているようだな。私を誰だと思っている。サルモールにしてウインターホールド大学顧問のアンカノだ」

「サルモール……?」

衛兵は、兜を被った頭を何度か上下させて顧問の姿を観察した。それから、剣の切っ先を顧問の胸の高さまで上げた。

「ハツタリをかますのも大概にしろよ。ウインターホールドにサルモールが来たなんて聞いたことがない。お偉いハイエルフの皆さんがたは、タロスを信奉する反逆者の土地、しかもこんな『寒村』に興味なんか持たないだろう」

顧問は片頬を神経質そうに痙攣させた。彼の唇からは、今にも理屈っぽい文句が矢継ぎ早に飛び出してきそうだった。だが、彼は一息、怒りで震える息を吐き出した後で、連れているドラウグルに片手を向け、軽く引つ張るような動作をした。ドラウグルが降り積もった雪の上にどさりと倒れた。

「要は、私と此奴が村の中を歩きさえしなければ気が済むのだな?」

顧問は、震えの残る声で言い、わたしとテルドリンを見下ろした。「私は先に行く。このドラウグルを担いで私の部屋まで来たまえ」  
言い終わるなり、彼は両手を胸の前に掲げた。真正面にいた衛兵が身構えたのも束の間、彼は薄紫色の光の粒と共に消え去っていた。どうやら今のが、予め自分で決めておいた地点に瞬間移動できるという、リコールの魔法だったらしい。きつと大学寮の中にでも戻ったのだろうか。

「どうするんだ？」

テルドリンが溜息混じりに尋ねてきた。もう答えは分かっているとしても言いたげな調子だった。わたしは答えた。

「連れていくよ。こんなところに置いておいたら町の人たちに迷惑だし。わたしが担ぐから、ちよつと手伝ってくれない？」

さすがに、道端に打ち捨てられるのはかわいそうだから、とまでは言えなかった。魔法に縁のない人々の間では、死霊術は忌むべきものという認識が根強い。わたしだって、サールザルと一緒に冒険したこのドラウグルでなければいい気持ちはしない。大学でも、一般人の前で死霊術を使うなど教わっている。顧問はあくまで顧問だから、大学の決まりに従うつもりはないのだろうけれど。

テルドリンは空いている方の手を二つのレンズの間に当て、力なくかぶりを振った。

「いいや、その必要はない。少しどいていろ」

テルドリンは億劫そうな掛け声と共に、顧問のドラウグルをもう一方の肩に担いだ。服の下の筋肉がぐつと盛り上がったのが分かった。すごい力だ。ウインドヘルムやソリチュードの船着き場の人夫に混じっても余裕で働けるだろう。

わたしは門番の衛兵に顔を向けた。彼の剣は既に鞘に収まっていたが、先ほどまでの親しげな空気は消えていた。すっかり酔いが醒めてしまったようだった。彼は木の門を開け、気遣わしげに、若干の警戒心も窺わせる声色で言った。

「あんたら、ああいう輩とは関わらないのが身のためだよ。朱に交われば赤くなるって言うだろ」

わたしが、はあ、と曖昧な返事をする横で、二体のドラウグルを担いだテルドリンが、うんざりした様子で言った。

「そうだな。もうこれつきりになることを願いたいものだ」

|||||

乾ききつているとはいえ死体を二体も担ぐと、さしものテルドリンでも歩く速さは落ちた。町と大学を繋ぐ長い橋を渡りきり、達成の間の前に着いた頃には、雲に覆われた月も星もない夜を迎えていた。

達成の間の扉を開けながら、そういえば顧問の部屋はどこにあっただろうと考えたものの、わざわざ探す必要はなかった。顧問が自室の横の壁に背中を預け、本を読んでいたからだ。

顧問はわたしたちに目を留めて、優雅な動作で本を閉じた。

「ようやく来たか。入りたまえ」

そう言うなり自室に引っ込んだ。わたしはテルドリンの先を歩き、顧問の部屋の扉を開けた。

彼の部屋に入るのは初めてだった。大学の顧問の部屋だからどんなにか豪華な内装が施されているかと思っただが、そこにあったのは、想像とは真逆の、ひどく殺風景な部屋だった。広々とした空間の一方の隅に藁の束と樽が置かれ、もう一方の隅に衣装ダンス一つと木箱がいくつか、それに机がある。木箱と机の上には、本が沢山、几帳面に積み重ねられている。中央には寝心地の良さそうな上質なベッド。それだけだ。装飾も何もあつたものではなかった。

わたしは扉の端を手で押さえてテルドリンが中に入ってくるのを待った。当然のことながら、部屋の主である顧問は、訪問客をもてなすつもりは全くなく、藁の束の横に陣取っていた。

「どっ、こっちにはどうに置けばいい？」

テルドリンが単刀直入に尋ねた。顧問は藁の束の上を示した。

「親玉はここに。手下の方は適当にそこらへ置け」

テルドリンは待つていたとばかりに顧問のドラウグルを扉の脇に

下ろした。続いて顧問の前を通り過ぎ、藁束の上に布にくるんだままのもう一体のドラウグルをどきりと乱暴に寝かせた。

顧問は苛立った様子で眉を吊り上げた。

「其奴について調べたいことがあると言ったであろう。もっと丁寧に扱え」

テルドリンが言い返した。

「忌まわしい死体をずっと背負ってきた身にもなってほしいものだ。調べたいと言っても、どうせろくなことではあるまい。あの衛兵の反応は至極真つ当だよ」

「無論、貴様らのような偏見と迷信に支配された者にはそう見えるであろう。理解されることなど期待していない。——ああ、待て。布を取り払い、鎧も外せ。私には外し方が分からぬ」

テルドリンは背を向けたところで顧問に呼び止められ、不満そうにぶつぶつ呟きながら藁束の上のドラウグルに向き直った。

わたしはテルドリンに手伝おうかと声を掛けたが、断られた。そんなわけで手持ち無沙汰になって、なんとはなしに机の上の本の背に書いてある題名を追っていった。『死霊の生成と消失』、『ドラウグルに囲まれて』、『ノルドの葬儀』、『霊魂の行方』、『死霊術とエルフ』……どれも死霊術や死者に関連する本のようなようだ。

「他人の部屋を許可も得ず不躰に観察するのは楽しいか？」

顧問の不機嫌そうな声が飛んできた。わたしは弁解した。

「すみません、暇だったので。本を読むの、好きなんですか？」

「研究に必要なだから読んでいるだけだ。この大学は蔵書だけは豊富にあるゆえ、それなりに捗る」

わたしは意外な気持ちになった。顧問の仕事は、アーチメイジへの助言とか、大学運営に対する提言とか、もつと実務的なものだと思うていた。

「顧問も研究してるんですか？ 先生たちと同じように？」

顧問は、テルドリンが赤茶色の手袋をはめた指先でドラウグルの鎧の留め金を器用に外していくのを眺めながら、答えた。

「今は、彼らと違って個人的な趣味に過ぎないがね。私がこの任務に

抜擢されたのは、過去の経歴を買われたためだ。ウィンターホール大学の教授陣と対等に話をするには相応の実力が必要だということだ。尤も、あの程度のレベルなら、私でなくとも十二分に事足りたであろうが」

あの程度のレベルと言われても、わたしから見ればどの先生もすごいと思えない。返しに困って、わたしは話題を変えた。

「サルモールにも色んな人がいるんですね」

街道で行き会ったサルモールの司法官は皮剥ければごろつきと変わりなかった。かと思えば、ソリチュードで見かけた大使一行は選り抜きのエリートという雰囲気だった。顧問は、話しぶりから推測すると、ずっと魔法の研究でもしていたのだろうか。

「当然だ。幼少期から一兵卒として訓練を受ける者もいれば、長じてから能力を見込まれ引き抜かれる者もいる。私は――」

顧問はそこまで言って、眉間に皺を寄せ、わたしを睨んだ。

「君にこんな話を聞かせてやる必要はない。無遠慮にずけずけと尋ねてくるゆえ喋りすぎてしまった。まさか、サヴォス殿から密命でも受けているのか？」

密命とはなんのことだろう。アーチメイジであるサヴォス・アレン先生には、すれ違ふときに挨拶するくらいで、何も頼まれてはいない。遺跡に残っているトルフェイル先生の指示で、この後、サルザルでの顛末を報告することになっているから、それがサヴォス先生とまとも言葉を交わす初めての機会になる。

わたしは首を横に振った。

「いえ、ただ、顧問がどういう人なのか気になっただけです」

顧問は、眉間の皺はそのまま、金色の目をみはり、唇を呆けたように開けた。気に障る言い方だっただろうか。わたしがこわごわ彼の出方を待っていると、顧問は、不安定な抑揚のある声で、やや早口に言った。

「個人的に、ということか？ それが分かって何になる。私と君では立場が違う。大学顧問たる私が君らの経歴や素行を把握することに一定の意義があるが、君が私について理解しても得られるものはな



かろう」

「どうも話が噛み合わない。わたしはそんな難しいことは考えていない。」

藁束に向かっていたテルドリンが、両手をパンパンと大きさに叩き合わせ、長めに息をついて、振り返った。彼は隣に立っている人物になんらかの含みのある視線を投げてから、わたしの方へ戻ってきた。藁束の上に横たわっているドラウグルは、水分が抜けてよれよれになった全身を部屋の空気に晒していた。

テルドリンはわたしと顧問の間に立ち塞がった。彼に遮られて、顧問の姿はほとんど見えなくなった。

「お望み通り放っておけばいい。サルモールなど、親身に接したところでつけ込まれるだけだ」

いくらなんでも、そこまで言わなくてもいいのに。そう返しかけたわたしの肩を、彼はやんわり掴んだかと思うと、扉の方へわたしの体を押し出した。

「さっさと出よう。これ以上こいつらと一緒にいるのは我慢ならん」

わたしは、なぜかいつにもまして強引なテルドリンに背中を押されながら、顧問を振り返った。彼は苦々しそうに唇を曲げていたが、わたしと目が合うなり、威圧するように顎を上向けた。

「サヴォス殿らに報告に行くのであろう？ 私も同行する。あの球体に関して諸々の提案をせねばならぬ。君らも、私がいの方が都合が良かろう——あの遺跡で為したことの全ての責任は私にあると、弁明ができるからな」

## 2. 魅了の魔法

わたしは自室の机に両肘を置いて、書き物用の木炭を指先で落ち着きなく回転させていた。ドレヴィス・ネロレン先生から宿題として出された、鎮静の魔法の仕組みについてのレポートの進み具合があまりよろしくなかった。今夜こそは全部終わらせようと思っていたのに、実際にはようやく下書きの半分が終わった程度だ。わたしはそこはかたない悲しみと無力感を振り払うために、ぐっと伸びをした。

「うくん、なかなかできないなあ」

授業で習って理解はできていたつもりだったが、いざ文章にしようとするとなかなか難しかった。日記以外でこんなに長い文章を書くのが初めてで、この魔法をまともに成功させたこともないからかもしれない。

向かい側の椅子で自らの籠手を外し、油を染み込ませた布で入念に磨き上げていた従者のテルドリン・セロが顔を上げた。兜のレンズがいたずらっぽく光った。彼はわたしの下書きをひよいと取り上げた。「どれ、見せてみる。……ハッ、綴りが間違いだらけだ。こりや、内容以前の問題で落とされるな」

テルドリンの声には愉快そうな笑いが絡んでいた。わたしは予想外の指摘に慌てた。

「ええ、ほんとに？ どこが間違ってるか教えてよ、直さなきゃ」「教えてやってもいいが、その前に一休みしたらどうだ。もうかなりの時間座りっぱなしだぞ」

一休みという言葉を聞くや否や、わたしはとても晴れ晴れとした気分になった。うん、そうだよ、と元気に答え、木炭を机の上に放り出して立ち上がった。わたしは、ブレリナ・マリオンやジェイ・ザルゴのような優等生とは違い、レポートを書くのが好きではない。だからもちろん、こうした提案は迷わず採り入れる。

テルドリンが可笑しそうに続けた。

「前に取ってきたスノーベリーを潰して潰けてあるんだ。水で薄めて飲ませてやろうか」

もちろんこれにも喜んで頷いた。ちょうど喉が渴いたと思ってい

たところだったのだ。

テルドリンがぴかぴかになった籠手を腕にはめ直して席を立った。わたしは彼の後について達成の間の廊下に出た。達成の間のキッチンにはわたしたちの部屋と同じ一階にあり、達成の間に部屋を持っている人なら誰でも使える。

わたしたちが、薄青い光を立ち昇らせている井戸のようなもの——サルジアス先生曰く、建物内の温度を調節するための設備だそうだ——の横を通り過ぎてキッチンの扉の前に立ったところで、扉が勢いよく開いた。見習いのローブを着た大柄な男子学生が硬い表情で飛び出してきた。彼はテルドリンの横をすり抜けようとしたが、肩をぶつけてしまった。

「おっと、ごめんよ」

軽い調子で謝った彼は、自分のすれ違おうとした相手が誰であるかを認識した途端、表情を強張らせた。彼は一瞬瞳を迷うように揺らした後、わたしたちに背中を向けた。

「オンマンド」

わたしが名前を呼んでも、肩に不自然な力が入っただけで、応じることはなかった。彼は大腿で自室の扉の前まで歩いていき、キッチンの扉と同じように勢いよく開けて、中へ消えていった。

わたしは独り言のように呟いた。

「オンマンド、まだ怒ってる」

テルドリンが力なく肩をすくめた。

「そうらしいな。ま、放っておいた方がいい。今の私たちが何をやっても、あいつの神経を逆撫でするだけだ」

オンマンドは、ウィンターホールド大学がサールザルの発掘調査を行っているとき、その純朴な面差しに怒りの片鱗を見せた。わたしたちがああ遺跡から持ち帰った不思議な球体と、それを発見するまでの経緯の話が拍車を掛けた。大学のほとんどの人がわたしたちのやったことをそれなりに肯定的に受け止め、これからあの球体についてどんなことを調べようかと張りきる中で、彼は断言した。わたしたちのやったことは、ノルドに対する冒瀆だと。そして、特にわたし

を強く非難した。ノルドでありながらノルドの悲劇の歴史を踏みに  
じった、裏切り者だと。

わたしは彼のその言葉を聞いた時、サールザルに穿たれたあの穴か  
ら真つ逆さまに落ちていくような感覚を味わった。わたしの軽はず  
みな行動が、唯一のノルドの同期として信頼を寄せてくれていた彼を  
傷つけたことが悲しかった。また、サールザルの発掘に対して面白そ  
うとかワクワクするとかいった他人事のような感覚しか持てなかつ  
たわたしには、やはり彼や他のノルドたちから同族と認めてもらう資  
格がないのだろうとも思った。

しかも、なお悪いことに、わたしの想像の中で、サールザルの穴か  
ら真つ逆さまに落ちていくのはわたしだけではなかった。わたしの  
命令に従っただけに過ぎないテルドリンも道連れになっていた。オ  
ンマンドとテルドリンは剣の稽古をするくらい仲の良い友人だった。  
わたしが彼らの仲を裂いてしまったのだ。

テルドリンは、オンマンドの部屋の方を見つめて固まったわたしの  
肩に、励ますように手を置いた。

「お前がいくら考えたってあいつの機嫌が良くなるわけもない。さつ  
さと一服して綴りの修正を始めようじゃないか」

わたしは、出かかっていた後悔の言葉を呑み込んで、そうだね、と  
無理に笑った。とぼつちりを食ったにもかかわらずこんなふうに前  
向きに励ましてくれるテルドリンを、これ以上くよくよ悩んで困らせ  
たくはなかった。

そういえば、キッチンから出てきた時のオンマンドは不機嫌そう  
だった。なぜだったのだろうか。その疑問は、テルドリンがキッチンの  
扉を開けるとすぐに解けた。

キッチンに、サルモールかつウインターホールド大学の顧問であ  
る、ハイエルフのアンカノがいた。より正確には、顧問と、彼が死霊  
術で操ってサールザルから連れてきたドラウグルが。顧問はテーブ  
ルの前の長椅子に腕を組んでふんぞり返って座り、暖炉の前でドラウ  
グルに鍋をかき混ぜさせていた。エルヴズ・イヤーを煎じた薬湯でも  
作らせているらしく、あの香草に特有の、食欲をそそるような香ばし

い匂いが充満していた。

「今度は貴様らか。なんの用だ？」

顧問は上半身をこちらへ捻って尋ねた。彼こそ、オンマンドにとっては諸悪の根源と言えるだろう。サールザルを破壊し、最奥部にあったあの球体を運び出す手筈を整えたのは彼だった。

テルドリンは腹立たしげに答えた。

「あんたにわざわざ話す義務はない。それより、どうしてそのドラウグルをまだ連れている？一刻も早く灰にしろと忠告したはずだ。そんなものと四六時中一緒にいたら、ますます嫌われるぞ」

顧問は鼻に掛かった声で言った。

「貴様の忠告を聞き入れる義務もないな。此奴は、本来執事や従者が担うべき些末な事柄を任せるのに適している。どういうわけかこの大学の者たちは、見習い以下の実力の学生が従者を持つのは認めても、大学顧問たる私に供をつける気は一向にないようだ。彼らがそのつもりであれば、私としてもそれなりの方法を取るだけだ」

テルドリンは不服そうに鼻息を噴き出した。

「誰もあんたのためにそこまでの手間を掛けられないし、掛けたくもないんだろう。我が儘を言っていないで、自分で適当な者を見繕ってくればいい」

「既に試みた。残念ながら、私に見合う者はいなかった。揃って愚鈍なくせ、悪知恵だけは働き、私を平然と裏切る。その点、此奴は人形に過ぎぬが、私の命じた通り忠実に動く」

「……あんたとまともに話そうとした私が馬鹿だった。——なあ、部屋に持ち帰って飲むか？これでは気が休まるどころか頭痛がしてくる。書けるものも書けなくなるぞ」

テルドリンは吐き捨てて、わたしを顧みた。

わたしはむしろ、あのドラウグルの元気な姿を久しぶりに眺められると思うと嬉しかったのだが、テルドリンが嫌なら仕方がない。

澁々頷いたわたしに、顧問がじろりと金色の眼を向けた。

「書き物をする能があるとは思わなかった。新しい魔法の開発でもしているのか？」

ものすごくけなされている気分だ。顧問にそういうつもりはなく、彼から見たわたしの評価を包み隠さず口にしていただけなのだろうけれど。

「鎮静の魔法の仕組みをレポートに書いて提出するんです。疲れちゃって、一休みしに来ました」

素直に答えると、顧問はあからさまな失望の色を整った細面に浮かべた。

「なんだ。その程度のものさえ休み休みでないと書き上げられぬのか」

ウィンターホールド大学の顧問になるくらいの実力のある彼ならばさらっと書いてしまおうだろうが、わたしはほぼ素人だ。どうやら息抜きになるような楽しいお喋りは期待できそうにない。

「まだ慣れてないので。ねえ、スノーベリーを漬けたやつってどこにあるの、テルドリン？」

わたしはにこやかに答えてから、顧問との会話を打ち切るべく、テルドリンに話を振った。何か言いかけたテルドリンの声を、顧問が思いきり遮った。

「目の前の相手に教えを請えるかもしれない、その可能性にさえ思い至らぬとは愚かなことだ。君の発想の貧困さには驚かされる」

こちらこそ、そんなことを彼自ら言い出したことに驚かされた。目の前にいるのがトルフデイル先生か同期の学生の誰かだったらそれも考えただろう。このとっつきにくいハイエルフが相手では思いつけるはずもない。

本人にその気があるのなら、聞くだけ聞いてみようか。彼の實力は、サールザルでも、また今この瞬間においても目の当たりにしているのだから。

「教えてもらえるんですか？」

わたしは尋ねた。顧問は片頬をぴくりと痙攣させた。何拍か置いて、彼は気取った様子で目を細めた。

「君は運が良い。あの薬湯は出来上がるのにしばらく掛かる。ほんの少しだけ時間を割いてやろう」

わたしの横でテルドリンが大きく息を吐いた。明らかに呆れられている。でも、この気難しい顧問がせっかく教えてくれるというのだから、一度厚意に甘えてみようと思った。

「じゃあ、ぜひお願いします。下書きを取ってきていいですか？」

わたしの言葉に、顧問は唇を引き結んだ。その両端に皺が寄った。笑っているのか、それとも不満を示しているのかは判然としなかった。彼は椅子から腰を上げた。

「まずは私の手本を傍で見ているが良い。その老いぼれに鎮静の魔法を掛けてやる」

「は?！」

テルドリンが声を裏返らせた。彼は今にも顧問の長身に掴みかかりそうな勢いで食ってかかった。

「何をどうしたら私があんたから魔法を掛けられることになるんだ」

「仕組みを理解させるには、実演しながら解説するのが早道だ。そしてこの場に練習台になれるような者は貴様しかない」

「ありえん。あんたの魔法を食らうなんて御免被る」

「この私が鎮静の魔法ごときで失敗するとも?」

「能力云々の問題じゃない。あんたを信用できないと言っているんだ」

言い争いを始めてしまった二人の間にわたしは慌てて割って入った。

「テルドリン、落ち着いて。顧問は敵じゃないよ」

顧問はひねくれてはいるものの、進んで人を陥れたり傷つけたりする類の悪意を持っているようには思えない。

テルドリンは腰に手を当ててわたしを見下ろした。

「ああ、確かに敵ではないさ。だが信頼に足る味方にもなりえない。この前から言っているだろう、サルモールに決して気を許すなど。どうして分からない?」

「分かっているよ。でも、せっかく教えてくれるって言うんだもの、いいじゃない。そうだ、テルドリンが嫌なら、わたしが魔法を掛けてもらうよ」

「なんだって！ どうしてそういう発想になる。それは、駄目だ。絶対に駄目だ」

テルドリンはきっぱりと言い、それから苛立たしげな溜息をついた。

「仕方がない。私が練習台とやらになってやる。いいか、私がもしかしくなったら、そのときはすぐに逃げろ」

そこまで思い詰めるようなことなのだろうか。少し心配しすぎではないかとわたしは思った。

テルドリンはわたしを脇にのけて顧問を睨みつけた。まるでこれから決闘でも挑もうとしているかのような雰囲気だ。

顧問は勝ち誇ったように唇の片端を吊り上げた。

「貴様の今の状態こそ、まさに鎮静の魔法を掛けるのにうってつけだな」

顧問は短く息を吐き、右掌に明るい緑色の魔力を集めて、それをテルドリンの胸の真ん中に向かって放った。彼の体の表面を緑色の光が走り抜けた。

わたしは固唾を吞んで様子を見守った。ドレイス先生が授業で怒らせたスキーヴァーに対して使った時は、まるで大学で飼っているペットのようにその場にごろんと寝転がって、ちよつとかわいかった。テルドリンはどうなるのだろうか。

何も起こらなかった。テルドリンは相変わらず、憤懣やるかたないといった空気を体中から発散していた。

「テルドリン？ 気分、どう？」

「全く変わらん。見習いでも使える初歩的な魔法にやられるほど私はヤワじゃない」

念のため聞いたら、そんな返事が返ってきた。なるほど、命中しても、彼のように鍛えている者に対しては効かないこともあるのか。わたしが小さな発見に感動している一方、顧問は唇の端を不服そうに下げている。

「耐性があるのか。モロウインド一の傭兵などどうぞぶいているだけのことはある。ならば、これはどうだ」



顧問は、今度は両手を広げ、真ん中に緑色の魔力を集め、指先を細かく動かした。緑色の中にほんのわずかに赤色が現れて、まるで水中に数滴落とされた血のように、うっすらと全体に広がっていった。彼は薄暗く濁ったそれをテルドリンに向かって放った。

テルドリンに命中した魔法の塊は、小麦粉をぶちまけてしまったみたいに周りへ広がり、わたしまで霧のように包み込んだので、思わず一息吸い込んでしまった。痛みはなかった。ただ、頭の中に薄い幕が掛かり、わたしの背骨に通っている芯がぐったりとへたれてしまったかのような奇妙な感覚に襲われた。

魔力の霧は間もなく晴れた。

「ハッ、なんだったんだ、今のは。わざわざ気を張る必要もなかったな。あんたの幻惑魔法は私には効かん」

テルドリンの声色には余裕があり、顧問を嘲ってさえいた。彼はなんの変わりもないようだ。

わたしの方はというと、床の上にぺたんとはたらく崩れ落ちた。力が出なかった。心臓が心地良い鼓動を刻み、全身が火照り、頬が緩んだ。わたしの全てが、強引に惹き付けられていた。わたしにこの魔法を掛けたハイエルフの方へと。

顧問は呆然としていた。その表情はサールザルで何度か垣間見たものどこか似通っていた。高圧的で堅苦しく、常に誰よりも優位に立とうとする彼に相応しくない、弱気な表情とでも表現するべきか。だが、それが顕れたのはほんの一瞬のことで、彼はすぐにいつもの高慢な顔つきを取り戻した。

「おい、どうした。すっかりしろ」

わたしの肩を掴み、揺り動かすテルドリンの声がひどく遠くから聞こえる。

「心配は要らぬ。これは魅了の魔法——鎮静と同じ幻惑魔法の一つだ。効果範囲が広すぎたようだな。しかも肝心の貴様には効かぬと来た」

対照的に、テルドリンより遠くにいるはずの顧問の声は、すぐ耳元で囁かれているように錯覚した。テルドリンの頭の向こうに見えて

いる顧問の姿が、視界の中でいやに目立って、きらきら輝いている。呼吸が速くなる。苦しい。切ない。なんだ、これは。

「ただごとじゃないぞ。こいつに何をした」

テルドリンはいきり立ち、わたしから離れた手を剣の柄に置いた。顧問がぎくりと肩を浮かせて一歩後ろに下がった。

「魅了の魔法だと言っているであろうが。私を殺して魔法を解こうなどと野蛮なことは考えるなよ。貴様の主人は今、私に魅了されているのだ。下手をすれば、私を守るために自ら剣の鞘になろうとするやもしれぬ」

テルドリンが言葉にならない唸り声を上げた。顧問は細い眉を吊り上げて、そのさまを若干緊張した面持ちで眺めていた。テルドリンが害意のないことを示すために腕を体の脇に下げると、顧問はわたしに目を向けた。

「体の自由が利かぬだけで、声は聞こえるな？ 本来はその老いぼれに掛けてみせるつもりだったが、一度身をもって体験するのも悪くはなからう。

ほとんどの幻惑魔法の根本的な原理は同じだ。生物の脳に特定の刺激を与え、心身にさまざまな反応を引き起こす。ゆえに、生きた体を持たないものには通常は効かぬ。例えば、そのドラウグルのような死者や、ドゥーマー・スパイダーのようなカラクリにはな」

顧問は、我関せずといった様子で鍋を一生懸命かき混ぜているドラウグルをちらっと見た。わたしは心臓を爪で引つ搔かれた心地がした。一旦手に入れた彼の関心がわたし以外へ向くのがかなり不愉快だった。幸い、彼はすぐにわたしに視線を戻した。

「どんな刺激を与えるかによって心身に生じる反応は異なり、結果として、表れる効果も異なる。鎮静は心身の興奮を抑えることで敵意を喪失させる。魅了も敵意喪失の効果を持つことには変わりないが、こちらはある種の興奮によってそれを引き出す。この魔法を掛けられた者は、術者を、非常に——」

顧問は言い淀み、まっすぐ見つめ返していたわたしの目から肩の辺りに微妙に視線を移し、心なしか上ずった声で続けた。

「——好ましい相手であると見なす。そうになると術者を攻撃するのは至難の業だ。強力な術者にかかれれば、攻撃できないばかりか逆に術者を守ろうとし、さらに、歓心を得るために嬉々として命令に従うようになる」

顧問は右手をこちらへ差し出した。

「試してみよう。立ちたまえ。ここまで来て、私の手を取るのだ」

へたれていた背骨の芯が急に元に戻った感じがした。わたしは立ち上がり、うずくまっているテルドリンをさつと避けて顧問に歩み寄った。わたしは右手で彼の大きくて乾いた手を握った。背筋がむずむずした。嬉しくて跳んで回りたい気分だった。

「大変よろしい。次は、そうだな、その場で何度か回った後で、私に一礼したまえ」

まさにわたしのやりたかったことを命じられて、ますます嬉しくなった。わたしは顧問の手を握った状態で、左足を軸にして右回りに回転しようとした。

「おわッ!？」

顧問はぼんやりその場に突っ立ったままだったので、つんのめって倒れそうになった。わたしは慌てて彼の体を左腕で支えた。少し重いが、支えきれないほどではなかった。上背があるだけで、テルドリンのような分厚い筋肉はついていなかった。

「わッ、私まで巻き込めとは言っていない。気が昂ぶるとその程度の判断もつかなくなるのかね、君は」

顧問はわたしを振りほどき、耳を真っ赤にして文句を言った。命令通りに動いただけなのに、怒られてしまった。悲しい。嫌われたくない。

「ごめんなさい」

わたしは肩を縮め、上目遣いで謝った。

顧問は目を見張り、鼻の穴を膨らませ、さつと顔を逸らした。彼の視線の先にはテルドリンがいた。テルドリンはいつの間にか立ち上がり、肩を強張らせてわたしたちを見据えていた。

顧問の目尻に皺が寄った。

「何か言いたいことでもあるのか、老いぼれ」

彼の声色が変わった。大学の体制や自分の待遇について不満を漏らすときの皮肉っぽい口ぶりとも少し違う、小馬鹿にしたような、からかうような喋り方だ。それは、わたしの記憶の限りでは、テルドリンにしか向けられたことがなかった。単に見下しているだけならば、そもそも声さえ掛けないだろう。わたしは鳩尾の底が不快に煮え立つのを感じた。

テルドリンが低い声で答えた。

「別に。強いて言うことがあるとすれば、そいつがあんたにヘコヘコしているところを見せられるのは気に食わん。それだけだ」

顧問の頬が面白そうに盛り上がった。

「この程度の従順さはむしろ当然とさえ言えるのだがな。私がこの大学の顧問であるのに対し、この者は一介の学生だ。にもかかわらず、貴様ほどではないが、私を少々軽んじている節がある。いつその魔法を常に掛けておいてやろうか」

「本気で言っているのなら——」

「はッ、冗談に決まっておろう。いかに私と言えどそこまでのことはできぬ。幻惑魔法は専門外なのでな。」

しかし、はした金で雇われた割に、貴様はこの者に随分執着していると見える。実に興味深い」

顧問は金色の目に不穏な光を宿した。しばらく黙り込んだ後、わたしの腰に無造作に腕を回した。体中を巡る血液が歓びのあまり沸騰するのを感じた。だが、完全に浮かれきることはできなかった。顧問の心は相変わらずテルドリン一人に向けられていると知っていたからだ。

彼は歪んだ笑みを唇に浮かべて、わたしの耳元へ顔を寄せ、次なる命令を囁いた。

最後まで聞き終わったわたしは、最早、彼にとって今の自分はただの道具に過ぎないのだと悟った。悔しかった。けれど同時に、彼の命令に従うことは至上の喜びでもあった。わたしはゆつくりとテルドリンに近づいていった。



きた。

「首や背中に痛みはないか？」

わたしは首を捻ったり、肩を回したりしてみた。異常はなかった。「うん。なんともない。わたし、どうしたんだっけ？」

テルドリンは腕組みを解いてわたしを見下ろし、硬い声で言った。「アンカノの魅了の魔法のせいで、私に……襲いかかろうとしただろう。やむをえず気絶させた。悪かったな」

わたしは少し考えてから、一連の出来事を思い出し、間抜けな悲鳴を上げて毛布をめちやくちやに引き寄せて頭から被った。とてつもなく恥ずかしくて、彼の顔をまともに見られなかった。

「ごめん、ほんとにごめん！あの時は何も考えられなかったの。もちろん、今は全然平気、魔法も全部抜けてるから。だから、その」

わたしが落ち着くまでしばらく部屋から出ていてほしい、というのが本音だったが、それはあまりに自分勝手だ。わたしは毛布を放り出し、テルドリンが立っているのとは反対側に降りて、裸足で部屋の扉の方へすたこら駆けていった。扉を開けようとしたわたしの肩をテルドリンの赤茶色の手袋が掴んだ。

「どこへ行くんだ」

身が縮むような思いがした。わたしは顔を背けて、彼の手を振り払った。

「散歩。屋上で外の空気を吸ってくる」

「今夜は安静にしていた方がいいと思うが」

「それなら図書館」

「私の言っていることが分からないのか？こんな遅くに出歩くのは危ない」

「じゃあ、お風呂かトイレ。ねえ、なんでもいいけど、ちょっと一人になりたいの。いちいち口出ししないですよ」

そつぽを向いたまま、きつい言葉を投げつけてしまった。

テルドリンは、やや置いて、深い溜息をついた。

「はなからお前をつけ回すつもりはない。私はずっとこの部屋にいる。気が済むまで行ってくればいい」

わたしの考えていることなどすっかりお見通しのようだった。わたしは恥ずかしさに加えて申し訳なさと胸がいつぱいになり、大人しく頷いた。

扉を開けて出ていこうとしたわたしの背中を、テルドリンのかすれ声を追ってきた。

「あのサルモールのところへだけは絶対に行くなよ。万一出くわしたらずぐに逃げろ。さっきのように操られたくはなからう」

そんなことは考えてもいなかったのに、言われた途端にそうなることを思い描いてしまい、わたしは立ち尽くした。先ほどの出来事をなぞるように想像すると、蘇った。魅了の魔法に掛かっていた時の、苦しくて、切なくて、それなのに満たされている、あの感覚が。

テルドリンは、わたしが彼の忠告に耳を傾ける気があると勘違いしたのか、重ねて言った。

「お前もさすがに懲りただろう。あの男は危険だ。今後は、私か、他の十分な実力のある者が傍にいない限り、あの男に近づくのはやめろ。いいな？」

わたしは、歩き出しながら、うん、分かった、と半分上の空で答えた。

というのも、顧問が最後にわたしに何を吹き込んだか、どうしても思い出せなかったからだだった。その後のわたしの行動からしてきつとろくでもないことだったのには違いない。でも、少しその手の場面に出くわすだけで大騒ぎして退学だなんだとたまう彼が、いったい何を考えてそんな命令をしたのか？ 見当がつかなかった。そして、例え見当がついたとしても得をすることはなく、なんならすぐくモヤモヤした気分になりそうだった。

わたしはトイレへ行くためにキッチンの前を通り過ぎた。顧問は既に自室に帰ったらしく、何人かの学生が楽しそうにお喋りをしている声が扉の向こうから聞こえていた。

1. オンマンンドの場合

フェルグロウ砦からウィンターホールド大学の図書館の蔵書を取り戻してきたオンマンンドとわたしは、ウラッグ先生に少し気に入られたようだった。初めに先生からの呼び出しを受けたときは戦々恐々とした。今度はいったい何をやらかして、拳骨を何発食らうことになるのだらうと思った。だが、実際には、先生はちよつとした給金付きの蔵書整理の仕事をわたしたちに任せるつもりだったのだ。わたしたちは小躍りした。ゴールドが余分にあつて困ることは何一つない。「ん。これ、考古学のLの棚に頼むよ」

オンマンンドから受け取った本の山を、わたしは指定された棚まで持って行って、作者名順の並びの中に差し入れていく。このくらいの作業だったらわたしにも難なくできる。オンマンンドが担当している、本の題名を目録と照らし合わせる作業は、専門用語を含んだ文章を読むのに慣れていないわたしにはまだ無理だ。

フェルグロウ砦の一件を経て、オンマンンドのわたしに対する態度は軟化していた。まだ言葉の端々にぎこちなさは残っている。一度芽生えた怒りや不信任はそう簡単には消えないのだろう。けれども、元の朗らかで親しみやすい彼に戻りつつあるのが、本当に嬉しい。何せ、彼はこの大学で初めてできた友達なのだ。

「ええつと、これは……へえ、学生の名簿なんてあるのか」

オンマンンドは面白そうな声を上げて、大判の本を机の上に広げた。わたしが隣に立つと、少し横にずれて、わたしが覗き込みやすいようにしてくれた。

「わたしたちの名前も書いてあるかな？」

「たぶんね。最後のページだと思うよ」

オンマンンドは、黄ばんではいるが、厚みがあつてちよつとやさつとでは破れそうにないその本のページをめくつていった。100、101、102と、ページの一番上に書いてある数字が大きくなっていき、



202が最後で、後は空白だった。202の下にずらりと名前が連なっている。オンマンドが、あ、と声を上げて人差し指で指し示した。中ほどにオンマンドの名前が、一番後ろにわたしの名前が書いてあった。

わたしたちはしばらく無言でそのページを見つめていた。この大学の歴史に、確かにわたしたちの名が刻まれているという事実が、図書館のインク臭い空気とともに胸に沁みわたっていった。

オンマンドが拳でぽんともう一方の掌を打った。

「待てよ。てことは、トルフェイル先生やサヴオス先生の名前も書いてあるんじゃない？」

言われてみれば、そういうことになる。ウイランドリアやウーンファース、それにカリクスト・コリウムの名前もどこかに書いてあるのだろう。彼らとも同窓生なのだと思うと、不思議な気分だ。

わたしたちはわくわくしながら、名簿のページを逆向きに辿り始めた。作業をすっかり放置しているが、幸いウラッグ先生は今、カウンターですやすやと船を漕いでいる。もし見つかったら、このくらいだったら休憩時間として許してもらえらると思う。最悪でも拳骨一発で済む。

と、そこへ。

「こんにちはー！」

ここが図書館であり、厳格なオークの司書が取り仕切っていることを全く理解していないであろう男の声が、出入口の扉の開く音とともに図書館中に響いた。オンマンドとわたしは飛び上がり、咄嗟に名簿をばたんと閉じた。ウラッグ先生がしかめ面で目を覚まし、訪問者を睨めつけた。

出入口の前に身軽そうな服装の男が立っていた。革の頭巾を被り、右胸に馬の顔を表した紋章を付け、大きなナップザックを背負っていた。配達人だ。紋章を見るにホワイトラン領からやって来たのだろう。片手に、丸められた紙と、膨らんだ布袋を紐でぶら下げて持っていた。

「ここにオンマンドさんがいるって聞いたんですが」

配達人が大声で言った。ウラツグ先生の不機嫌そうな目が、配達人からオンマンドに移った。オンマンドはひくりと喉仏を上げ、目をまん丸くして配達人に早歩きで歩み寄った。

「ぼくがオンマンドだけど、何か——」

「あー！ あんたがオンマンドさんかい！ はっはっは、いやー、いいねえ若いつて！ はっはっはっは!!」

配達人は、怪訝そうな顔をしているオンマンドの背中をばんばん叩いた。オンマンドと話すだけならそこまで大きな声を出す必要はないのに、出入口の向かい側にいるウラツグ先生までばつちり聞こえ、先生を苛立たせている。酔っ払っているのだろうか。

配達人は布袋をオンマンドに渡し、紙の方を広げた。

「オンマンドさん、さるお方からあんたに手紙とプレゼントだ。ええつと、なになに……『オンマンド。元気にしてる？ 風邪は引いてない？ 友達はできた？ あんただったら、全然手紙をよこさないのね。もしかして、好きな子でもできたの？ べ、別にそんなことはどうでもいいけど、あたしだって一応——』」

「わああー!! やめて!! やめてくれ!」

甲高い声色を作って読み上げた始めた配達人を、オンマンドは遮って手紙を奪い取り、布袋と一緒に抱えて後ずさった。配達人は爽やかな笑顔を浮かべた。

「うーん、いい反応だ。俺の若い頃を思い出すねえ。プレゼント、大切に食べなよ。それから、お嬢さんにはちゃんとお返しをしてやりな。イスミールに懸けて、俺たち配達人がばつちり届けるから」

「分かったよ！ 分かったから、もうどっか行ってよ!」

「ああ、もちろん。名残惜しいが、まだたつくさん仕事があるんだ、あんたみたいな若者たちのためにね」

オンマンドは空いている方の手で、相変わらず上機嫌な配達人の背中を押し、図書館の外へ追いやった。扉が閉まり、図書館内は静寂で満たされた。

オンマンドはそろそろと振り返った。ウラツグ先生がカウンタ―に両手をつき、オンマンドをまっすぐ睨み据えている。オンマンドは

どもり気味に弁解した。

「せつ、先生。ぼくのせいじゃありません、そうでしょう？ 配達人が直接渡しに来るなんて聞いてない。門番は何をしてたんでしょうか」  
ウラツグ先生の牙の生えた口が開いた。ひっと小さく悲鳴を上げて首をすくめたオンマンドに、先生は思いの外、抑えた声で言った。  
「どんな事情があらうと、飲食物の持ち込みは禁止だ。出ていけ」

オンマンドは素朴な藍色の目を瞬かせた。

「じゃあ、蔵書整理の仕事は？」

「今日は仕舞いにする。浮かれ半分で作業をされてはかなわん」

わたしは少しがっかりした。途中までとは言え仕事はこなしたのだ。次に頼まれるときは、今日の分も色を付けてもらえるといいのだが。

オンマンドの方は、そうですか、と言うなり手元の羊皮紙と布袋に目を落とし、そこまでは頭が回っていないみたいだった。彼はぼんやりした声でウラツグ先生に挨拶をして図書館を出ていった。

わたしは彼を追いかけた。あの配達人のせいで、わたしも彼の受け取ったプレゼントが気になっていた。

|||||

「チョコレート？」

「うん、そう。知らないの？ 『恋人たちの日』に友達と贈り合ったりしなかった？」

オンマンドに聞かれて、わたしは首を横に振った。以前は旅芸人だったから、普通の町や村に住んでいる人たちの暮らしぶりには詳しくない。だから、こういう話を聞くと新鮮で面白いと思う。

オンマンドの部屋で彼が見せてくれた布袋の中身は、真ん中に動物をかたどったクッキー生地をそれぞれ嵌め込んだ、チョコレートの山だった。クッキー部分はかなり不格好で、中にはなんの動物を表しているかよく分からないものもあった。それでも頑張って丁寧に作っているのが伝わってきて、心がほっこりと温かくなった。

「恋人たちの日」と呼ばれる祝日は数日後に迫っていた。このチョコレートを作った誰かは、その日には間違いないく届くよう、配達人に託したのだろう。

「恋人たちの日は友達とチョコレートを贈り合う日なの？　なんだかちぐはぐなネーミングだね。それに、あの手紙は友達って雰囲気じゃなかったように思うけど」

若干のからかいの意図も込めて聞いてみた。オンマンドは非常に分かりやすく鼻の頭を赤らめた。

「ううん。本当は言葉通りの日だよ。恋人同士で過ごしたり、好きな人にチョコレートとかのお菓子やアクセサリーなんかを贈って告白したりするんだ。でも、ぼくたちくらの世代にとっては、そういう相手がいなければ、代わりにきょうだいや友達や、とにかく親しい人にお菓子を贈る日になってる。あいつ、幼馴染へのお情けだとか言ってる毎年渡してくるんだ」

以前わたしが偶然知ってしまった、オンマンドが何かと張り合っている幼馴染みか。実に微笑ましい気分になったわたしの前で、オンマンドは困ったように頬を掻いた。

「でも、今年も貰っちゃった以上、ぼくも作らないわけにはいかないな。お返ししないとすごい剣幕で怒るからなあ……」

「このあたりで材料なんて手に入るの？」

「たぶん大丈夫。この時期はこの店もたっぷり仕入れるんだ。あればあるだけ売れるからね。ビルナさんのところなんか、大学の学生目当てに用意してるはずだよ」

そうは言っても、スカイリムは内戦の真っ最中で、しかもわたしたちがいるのはこんな極北の地だ。嗜好品を大量に仕入れることなどできるのだろうか。でも、確かに配達人は平気な顔をしてスカイリム中を飛び回っているし……などと考え込んでいたら、オンマンドでもわたしでもない、三人目の声が割り込んできた。

「ハッ。なるほど。何年前、レイヴン・ロックの若者の間でそいつが流行っていたが、そういうことだったのか。東帝都社の商魂の逞しさには恐れ入る」

皮肉っぽい口調のかすれた声。それは、奇妙な生物の殻でできた兜と赤いマスクとで顔を覆い隠し、兜と同じ素材でできている鎧を身につけた男が発したものだ。わたしの従者のテルドリン・セロだ。彼は、達成の間に帰ってきたわたしたちと合流し、一緒にオンマンドの部屋を訪ねていた。

わたしは尋ねた。

「レイヴン・ロックでも？」

「ああ。私もいくつか貰ったよ。苦くてとても食べられたものじゃなかったがな。嫌がらせをされているんじゃないかとさえ思った」

苦笑を含んだ声でばつさりと切って捨てたテルドリンを、オンマンドはにこやかに振り返った。

「あはは、テルドリンはそのまま食べさせられたみたいだね。蜂蜜を入れたり、クツキーと組み合わせたり、他にも色々な食べ方があるのさ。ちゃんと作ればおいしいよ」

「どうだか。ノルドの舌は信用しかねる」

「ハイロックやシロデイルでも大流行してるって」

「ブレトンまで持て囃しているのか。連中、珍しもの好きだからな」

オンマンドとわたしの間の緊張が解けたことに伴い、オンマンドとテルドリンの仲も元に戻りつつあった。わたしはほっとしていた。年齢も人種も違えど、彼らは気の合う友達同士だ。わたしのせいでテルドリンがオンマンドに冷たく突き放されているのを見るのは心臓に悪かった。

オンマンドは布袋に片手を突っ込み、フクロウらしき動物をかたどったクツキー付きのチョコレートを取り出して、自分の口の中にそっと放り入れた。

「うん、おいしい。きみたちも一つ食べてみなよ」

オンマンドはもぐもぐしながら、わたしたちに布袋を差し出した。

「いいの？」

「うん。一つだけね」

テルドリンとわたしは、布袋の中からチョコレートの一つずつ取り上げた。テルドリンのチョコレートには、狼らしい四つ足で口の長い

動物のクッキーが嵌まっていた。わたしのチョコレートのは、なんだろう？ 鳥でも蝙蝠でもない、二つの翼を左右に広げた生物だ。

オンマンドがわたしのチョコレートを覗き込んだ。

「あ、珍しいの取られちゃった。それはドラゴンだね。帝国の紋章を真似て作ってるんだって」

ドラゴンと聞いて、胸がざわついた。今スカイリムに降りかかっている災厄の一つだ。わたしの生活も、あの日ヘルゲンに現れたというドラゴンのせいで一変した。だが、伝説上の彼らは、人間がエルフや敵対するドラゴンに対峙するために、強大な知恵と力をもたらしにくれた存在でもある。だからこそ、帝国の紋章にまで姿が刻まれているのだ。

わたしは小難しい物思いを振り払い、チョコレートを口の中に入れた。一瞬、鼻の奥がぎゅつと締まるような苦みが来た後で、蜂蜜の甘みが湧いた。ひと噛みするとクッキーが砕け、小麦粉の香りで鼻腔が満たされ、頭の奥の方まで幸せな気分がふんわり広がった。

「おいしい。ね、テルドリン」

わたしはテルドリンに笑いかけた。彼はマスクを引き下げ、刺青の入った灰色の肌を露わにしてチョコレートを味わっていた。

「まあ、そうだな。昔食わされたものに比べれば、かなりまともな味だ。私はもつと甘い方が好みだが」

素直に褒めないのがいかにも彼らしい。

オンマンドはわたしとテルドリンに代わる代わる顔を向けて、どことなく遠慮がちに聞いた。

「ぼく、これから材料を買いに行くけど、きみたちはどうする？」

わたしは色めき立った。蔵書整理の仕事もなくなって暇になったところだった。スカイリムやシロデイールの若者の間で大流行だというこの行事に、せっかくだから一度は参加してみたいと思った。

「わたしも一緒に作りたい。お菓子を大学の人たちに配って、配達人に頼んでスカイリムとソルスセイムの友達にも贈りたいな」

オンマンドが嬉しそうに頷いた。

「いいね！ そうしよう。テルドリンは？」

テルドリンは肩をすくめた。

「無論、私はこいつを護衛するために行かざるを得ない。だが、それを抜きにしても、たまには新しい料理に手を出してみるのも面白そうだ」

テルドリンは、わたしの護衛もなく手持ち無沙汰なときは、自由気ままな時間を送っている。以前から野営地などで簡単な料理を作っていたが、ここではもっと時間の掛かる料理にも挑戦しているようだ。

話が決まれば、善は急げだ。わたしたちは連れ立ってウインターホールの町に繰り出した。

## 2. ジェイ・ザルゴの場合

チョコレートはビルナさんの店でも他の店でも山積みになっていたので、買うのに苦労しなかった。しかし、少し遅れて買いに出た学生たちは、倉庫係のエンシルに買い占められ、法外な値段で売りつけられたそう。見かねたミラベル先生がエンシルをこつてり絞り、適正な価格で学生たちに販売させ、町にもいくらか戻した。被害者の一人であるニルヤ曰く、毎年こんな感じだという。

オンマンドとテルドリンとわたしは、日持ちの良いチョコレートタルトを作った。器の形にしたタルト生地の中に、蜂蜜と山羊の乳で味をまろやかにしたチョコレートを注ぎ、テルドリンが持っていた、モロウインドのつんとした風味の香辛料を振りかけた。甘いものに香辛料なんて、と普通は思うだろうが、結構おいしい。ただし、このおいしさに辿り着くまでに散々試行錯誤した。まるで新しい魔法の実験みたいだ、とオンマンドは笑っていた。

わたしたちはあの陽気な配達人を呼んで、オンマンドの幼馴染みと村の人たちと、わたしのスカイリムとソルスセイムの友人たちに届くよう手配した。少しでも喜んでもらえたら嬉しいと思う。

やがて、恋人たちの日がやって来た。朝からみんななかそわそわしていた。恐らく、言葉通りに恋人と過ごす人や、意中の相手に告白したい人、それにオンマンドの幼馴染のように、この機会にかこつけて誰かに好意を仄めかしたい人が少なからずいるからだろう。

わたしは既に何人かの先生や学生から、テルドリンとわたし宛の菓子を貰い受け、お返しに三人で作ったチョコレートタルトを渡していた。チョコレートを中心に色々な種類の菓子が目の前に並んでいくのは楽しかった。特に、ブレリナ・マリオンから貰った、ソルトライスという植物から作った菓子は、モロウインドから取り寄せたのだから、包装にテルヴァン二家の紋章が刻まれていて、わたしが一ヶ月で稼ぐゴールドの額を遥かに超える価値がありそうだった。それを大学の全員に配っているというのだから、彼女が相当裕福な家の出身であることが窺える。



チョコレートを携えた訪問者が一段落した後、わたしは配る側に回ることにした。テルドリンに部屋を任せ、後ろ手に菓子を入れた袋を持って、まずはジェイ・ザルゴの部屋の扉を叩いた。

「ジェイ・ザルゴ。いる？」

一拍置いて、ふが、と水牛が鼻を鳴らすような音が聞こえた。わたしは不審に思って扉を開けた。ジェイ・ザルゴがベッドに突っ伏していた。部屋の隅にある机の上に目をやって、わたしは驚いた。剥き出しの菓子や、菓子の入った袋が山盛りになっていた。朝から今まで、既にこの量？ わたしたちはこんなにくさん貰っていない。

考えてみれば、ジェイ・ザルゴは意地っ張りで自信家だが、その分裏表がなく、妙に抜けているところもあって憎めない。そして見た目や仕草や表情のひとつひとつがとてもかわいい。そんな彼が人並みの成果で終わるはずがないのだ。

ところが肝心のジェイ・ザルゴは見れば、気の向かない様子で起き上がってベッドの脇に座り、尻尾をだらんと垂らしていた。ふわふわの毛に覆われた目の周りがうつすら光っていた。もしかして、泣いていたのか？ その姿にわたしは胸を衝かれ、彼に駆け寄った。

「どうしたの、ジェイ・ザルゴ。どこか具合でも悪いの？」

ジェイ・ザルゴはわたしを見上げ、ふらふらと立ち上がり、わたしの肩に縋りついた。

「ひどいんだ。みんなジェイ・ザルゴのことをなんにも分かってない！」

そのままわたしの肩に顔を埋め、ぐすぐすと鼻を齧りだした。またローブが汚れてしまう。まあ、すぐに乾くし、ジェイ・ザルゴの体がふわふわしていて気持ちいいのでどうということはないのだが。

「分かってないって？ あんなにいっぱいお菓子を貰ってるじゃない。羨ましいよ」

ジェイ・ザルゴはがばと顔を上げて、まるで親の仇でも見るような目つきで、机の上の菓子の山を指さした。

「よく見てみる。チョコレートばかりだ！」

わたしははっと気付いた。カジートがチョコレートを食べられない

いいというのは、彼らの身近で暮らしたことのない人にとっては馴染みのない知識だろう。わたしは旅芸人時代にカジートの妹分がいたので、当たり前のこととばかり思っていた。作っている人たちに言っておけばよかった。

「カジートにとってチョコレートは猛毒と同じだ。でも、皆嬉しそうに持ってくるものだから、無下に断れなかった。オマエは？ オマエもまさか、ジェイ・ザルゴにチョコレートを贈るつもりか？」

ジェイ・ザルゴは絶望に染まった表情で喉から声を絞り出し、わたしの肩に置いた両手を強張らせた。わたしは空いている方の手で、彼の腕を軽くさすってあげた。

「ううん。ちゃんとチョコレートじゃないの作ったよ。ジェイ・ザルゴ専用だね」

ジェイ・ザルゴは、ほわあと息を漏らした。柔らかそうな口元が綻んだ。彼は、わたしが持ってきた袋の口を開けるのを見守っていた。中から鮮やかなキツネ色をしたクッキーが顔を出すと、彼の目がきらきら輝いた。

「これは？」

「エイダール・チーズで香りを付けたクッキー。オンマンドとテルドリンと三人で作ったの」

「うわーん、ありがとう!! オマエはジェイ・ザルゴの一番の親友だ！」

わたしはジェイ・ザルゴに抱きすくめられた。クッキーがわたしたちの体に挟まれて何枚か割れた感触があった。だが、やはりジェイ・ザルゴの体は絶妙に柔らかくて心地が良い。ちよつと気を抜くと、その妙なる感触に魂を奪われてしまいそうだ。

「……おい」

低い、不機嫌そうな声がした。ジェイ・ザルゴの声ではなかった。わたしたちは部屋の扉の方を振り返った。テルドリンが腕組みをして立っていた。

「ああ、テルドリン、来てたの」

わたしは、二人だけの癒しの時間を中断され、内心恨めしく思いな

がら声を掛けた。

「来てたの、じゃない。その猫の大声が聞こえたから飛んできたんだ。なんだ、その格好は」

彼は苛ついた口調で答えて顎をこちらへしゃくつた。わたしは自分の服装を見下ろした。ジェイ・ザルゴに縋りつかれ、抱きつかれていたせいで、ローブを留めていたボタンが外れ、下の服も少しはだけていた。わたしはジェイ・ザルゴをベッドに座らせて、服装を直した。「ジェイ・ザルゴと友情を確かめ合っただけだよ」

「友情を確かめ合うためにお前が服を脱ぐ必要があるのか？」

「脱いだんじゃなくて、脱げたの。というか、わたしたちが何をしてよとテルドリンには関係ないでしょう。確かこないだも同じこと言っただよね？」

テルドリンは、フンと鼻を鳴らして黙り込んだ。彼は時折、おてんばな子供を心配する口うるさい父親のごとく振る舞うことがある。彼の年齢に比べると、わたしは孫や曾孫どころではない若輩者なので仕方ないかもしれないが、もう何度も伝えていっているようにわたしは人間としては大人で、それ以前に彼の雇い主なのだ。そういう扱い方はやめてもらいたい。

ジェイ・ザルゴがちよいちよいとわたしの手の甲をつついた。

「なあ。クツキー食べていいか？」

わたしは笑顔を作り、ジェイ・ザルゴを見下ろした。

「もちろんだよ。喉に詰まらせるといけないから、水持ってこようか？」

「ほんとか？ 助かる」

わたしがキッチンから水を持ってくると、ジェイ・ザルゴは口の周りに食べかすを沢山くっつけて、クツキーをもりもり頬張っていた。彼はわたしに、うまいぞ、と満面の笑みで言った。わたしはほんわかと胸が温まるのを感じた。

テルドリンはジェイ・ザルゴの机の上を漁っていた。

「何人かはお前たちカジートの生熊についてきちんと調べたようだな。これなんか随分と手が込んでいる。気合いを入れて作ったんだ

ろう。物好きな奴だ」

ジェイ・ザルゴのために菓子の山を選び分けているようだ。ジェイ・ザルゴを「猫」呼ばわりし、何かと冷たく接することが多いが、困っていればああして世話を焼く。彼の、素直ではないけれど心優しいところが、わたしはとても好きだ。

「さて、チョコレートの方はどうしたものか。こいつとオンマンドとブレリナあたりを呼んで宴会を開いて、代わりに食わせるか？」

テルドリンの冗談半分の一言に、ジェイ・ザルゴは口元から横に伸びるヒゲをぴんと真っ直ぐにした。

「名案だ。テルドリンも来てくれ。いや、むしろ大学寮の者たちをありったけ呼ぼう」

その夜、ジェイ・ザルゴの宣言通り、彼の部屋で宴会が催されることになり、色々と愉快的な事件が起きたりもしたが、それはまた別の話だ。

### 3. アンカノの場合

わたしは、エイダール・チーズ風味のクッキーに大満足のジエイ・ザルゴと別れ、テルドリンを連れて達成の間と平静の間の人々、それにアーチメイジの居室などを順に訪ねていった。最後に残ったのが、達成の間の一階の、ウインターホールド大学の顧問であり、サルモールである、アンカノの部屋だった。

「本当に行くつもりか？」

その部屋の扉に手を掛けようとしていたわたしの背後で、テルドリンが尋ねた。

「うん。他の人全員に配って顧問にだけ配らないのも申し訳ないから」

などと言いつつ、比較的近い部屋に住んでいるのに最後まで残っていたのは、わたしにも迷いがあったからだ。テルドリンはそんなわたしの気持ちを看透かして、溜息混じりに続けた。

「私たちを散々な目に遭わせた男をそんなふうには思いやる必要はない。放っておけばいいんだ、放っておけば。何度も言っているだろう、あいつは危険だと。これ以上関わり合いになったら、本当に命を取られかねんぞ」

そんな大げさな、と笑い飛ばしかけたわたしの脳裏に、フェルグロウ砦で顔色一つ変えずにかつての同僚を葬った顧問の姿がよぎった。あの時の、体の芯まで底冷えするような金色の目でまた睨みつけられたら、魔法を撃ち込まれるまでもなく血液が凍りついて死に至る気がした。

けれども、冷酷で傲慢なサルモールとしての彼は、彼自身のほんの一面に過ぎないようにわたしには思えた。もう少し交流を持てば、もっと別の一面が見られるかもしれないと、わたしはなぜか期待している。そんなことをテルドリンに伝えたら、君子危うきに近寄らずとかなんとか小言を言われそうなので黙っているけれど。

「ちよつと渡すだけだから問題ないでしょう？ あなたもすぐ後ろにいるしね」

テルドリンは、ぴくりと肩を震わせて、わたしを二つの丸いレンズで見つめ、静かに息を吐きながらかぶりを振った。

「ちよっと渡すだけ、か。分かったよ。その『ちよっと』を超えると私が判断したら、すぐさま止めに入るぞ」

わたしは、口うるさい父親と化した彼が一応納得してくれたことに胸を撫で下ろした。

「うん、よろしく。それじゃ、ノックするね」

わたしは、礼儀作法に厳しい顧問の機嫌を損ねないように、背筋を伸ばし、精一杯の丁寧さを込めて扉を叩いた。ややあつて、中からくぐもった声が聞こえてきた。

「誰だ」

わたしが名前を告げると、扉が薄く開いた。顧問の長身がその隙間から覗いた。彼はわたしを冷ややかに見下ろしていた。よかった。いつも通りの顧問だ。ただ、目の下に以前からあった隈が、心なしか濃くなっていた。

「寝不足ですか？」

「はっ」

思わず余分な一言が口を突いて出てしまった。顧問は優美な弧を描く眉の間に薄い皺を作つて、しばらく使っていないかっただであろう喉から、かすれ気味の声を発した。

わたしは両手を胸の前でぶんぶん振った。

「いえ、そんなことはどうでもいいですよね。今日がなんの日かご存知ですか？」

「薄明の月の一六日だ。それが何か」

こんなごく普通の日に、とてつもなく忙しい私を捕まえてどういうつもりだ、とでも言いたげだった。もしかしたら、彼は祝日や祭りの日に頓着しないタイプかもしれない。わたしは早くもへこたれそうになりながら、頑張つて笑顔を維持した。

「今日は恋人たちの日なんですよ。だから講義も町のお店も休みになつてるでしょう。それで、もしよかつたら——」

顧問のつんと上に向けた鼻の穴が大きく膨らんだかと思うと、扉が

ボタンと閉じた。わたしは凝り固まった笑顔のままその場につ  
立っていた。

「……え？」

何拍か過ぎた頃、わたしはようやく状況を把握した。

「顧問？　どうかしましたか？」

わたしは扉をノックした。すぐ向こうで誰かがぎよつと身じろぎ  
をする気配が感じられた。

「きッ、君がそこまで乱れているとは思わなかった。去りたまえ。金  
輪際、君にかける言葉などない」

なんだか壮絶な誤解をされている気がする。わたしは扉に向かっ  
て呼びかけた。

「あの、わたし、顧問にプレゼントを渡しに来ただけです」

向こう側でもどもぞ動く気配があり、扉が再び薄く開いた。

「……贈り物を。恋人たちの日にか？」

顧問は、わたしを何か珍奇な姿形をした生き物でも見るような目で  
見下ろした。わたしはすさまじい居心地の悪さを感じた。

「はい、そうです。そういう日だと聞いたので」

「ふん。度胸だけは褒めてやっても良い。しかし、その灰臭い老いぼ  
れまで連れてくるとは何事だ」

何事って、わたしが従者であるテルドリンを連れてくることの何が  
そんなにおかしいのだろうか。わたしはテルドリンを顧みた。彼は  
こちらを見据えながら腕組みをして、脚を片側に広げ、キチンのブー  
ツで石の床をとんとんと苛立たしげに叩いていた。助け船を出して  
くれそうな雰囲気ではない。

「ええと。テルドリンも一緒に作ったから、一緒に届けにきた？　と  
いう感じですかね？」

自分でもよく分からないまま適当な理屈をこねてみた。顧問は切  
れ長の目を見開いた。

「君らが、二人で一緒に作っただと……。手作りなのか？」

正確に言えばオンマンドと三人で作ったのだが、顧問がなぜか事の  
次第を飲み込むのに手間取っているようなので、とりあえず黙って頷

いておいた。

わたしはふと、顧問の耳が赤くなっているのに気付いた。それは徐々にこめかみと頬、首筋にも広がろうとしていた。顧問は一方の肩と下脛をびくびく痙攣させ、落ち着きなく口を開けたり閉じたりしていた。やがて、彼の口から、怒濤のような文句が溢れた。

「そんなことで私が君らを受け入れるとでも思ったのか。少し良くしてやったからといって、思い上がるのも大概にしたまえ。そもそも私はこの大学の顧問で、君は落ちこぼれの学生、その老いぼれと来たら員数外の野蛮な傭兵だ。釣り合うところなど何一つない。しかも、君だけならまだしも、その男も入れて三人で、とはどういうことだ!」  
「どういうことだと聞きたいのはこちらの方だ。彼が何を言っているのかさっぱり分からない。わたしはさすがに説明を求めようと声を上げかけたが、突然腕を掴まれた。彼は扉を開け放ち、わたしを部屋の中に引きずり込もうとしていた。

「入りましたまえ! 君らには一度はつきり教えておく必要がある。分を越えた望みを持つことがどんなに馬鹿馬鹿しいか——」

わたしは、今度は背後から肩を掴まれ、後ろへ引き寄せられた。顧問の手がわたしから無理矢理剥がされた。背中から左腕にかけてに誰かの逞しい腕が回され、温もりを帯びた硬い鎧の表面に体が押しつけられた。

わたしはテルドリンの左腕に抱き留められていた。テルドリンは右腕で剣を抜き放ち、顧問の鼻先に突きつけていた。彼は、溜まりに溜まった腹の底からの怒りを一挙に集めたかのような声を、マスクの下から迸らせた。

「思い上がっているのはどちらだ。私たちはただ貴様に菓子を渡しにきただけだ、大学の他の連中にしたのと同じようにな!」

顧問は剣を突きつけられてのけぞり、一気に青白い顔色になったその姿勢のまま、は? と弱々しい息を吐いた。

「菓子、を?」

テルドリンはわたしを腕の中から解放し、わたしが持っていたチョコレートタルトの入った袋をもぎ取った。彼はその袋を顧問の胸に、



顧問を半ば突き飛ばすようにして、押しつけた。顧問は、まるで顔のすぐそばで大きな音を出されて驚かされたかのような表情を浮かべていた。

「ありがたく食うがいい。どうせ他に恵んでくれる奴もいないんだろ  
う」

テルドリンはそう吐き捨てた。呆然としながらチョコレートタルトの袋だけは受け止めた顧問を、テルドリンは乱雑に部屋の中へ追いやり、扉を閉じた。扉の向こうでどたんばたんと音がして、間もなく静かになった。

テルドリンは長い長い息を吐いた。それから、わたしの肩を軽く叩き、自室へ戻ろうと促した。表情が見えなくても、彼がげっそり疲れきっているのが如実に感じ取れた。

「だから言ったんだ。放っておけばいいと」

テルドリンが呟いた。わたしは、何がどうしてああなったかは未だに分からなかったが、そうだね、とだけ答えた。

#### 4. テルドリン・セロの場合

恋人たちの日の夜も更け、ジエイ・ザルゴの部屋での大宴会の後片付けを終えて、わたしは自室に戻ってきた。椅子に座り、明日の授業で使う本を開いた。中身に何が書いてあるかはろくに理解できなかった。宴会のわくわく、そわそわした空気が未だにわたしの周りに纏わりついているせいもあるが、まだ最後のお楽しみが残っているのだ。勉強に集中できるはずもない。

部屋の扉がノックされた。入っていいよと声を掛けると、テルドリンが何か湯気の立つものを持って入ってきた。

「捗るか？」

「ううん、全然」

「だろ。あれだけ馬鹿騒ぎした後では」

テルドリンはわたしとテーブルを挟んで向かい側の席に座った。彼の方からなんだかいい香りが漂ってきた。わたしは本から顔を上げ、彼の持ってきたものに視線を注いだ。大きなマグカップの中に、おいしそうな茶色の液体がなみなみと入っていた。

テルドリンは、わたしが聞いてもいないのに、自慢げに説明した。「ホットチョコレートというやつだ。図書館の古いレシピ本に書いてあった」

わたしは急激な焦りに襲われた。まさか彼が自分用の夜食を作ってくるとは予想していなかった。彼がそれを今から飲むなら、わたしの「あれ」はどうすればいいのだ。

わたしは懸命な努力の末、ふーん、といかにも興味のないような相槌を打つことに成功した。ホットチョコレートを飲み干した後の彼の様子でこちらの出方を決めよう、そう思った。そして、彼がマスクを外し、ホットチョコレートに紫色の唇を浸す瞬間を待った。

しかし、その瞬間はいつまで待っても訪れなかった。妙ちきりんな生物の殻を被った男は、本を適当にめくるわたしを、穴の開くほどじいっと見つめていた。

「冷めちゃうよ。飲めば？」

落ち着かなくなつて、わたしは彼を促した。すると、彼はそのホットチョコレートのマグカップをわたしの前に置いた。

「私が飲むわけじゃない。これはお前のために作ったんだ——お前だけのために。飲んでくれ。自分で言うのもなんだが、いい出来栄だ」

彼は、耳に心地良い、柔らかかで静かな声色で、そう言った。

「え、あ、……ありがとう？」

わたしは恐らく、今までの人生で一番の阿呆面を彼に晒してしまつたと思う。テルドリン「「r・b・も　>　・」」作っていたのか。でも、「お前だけのため」ってどういう……そうだ、きつと、わたしの稚拙な企みなんて最初からお見通しだったと茶化しているのだろう。

わたしは観念して、ベッドサイドテーブルの中に隠しておいたものを取り出し、テルドリンの前に置いた。

「テルドリンには敵わないな。わたしがやってたこと、ばれちゃつてたんだね。これ、わたしもテルドリンのために作ったの。いつもお世話になつてるお礼。ちよつと見た目は悪いけど、おいしいよ」

テルドリンと同じように図書館のレシピ本を見て作った、チョコレートケーキだ。テルドリンは甘いのが好きらしいので、レシピに書いてあるよりも蜂蜜をたくさん入れた。その分固めるのが大変で、材料を買ってきた日から昨日まで、彼が風呂などへ行っている時を見計らつて何度も作り直していた。ここぞというときに目の前に出して驚かせるつもりだったのに、全部知られていた上に先回りされてしまったなんて、すごく恥ずかしい。

テルドリンは、わたしの不格好なチョコレートケーキを、これまた穴の開くほど見つめていた。

「テルドリン？　嫌だったら無理して食べなくていいよ」

わたしは控えめに声を掛けた。無機質な二つのガラスの目が、部屋の照明を反射してから、わたしを捉えた。

「いいや。いただくよ。ありがとう」

テルドリンは、先ほどと同じ、わたしの耳から入り込み体の奥深いところまで蕩けさせるような、甘い声色で言った。そう、甘いという

表現がとてもしつくり来るのだ、この声は。どうしてわたしに向かつてそんな声で語りかけるのか。宴会に誰かが酒を持ってきていた。彼はそれを飲んで酔ってしまったのだろう。わたしも記憶はないが、きつとだいぶ飲んだのだ。だから今、やはり酔っている。

心臓がばくばくとうるさくて、何も考えられない。わたしはテルドリンが作ってくれたホットチョコレートに口を付けた。初めのほろ苦さを過ぎると、それはテルドリンの声に似て、とても甘くて、温かった。

—『恋人たちの日』了—

5—X—Interlude： 身づくろい  
身づくろい

小さな村の酒場兼宿屋に集まった村人たちに、モーサルの珍味、沼キノコの干物を売り込み、ようやく何束か買ってもらえたところで、その日の商売はお開きにした。村人たちは、ほどなく酒に酔い、吟遊詩人の奏でる曲に陽気に手を叩き始めた。

わたしが拙い商売をしている間、従者のテルドリン・セロはわたしの傍らに立ち、時折村人とわたしの会話に割り込んで軽口を叩いていた。だが、村人たちのどんちゃん騒ぎが始まると、肩を組もうとしてきた老人の手をやんわりと避けて、どこかへ去っていった。わたしはテルドリンの代わりに老人に捕まり、しばらく彼の老妻と息子たちに関するのろけ話や愚痴を聴くことになった。

話を終えて満足した老人は、テーブルに突っ伏して眠り始めた。今や完全に出来上がっている他の村人たちは、よそ者のわたしのことなど眼中にない。

わたしはテルドリンと二人で借りた部屋に戻った。テルドリンはいなかった。そういえば、彼は先ほど、風呂はどこにあるかと宿の主人に尋ねていた。彼は清潔であることを好み、風呂に入る機会を決して逃さない。それなのに、蜘蛛の巣や泥や血に塗れ、何十日も同じ格好のまま、なんてことも多いであろう傭兵の仕事を二百年以上も続けてこられたのが、わたしには不思議で仕方なかった。

わたしはしばらく部屋で錬金術のレシピを読んでいた。そのうち、文字を追うのが退屈になったので、気分転換をしようと宿の外に出た。

満天の星空の下、心地良い夜風が吹いていた。宿の入口は、松明を持った衛兵が行き来する街道に直に繋がっている。平和な村だ。ふとそう思った。でなければ、テルドリンはわたしを決して一人にはせず、もしどうしても風呂に行きたかったらわたしを容赦なく部屋に押し込み、こんなに長く風呂を楽しむこともない。わたしにもつと頼り

甲斐があれば、彼もぴりぴりせず済むだろうに、と少し悔しくなる。それでも今のところ、彼にわたしとの雇用契約を解消するつもりがなさそうなのは、ありがたかったし、嬉しかった。

わたしは宿屋の裏手に回ることにした。普段客のやってこない裏手には、使い込まれた掃除道具や、新人の従業員が練習がてら割った薪の山があったり、風呂の煙がもくもく上がっていくのが見えたりして、楽しいのだ。たまに客同士の喧嘩を目撃してしまうこともあるけれど。

宿屋の建物の角から顔を出して、様子を窺った。宿屋の裏手には夜空をそのまま映した小さな池があり、その周りを木立が囲んでいた。池の手前には篝火が灯され、その傍の切り株に、誰かが池に向かい、こちらに横顔を見せる形で座っていた。青みがかかった灰色の肌、額から目元さらに頬まで伝う凜々しい刺青、ぴんと尖った耳、黒々となびくモヒカン、つぎはぎだらけの赤茶けた服の上からでも見て取れる、鍛え上げられた体——テルドリンだ。兜と赤いマスク、鎧を足元に置いて、彼は右手で鋭く光る小さな刃物のようなものを頭に当てていた。どくん、と心臓が跳ねた。それは、刃物のようなもののせいなのか、それとも食事時以外にはお目にかかることのないテルドリンの端正な素顔の不意打ちを食らったためなのか、分からなかった。

「風呂を覗き見に来たのか？　生憎、今は誰も入っていないぞ」

さらに、彼の方からにやついた声で話しかけてきたものだから、わたしは狼狽した。

「違うよ。散歩しに来たの。テルドリンこそ何してるの？　お風呂は終わったの？」

わたしは狼狽を隠すために早口で言い、彼に歩み寄った。

テルドリンは刃物のようなものを頭から離し、皮肉っぽい笑顔をわたしに向けた。赤い両目が篝火の光を反射して煌めいた。肌がうっすらと汗ばんでいるのが見て取れた。風呂から出たばかりなのだろう。わたしは一瞬、彼が腰布一枚で風呂に入っている姿を想像してしまい、なぜか頬が熱くなった。

「髪を剃ろうとしていたんだ。最近伸び放題だったからな」

彼の右手に握られていたのは剃刀だった。膝の上には水の入った桶と使い古された布切れもあった。

なるほど、確かにここ数日の食事時のテルドリンは、左右の側頭部の剃り上げていた髪が伸び始めて、中央を走る立派なたてがみとの均衡が崩れ、若干、血の気の多い山賊の親玉のような見た目になっていた。ただ、そう見えるというだけで、食事を終えて兜を被りさえすれば、いつもの頼れるテルドリンのままなのだが。

「ふうん。テルドリンは兜被ってるんだから、気にしなくていいのに。わたしなんか二ヶ月くらい伸ばしっぱなしだよ」

わたしはそう言いながら初めて自分自身の状態に思いを馳せ、自分の髪の毛を指先で弄んだ。だいぶ量が多くなって、もっさりしている気がした。

テルドリンは大仰にかぶりを振った。

「だらしない奴だな。身なりを整えることは己の精神を整えることでもあるんだぞ。他人に見られているかどうかなど関係がない。それに——」

テルドリンはしかめつらしくのたまったかと思うと、不意に言葉を切って、眉間に薄い皺を作り、わたしを見上げた。それに、なんだというのだろうか？ わたしは彼の言葉の続きを待った。だが、彼はむつつりと唇を噛んで沈黙した。わたしは素顔のままの彼と、いつになく至近距離で見つめ合うことになった。

なんだ、この変な間は。わたしは自分の背骨の一番下から、じわじわと、奇妙な感覚が忍び寄ってくるのを感じていた。少し気を抜いたら、彼の美しいルビーのような両目の中へわたしの心が吸い込まれてしまいそうな感覚。だがそれは決して忌むべきことではなく、むしろ……いや、待て、とにかく、このおかしな空気から抜け出さなければ。わたしはなんといいことはない風を装って、軽く首を傾げてみせた。

「よかったら、手伝おうか？」

テルドリンの眉間の皺が深くなった。

「はっ」

奇妙な感覚が一挙に立ち消えた。わたしは内心ほっとして続けた。

「テルドリンの髪の毛、わたしが剃ってあげるよ」

テルドリンは慄然とした表情で、剃刀を持った右手をわたしの手の届かないところまで退けた。

「必要ない。いつも自分で剃っているんだ」

「他の人にやってもらった方が剃り残しがなくなって気持ちよくない？」

「私は剃り残しなどしない。第一、お前に任せたら頭を切り刻まれかねん」

わたしはむっとした。いくらなんでも、そこまで言われるのは不名誉極まりない。わたしの武器の扱い方が下手なのを知っているからそんな発言が出るのだろうか、武器を使うのが苦手なのは、緊張して間合いを計れなくなるからだ。安全な場所で剃刀で毛を剃る程度なら間合いも何もない。

「大丈夫だってば。昔の仲間にもやってあげてたから得意だよ。演し物の都合でもっと変わった髪型にすることもあったんだから」

わたしは精一杯まくし立てた。テルドリンはいかにも信用ならなしいと言いたげに目をすがめていたが、溜息をついて、わたしの右手に剃刀を握らせた。

「……そこまで言うならやってみろ。私の頭に少しでも傷を付けたら、次に受ける依頼の取り分は私が九で、お前が一だぞ」

わたしは無性に嬉しくなって、何度も頷いた。彼が膝に置いていた桶と布切れももらい、池の方へ顔を向けた彼の後ろに回った。

服以外何も身に着けていないテルドリンを眺めるのは新鮮だった。ぴよこぴよこ飛び出している髪の毛を無視すれば、彼の頭は非常に優美な丸い線を描いている。その頭から、これまた優美でしなやかな筋肉に支えられた首が伸び、赤茶色の服の下に隠された逞しい肩に繋がっている。

わたしはテルドリンの頭の左半分指先で触れた。短い毛に覆われた彼の肌は少しぬるついていた。既に油を塗ってあるようだ。テルドリンはかすかに肩を震わせただけで、じっとしていた。わたしは



指の腹を、続けて左掌を、テルドリンの中途半端に伸びた髪の中に埋めた。水分を含み、油で滑らかになった彼の毛が、ちくちくとわたしの肌を刺してくる。こそばゆく面白。わたしは彼の頭を、犬の頭を撫でるよりやや控えめに撫でてみた。掌がわしやわしやす。うわあ、なんだか楽しい！ この感触、癖になりそう。う

「おい、何をしている！」

テルドリンが、顔は池の方へ向けたまま、こめかみをひくつかせて叫んだ。わたしははっと我に返った。

「ごめん！ つい夢中になっちゃった」

「何が、夢中になっちゃった、だ。頭を撫でてほしいと頼んだ覚えはない。これ以上ふざけたら剃刀を返してもらおうぞ」

ものすごく怒っている。当たり前だ、信用して剃刀を預けたのに一向に取りかからずに自分の頭で遊ばれたのでは、堪ったものではない。わたしは反省して、真面目に取り組むことにした。

「今度はちゃんと剃るから。動かないでね」

わたしは剃刀を桶の水で湿らせると、左手を彼の頭に添え、右手に持った剃刀を彼の襟足に当てた。彼の首の筋肉がわずかに強張ったのが伝わってきた。いくら強靱な精神力を持つ彼だって、他人に髪の毛を剃られるのは怖いのだ。それでも身を預けてくれているのだから、わたしも彼の信頼に応えるために集中しよう。

剃刀を毛の流れに沿ってゆっくりと動かすにつれ、テルドリンの余分な髪の毛がじよりじよりと音を立てて切り取られ、刃の上に積み重なっていく。ある程度溜まったら、剃刀を桶の水の中で振ってから布切れで拭う。一帯を一通り剃り上げたら、今度は同じ箇所、毛の流れとは逆向きに剃刀を当てる。

わたしは、それから急速に、テルドリンの側頭部を綺麗に剃ることだけに集中していった。じよりじより、じよりじよりと小気味の良い音が、後ろの宿屋から聞こえてくる雑多な声や物音を清らかに上書きしていく。彼の頭に剃刀を当てるときは、前のめりになり、彼の両肩に両肘を置き、彼の背中に体をくつつける。こうした方が、手元の狂いが少なくて済む。顔も、彼の頭にぐつと近づける。隅から隅までく

まなく見渡し、一本の剃り残しも見逃さないためだ。

わたしの作業は、一番の難関である、彼の尖った耳の横に差し掛かった。わたしは左手で彼の温かな耳をそっと畳んだ。その時、テルドリンが肩を跳ね上げたので、剃刀を当てようとしていたわたしの手元が狂った。幸い肌を傷つけることはなかったが、何本かの毛が中途半端に切れて、耳の生え際の溝に飛び入ってしまった。あの溝に細かいトゲや髪の毛が入ると、恐ろしく痒い。取り払おうと思ったが、わたしの左手はテルドリンの耳で、右手は剃刀で塞がっている。そこでわたしは、タンポポの綿を飛ばすときのように、溝の中へ息を吹きかけた。

「ひっ……ひっ……」

テルドリンが、今までに聞いたことのないような素つ頓狂な声を上げ、再び肩を跳ね上げた。肩を動かされたことでまた手元が狂いそうになったので、わたしは心配になって彼の耳元で尋ねた。

「大丈夫？ わたしの剃り方、やっぱり怖い？」

テルドリンは、再三肩を震わせて、とげとげしい声色で答えた。

「違う。驚いただけだ。何も言わずに突然息をかける奴があるか」

なんだ、それならよかった。わたしは彼の耳の生え際を確認してから尋ねた。

「髪が耳のところに挟まってて痒いでしょう？ まだ残ってるから、もう一回やるね？」

「なっ……、痒くない！ 放っておけ、馬鹿」

やけに荒々しい物言いだ。突然で驚いたと言うからわざわざ聞いてあげたのに。まあ、彼が気にならないならとりあえず放っておくか。

わたしは最大の関門である耳の後ろを、長い時間を掛けて丁寧に剃り上げた。そうしてわたしの作業はテルドリンの、エルフ特有の突き出した額の生え際に近づきつつあった。

「テルドリン、上向いて」

テルドリンは顔と地面がほぼ平行になるまで顔を上向けた。彼の立派なたてがみのような髪の毛がわたしの胸をくすぐった。胸の奥

の方が少しそわそわした。

テルドリンは目をきつくつぶっていた。額から眉間にかけて走る皺は、彼の眉骨の上に乗っている筋肉が張り詰めていることを示していた。額の生え際も、これまた油断ならない部分なのだ。わたしは今まで以上に彼に体を密着させ、彼の顎を左手で支え、自分の胸に彼の頭を押しつけた。

「むあ!？」

テルドリンの喉から間の抜けた声が漏れた。彼は体全体を震わせ、目を見開いて、逆さまの状態でわたしをきつく睨みつけた。

「おい、お前——」

ちやうど彼の額に剃刀を近づけていたわたしには、彼のお喋りに応える余裕も、余分な動きを許す余裕もなかった。

「ちよつと黙って、動かないで。すぐ終わるから」

テルドリンはあからさまに不服そうに両目と唇を閉じた。わたしは彼の顎から手を離し、彼の秀でた頬骨からこめかみにかけてを左掌で包み込むようにして、剃刀を額の生え際に走らせた。剃り進めるにつれ、彼の顔つきは不服そうなものから、何やら苦しそうなものへと変わっていった。苦しそうと言っても、痛みを我慢している様子はなさそうで、しかも唇の端はなぜか微妙に緩んでいた。わたしは特に気にせず剃り続けた。

真ん中の黒髪の生え際まで剃り終わった。わたしは彼の頭を元通り正面に向かせ、耳の付け根を含め、あちこちに残っていた細かな毛を指先で丁寧払い、彼の頭の左半分をよく観察し、掌で隅々まで触れて、剃り残しがないことを確認した。正直に言くと、ざらざらしていて大変触り心地が良かったので、余分に何周か撫で回してしまった。その間、彼の体は小刻みに震えていた。くすぐったかったのかも知れない。

最後にもう一度全体を見渡して、わたしはほんとテルドリンの背中を叩いた。

「はい、終わったよ。次は右側ね」

ところが。テルドリンは背を向けたまま、後ろ手で器用にわたしの

腕を掴み、わたしを彼から一步遠ざけた。それから、掌を上向けた。ぶすつとした声で彼は言った。

「剃刀を返せ。残りは自分でやる」

わたしは、ええ〜！ と不満たつぷりに声を上げた。

「せつかく半分できたのに。もう半分もやらせてよ、なんか気持ち悪いじゃない」

「諦めろ。これ以上お前にやらせたら、私の方が保たない」

わたしの剃刀の使い方はそれほど危なっかしいのだろうか。旅芸人時代もよく使っていたので、慣れているつもりだったのに。シヨックだ。自信をなくした。

彼の不興を買ってまで残り半分を剃りたいとも思わなかったので、わたしは彼に大人しく剃刀を渡し、退散することにした。

テルドリンはわたしが剃った左半分を確かめるように触っていた。わたしが片足を宿屋の方へ向けた時、彼はやはり全くこちらを振り返らないまま、ぼそりと言った。

「その、なんだ。まあ、それなりに上手いと思うぞ。ありがとう」

彼の少しかすれた温かな声を聴くと、現金なもので、わたしは途端に自信を取り戻した。

「どういたしました。言ってくれば、またいつでもやってあげるよ」  
テルドリンは何も答えなかった。わたしは軽やかな足取りでその場を離れた。宿屋の角を曲がるときにテルドリンの方へ目をやると、彼はまだ右半分には手をつけずに、夜空を反射して輝く小さな池をぼんやりと眺めているようだった。

わたしはトイレを借りて宿の部屋に戻った。それから机の上に置いておいたレシピのメモを取り上げて、瞼が重くなるまで読んでいた。テルドリンはまだ部屋に戻っていなかった。だが、少し前まで彼の頭や背中に触れていたためか、彼がすぐ傍にいないことに珍しく不安を感じずに、わたしは一人であっさり眠りについた。

## 6—1： 思い出の夜

### 1. ホワイトラン

大勢の客で賑わう酒場バナード・メアの中に、ちょうど二人分の席が空いているのを見つけた。三人掛けのテーブルで中年の男が一人、ボトルからジョッキに酒を注いでいるところだった。男はわたしと目が合うと人懐っこい笑みを浮かべて、手振りでここに座れと示してきた。

「やあ、いい夜だ！ 実にいい夜だ！ あんたたち、一仕事終えてきたところだろ？ 俺はサムってんだ。他人様の冒険の話聞くのが大好きでねえ。一杯奢るから、ちよいと聞かせてくれないかね？」

席に着くなり、男はわたしたちの返事も聞かず店員に新しいジョッキを用意するよう言いつけた。

わたしは、わたしに付き従ってサムの向かい側に座った、キッチン装備で全身を固めたダンマー——従者のテルドリン・セロをちらりと見た。テルドリンはやれやれといった様子で肩をすくめた。大がかりな依頼を終えたばかりで疲れも腹の空き具合も尋常ではないのだが、まあ一杯くらいなら大丈夫だろう。

間もなくジョッキが二つ運ばれてきた。サムがボトルから酒を注いでいる間、わたしは店員に三人で食べられそうな料理をいくつか出してほしいと伝えた。

「さあさ、ジョッキをお持ちください、魔術師様。いよし、そんなじゃ、かんぱーい！」

サムに促されるがまま、わたしはジョッキの酒を一気に飲み干した。まろやかな舌触りと鼻腔に爽やかに充滿するベリーののような香りがたまらない。しばらくうつとりしていたら、不意に喉から腹までのあたりを焼けつくような熱さが走り、激しく咽せた。

「おい。これはエールじゃないな？」

テルドリンが呆れたような声色でサムに尋ねた。乾杯の合図に従わなかったようだ。彼はまだキッチンの兜を脱いでさえいなかった。

サムは一瞬きよとんとした。それから手を叩いて笑った。

「ん？ ああ、こいつは悪いことをした！ 若いヤツにはちよつと強すぎたか。ま、あんたも飲めよ、旨いぞ」

「私は酒に弱いんだ。こいつのお守りもしなきゃならないから遠慮しておく」

お守りつて何、お守りつて！ と、言いたかったが声が出ない。わたしは急激に襲ってきた目眩に耐えきれずテーブルに突っ伏した。気軽に勧めてくるから弱い酒だと思ったのに。油断した。ほぼ二日ろくに飲み食いしないで薄暗い墓地を歩き回って帰ってきたところにこれは、きつい。

「で、あんたらどんな冒険をしてきたんだ？ 聞かせてくれよ。さしずめ、ならず者退治つてところか？」

サムがテルドリンにうきうきと話しかけているのが聞こえる。

「それよりはずつとマシな仕事だ。ブリーク・フォール墓地のドラウグルを蹴散らしてきたのさ。依頼主があそこにちよつとした忘れ物をしてね」

テルドリンが答えた。ファレンガーとドラゴンストーンについては伏せることにしたらしい。ドラゴンズリーチの重鎮の一人とお近づきになったことを素性の知れない人間においそれと話すわけにはいかないだろう。正しい判断だ。

「へえ、あんな不気味な場所へよく入れたな。しかし、この人はともかく、あんたはかなりの腕利きのようだ。ドラウグルなんぞ目じやなかつただろう」

「まあな。こいつは戦うことに関してはからつきしだから、いつも私が前が出る。今回もそうだった」

「そりや勇ましい。絵になるだろうねえ。で、この人はあんたが化け物どもを蹴散らしている間、何をしたんだい？」

「暗がりや灯火の魔法で照らしたり、私に回復魔法をかけたたり、色々さ。たまに男の生霊みたいなのを召喚していた。むしろそいつの方が攻撃魔法に長けているんだ」

何やら悪口を言われている気がする。まるでテルドリンが雇い主

で、わたしがその頼りない従者みたいな言い草だ。ぼんやりした頭の中で、名誉を挽回しなければと思う。

わたしは勢いよく立ち上がった。

「まだまだ行けるぞ！　わたしは、酔ってない！　テルドリンと違って、酒には強い！」

こめかみにアイスパイクが直撃したような痛みが走った。足下もなんだかふらふらするが、気にはしてはいけない。わたしの名誉のためだ。

「おい、無理して立つな。水を持ってこさせるから座つ——」  
「戦いでは負けても酒では負けないって？　いい心がけだ！」

テルドリンの言葉をサムが遮り、がたんと椅子を倒して立ち上がった。見た目に現れないだけで、彼も実は相当酔っていたのかもしれない。

「じゃあどうだ？　俺と一気飲みの勝負をするってのは。俺が負けたらいい魔法の杖をやる。あんたが負けたら何をくれる？」

サムが大声で言ったのを、周囲の酔っ払いたちが聞きつけてやんやと囃し立てた。わたしは、フアレンガーから謝礼として渡された大金の袋をナツプザックから取り出し、どんとテーブルの上に置いた。

「だははは、あんたの依頼主は随分金払いが良かったんだな。いいだろう、それじゃ、まずは俺から行くぞ！」

彼は例のボトルからジョッキになみなみと酒を注ぎ、瞬く間に飲み干した。わたしは彼の勝ち誇ったような顔に不敵な笑みを返した。ボトルを受け取るとジョッキが満杯になるまで注ぎ、一気に飲む。既に酒の効果が行き渡っているからか、初めるときほどの衝撃は襲ってこなかった。

「なかなかやるじゃないか。二杯目だ」

サムがジョッキに酒を注ぎ、またもや一気に飲み干した。しかしジョッキを口から離すと、顔をぎゅつと歪めた。限界が近いのだろうか。わたしはほくそ笑んだ。この勝負、もらった。

わたしはボトルを奪い取り、直に口をつけた。そのままラツパのように掲げ、先ほどまでよりゆっくりしたペースで味わってみることに

した。うつとりするような喉ごしと、鼻と口、さらには耳や目にまで染み渡りそうなベリーの香り。全身がふわふわと心地よくなってきた。この酒はなんとという名前だろうか？　いつまでも飲んでいた気分だ……。

「分かった、ようやく分かった！　あんたの勝ちだ！」

サムにボトルを奪われた。彼は片腕でボトルを持ち、もう片腕でわたしと肩を組んだ。わたしが未練がましくボトルに手を伸ばすのを見て、彼はけたたましい笑い声を上げた。

「ハハハハ！　そんなに飲みたいなら、いいところに連れて行ってやろう。もつとうまい酒がたんまり置いてある、俺の秘密の場所だ。実を言うと、そこにあんたにやる杖も置いてあるんだ」

わたしはサムに導かれるがまま、酒場の入り口へ向かって歩く。酔っ払いたちが自分も連れていけだのそのまま押し倒しちまえだの好き勝手なことを喚いているが気に留めることはない。これからうまい酒を浴びるように飲めるって？　最高じゃないか。



## 2. マルカルス

気づくと、わたしはどうやら、ひんやりした台の上に横たわっているようだった。

頭が痛い。とても痛い。アイススパイクを十発撃ち込まれて、さらにメイスで二十回くらい殴られたような凄まじい痛さだ。とても目を開けてあたりを見回せる状態ではない。

感覚を研ぎ澄ますと、右手だけが台の下へ放り出される格好になっているらしい。わたしは右手を弱々しくさまよわせて、周囲に何かないか確かめた。手の甲に硬い感触があった。

「目が覚めたか」

聞き慣れた、しかしいつもよりだいぶとげとげしい男の声が上の方でした。テルドリンだ。わたしの右手は彼のキッチンのブーツに当たったらしかった。

「うん……頭、痛い……」

額に冷たくて柔らかいものが乗った。冷水で湿らせた布だろうか。粉々に割れそうだった頭が少し楽になった。

「……、どいっ？」

「覚えていないのか？ マルカルスだ。私は丸四日も馬車を急がせてきたんだぞ」

マルカルス？ わたしたちはホワイトランにいたはずだ。それがなぜいきなり、スカイリムの西端の街にいるのか？

わたしの考えていることくらいお見通しだとしても言うように、テルドリンは続けた。

「私にはお前がいったいどうやってここまで来たかなど知るよしもない。私に分かるのは、お前があつた男と一緒にいなくなった挙げ句、私にふざけた手紙を超越し、四日後の今日、このデイベラ神殿に寝転がっていたということだけだ」

あつた男。そうか、バナード・メアでサムという男と、魔法の杖と金を賭けて飲み比べをしたのだ。わたしはあつたあと、どうしたんだっけ？ 肩を組んで外に出たところまでは記憶にある。でもその先は全

く覚えていない——テルドリンの言っていることが正しければ、あれから四日後の今に至るまで。誰かがわたしの頭の中を綺麗にぬぐい去ったかのように完璧に真っ白だ。

とりあえず、テルドリンをもものすごく振り回してしまったことは確かだ。

「ごめん、テルドリン。すごい迷惑かけた。今も、かけてる」

素直に謝罪すると、テルドリンはしばらく沈黙した。それからやや落ち込んだ口調で言った。

「いや。私も悪かった。私がすぐに後を追っていればこんなことにはならなかったんだ。……あいつに妙なことはされなかっただろうな？」

妙なこと？ 一瞬考えて、それからわたしはくすつと笑った。本当は笑っていられる状況ではないが、テルドリンがまるで父親か兄のようになつたの心を心配しているのが無性におかしかった。

「全然覚えてない。でも少なくとも変な魔法や病気にはかかってないんじゃないかと……うう、痛っ」

笑ったら頭に響いたらしく、また痛みがぶり返してきた。

「すまん。話させるべきじゃなかった。まだしばらく眠った方がいい」

テルドリンが囁くように言った。それから、ずり落ちたわたしの右手を寝台の上に戻し、はいでいた毛布をかけ直してくれた。わたしは傍らにテルドリンが立っているのを感じ、安心して眠りに落ちた。

|||||

たつぷり眠ったおかげで頭痛は消え去った。

起床して身支度をしながら聞いたところによると、テルドリンはわたしとサムがバナード・メアを飛び出した後、わたしが席に置いていった荷物をかき集めてから、わたしたちを夜通し探し回ったそうだ。明け方になって彼の前に配達人が現れた。配達人は、わたしの筆跡で「マルカルのデイベラ神殿で待つ」とだけ書かれた手紙を彼に

渡した。テルドリンが馬車を雇って全速力でマルカルスまでやってきたのが四日後の夜、つまり昨晚。彼はディベラ神殿の床に転がっている泥酔状態のわたしと、カンカンになって怒っている司祭を発見した。わたしはテルドリンが到着するほんの少し前に一人でやってきて、どこから持ってきたのか分からないごみを神殿中にばらまいた後で倒れたらしい。テルドリンは司祭に愚痴られながらわたしの代わりにごみを拾い集め、わたしをマルカルスの宿屋「シルバーブラッド亭」に担ぎ込み、目覚めるまで看病してくれていたのだ。一連の話を聞いた後、わたしが再度謝罪したのは言うまでもない。

今、シルバーブラッド亭のテーブルで、わたしとテルドリンは遅い朝食を摂っている。

「ねえ、テルドリン。まだ契約は破棄しないでいてくれる？」

わたしは情けないくらい色々な失敗をする雇い主だが、こんな醜態をさらしてしまったのは初めてだ。いかげん嫌気が差したんじゃないだろうか。彼は以前、ノルドの雇い主との契約を自主的に解除したと話していたから、わたしも同じように見捨てられるのではないかという不安が急に襲ってきた。上目遣いにテルドリンを見ると、ルビーのような赤い双眸と目が合った。

テルドリンはキッチンの兜を外している。雇ったばかりの頃はどんなときもがんとして兜を外さなかったが、最近はわたしに気を許してくれたのか、食事時には素顔を見せるようになった。彼は弓のような力強い弧を描いた眉をわずかに上げた。

「もちろん破棄などしないさ。ただ、見ず知らずの人間に対してはもう少し疑り深くなれ。私の都合ばかりじゃない、お前の将来のためにもな」

ほっとして、わたしは頷いた。しかし、その後で彼が満足そうな微笑みをたたえたと、急に落ち着かない気分になった。

食事を挟んで話をするたび、キッチンの兜の、ある種のかわいらしささえ感じさせる丸いレンズの下には、実はこの鋭い鷲のような眼光が宿っていると気づかされる。いつもは兜の下から聞こえる少しざらついた声も、この端正なダンマーの唇から発されていると悟る。そし

て、食事時でさえ見られない鎧や腕当ての下にはどんなにしなやかな灰色の肉体が隠されているのだろうと考える。それから、なぜかとてもなく胸がどきどきするのだ。

「昨日からなんだか父さんみたいなことと言うね？」

妙な気持ちを紛らわすためにおどけてみせると、テルドリンは目を丸くした。

「父さん!? そんなつもりはない。ただお前がこのところあまりに危なっかしいから忠告しているだけだ」

彼は不服そうにわたしから目線を外し、グラスの水をがぶ飲みした。おかげでわたしの胸の動悸はだいぶ治まった。二百歳以上違うので本来なら父さんどころではないが、年上扱いされるのは気に食わないみたいだ。

「うえっへん。で、私の話はこれで最後になるが。司祭によると、お前はここに来る前にロリクステッドに寄り道してきたと喚いていたそうだ。まあ、おおかた幻でも見たんだろうが」

水が気管に入ったのか、大げさに咳払いしてからテルドリンは言った。

ロリクステッドに寄っていた? どうも不可解だ。ホワイトランからマルカルスまで来るのには、テルドリンのように馬車を使っても丸四日かかる。ロリクステッドに寄ったのなら時間が足りない。

「神殿で拾ったごみはまだ持ってる？」

テルドリンは眉根に皺を寄せた。これ以上首を突っ込むなどとも言いたげだ。だが、逆らいはせず、枕ほどの大きさの布袋を差し出した。

わたしは袋の中身をテーブルの上に出してみた。巨人のつま先、ハグレイヴンの羽、半分ほど中身の残っているワイン、それにくしゃくしゃになった紙。紙を開くと、手書きの文字で「サム」とあるのがまぶ目に入った。その上に、「杖を直すには、巨人のつま先、ハグレイヴンの羽、聖水が必要」と走り書きされている。

その文章を読んだ瞬間、いくつかの記憶の断片がわたしの脳裏に浮かび上がった。わたしは魔法の杖を確かに受け取っていた。それは

とても強力な杖で、何か……とてつもないものが出てきたような……。

「テルドリン。わたしたち、ロリクステッドに行かなきゃ」

わたしは自分でも知らないうちに立ち上がっていた。テルドリンは、そうなると思ったよ、と諦め気味に言った。

### 3. ロリクステッド

ロリクステッドまでは徒歩で三日ほどかかった。ここには旅の途中で何度か足を運んだことがある。十数軒の質素な家と畑しかないのどかな村だ。

晴天の下、村人たちは土を耕したり農作物に水をやったりと仕事に励んでいる。とりあえず宿屋の主人に話を聞くため、入り口から中心部に向かおうとすると、横の畑で雑草を刈っていた男が突然、雄叫びを上げてわたしに飛びかかってきた。

不意を突かれたために、わたしはなすすべもなく地面に叩きつけられた。男は鬼気迫る表情でわたしにのしかかり、わたしが身動きを取れないように両手首をぎりぎり締め付ける。

と、男の土で汚れた頬に鋭い刃が突きつけられた。

「私の主人から離れる。さもなければ、この剣で貴様の頭を切り落とすぞ」

テルドリンだ。片手で剣を男に向け、もう片手で今にも炎の精霊を呼び出そうとしている。

「ひえっ！ 助けてえー！」

恐怖に身を震わせ、男は飛びのいた。

尋常でない様子を察知して、男の周囲に他の村人が数人集まってきた。味方ができたことに勇気を得たのか、男はわたしを指さして叫んだ。

「み、みんな、そこにいるのがあのときの盗人だ！」

村人たちはそれだけで合点がいったらしく、各々がわたしににじり寄ってきた。テルドリンは剣を抜いたままわたしと彼らの間にさつと立ち塞がり、燃えさかるオブリビオンの住人を彼らの背後に召喚した。そして、ならず者やドラウグルと戦っているときと同じ、ぞつとするような野蛮な笑いを含んだ声で凄んだ。

「さあ、どいつからボエシアの生け贄にしてやろうか？」

村人たちの顔が恐怖に染まる。遠くの方で、数人の衛兵がこちらへ走ってくるのが見えた。

わたしはテルドリンに今すぐ武器を収め精霊を還すようにと命令した。このままでは殺し合いになってしまう。彼らの反応を見るに、わたしはロリクステッドで何かしでかしたのだ。弁明しなければならぬ。

|||||

わたしは衛兵に付き添われて、最初に飛びかかってきた男、エニスと話すことになった。

「つまり、わたしがあなたのグレダというヤギを盗んで、グロクという巨人に売り払ったのですか？」

わたしが他人事のように言ったために、エニスは神経を逆撫でされたようだった。

「そうだ！ あいつはオレが手塩にかけて育てた他に二匹とないヤギだ！ それをおめえはヘラヘラ笑いながら両手で抱えて走り去ったんだ」

今にもつかみかかってきそうだが、テルドリンが遠くの方で腕組みをしてこちらを眺めているから、おそらく実行はされないだろう。

「いや、本当にすみません。何も覚えてないんです。嘘じゃありません」

心底から謝って頭を下げるも、エニスは取り合わない。

「ああ、おめえは覚えてねえだろうな、ひどく酔っ払ってたんだからおめえが行った先に運悪くグロクがいたもんで、あの巨人はおめえに金を渡し、おめえはグレダを渡した。それで、ようやく追いついて途方に暮れるオレを指さして笑ってトンズラしたんだ」

自分がそんな悪人じみたことをやらかしたとは到底信じられない。しかしこの正直そうな男がこんなややこしい嘘をつくとは思えない。たぶん真実なのだ。

「あのう、つまり、わたしはそのヤギを取り戻してきた方がいいんですよね？」

エニスはふんぞり返って頷いた。

「よく分かってるじゃねえか。さっさと行ってこい。グレダが帰ってくるまでこのロリクステッドの土は踏ませねえからな！」

わたしはエニスからグロクの住んでいる方角を教えてもらい、テルドリンを伴ってとぼとぼと歩き出した。テルドリンが低い声で話しかけてきた。

「ヤギを取り返しに行くつもりならやめておいた方がいい。巨人だぞ？ この村にはこの先特に用事もないだろう。これは私の勘だが、あのサムとかいう男やら魔法の杖やは、追いかけたところでどうせろくなことにならない」

テルドリンの言っていることは正しいのだろう。でも、どうしてもあの杖のことが気にかかる。それに、わたしは断じてエニスの考えであるような悪人ではない、と自分では思っている。だから、このまま逃げたら何か大切なものを失いそうな気がする。

わたしはテルドリンにいったいどのようなように答えようか考えあぐねた。彼が大きく息を吸ってさらに文句を言おうとしているのが分かった。しかし、わたしたちはそこで数人の村人とすれ違った。「ああ、あれがヤギ泥棒か」「ウインターホールド大学のアーチメイジなんだってよ」「隣のは専属の殺し屋なんだって」などと囁いていた。驚いたことに、わたしがアーチメイジだということは既に周知されているらしい。宿屋の息子のエリクあたりが広めたのだろうか。もはやわたしだけの問題ではなくなってしまったようだ。

「選択肢はなくなったね」

わたしは苦笑いした。テルドリンが兜の中で渋面を作っているのが容易に感じ取れた。

|||||

空の端が燃える炎の色に変わり始めた頃、背の低い草原の中をグロクとおぼしき巨人がヤギを連れて歩いているのに遭遇した。いや、正確に言うと、あてどなく草原をうろつくヤギを巨人が監視しているようだ。



わたしたちは近くの岩陰に隠れた。

「こちらには気づいていない。奇襲すれば有利に戦える」

テルドリンが早速両手に魔力を蓄え始めた。

「待って。わたしはあの巨人と一度取引してるはず。だから交渉できるかも」

そう言うと、テルドリンは苛立たしげに声のトーンを上げた。

「おい、また酔っ払ってるのか？ こないだのお前は運が良かったんだ。今出ていけばミンチにされるぞ」

「試してみるだけだよ。まずいと思ったら逃げるから、そのときに攻撃を始めて。わたしが囷になっていればテルドリンには向かってこないでしょう」

「……………勝手にしろ」

わたしは苦々しげな雰囲気を漂わせるテルドリンを岩陰に残し、忍び歩きで巨人に近づき始めた。

本当のところは、無闇な殺生をしたくないのだ。巨人は問答無用で襲いかかってくる獣とは違い、ある程度の意味疎通はできる、らしい。少なくとも記憶にないわたしはやってのけた。話を通じるなら穏便に事を進めたい。それに、テルドリンの鎧や剣を血塗れにするのも避けたい。彼はわたしの護衛として雇っているのであり、殺し屋ではない。——もつとも、そんな思想を口に出そうものなら、スカイリムでは偽善者呼ばわりされてしまうだろうけど。

わたしは意を決してグロクの前に躍り出た。グロクの図体はわたしを縦に三倍、横に二倍したくらいはあるだろう。巨人はわたしをじろりと見下ろして、手に持っている骨の棍棒を振り上げた。

大丈夫だ、と自分に言い聞かせた。もしいきなり攻撃を仕掛けられなくても、避けることに関しては達人だ。スカイリムでは、身のこなしの軽さで生き延びてきたようなものなのだから。

棍棒は振り下ろされなかった。グロクはわたしがヤギを売りにきた小人族だと気づいたらしい。棍棒を掲げたまま、わたしの出方を窺っている。やはりエニスは嘘をついていなかった。

わたしは大きさに両手を広げてグロクに笑いかけた。

「こんばんはグロク！ このあいだはグレダを買い取ってくれてありがとう。でも非常に申し訳ないんだけど、事情が変わってしまったんです。お金を返すからグレダも返してくれませんか？」

グロクが棍棒を頭上でぶんぶん振り回した。怒っているらしい。あれを叩きつけられたらひとたまりもないだろう。全身に鳥肌が立った。

「グロクはマンモスも飼ってるでしょう？ その上ヤギも飼うなんてことになるよ、ちよつと負担が大きいんじゃないでしょうか。それにほら、グレダはいかにも逃げたがってるし。見張っている方がかえって手間ですよ」

わたしは平静を装った声を絞り出しながら、金の詰まった袋をグロクに差し出した。二百ゴールドくらいで足りるだろうか。

グロクはわたしにぬつと顔を近づけ、武器を持っていない方の手で袋を取り上げた。すえた肉と毛皮の匂いがあたりに充満する。グロクは重さを確かめるように何度かじやらじやら袋を上げたり下げたりした。それから袋を地面に置いて、人差し指をすつと一本立てた。「もう一つ欲しいんですか？ いいですよ、ちよつと待っててくださいね」

グロクがわたしに支払った正確な金額は分からない。わたしがマルカルスへ行くまでにどこかへ落としてしまったからだ。羊一頭に四百ゴールドは高いが、違約金ということなのかもしれない。

わたしはナツプザツクの中からもう二百ゴールドを集め、袋に詰めてグロクに渡した。グロクは慎重に袋の重さを確かめた後、棍棒をゆつくりと下ろした。

「返してくれるんですか？」

恐る恐る尋ねると、グロクは大きな手でグレダをこちらへ押し出した。

「ありがとう、グロク！」

わたしはグロクを見据えたままそろそろと後ずさった。グレダがわたしの横を無邪気についてくる。巨人はしばらくヤギを目で追っていたが、やがてゴールドの袋を拾ってこちらに背中を向け、夜の帳

が降りつつある草原へ消えた。

自然と安堵の溜め息が出た。

「怪我はないか？」

テルドリンが駆け寄ってきて聞いた。一部始終を見ていたのなら分かりそうなものだが。

「大丈夫」

それでも、喉から出た声は、緊張が緩んだからなのか情けないくらい震えていた。

「もう、また父さんみたいな心配の仕方はやめてよ」

誤魔化すために軽口を叩いた。テルドリンは何かを掴もうとするかのようにこちらに手を伸ばしたが、すぐに引っ込めた。

「父さんじゃないと言っているだろう」

やはり父親呼ばわりは気に食わないらしい。

「ねえ、それよりも、巨人がちゃんとこつちの話を聞いてくれたよ。ゴールドも受け取ってくれたよ。巨人も懸賞金をかけられるような凶暴なやつばかりじゃないんだ」

襲われる危険が完全になくなったと分かると、わたしはにわかに興奮した。もしかして、巨人とも商取引ができるのではないだろうか？ それを実現できたらわたしは、商人として唯一無二の強みを持てるかもしれない。

テルドリンは一瞬間を置いてから、不意にくつくつと笑い声を上げた。わたしはぎよつとした。あまりに非常識なことをやったから、呆れられてしまったのだろうか。

幸い、そういうことではなさそうだった。テルドリンはひとしきり笑った後で答えた。

「ああ。その通りだな。私は狩るべき対象としての巨人しか見たことがなかったが、お前のようなやり方もあるんだな。やはりお前と一緒にいると退屈しない」

少しくすぐったい気分になった。こんなふうにあけっぴろげに褒められるのは久しぶりだ。マルカルスで再会してからこのかた、テルドリンは何かとわたしに手厳しかった。

テルドリンは続けて言った。

「これまであまり乗り気でなくて悪かった。私は、お前のことが、その……先達として心配だったんだ。だがここまで来たら、最後まで付き合ってやろうじゃないか」

|||||

翌朝ヤギのグレダをロリクステッドに連れて帰ると、エニスはわたしがかつてした仕打ちが申し訳なくなるほど彼女の帰還を喜んだ。まさか取り戻してくるなんて！ 八大神よ、感謝します！ とまで言われた。もしかして、わたしは逃げるか死ぬかすると思われていたのだろうか。

エニスによると、わたしはマルカルスのデイベラ神殿に到着する前日、つまりバナード・メアから姿を消して三日目に、ロリクステッドに一人でやってきたらしい。ひどく酔っ払っていて、グレダの面倒を見るために家の外に出ていたエニスにたちの悪い絡み方をした。エニスにとってはわたしの話すことのほとんどが支離滅裂で理解できなかったが、唯一明確に聞き取れた情報は、わたしがホワイトランのイソルダに借りを作った、というものだった。その直後に、わたしはグレダを盗み出したという。

バナード・メアから出た直後に何かやらかして、借金でも作ったのだろうか。イソルダはわたしの商売仲間の一人で大切な友人で、しかしかなり計算高い。内容によっては一生こき使われかねない。早いところ、何をしてしまったのか確かめなければ。

しかし、ロリクステッドからたった一日でマルカルスに辿り着くなどということが果たして可能なものだろうか？

#### 4. ウイツチミスト・グローブ

ロリクステッドからさらに三日ほどでホワイトランに到着した。目的の人物は市場を訪ねるとすぐに見つかった。

イソルダは果物商の女性からリングを買っているところだった。買い物を終え、リングをかごに入れた彼女に横から声をかけると、彼女はびよんと跳び上がった。

「ああ、びつくりした！ もう帰ってきたの。しばらくゆつくりしてくるか——」

言い終わらないうちに、彼女はわたしの後ろで腕組みをしているテルドリンを見つけた。

「あら、彼も一緒なのね！」

イソルダはぱあつと顔を輝かせた。

「ハネムーンの途中？ わざわざ立ち寄ってくれるなんて嬉しいわ。おめでとう、ふたりとも」

……ハネムーン？

「なんだか反応が薄いわね。分かった、恥ずかしいのでしよう。でも胸を張らなきゃダメよ、あなたたちはついに永遠の愛を誓い合って結婚したのだから」

「け、結婚?!」

わたしとテルドリンは同時に叫んだ。噛むところまでそっくり同じだった。周りにいた市民たちが何か面白いものでも見つけたような表情でわたしたちの方を振り向いた。

顔にさつと血が上るのを感じた。わたしはテルドリンにつかみかかるような勢いで質問を浴びせた。

「ちよつと待って。テルドリン、わたし、意識を失っている間にあなたと結婚した!?!」

テルドリンもかなり動揺しているらしく、上ずった声で答えた。

「まさか！ 呑気にグースカ眠っているお前を私が看病していただけだ。だいたい、お前がそんな、そんなことを私に望むはずがない」

「そうだよね!! ありえないよね!! わたしがテルドリンと、け、け、

結婚なんて」

「ああそうだ、オブリビオンの門が開いてもありえない！ 私はただの従者だ。それ以上のことなど私には……」

イソルダはぼかんと口を開けている。市場にいた他の人々には痴話喧嘩と思われたようで、「新婚であそこまで仲が悪いとは」「先が思いやられるな」「さっさとお前らのマイホームに帰れ」などと野次を飛ばされている。

「イソルダ！ ちょっと話を聞かせてもらってもいい!?!」

わたしはイソルダの腕をぐいと掴んで、有無を言わさず市場の外へ連れ出した。

|||||

結論から言うと、原因はわたしだった。

これまでもさんざん述べた通り、わたしにはバナード・メアからマルカルのデイベラ神殿へ至るまでの記憶が全くないのだが、わたしはバナード・メアを出た後、イソルダの家を訪ね、指輪をツケで買ったらしい。テルドリンに告白したときに渡す婚約指輪にするために。

酔っ払っていたとはいえ、そのような突拍子もない言動を取るに至ったことが信じられない。テルドリンが受け入れてくれるはずがないではないか。わたしだって彼のことは……せいぜい父親のようにしか思っていない。全部サムのせいだ。きつとそうだ。

「ええ？ あれはただの酔っ払いのたわごとだったってこと?」

事情を簡単に説明すると、イソルダがぐさつとくるような一言を放った。わたしはしゅんと頭を垂れた。

「そういうことだね」

「じゃあ、あなたたちはまだ結婚してないの?」

「まだ、ではない。これから、その予定は、ない」

テルドリンはえらく一語一句を強調した。それもまた、わたしの心にぐさぐさと突き刺さった。

「そうなの……。それじゃあ、わたしがツケで売った指輪はどこ?」

うちの商品なのだから、返してもらわなきゃならないわ」

なぜかしんみりした調子でイソルダが言う。嫌な予感がした。わたしは自分のナツプザックを漁った。見つからない。念のため両手を眺めてみても、はまっているのは魔力上昇の付呪をしてある指輪だけだ。

わたしは手もみしながらイソルダに聞いた。

「あ、あのさ、わたしが指輪も作れるの、知ってるよね？ それを代わりに納めてもらうというのはどう？」

「ダメ。あれはリフテンのマデシという有名な職人が作ったものなの。あなたみたいな駆け出しの作品とはわけが違うわ。あれを返してくれなきゃダメ」

「じゃあ、弁償するのは？」

「二つとない指輪なのよ。あなたから頼まれなければ、本当はもつとすごい高値をつけて売るつもりでいたの。あなた、そんなお金があるの？」

泣きたい気分だ。どこへ行ったか分からない指輪を探すなんて、世界のノドから爪の先ほどの大きさの氷の結晶を見つけ出すようなものだ。

わたしはしつこく食い下がった。

「でも、どこにあるかも全く心当たりがないんだ。わたしがイソルダから指輪をもらったとき、何か言っただけじゃなかった？」

イソルダは首を傾げた。

「そうねえ。ああ、確か、イーストマーチにあるウィッチミスト・グローブという場所で告白すると言ってたわよ。あなたがテルドリンと初めて会ったのもそこだったのよね？ とってもロマンチックな出会い方でしたのですってね」

何を口走ったんだ、この酔っ払いは。わたしは過去の自分に憤慨した。全然事実と異なるじゃないか。第一、ウィッチミスト・グローブなんて聞いたこともない。どこからそんな名前が出てきたのか。

「出会ったのと同じ場所で告白しようだなんて、あなたも案外キザなのね。テルドリンが羨ましくなっちゃった」

イソルダがなんだか楽しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「分かった。とりあえずそのウィッチミスト・グローブとかいうところを探してくる」

わたしは早々に出発することにした。これ以上イソルダの話を聞いていると顔から火が噴き出そうだったからだ。

|||||

道中は非常に気まずかった。

いつもはペラペラとよく喋るテルドリンが終始押し黙っていた。その隣を歩くわたしも、時折薬の材料になりそうなものを見つけて待ったをかける他は、全くの無言だった。

隣を歩いているとは言ったものの、わたしたちは普段と比べると異様に距離を空けていた。まるで何かの拍子に互いの体に触れてしまうのを恐れているかのようだった。

何日か野宿をして歩き続け、道沿いにあつた小さな村で聞き込みをしてウィッチミスト・グローブの場所を突き止めた頃、わたしはついにこの重苦しい行軍に耐えきれなくなった。

村を出て少ししてからわたしは立ち止まった。

「あ、あのさあ、テルドリン?」

人間十人分ほどは離れたところにいるテルドリンに声をかけると、彼は無言でこちらに顔を向けた。無表情なキチンの兜がわたしを見据えている。気圧されたが、わたしは勇気を振り絞って彼に歩み寄った。

「あなたも分かっているだろうけど、わたしはあの数日間おかしかったです。だから本当は思ってもいないことを言ったりやったりした。テルドリンに、きゅ、求婚したいなんて、普段から考えていたわけじゃない」

「……………」

沈黙がづらい。でもこの空気はなんとかしなければ。このままだと最悪、朝起きたらテルドリンがいなかった、なんてことになりかね



ない。

「きつとサムに吹き込まれたんだ。あの従者と結婚したらどうかかって。わたしはその言葉に一時的に惑わされただけで」

話しているうちに、なんだか胸のあたりがモヤモヤしてきた。なぜだろう。わたしは間違ったことは言っていないはずなのに。

「つまりね。わたしがあなたに変な気を起こしてるんじゃないかって心配はしなくて大丈夫だよ、テルドリン。わたしはもう、平気だから」わたしはキチンの兜に向かって努めて明るく笑いかけた。言い終える頃には、心臓に重りがついたみたいに胸が苦しくなっていたが、気にしないことにした。

「……そうか」

テルドリンのざらついた声を久しぶりに聞いた。

「私は初めから心配などしていなかったよ。お前に変な気を起こさせたとところで、返り討ちにできるしな」

憎まれ口を叩かれるのも久しぶりだ。この様子だと、彼がホワイトランからずっと黙りこくっていたのも、わたしへの気遣いだったのだろうか？ きつとそうなのだろう。年上の余裕というやつだ。

わたしは、返り討ちとは失礼な、とふざけて怒るふりをした。それからウイッチミスト・グローブまでの間は、いつものわたしたちに戻れた。

|||||

ウイッチミスト・グローブは、到底愛の告白をするとか、ロマンチックな出会い方をするとかいったイメージには似つかわしくない場所だった。

森の中にぼろ屋が一軒建っている。その周りを囲むように、先端を鋭利に尖らせた太い杭が乱雑に突き立てられている。ぼろ屋の敷地内と思わしき範囲には、ところどころ血溜まりができています。しかも、近くの地面から吹き出す熱くむしむしした蒸気が霧のように一帯を覆っている。一言で表すと、不気味だ。

「こんなところで愛の告白をするなんて、どうしたら考えつくんだ？ ソルスセイムのアッシュスポーンだらけの廃城の方がまだマシだ」  
テルドリンがやれやれというように首を横に振った。言い返すこともできず、わたしは赤面した。こんな場所で告白したら受け入れてもらえるどころか、怪しげな魔術の犠牲にされてしまうのではと恐れられ、殺されるのがオチだ。

「とりあえずあの家の中を探してみる。指輪が落ちていればいいんだけど」

わたしは敷地内に足を踏み入れ、ぼろ屋に近づいた。てつきり空き家だとばかり思っていたのだが、中からゼイゼイとせわしない息遣いが聞こえ、突然、黒い影が飛び出してきた。

「ダーリン！ 待っていたよう、帰ってくるのを！」

怖気の走るようなだみ声が響きわたった。

わたしは、一羽のハグレイヴンにべったりしがみつかれている。どうやら今の声はこのハグレイヴンが出したらしい。

ハグレイヴンって人間の言葉も喋るんだ。そうか、元人間だから当たり前か。思考停止してからまず浮かんできたのは、そんな、他のもつと目に見えて深刻な問題に比べれば至極どうでもいい感想だった。

「さあ、早く家の中にお入りよ。そして約束していたように愛を実らせようじゃないの、情熱的な臥所の中で」

わたしはハグレイヴンのこの一言で、ようやくこれが普通の状況ではないことを認識し、悲鳴を上げて彼女(?)を振りほどいた。彼女はぼろ屋の前に放り出され、しわだらけの顔に怪訝そうな表情を浮かべた。

わたしは震える口を無理に動かして尋ねた。

「ど、どういうこと？ わたしはここに指輪を探しにきただけ。あなたにダーリンなんて呼ばれる覚えはない」

ハグレイヴンは黒い小さな目を見開いた。

「嘘だ！ あの夜のこと、あたしはまだ覚えてるよ。ダーリンはあたしに愛の言葉を囁いて、この指輪をくれたんだ。誓いの印だと言って

ね」

ハグレイヴンがよろめきつつ立ち上がり、わたしに骨張った左手を見せつけた。その薬指には金色の指輪がはまっている。優美な文様の彫られた、つややかな光沢のある指輪だ。あれは、わたしがイソルダから受け取ったものに違いない。何をどうしたら見知らぬハグレイヴンに渡すことになってしまうのか。

衝撃のあまり何も言えずにいると、彼女は顔に刻まれたしわを醜悪に歪め、まくし立てた。

「さてはエスメラルダにたぶらかされたね!? あの子は売女め。ダーリンはあたしのものだ。エスメラルダなんかは渡すくらいなら——」

ハグレイヴンは腕を振り上げた。

「あたしが殺す！」

ハグレイヴンの両手に魔力が集まる。

この距離からでは避けられない、魔力の壁を発動させている時間もない。そう思つて慄然としたとき、背後から脇をかすめて火の玉が飛んできた。それはハグレイヴンの腹部に直撃し、その小さな痩せた身体をぼろ屋の中へ吹っ飛ばした。

彼女は耳障りな悲鳴を上げて板の間を転げ回っている。テルドリンが後ろから走ってきて、わたしを突き飛ばすようにぼろ屋の入り口に立ち、すらりと剣を抜いた。

「待って、テルドリン！」

わたしは咄嗟にテルドリンの背中に向かって叫んだ。テルドリンはハグレイヴンから目を離さずに言った。

「何を待てる?! こいつはお前を殺そうとした。危険だ。とどめを刺さなければ」

「確かにそうだけど、元はといえばわたしが悪いんだよ。わたしが酔つて指輪を渡しちやっただから」

ハグレイヴンの身体からは既に火が消えているようだ。彼女は怯えた表情でテルドリンを見上げている。わたしはテルドリンを押しつけてぼろ屋に踏み込んだ。

ハグレイヴンは継り付くような目をわたしに向けた。こうして眺

めてみると、思いの外、理性的な表情をしている。老婆のように恐ろしくしわくちゃだが、見慣れてしまえばどうということもない。それに彼女は人間の言葉を喋れるのだ。ロリクステッドで出会った巨人のグロクと同様、決して意思疎通のできない敵などではない。

「わたしは、結婚するって約束したんだよね？」

静かに聞くと、ハグレイヴンは頷いた。彼女は左手の薬指を大事そうにぎゅっと握りしめた。その小さな動作から、彼女は心からわたしのことを好きなのだと分かった。ロリクステッドと同じで、全てはわたしの過ちから始まったことだ。その気持ちに応えないわけにはいかない。

「さっきは取り乱してごめん。わたし、約束を果たすよ」

わたしはハグレイヴンに右手を差し出した。彼女はわたしの手を取って立ち上がった。痩せているせいか、それとも半ば鳥のような身体になっているせいか、彼女は驚くほど軽かった。

そうだ、テルドリンにはとりあえず遠くの方で待っていてもらわなうといけない。というか、雰囲気を感じて出ていってくれないだろうか。

後ろからガタツと何かが落ちる音がした。やはり直接伝えないとダメかもしれない。わたしはハグレイヴンの手を離して振り返った。

一瞬ののち、わたしは火山灰の匂いのするキッチンの腕に両肩を掴まれていた。テルドリンの、蛇のような刺青の入った灰色の素顔がわたしの前にある。赤い両目がぼろ屋の薄暗がりの中でうつすらと光を帯びて見える。足下にキッチンの兜が転がっている。いつの間に兜を外した？ どうして彼はわたしを捕まえている？ 呑気に考えているうちに彼の顔がわたしに近づいてきて、唇を塞がれた。

彼の唇は薄くて熱っぽかった。彼は舌でわたしの唇をこじ開けるとわたしの舌を絡め取った。わたしは顔を左右に振って抵抗したが、無意味だった。少し離れても、すぐにむしゃぶりつかれた。暴れているうちに、キッチンの鎧とわたしの身体が密着した。鎧の下の筋肉が張り詰めているのが分かった。彼は片腕をわたしの頭の後ろに、もう片腕を腰に移動させて押さえ、わたしの口内をさらに奥深く責め立て

た。わたしはたまらず声にならない声を上げた。全身を得体の知れない心地良い痺れが襲い、がくんと力が抜けた。テルドリンは腰に回した腕の力を強めてわたしの体を支え、しばらく水音を立てながらわたしの蹂躪していたが、最後にわたしの唾液を全て奪おうとするかのように食欲に口内を吸って、唇を離した。そして、わたしの顔を自分の肩に押しつけるようにして引き寄せた。

何度か荒い呼吸をすると痺れは取れたが、指一本たりとも動かさなかった。先ほどのあの瞬間のえもいわれぬ快感が、まだどこかに残っている。それをテルドリンに気づかれて刺激されたらどうにかなってしまいそうで、このまま動けないふりをしておくのが得策のように思われた。

テルドリンはやがてわたしを解放した。わたしは彼の体温が離れていくのをとても切なく感じた。テルドリンは、初めて見る表情をしていた。眉を下げ、両眼を潤ませ、唇を何か言いたげにわずかに開けている。それがどのような感情を表したもののなか、わたしが考えをまとめられないうちに、ギャーツという断末魔の叫びのようなものが耳をつんざいた。

「うわああああん!! ダーリンが、あたしの目の前でええ! 暴力男とキスしたああああ!!」

先ほど約束を果たすと伝えただけのハグレイヴンが、その場にしゃがみこんでわんわんと泣き喚いている。まずい。わたしは結婚相手の前でなんてことを。

テルドリンが、どんと床を踏み鳴らした。ハグレイヴンは肩を震わせて、涙と鼻水まみれの顔を彼に向けた。

テルドリンは赤い目を細めて口の端を不機嫌そうに曲げ、苛立たしげに腕組みをした。モヒカンと刺青も相まって、ならず者の親玉のような雰囲気醸し出している。

「いいか、ハグレイヴン。こいつとは私が先に結婚していたんだ。酔っ払って正気を失いあることないこと喋ったようだが、その事実が変わらん。貴様とこいつは結婚できない」

テルドリンはわたしに視線を移して、な、そうだろ? と同意を求

めてきた。わたしは大変混乱した。テルドリンは何を言っている？  
わたしが彼と結婚したというのは、わたしのたわごを聞いたイソ  
ルダの早とちりだった。実際にわたしが求婚したのはこの哀れなハ  
グレイヴンなのだ。

テルドリンは深い溜め息をついた。それからわたしの肩を掴み、も  
う一度さつきと同じように顔を寄せてきた。わたしは彼がその瞬間  
に浮かべた危険なほど甘い表情に魅せられて動けなくなって――。

「う、裏切り者！ ダーリンの馬鹿っ！ ううん、もうあんたなんか  
ダーリンじゃないっ!!」

ハグレイヴンが指輪を外してわたしの顔面に投げつけた。それは  
わたしの頬を直撃し、慌てて広げた掌の中に収まった。

彼女の攻撃はそれで終わらず、ぼろ屋の中のあらゆるものを投げつ  
けてきた。散らばっていた動物の骨、ナイフ、腐った板の切れ端、獣  
臭いベッド……わたしとテルドリンは全速力でウィッチミスト・グ  
ローブを脱出した。

|||||

だいぶ遠くまでやってくると、あのぼろ屋のあった方角から叫び声  
や泣き声がかすかに聞こえるだけになった。

わたしは隣を走っているテルドリンを盗み見た。いつの間にかキ  
チンの兜を被り直している。

「ここまで来ればもういいだろう」

テルドリンが言った。わたしは返事をする代わりに徐々に走る速  
度を緩め、立ち止まった。さすがに息が乱れている。蒸し暑い中を  
走ってきたから余分な汗もかいている。少し休憩してから歩き出そ  
う。

ナツプザックから取り出した布で汗を拭っていると、不意にぼろ屋  
での一件が脳裏に蘇った。顔がパン焼き釜の真ん前に立っているみ  
たいに火照った。

わたしは、腕組みをしてわたしを待っていたテルドリンに話しかけ

た。

「さつきはなぜあんなことを？」

彼は組んだままの指先をぴくりと動かした。それから長いこと微動だにせず黙りこくってから、押し殺した声で答えた。

「お前がああハグレイヴンと結婚するなど馬鹿なことを言い出すから。阻止するためには、ああするしかなかった」

ああする、のところで、わたしはまた一連の行為のことを思い出してしまった。わたしはテルドリンから顔を背けた。

「ば、馬鹿なことじゃないよ。誰も試してないだけで、実際は結婚できるかもしれないじゃない。いい人そうだったし」

テルドリンは苛立ったように声のトーンを上げた。

「いい人？ あれは化け物だ。まともに関われる相手ではない」

「そう思うなら、まわりくどいことをせずに攻撃すればよかったのに」「そうしたらお前は怒るだろう？」

確かに、そうだ。なるほど、彼はわたしがどのような方針でスカイリムを旅しているか、グロクのことでもあつて理解したのだろう。だからわざわざ穏便に済ませようと努力してくれた。

よく考えたら、見知らぬ相手といきなり関係を持って、生活や価値観の違いから不仲になりかねない。ただでさえハグレイヴンはわたしたちとは根本的に違う生き物だ。問題が生じる可能性は非常に高い。テルドリンはわたしが感情に流されて誤った選択をするのを止めてくれたのだ。

「ありがとう。わたしのやり方に合わせてくれたんだね。でも、その、好きでもないのに、嫌だったでしょ」

わたしは顔を背けたまま言った。さすがに今正面から向き合う勇氣はない。

「……お前こそ、嫌ではなかったのか？」

逆に問われて、答えに窮した。嫌ではない。そう、彼とああいうことをするのは決して嫌ではない。むしろ……。

「テルドリンって上手いんだね！ 久しぶりだったけど、すごくよかったよ。やっぱり長生きすると経験豊富になるものなの？」

わたしは話を逸らした。素直な気持ちを伝えてしまったら、彼がこの場で契約を解除して消えてしまってもおかしくないと思った。そんなのは絶対に嫌だ。わたしは彼を手放したくない。それは——彼が優秀な戦士で、物知りで、お喋りで、一緒に旅をするのが楽しいからだ。

テルドリンはまた少し黙り込んだ。だが次に口を開いたときには、急にいつも通りの陽気な口調に戻っていた。

「ハハハ、そうだな、二百年以上もこの世にいれば多少の経験はある。いや、実際人間や獣人がどんなに頑張ろうが、エルフのテクニクには敵わないだろうよ。飽きてくるから色々試すんだ。例えばアルトマーなんかは——」

上品とは言えない豆知識を共有しながら、わたしたちはどちらともなく歩き始めた。わたしは、わたし自身には全く役立たないテルドリンの無駄話の登場人物に対しどす黒い感情を抱いた。

|||||

ホワイトランに着いたのはそれから四日後の夕方だった。イソルダの家を訪ねて戸口で指輪を渡すと、まさか本当に見つけてくるとは思わなかった、とロリクステッドのエニクと同じようなことを言った。彼女のことだから、指輪が見つからなくてへろへろになって戻ってきたわたしに、他の要求もついでに上乘せしようと思っていたのではないだろうか。

イソルダはわたしの後ろで鼻歌を歌っているテルドリンをちらつと見て、ちよつと来て、とわたしだけを家の中に招き入れた。テルドリンが背後で、おい、どうした？　と言っているのが聞こえた。

「テルドリンと何かあった？」

イソルダはなぜか真剣な面持ちで尋ねた。わたしは、いや、特に何も、と視線を泳がせた。そう、何もなかった。少なくとも彼はわたしのことをなんとも思っていない。だからあのことは数に数えなくていい。



「ふうん、そう……。ああほら、出ていくときは険悪だったでしょう？  
仲直りしたみたいでよかったと思っただのよ」

イソルダは、計算高い彼女に似つかわしくない聖母のような微笑みを浮かべた。もしかして、わたしはバナード・メアから出た後、まだ何か彼女にやらかしていたのか？ 次は何をふっかけてくる気だ？

内心、戦々恐々とした。

イソルダは、ふと考え込むような表情になったあと、ぽんと手を叩いた。

「そういえば、あなたたちが帰ってきたら伝えようと思っていたことがあるの」

「な、何？」

できうる限りの心の準備をしてわたしは聞いた。返ってきたのは意外な答えだった。

「あなた、テルドリンとの結婚披露宴はイーストマーチのモルヴンスカーという場所でやるって言っていたわよ。なんでも、特製の魔法の杖で彼や招待客を驚かせるとか豪語していたわ。もしかしたら、そこにも何か置き忘れてきたのではないの？」

魔法の杖。そうか、指輪騒ぎですっかり忘れていた。わたしはサムと、彼がくれると言っていた魔法の杖を追っていたのだ。ここに来てついに手掛かりがつかめた。それすなわち、ようやくこの奇妙な旅の終わりが見えてきたということだ。

それにしても、たった四日間でイーストマーチとホワイトランの間を何度も行き来し、さらにマルカルスまで行くなど、常人にはまず不可能だ。なんらかの特殊な力が働いていたことは間違いない。その正体を確かめるためにも必ずサムと杖を見つけ出そう、とわたしは決意した。

## 5. モルヴンスカー ― 霧の森

三日後の昼過ぎ、わたしたちはモルヴンスカーを近くの大岩の陰から観察していた。

「あれが披露宴の会場だつて？ 傑作だな」

テルドリンが言った。兜の下で笑っているに違いない。わたしは改めて、酔っ払った自分の馬鹿さ加減に恥じ入った。

モルヴンスカーは朽ちた城塞跡だった。剥がれ落ちた壁やぼうぼうに伸びた雑草が景観も足下も悪くしており、黒いローブを着た魔術師が五人ほど城塞の上や入り口をうろうろしているのが見える。どう考えても披露宴にはふさわしくない。

わたしが独りで正面から近づいていくと、挨拶代わりにアイスジャベリンとファイアボールが数発飛んできた。わたしはそれらを魔力の壁で無効化し、お返しに鎮静の魔法を数発放った。鎮静の魔法は一番近い位置にいた一人に奇跡的に当たるも、一人には当たったのに効果がなく、三人からは大きく逸れた。残った四人はもう一発ずつ攻撃魔法を撃ち出しつつ、オブリーブオンから精霊を呼び出そうとしている。わたしは攻撃魔法を横に跳躍して避けながら眺めた――彼らを剣の柄で次々に殴り、気絶させるテルドリンの姿を。彼にはわたしが正面で敵を引き付けている間、側面の崩れた部分から城塞跡によじ登ってもらったのだ。

城塞跡の外側部分はすっかり静かになった。テルドリンには気絶した魔術師の両手を彼らの身体の後ろできつく縛り、そのままの場所に横たえてもらった。わたしは鎮静の魔法のかかった残りの一人に尋ねた。サムという男や、不思議な魔法の杖のことを知らないかと。

魔術師は首を横に振った。わたしたちは仕方なく、城塞内部の大きな構造と敵の位置を聞き出した後で、彼も気絶させて忍び込むことにした。

城塞の中は薄暗く、何十年も掃除していないなそうな埃っぽい匂いが漂っている。出入り口付近に人の気配はない。少し遠くから鍛冶仕事でもしているらしいカンカンという音がするくらいだ。右手に階

段が見える。先ほどの魔術師から聞いた、城塞の地下部分に降りる階段だろう。わたしはテルドリンと一緒に忍び足で近づき、そろそろと降りていった。下にあった扉を音を立てないように開けると、人気のない細い通路に出た。通路はすぐに左手に曲がった。その先は一直線に長く続き、また左へ曲がるようだった。壁に燭台がついていたり通路の隅に火が焚いてあったりするおかげで、上階よりは全体が明るい。

わたしはほっと一息ついた。こんなところに隠れているくらいだからろくなことをしていないと分かりきつていはいえ、討伐命令も出ていないのに彼らの住処に侵入するのは気が引ける。このまもうまいこと戦わずにサムだけを見つけ出せるといいのだが。

忍び足のまま通路をゆつくり進んでいくうちに、何やら視界が白くかすみ始めた。疲れて目がおかしくなっているのかと思いきすつても変化はない。自分の目ではなく、周りがおかしくなっていると気づいたのはしばらく経ってからだった。

わたしはいつの間にか濃い霧に包まれていた。自分の手さえ少し離すと分からなくなるほどで、さつきまでであった石造りの壁や燭台の明かりも見えなくなっている。わたしは背筋が寒くなって忍び足をやめ、後ろを振り返った。ついてきているはずのテルドリンの姿がなかった。

「テルドリン！ どこ？」

敵に聞こえてしまうかもしれないことも忘れて叫んだ。すぐに、ここだ、と返事が返ってきた。しかし、どの方角から聞こえてきたか皆目見当が付かない。それどころか、自分が先ほどまでどの方角に向かって進んでいたのかも分からない。わたしは両腕を前後左右へ伸ばした。腕をいっぱいまで広げたら両手が壁につきそうなくらい細い通路にいたはずなのに、何も感触がない。そばにいたはずのテルドリンも、気配さえ感じられない。

こんな幻惑魔法は聞いたことがない。この城塞跡の魔術師たちがこれほどまでに高度な魔法を使えるのなら勝ち目はない。ここで死ぬのか？ わたしは恐怖で震えながら魔力の盾を発動させた。ただ

では死なない。せめてテルドリンには逃げてもらわなければ――。

不意に、左手からジャリジャリと土を踏んで誰かが近づいてくるような音がして、霧の中からぬっとキッチン装備を着けた腕が一本出てきた。腕は何度か空を搔いた後でわたしの左肩を掴んで引き寄せた。目の前に全身をキッチン装備で固めた人物が立っていた。

「テルドリン？」

確信が持てず、わたしは聞いた。そうだ、と紛れもない彼の声が返ってきた。一瞬ほっとして気が抜けたものの、すぐに我に返った。

「敵が攻撃してくるかもしれない。逃げないと」

「いったいどこに逃げるといふんだ？ それより、少し口を閉じて周りの状況を確かめろ」

わたしは逸る気持ちを抑えて、テルドリンに言われた通り黙って耳を澄ませた。さらさらと水の流れる音と、木の葉のこすれる音が周囲から聞こえる。鼻の中に流れ込むのはみずみずしい土と草の匂い。……わたしたちは打ち捨てられた城塞の中にいたのではなかったか？

「どういうわけか、別の空間に入り込んでしまったようだ。しばらくじっとしていた方がいいんじゃないか？ この妙な霧が晴れてくれるかもしれない」

テルドリンの提案にわたしは頷いた。幸い、わたしたちの他に人の気配はない。下手に動くのも危険だ。

わたしたちはそのまま待機することにした。テルドリンの右手はわたしの左肩に置かれたままだ。万一にでもはぐれないようにと思っているのだろう。だがテルドリンの手の温かさがウイツチミスト・グローブでの一件を思い起こさせ、こんなときにも関わらず恥ずかしくなった。

わたしは思いきつて、テルドリンの腕に沿わせるようにしてわたしの左手を彼の右肘に添えた。彼はびくりと震えたが、振りほどきはしなかった。

「早く晴れるといいね」

心の奥底で感じたのとは正反対のことをわたしは呟いた。

|||||

腕が痺れてきた頃を見計らったように、霧が若干薄くなった。

わたしたちは、低木の森の中の少し開けたところに立っていた。まばらな石畳が足下から前方に向かって敷かれている。その先には小川が数本流れており、それぞれ上に石製の橋が架かっている。さらに奥にも石畳の敷かれた道が、鬱蒼と茂る低木に囲まれて続いている。少し薄暗いが、道のところどころにランタンが掛けられ、また木立の中に蛍の光が舞っているおかげで難なく見通すことができた。

頭上を見上げても霧のせいで空の様子は分からない。しかしおそらく今は夜なのだろう。そしてあの城塞跡とは明らかに別の場所だ。

「行くう」

わたしは言った。テルドリンがわたしの肩から手を離したので、わたしの手も自然と彼の腕から離れる形になった。わたしはそこはかとない名残惜しさを感じた。

道はいくつかの小川を挟みながらわたしたちを森の奥へと導いた。やがて、大勢の人間が楽しそうに喋っているようなざわめきが聞こえてきたかと思うと、明るい光が目飛び込んできた。

そこはドラゴンズリーチの謁見の間ほどの大きさのある、木立に囲まれた広場だった。木立の枝と枝を結ぶ紐に掛けられたたくさんのランタンによって、全体がまばゆく照らされている。広場には何列にもわたってテーブルが並び、老若男女さまざまな人々が端から端まで欠けることなく席についている。彼らはジョッキを傾け、目の前の豪華な料理をつまみながら、ひっきりなしに隣近所の人たちと頭を寄せて話をしてゲラゲラ笑っている。まるでどこかの大きな村の祭りのようだ。

わたしはテルドリンと顔を見合わせた。ここが終着点、だろうか。

「おうー！ あんたかあ！ もう戻ってこないんじゃないかと思つたぞお」

聞き覚えのある声がした。わたしたちの一番近くに座っていた男

が席を立ち、こちらへやってきた。紛れもなく、バナード・メアで一気飲み対決をしたサムだ。わたしとテルドリンをここの十数日振り回した張本人だ。酔っているらしく、足取りが危なっかしいうえに口調も若干怪しい。

他の者たちはわたしたちのことなど一切気にしていないようだ。サムの席にはすぐにとどこからやってきた別の男が座り、近くにいた連中と談笑し始めた。

何もかも不思議なことだらけだったが、人懐っこそうにニコニコするサムからは特に邪な意図は感じられなかったので、わたしはこの状況に関してはあえて言及しないことにした。おそらく、わたしにイーストマーチとホワイトランの間、ロリクステッドからマルカルスまでを超高速で行き来させたのと同じ力で、わたしたちはここに辿り着いたのだ。

「サム。魔法の杖を直す材料を持ってきたよ」

わたしはナツプザックから巨人のつま先、ハグレイヴンの羽、ワインを取り出してサムに渡した。マルカルスでテルドリンが拾ったサムの走り書きのうち、「聖水」だけが意味不明だったけれども、ごみの中にあつたワインがそれに該当すると信じたい。少なくとも、これらの材料を見せれば、魔法の杖とやらを拝むことはできるだろう。

サムは、おお、これこれ、などと嬉しそうに言い、地べたに座り込んだ。彼は渡した材料を地面に並べ、どこからか一本の杖を取り出した。杖は真ん中が力任せに折ったみたいに裂けて、木の皮一枚でつながつている状態だ。先端に大きな花の飾りがついている。花弁を幾重にも重ねた赤い花だ。これと同じ形状の花をソリチュードのブルー・パレスの中庭で一度だけ見たことがある。確か、バラという名前だった。

「あんたがすごい盛り上がりすぎあ、『今から手品しま〜す！』とか言ってるバキツと折っちゃうから大変だったのよ？」

バキツ、のところでサムは白目を剥いて杖を折るふりをした。もしかして、そのときのわたしがそんな顔をしていたのだろうか。信じたくない。

サムは杖の折れた部分に巨人のつま先を当て、ハグレイヴンの羽でその周りをぐるぐると巻いた。しまいにワインをその上から乱雑に振りかけた。

その瞬間、暖炉でも爆発したかのような派手な音がして、杖とサムの周りに白い煙が立ち昇った。わたしとテルドリンは素早く飛びのいたが、音だけで実際に爆発したわけではないようだった。

煙が晴れるとサムはいなかった。その代わりに、頭にヤギの角のようなもの、四本生やし、黒い派手な鎧を着た大男が杖を片手に立っていた。

「俺の真の名はサングイン。放蕩と快楽を司るデイドラ・ロードなり！」

男は雄牛の唸り声のような低く厚みのある声で宣言した。そこまですぐで大声ではないのに空気がびりびり震える。

デイドラ・ロード。オブリビオンに住んでいる邪悪な神々を指す呼称だ。サムがデイドラ・ロードだった？ 何かの冗談ではないのか。しかし、今までのことを思い返してみると納得がいく。時間や空間を自由自在に捻じ曲げるなんてことは常命の者には不可能だ。もし万一できるとしても、自身の命や魂を賭すなど、重い対価を支払うことになるだろう。そんなことが軽々しくできるのは神かそれに類する存在だけだ。

「いやあ、実に愉快だ。やはりこの杖はあんたに相応しい。心からそう思うよ」

サングインが杖を持ったまま、意外なほど優雅な足取りで近づいてきた。テルドリンが剣を抜き、腰を落として一歩前が出る。サングインは鋭い歯を剥き出して笑った。

「熱心な従者だ。主人のためならデイドラ・ロードにまで歯向かうか」「金で雇われている分、こいつが逃げるための時間稼ぎくらいはしなきゃならないさ」

テルドリンはお馴染みの憎まれ口を叩いた。普段とは違い、ごく真剣な口調で。

サングインはガハハと笑い声を上げた。

「殊勝なことだ。だが誤解してほしくはないな。俺はこの杖をあんたの主人に渡して、少し世間話をしただけだ。物騒だから剣を収めてくれないか？」

テルドリンは動かなかった。わたしが命令すると、姿勢はそのまま、渋々といった様子で剣だけを収めた。

「結構。さあ、こつちへ来るんだ」

サングインに呼びかけられて、わたしは彼に歩み寄った。正直、極度の恐怖で今にも卒倒しそうだが、命令に従わないわけにはいかない。危害を加えるつもりはないと言っているし、それがもし嘘だとしても、咎を受けるべきはテルドリンではなく、安易にサングインの術中に嵌り、ここまでのこのこ来てしまったわたしだ。

わたしはサングインから差し出された杖を受け取った。いったいどんな仕組みなのか、折れていた部分は跡形もなくきれいになっている。この現象について一瞬考え込んだわたしの頭に、サングインの手がぽんと乗った。テルドリンが剣の鞘をカチャリと言わせる音がした。

サングインの籠手はひんやりしていた。その爪先が頭に食い込んでくる気配はなかった。

「ハハハ、真面目くさった顔をして。酒を飲んで暴れていたときは別人だな」

被っていたフードを外され、頭をわしゃわしゃ撫でられた。まるで幼い子供の成長を喜ぶ親族のおじさんのような接し方だ。驚いた。デイドラ・ロードたるもの、もつと傲岸で乱暴な性格だと思っていた。「そんなにひどかったんですか？」

わたしは尋ねた。サングインが少しでも怒っているのなら謝らなければいけない。しかしサングインはむしろひたすらに上機嫌だった。

「ああ。ここでも、ニルンに戻ってからもな。内なる欲望のまま存分に踊り狂っていたよ。後始末のつけ方もなかなかイカしていたじゃないか、え？」

わたしは思いがけず狼狽した。内なる欲望とはなんのことだ。ヤ



ギ泥棒も求婚騒ぎも自分で進んで引き起こしたわけじゃない。全てはサングインにおかしな酒を飲まされ唆されたせいだ。そのはずだ。「わたしはあんなこと、本当にしたかったわけじゃ……」

いかにも言い訳めいた口調で呟いてしまった。するとサングインは意地悪そうに唇の端を上げて、わたしの頭からぱつと手を離し、大げさに両腕を広げた。

「俺はあんたをつまらん理性から解放して、あちこち動き回るのを助けてやっただけだ。ああしろこうしろと指示してはいない。全部あんたが心底やりたくてやったことだ」

わたしは唾然とした。つまり、全てはわたしが無意識下で望んでいたことなのか？

「信じられないって顔をするなよ。悪いことじゃない。おかげであるの世界は広がったんだから」

世界が広がったとは随分もつもらしいことを言ってくれる。確かに、巨人やハグレイヴンと殺し合うことなく交流ができたのは面白い経験だった。でも、わたしはヤギ泥棒などという不名誉を被りたくなかったし、イソルダに迷惑をかけたくなかった。何よりテルドリンに求婚なんて……あれは、わたしの……。

「あなたはどうしてわたしを選んだのですか？」

些細な抵抗を試みるつもりでわたしは聞いた。誰か他の人を選んでくれればよかったのに、とまでは言えなかった。

サングインは顎に手を当てた。

「初めはなぜだか俺にも分からなかった。しかしまあ、今考えてみれば——運命、かな」

「運命？」

放蕩と快樂を司る神ゆえ、ふざけた答えを返してくるのではないかと思っていた。予想外に重い言葉だった。

「あなたは面白そうな運命を背負っている。俺はそれに惹かれてあんたを選んだらしい。それをより愉快なものにするために少しちよっかいを出してやりたくてな」

その運命とは、いったいどのような類のものなのか。わたしはさら

に質問しようとした。サングインはそれを手振りで押し留めた。

「悪いがそろそろお開きの時間だ。あんたの運命の時が迫っている」

おもむろに視界に白い霧が漂い始めた。霧は森の中の宴会場を、サングインを覆い隠し、どんどん濃くなっていく。不意に両足の下の重みがなくなった。足をついていたはずの地面がなくなっている。バランスを失って体勢を崩したが、どこかにぶつかれることも下へ落ちる感覚もなく、そのまま何も見えない霧の中に浮かぶ。

「これから俺を楽しませてくれよ！ その忠実な従者と一緒にな」

霧の向こう側でサングインが楽しそうに叫んでいるのが聞こえた。

## 6. ホワイトラン

頬に触れる空気が柔らかい。大勢の人間の話し声が八方から聞こえ、酒と料理の匂いが漂っている。壁掛け松明のおかげで温かな明るさに満ちたその空間はテーブルと陽気に浮かれ騒ぐ人々で埋め尽くされ、数人の給仕係が忙しく歩き回っている。

ここは、バナード・メアだ。しかも、サム——いや、サングインにあの日、勝負を仕掛けられたのと同じあのテーブルだ。しかし、サングインはいないし、酒のボトルもない。

「これは、どういうことだ？」

かすれた声が聞こえた。テルドリンがあのとときと同じように隣の椅子に腰を下ろしていた。たぶんわたし同様、キッチンの兜の下でぽかんとしているだろう。

「分からない。さっきまでは確かにあのおかしな場所にいたはず」

ふたりして呆けていると、料理の載った皿を何皿も抱えた給仕係がわたしたちのテーブルにやってきた。

「お待たせしました」

大皿の肉料理をいくつか置いて、次のテーブルへ向かっていく。焼き上がったばかりの肉がじゅうじゅうとおいしそうな音を立てている。ふと、猛烈に腹が減っていることに気づいた。わたしは鶏肉を香草で炒めたものを自分の皿に取り分け、がつがつとかき込んだ。

テルドリンはまだぼんやりしていたようだったが、彼もまた空腹を感じたらしく、兜を外して羊の骨付き肉に食らいついた。

間もなく運ばれてきた料理は全てなくなった。わたしは、ふうと息をついて、椅子の背もたれに寄りかかり、天井を見上げた。これまでも理解の追いつかないことは何度か体験してきた。今度の件は思い返してみれば、最初から最後まで全てがおかしかった。まるで熱に浮かされていたみたいだ。しかし不思議がったところでどうしようもない。何せ、デイドラ・ロードが関わっていたのだから。

そうひとりごちたところでテーブルに視線を戻すと、以前サングインの座っていた椅子に細長い棒状のものが立てかけられているのが

目に入った。

先端に変わった装飾の施された魔法の杖だった。わたしは杖を手を取った。他の誰かの忘れ物ではないかとも思ったが、このバラのような飾りは見間違えようがない。サングインからの贈り物だ。

「夢じゃなかったんだな」

テルドリンが独り言のように呟いた。

反射的にテルドリンに顔を向けると、彼はわたしを見つめ返した。底知れない真紅の双眸が松明の明かりできらめいている。彼は全て覚えているのだろうか？ バナード・メアを出てから、サングインに再会するまでの出来事を。——わたしの心臓がどくと高鳴った。

テルドリンがさらに何か言おうとして、彼の薄い唇がわずかに開き白い歯が覗いたが、それ以上の言葉が発されることはなかった。

酒場の扉が勢いよく開かれた。数人のホワイトラン衛兵が駆け込んでくる。何事だろうと首を巡らせる酔っ払いたちに向かって、一人の衛兵が声を張り上げた。

「この中に腕に覚えのある者がいたら、われわれについてきてくれ。報酬ははずむ」

「なんだなんだ、何が起こったっていうんだ？」

誰かから質問が飛んだ。それに対する衛兵の答えにバナード・メアは水を打ったように静まり返った。

「西の監視塔がドラゴンに襲撃されている」

遠くから、雷の轟くような不気味な音が響いている。嵐か？ いや、そうではない。わたしはいつかあの音を聞いたことがある。どこで？ 覚えていない。だが、すごく恐ろしい経験をした気がする。追いかけてくる炎、全身を燻す煙、血と肉の焦げる臭い、人々の悲鳴、慟哭、沈黙……。

ぞつとした。わたしには関係ない。太刀打ちできるわけがない。誰か、もっと強い人が彼らを助けてあげればいい。しかし、衛兵は無情にも、わたしを指さした。

「おい、お前。確かさつきフアレンガー様の依頼でドラゴンズリーチに来てたな。ウインターホールド大学のアーチメイズなんだろう」

酔っ払いたちの視線が一斉にわたしを射抜いた。

「お前の魔法が役に立つかもしれない。どうだ？ 来てくれるか？」

怖い。行きたくない。でもここで断ったら大学の評判に関わる。サヴオス・アレンの遺志を無駄にするわけにはいかない。

わたしは、恐怖にすくみそうな両足を励まして立ち上がった。

「行きます。皆さんを援護します」

「よし。では、ついてこい。早くしないと手遅れになる」

わたしはサングインの杖を持ったままテーブルの間を縫って、酒場を出ていく衛兵に続いた。他にも何人かの客が後ろについてきた。その中のひとりは、もちろん、わたしの従者であるテルドリン・セロだ。

「テルドリン」

わたしは彼の名前を呼んだ。

彼はわたしの従者だ。何も言わなくてもわたしと一緒に戦うつもりでいるのは分かっている。しかし、わたしは今この瞬間、さしたる理由もなく、彼の名前を口にして、彼を近く感じたかった。

テルドリンがわたしの横に並んだ。いつの間にかキチンの兜を被っている。ヘンテコな生き物の殻で身を固めた彼の見た目はとても奇妙だが、たぶんこの中の誰よりも強いことをわたしは知っている。

彼は戦闘前にしては珍しく、落ち着いた調子で言った。

「心配するな。アズーラに誓って、お前を殺させはしない」

見るからに怯えきっているわたしを安心させるために違いない。その声を聞いただけで、恐怖は消え去らないまでも、わたしを支配するほどではなくなった。わたしの中の別の気持ちがもつと大きくなったからだろう。

彼は続けて、いつもの陽気な憎まれ口を叩いた。

「ま、ドラゴンなんて所詮、ほんの少しでかくなったアルゴニアンだ。お前が情けなく逃げ回っている間にさっさと倒せるだろう」

アルゴニアンを例えに出すとは斬新だ。わたしは少し笑った。

「ありがとう。頼りにしてるよ、テルドリン」

そして、今心から思っていることを素直に彼に伝えた。

## 予感

蠟燭の薄明かりの中、結構な音量のいびきが隣のベッドから聞こえていた。ホワイトランでわたしの二人目の従者になったリディアだ。彼女は毛布を板敷きの床に豪快にうち捨てて、大の字になって眠りかけていた。寝間着の胸元がこれまた豪快にはだけ、大柄な体に見合った豊かな胸の谷間が露出していた。

一度目に留まると気になって仕方がない。わたしはベッドから起き上がり、床の毛布を拾って彼女の体の上に掛けた。彼女は眠ったまま眉をしかめ、何かむにやむにやと寝言を言い、毛布を払いのけた。わたしはもう一度毛布を掛けた。払いのけられた。毛布を掛けた。払いのけられた。……もう何度か繰り返し、諦めた。まあ、この部屋にいるのは彼女とわたしの女二人だけなので、大した問題ではないだろう。

この宿に到着したのは、太陽の丸い底が世界のノドの輪郭にかかろうとしている時だった。ここは世界のノドへの巡礼者を目当てに昔から営まれている有名な温泉宿らしい。建物の裏手にある世界のノドを望める温泉と、山の幸をふんだんに使った料理が売りだそうだ。街の宿屋と比べても遜色なくらい大きく、盗賊対策に用心棒も雇っていた。

今日は偶然他に客がいなかったため、宿は貸し切り状態だった。夕食後、リディアと一緒に温泉に入ったが、わたしは未だに気詰まりな思いが拭えず、あまりリラックスできなかった。リディアはそうでもなかったらしく、部屋に帰ってからすぐに気持ち良さそうに寝入ってしまった。

部屋の外から、賑やかな笑い声が聞こえてきた。あちら側はまだ宴もたけなわのようだ。わたしの護衛のためにリディアの部下に任じられた男性の衛兵三人と、わたしのもう一人の従者であるテルドリン・セロ。輪の中心になっているのはきつとテルドリンだろう。彼は

わたしたちよりずっと年上なので、色々なことを経験していて、とてもお喋りだ。

ついこの前まで、テルドリンの話に耳を傾けているのはわたしだけだったが、ここ数日で急に新しい聴衆を得て、彼は大変満足しているように見えた。衛兵たちはリディアやわたしと同じ年頃の青年だ。彼らは、ホワイトラン衛兵隊の指揮官であるイリレスの姿を見ているからか、一行の中で唯一のダンマーであるテルドリンにも分け隔てなく接し、ふざけ半分、真面目半分に、彼を人生の先輩と仰いでいる。テルドリンが青年たちに囲まれて嬉しそうにしていれば、主人であり友人であるわたしも嬉しい——はずなのだが、どういうわけか胸の中がもやもやする。

わたしは壁に掛けておいた体を拭くための幅広の布を脇に抱えて、リディアを起こさないように、そつと部屋の扉を開けた。メインホールの明るい灯明の光が視界に広がった。中央の暖炉端で、顔の前面を覆う兜を脱いで素顔になった衛兵三人と、キッチンの兜を被ったまま赤いマスクだけ外したテルドリンが、エールの入ったカップを片手に談笑していた。

「あれ、従士様。どーしたんです？ 眠れないんです？」

童顔の青年がわたしに気付いた。

わたしはぎこちなく微笑んだ。リディアも然り、わたしなんかよりずっとしつかりした身の上の、同じ年頃の青年たちに敬語で話しかけられるのは、いまいち落ち着かない。

「ちよつとだけね」

「もしかして、オレたちの声うるさかったんです？」

「ううん、それは大丈夫」

青年は、あ、と声を上げて、他の二人に意味ありげな視線を送り、わたしを見上げた。

「じゃありディアのいびきと寝相ですか？ マジヤバいつすよね。野宿のときはフツーなんすけど、ベッドだとムダによく寝れるらしくて。オレ、あいつと当番が被ると仮眠が取れなかつたんすよ」

リディアと彼らは衛兵隊の同期だったらしい。リディアだけが実



力を買われて別の任務に就き、今では公的には彼らの上司となっているものの、同期のよしみで気楽な仲のようだ。

リディアのいびきやら寝相やはら分わたしが眠りに就けないことの根本的な原因ではないが、青年たちは勝手に納得した様子だった。最初の青年よりは少し年嵩であろう、がっしりとした顔に立派な顎髭を生やした青年が口を開いた。

「他の部屋が空いているのですから、移られたらいかがでしょうか？  
なあ、おかみさん、いいだろ？」

彼はカウンターの向こうで明日の朝食の仕込みをしていた宿の主人に声を掛けた。宿の主人が笑顔で振り返った。

「ああ、もちろん。ドラゴンボーンの泊まった部屋だって、未代まで宣伝できるからね。どんどん部屋を替えとくれ」

わたしは慌てて首を横に振った。

「お構いなく。お恥ずかしい話ですが、一人だとかえって落ち着けなくて、眠れないんです」

「……そうだな。眠っている間は無防備だ。誰かが一緒にいるべきだ」

真面目そうな細面の青年がぼそりと言った。

最初の青年が口を尖らせた。

「誰かって、リディア以外に誰がいんだよ」

細面の青年は黙って頭を巡らせた。彼の視線の先には、わたしたちのやり取りを酒をちびちび呑みながら眺めていたテルドリンがいた。

テルドリンがカップを口から離した。エールの水分を纏った紫の唇が暖炉の橙色の光を艶やかに反射した。

胸の中の空洞を大きな手で優しく撫でられているかのような錯覚に陥った。確かに、わたしはテルドリンとよく同じ部屋で眠っていたし、時には寢床を共有したこともある、もちろん深い意味はなしにだ。でも、それは数日前までの話。今は……。

テルドリンが意地の悪い笑みを浮かべた。

「勘弁してくれ。こいつもリディアと同類なんだ。今までは私しかお守り役がないから我慢してやっていたがな、この先はいぎたない者

同士、よろしくやってほしいよ」

ざわつきかけていた胸の内が嘘のように鎮まった。わたしはときどき悪夢を見てうなされる。悪夢の原因はヘルゲンで起きた悲惨な事件だ。深刻な問題なのに、あんなふうに気持ち良さそうに眠っているリディアと一緒にされたにされ、いぎたないと言われるのはかなり心外だ。そもそも、お守り役ってなんだ。わたしはむくれた。

「うるさかったら起こしてって言ったじゃない」

「起こしたら起こしたで、眠れなくなったと文句を言っ泣きついてくるだろう」

「わたしはそんなことしない」

「寝付けない夜に昔話を聞かせてやったのを忘れたか？」

「それとこれとは別でしょう。というか、テルドリンが話したそうにしてるから仕方なく聴いてあげてたんだよ」

「そのわりには、わざわざ話していないことまで根掘り葉掘り聞いてきたじゃないか」

「それは、だって、気になったから」

「あははは！ おもしろー。テリーさんと話してるときの従士様って、反抗期の子供みたいっすね！」

テルドリンに散々からかわれ、さらに最初の青年に追い打ちをかけられて、わたしはますますむくれた。

「もういいよ。わたし、リディアのことはそんなに気にならないから。もう一回温泉に入ってくる。みんなは遠慮しないで話してて」

四者四様の返事を背中に受けながら、わたしはメインホールの隅の扉に入った。

扉の先は脱衣所になっていた。ここで裸になって、温泉のある屋外に出るのだ。屋外へ通じる扉からは温泉の蒸気が漏れていた。わたしは今しがたテルドリンから受けた仕打ちをあっさり忘れ、自然と笑顔になった。温泉は普段の蒸し風呂より断然気持ちが良い。さつきはリディアと一緒に緊張してしまい、満喫することができなかったが、今度こそゆつくりしたい。寝間着を脱いで籠に入れ、屋外への扉を開けた。

まず目につくのは、中央のもうもうと蒸気の立っている一帯だった。古いがよく磨かれている石畳の中に、エメラルド色の半透明の湯が、丸い石でぐるりを囲われて蒸気を湧かせていた。十人ほどで一気に入ってもまだ余裕のある広さだ。

わたしはこの温泉を取り巻く景色を改めて見渡した。宿の壁際には洗い場があった。壁からは、背の高い木の柵が温泉を守るように四角形に連なっていた。柵によってこちら側と隔てられているのは、鬱蒼と茂った森だった。彼方に世界のノドが突き出していた。今夜はよく晴れていて、二つの月と夜空の星の明かりだけでも、この小さな世界の全貌を把握するには十分だった。そのためか、温泉の周りに木のかかりが六つも立てられているのに、使われているのは真ん中の二つだけだった。

温泉の蒸気の、強烈だが不快感のない金属臭が鼻をくすぐった。石畳を渡り、湯に足から順に全身を浸した。まるで大きな海藻が何枚も体に巻き付いているかのような、ぬるぬるした触感に包まれた。このもどかしいような、くすぐつたいような感じがたまらない。わたしは湯を掻き分けて、温泉のもう一方の端、森の近くまでしゃがみ歩きをしていった。金属臭に、森から漂ってくる草葉の匂いが混ざった。どこから虫の鳴き声が聞こえていた。

わたしは、温泉の底に尻を降ろし、首の半ばまで湯に浸かった。そのまましばらくじっと待っていると、湯が皮膚を通り抜けて体の芯まで沁みていくような感覚が全身に広がった。今この瞬間に少しの苦しみもなく死ねれば、全く後悔はしないだろう。

わたしはぼんやりと世界のノドを見上げた。タムリエルで一番標高の高い雪山は、薄い雲をシヨールのように纏い、星の瞬きで周りを飾り立て、濃い藍色の夜の陰りで全身を覆って屹立していた。あの山の頂上付近には、グレイビードと呼ばれる隠者たちが住んでいる。スウームの使い方を教えてくれるという話だが、彼らに教わったところで、わたしはまともにドラゴンボーンの力を使いこなせるようになるだろうか。

先ほど、リディアと二人で温泉に入った時のことを思い返す。彼女

は寡黙な性質だ。温泉に身を浸すと、良い湯ですね、と呟いた。それから、二、三適当な雑談を交わしたきり、話が途切れてしまった。それならそれで景色でも眺めればいいのに、ひたすらわたしを見つめてくるものだから、なんだか居心地が悪くなってしまい、わたしはつい、ドラゴンボーンとしての自分にあまり自信が持てないことを漏らした。

リディアは身を乗り出し、真剣な表情で、大丈夫ですよ、と言った。次いで、怒濤のように、アカトシュからドラゴンボーンに選ばれることを夢想していたノルドが、彼女自身を含めていかに多いか、つまりわたしがいかに羨まれているかを語り出した。続けて、伝説で語られるドラゴンボーンの中にもわたしのように自信のない者はいたが、修行や実戦を重ねるうちに相応しい能力を身につけ、立派に役目を果たしたことも熱弁した。最後に、彼女はこう締めくくった。だから、従士様もきつと強くなれますわ。ドラゴンボーンに憧れていたあたしたち皆、貴女と一体になるようなつもりでお支えますもの。

ドラゴンボーンのことを語る彼女の眼差しは、終始、力強く輝いていた。あんな目をしたノルドを今まで何人も見てきた。彼らの目の輝きは、彼らがスカイリムで生き、育んできた、強靱な意志の力——故郷や家族、理想を守るためなら死も厭わずに戦う、不屈の精神を源にしている。わたしには、天地がひっくり返っても手に入らないものだ。

わたしは励まされたふりをして礼を言った。彼女の期待を裏切りたくなかった。

あれからずっと、重苦しい疑問が頭の中に渦巻いている。なぜ、アカトシュはわたしなんかをドラゴンボーンに選んだのだろうか。もつと相応しい人はいくらでもいる。それこそ、リディアや三人の衛兵たちの方がずっと良かった。伝説の中のドラゴンボーンたちは最後には必ず役目を果たした、だって？ 役目を果たせないまま死んだドラゴンボーンの逸話を誰も語り継がなかっただけではないのか？

現在のニルンにただ一人しかいないドラゴンボーンのわたしも、し、そうなつてしまつたら……。

胸がぎゅつと締まった。ミルムルニルの煮え立ったマグマのような声が耳の奥から聞こえてくる気がした。いや、実際に聞こえていたのかも知れない。彼はわたしの意気地のなさを嗤った。わたしの体に乗っ取る日もそう遠くはないだろうと囁いた。

不意に、コンコン、と後ろで音がした。締めつけられていた心臓が危うく止まりそうになった。湯を撥ね飛ばしながら振り返った。脱衣所の扉を誰かが内側から叩いているのだ。

「誰？」

返ってきたのは、聞き慣れた、少しかすれた声だった。

「テルドリンだ。まだ入浴中か？　そろそろ交替してもらいたいんだが」

「え？　早くない？」

「馬鹿を言え、もう結構な時間が経ったぞ。私たちも解散した」

自分で感じていたより長いこと物思いに耽っていたらしい。まだ全然満喫できた気がしない。

「さつきみんなと一緒に入らなかったの？」

「ああ、入ったさ。だが、連中は湯に浸かっている間もやかましく喋ってばかりだな。本当の楽しみ方をまるで分かっていない。嘆かわしいことだよ」

要するに、彼も満足できていないらしい。それなら。

「じゃあ、一緒に入ろうよ」

扉の向こう側が、静まり返った。

しばらく経ってから、わたしは我に返った。どうしてこんなことを提案してしまったのだ。わたしは、最早誰も入ってこないだろうとたかをくくっていたので、全裸だ。テルドリンもきつと裸になって入ってくる。

提案を取り下げなければ。いや、それ以前に、非常識だとかなんんと言われて断られるに決まっているが、わたしがそこまで物を知らなわけではないことを彼に示さなければならぬ。もう少し待っていてほしいと伝えよう。わたしは脱衣所に近い温泉の縁まで移動した。ところが。

「いいだろう。すぐにそちらへ行く」

テルドリンのくぐもった声がわたしの耳に届いた。続けて、鎧の金具が触れ合ってカチャカチャという音が聞こえ始めた。なんということだ。

彼との付き合いも長いが、わたしは未だに彼のありのままの姿の首から上にしかお目に掛かったことがない。あの分厚い鎧とごわついた服の下にどんな肉体が隠されているのかとても気になる。って、何を考えているのだ！ 今からだって彼に待ったを掛ければいい。それなのに、どうして口が石みたいに重くなつて開かず、胸がどきどきしているのだろうか。

「入るぞ」

脱衣所の扉が開いた。わたしは咄嗟に扉に背を向け、湯に体を深く沈め、両膝を抱え脚を胴体に引きつけて、目をきつく閉じた。

石畳を注意深く踏む足音が近づいてきた。それはわたしの左後ろの辺りで止まった。ざぶりと水音がして、左側から大きな揺れが伝わってきた。しばらくすると収まり、代わりに、何か大きな質量を持ったものが湯の中に落ち着いたのが分かった。

「どうした、しかめ面をして。具合が悪いのか？」

氣遣わしげな、温かな声でそう問われた。わたしは適当に目をいじるふりをした。

「ううん。目にゴミが入っちゃって」

テルドリンが可笑しそうに息を吹き出すのが聞こえた。

「取ってやろうか？」

「いつ、いいよ。そのうち自然に取れるから。わたしのことは気にしないでゆっくりして」

「ふん。それじゃ、お言葉に甘えるよ」

水音と共に、湯が再び大きくうねった。テルドリンはその場で体勢だけ変えたようだった。彼はいかにも満足げに、とても長い息を吐いた。

それから、いくらか沈黙が流れた。相変わらず心臓がどくどく鳴っていて落ち着かないが、居心地が悪いとは思わなかった。

「リディアとはうまくやれそうか？」

テルドリンが静かに尋ねた。

わたしは、間違つてもテルドリンの姿が目に入らないよう、首を思いきり右側に捻つてから瞼を開けた。夜空の双子の月の片割れ、セクンダが、その身を半分ほど世界のノドの頂に沈み込ませていた。

「どうかな。いい人だとは思うけど、テルドリンみたいには喋らないから調子が狂うよ。仲良くなればいいな」

「ああいう堅物は初めはとつきにくいが、一度懐に入れば誰よりも信頼できる友人になる。辛抱強く付き合ってみることだ」

反射的に、テルドリン以上に信頼できる相手はいないと口に出しそうになり、思い留まった。まるで父親の傍から離れたがらない小さな子供のような言い分だ。大笑いされるに決まっている。わたしが、そうだね、と答えると、テルドリンは続けて尋ねた。

「あの三人衆はどうだ？ 若くて考えの足りていないところはあるが、悪い奴らではない。剣と弓の腕も確かだ」

どうと言われても。彼らは、彼ら同士かテルドリンを加えて四人で盛り上がっていることが多く、リディアのように一対一で話をしたこともない。それに、テルドリンを独占されているときは、正直あまり良い気分ではない。

「よく分からない。テルドリンみたいには打ち解けられないかも」

小さく湯の跳ねる音がした。テルドリンが手か足でも動かしたらしい。

「そんなふうを決めつけるものではないぞ。機会を見つけて話してみろ。もしかすると、あの三人の内の誰かが、お前の——」

彼は何か言いかけたが、ざらついた低い声で打ち消した。

「いいや。邪推が過ぎるな。凶体も頭脳もそれなりに育っているが、心はまだ少年のままだ。話にもならん」

褒めていると思つたら急に酷評し始めた。まあ、テルドリンから見たら、わたしたちは生まれたての雛みたいなものだろう。

それよりも、どうしてテルドリンは、わたしがリディアたちと仲良くなれそうかなんてことを気にするのだろうか。これから先も行動

を共にしていれば、そんなことは自ずと分かるだろうに。

夜空の星の瞬きが鈍くなった気がした。

「わたしの従者を辞めるつもりなの？」

喉から漏れた声は、自分でもどうしたのかと思うほど、か細く、震えていた。テルドリンがびっくりしたように声のトーンを上げた。

「そんなはずがなからう。いったいなぜそんなふうに思った？」

「だって、リディアたちのことを聞くから」

「はあ？ お前が新しい仲間とうまくやっていけるか気にするのは当然だろう」

「子供に言うみたいなこと言わないでよ。仲良くなれそうなら勝手に仲良くなるし、駄目なら適当に折り合いつけるよ」

テルドリンは、人情に厚く世話焼きな性格が高じて、頼りないわたしを子供扱いすることもままある。でも、今のはそうではなかったとわたしは感じた。彼自身も気付いていないようだけれど。

ミルムルニル戦の後、ドラゴンズリーチの一室で彼があ約束を交わしてくれなかったら、わたしはわたしではなくなっていた。今だつて、彼がわたしのもとを去れば、たちどころに精神が崩壊してしまいうさだ。しかし、あの約束は、あの場でわたしの正気を保っておくための優しい嘘だったのかもしれない。彼にはわたしと一緒に世界の存亡を懸けた戦いに挑む義務はない。彼が自らの命の危険その他を鑑みて、以前の雇い主に対してしたのと同じように袂を分かちたいと言ってきたら、わたしは受け入れなければならない。

それなら、せめて今だけは彼の優しさに縋っていたい。

「ねえ、もうちよつとそつちに寄つてもいい？」

テルドリンが身じろぎをしたのが、水音と湯の微かな動きで感じられた。

「ああ、構わんが。急にどうした？ 一人で長居しすぎて寂しくなつたのか？」

わたしはそろそろと左側へ移動していった。ぎりぎり触れないくらいの距離で止まろうと思ったが、未だにそっぽを向いていたので距離感を誤つたらしい。みっちりした感触の大きな塊が左の肩から腕



にかけてに触れた。

「あつ……い！」

わたしは小さく声を上げた。慌てて離れようとしたら、力強い腕がわたしの背中から右腕へと回され、体を引き寄せられた。左の耳元で、かすれた声が囁いた。

「体が異様に熱いぞ。まさかお前、休憩もせずに入っていたのか？」

彼の張り詰めた肉体がわたしの体に密着する。ぬるぬるした湯がわたしたちの間をすり抜け、滑らせ、互いの肌を擦らせ合う。いったいどこどこが触れているのだろう。それも判らないくらいに気が動転し、心臓の鼓動が急激に速くなった。

「え、う、あ、」

「しつかりしろ。早いところ湯から上がって水を飲もう」

彼の太い指がわたしのどこかを擦り上げた。激しい電流が体の奥まで走り抜けた。

「ひあつ！」

「へ、変な声を上げるな！ 落ち着け！」

そんなことを言われたって落ち着いていられるわけがない。わたしは無我夢中で両手を彷徨わせ、最初に触れたどこかを掴んだ。

「うぐ?!」

なんだかむにゅむにゅしている。いつか触ったことがあるような気がするけれど、いつだったか。

「や、め、ろ……!!」

体に纏わりついていた湯がざばんと落下する感覚があった。続いて、びたびたびた、という水っぽい足音に合わせて世界が大きく揺れ、バキヤ、ドキヤ、と何か固いものが壊れた音が二回。

「おい、水をくれ！ それから塩の塊と、できれば濡らした布と氷を――」

宿の主人らしい女性の素っ頓狂な悲鳴が上がった。

「ぎゃーっ！ なんて格好してるの!?! お湯の中で何してたのよ!!」

「何もしてない！ 早く水を！」

「なんの騒ぎ、うえっ、おわあああっ!!? 変質者の襲撃か!？」

「変質者じゃない！ テルドリンだ！」

「へえ。やはり従士様とはそういう関係で……」

「誤解だ!!」

騒ぎを聞きつけて部屋から出てきたらしい衛兵の青年たちの声も聞こえてきた。

わたしはすさまじい頭痛に襲われ、意識を失おうとしていた。ただ、わたしの傍らにずっとテルドリンがいることだけは伝わってきた。それが無性に嬉しくて、わたしは意識が途切れるまで、へらへらとだらしなく笑っていた。

—了—